

佐賀県文化財調査報告書第80集

筑後川下流用水事業に係る
文化財調査報告書 1

野田遺跡
川寄吉原遺跡
尾崎土生遺跡

1985年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第80集

筑後川下流用水事業に係る 文化財調査報告書 1

野 田 遺 跡
かわ より よし わら
川 寄 吉 原 遺 跡
お さき は ぶ
尾 崎 土 生 遺 跡

1985年3月

佐賀県教育委員会

序

この調査報告書は、佐賀県教育委員会が水資源開発公団の委託を受けて、昭和56年度から実施している筑後川下流用水事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は、昭和56年度から昭和58年度までに発掘調査を実施した神埼郡神埼町所在の野田遺跡・川寄吉原遺跡・尾崎土生遺跡の3遺跡であります。これらの遺跡からは、主に弥生時代から平安時代にかけての集落跡・墳墓が検出され、多数の遺物が出土しており、古代史を知る上で重要な資料となります。

ここに発掘調査報告書を刊行し、学術資料として、また重要な文化財を大切に保存してゆくための資料として役立てていただければ幸いと思います。

なお、発刊にあたり、調査に御協力いただきました地元の方々をはじめ、関係各位に心から感謝申し上げます。

昭和60年 3 月

佐賀県教育委員会

教育長 志岐 常文

例 言

1. 本書は筑後川下流用水事業に伴う事前調査のうち、昭和56年度から昭和58年度にかけて発掘調査を行なった神埼郡神埼町所在の野田遺跡・川寄吉原遺跡・尾崎土生遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、水資源開発公団の委託事業として佐賀県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にあたっては、神埼町教育委員会・土地改良課、および地元の方々の協力を得た。
4. 本書の執筆は、Ⅱ-1を木下巧が、Ⅳ-3を古庄秀樹が、他を森田孝志が担当した。
5. 遺物実測・整図・報告書作成作業は、佐賀県文化財資料室および神埼発掘調査事務所でおこなった。
 - 遺物整理……………梅野澄子・古賀安子・中島美須三・中村三千代・樋口管子・三好文子
 - 遺物実測……………青木瑞枝・神田浩子・野口百合子・馬場美奈子・平川朋子・松永節子
武藤直子・古庄秀樹
 - 整図……………青木瑞枝・貞包洋子・六田育子
 - 遺物写真撮影…原口定・古賀栄子
6. 本書の編集は、調査員および種浦加代子の協力を得て森田孝志が担当した。

凡 例

1. 遺構番号は一連番号を付し、SB：竪穴住居跡・掘立柱建物跡、SK：土壙、SE：井戸跡、SA：柵列、SD：溝跡、P：柱穴の分類記号を用いた。

川寄吉原遺跡および尾崎土生遺跡の遺構番号の100の位は調査区を表わし、川寄吉原遺跡-1：Ⅱ区・Ⅲ区、尾崎土生遺跡-1：11区・2：12区・3：13区・4：14区である。
2. 挿図中の方位は一部（M・Nと表示）を除いてすべて磁北である。
3. 資料の保管については168頁（図版49の裏頁）に記載している。

目 次

I. 立置と環境	1
1. 自然的環境	3
2. 歴史的環境	3
II. 発掘調査の経過	5
1. 調査に至る経過	6
2. 調査組織	7
3. 調査の経過	8
III. 野田遺跡	11
1. 遺跡の概要	12
2. 遺構	14
(1)弥生時代の遺構	14
(2)古墳時代の遺構	17
(3)平安時代の遺構	22
3. 遺物	31
(1)弥生時代の遺物	31
(2)古墳時代の遺物	36
(3)平安時代の遺物	41
4. 小結	52
IV. 川寄吉原遺跡	55
1. 遺跡の概要	56
2. 遺構	58
3. 遺物	62
(1)土器	62
(2)土製品	74
(3)石器	74
(4)木製品	74
(5)青銅器	76
(6)その他の遺物	76
4. 小結	79
V. 尾崎土生遺跡	81

1. 遺跡の概要	82
2. 遺構	84
(1)弥生時代の遺構	84
(2)古墳時代の遺構	84
(3)平安～鎌倉時代の遺構	91
3. 遺物	93
(1)弥生時代の遺物	93
(2)古墳時代の遺物	95
(3)平安～鎌倉時代の遺物	106
4. 小結	113

挿 図 目 次

Fig.1	野田遺跡・川寄吉原・尾崎土生遺跡周辺の地形と主な遺跡	2
Fig.2	掘削機による表土剥ぎ（尾崎土生遺跡11区）	8
Fig.3	遺構検出作業（尾崎土生遺跡12区）	8
Fig.4	遺構の掘り下げ（野田遺跡8区）	8
Fig.5	遺構の掘り下げ（川寄吉原遺跡）	8
Fig.6	遺構の掘り下げ（尾崎土生遺跡14区）	9
Fig.7	遺構の掘り下げ（尾崎土生遺跡12区）	9
Fig.8	遺構の掘り下げ（尾崎土生遺跡12区）	9
Fig.9	遺構の掘り下げ（尾崎土生遺跡14区）	9
Fig.10	遺構実測（尾崎土生遺跡12区）	10
Fig.11	遺物整理（神埼発掘調査事務所）	10
Fig.12	図面整理・整図（神埼発掘調査事務所）	10
Fig.13	遺物実測（文化財資料室）	10
Fig.14	野田遺跡・川寄吉原遺跡・尾崎土生遺跡周辺地形図	折りこみ
Fig.15	野田遺跡周辺地形図(1/3,000)	13
Fig.16	SK059土壌実測図	14
Fig.17	SK099土壌実測図	14
Fig.18	SJ052甕棺墓実測図	15
Fig.19	SJ053甕棺墓実測図	15
Fig.20	SJ054甕棺墓実測図	16
Fig.21	SJ055甕棺墓実測図	16
Fig.22	SJ056甕棺墓実測図	16
Fig.23	SB001竪穴住居跡実測図	17
Fig.24	SB074掘立柱建物跡実測図	17
Fig.25	SB075建物跡実測図	18
Fig.26	SB076建物跡実測図	18
Fig.27	SB077建物跡実測図	18

Fig. 28	SB078建物跡実測図	19
Fig. 29	SB081建物跡実測図	19
Fig. 30	SK005土壌実測図	20
Fig. 31	SK013土壌実測図	20
Fig. 32	SK050土壌実測図	20
Fig. 33	SD072溝跡土層断面図	21
Fig. 34	SB038溝跡実測図	22
Fig. 35	SB041建物跡実測図	23
Fig. 36	SB042建物跡実測図	23
Fig. 37	SB043建物跡実測図	24
Fig. 38	SB045建物跡実測図	24
Fig. 39	SB044建物跡実測図	24
Fig. 40	SB082建物跡実測図	25
Fig. 41	SB083建物跡実測図	25
Fig. 42	SB086建物跡実測図	25
Fig. 43	SB088建物跡実測図	26
Fig. 44	SE006井戸跡実測図	27
Fig. 45	SE016井戸跡実測図	27
Fig. 46	SE029井戸跡実測図	28
Fig. 47	SE029井戸跡土層図	28
Fig. 48	SE031井戸跡実測図	29
Fig. 49	SE033井戸跡実測図	29
Fig. 50	SK014土壌実測図	30
Fig. 51	SK017土壌実測図	30
Fig. 52	SD048溝跡実測図	30
Fig. 53	弥生土器実測図1	32
Fig. 54	弥生土器実測図2	33
Fig. 55	弥生土器実測図3	34
Fig. 56	弥生土器実測図4	35
Fig. 57	石器実測図	34
Fig. 58	SK005出土土器実測図	37
Fig. 59	SK013・SK050・SD072・SB079出土土器実測図	39
Fig. 60	SD072出土木製品実測図	40
Fig. 61	SK014・SK017出土土器・石器実測図	43
Fig. 62	SE006・SE016・SE029出土土器・陶磁器実測図	45
Fig. 63	SE031・SD003・SD032・SD048出土土器・陶磁器・石製品・木製品実測図	47
Fig. 64	野田遺跡8区・9区遺構配置図 (1/200)	折りこみ
Fig. 65	野田遺跡10区・11区遺構配置図 (1/200)	折りこみ
Fig. 66	川寄吉原遺跡周辺地形図 (1/3,000)	57
Fig. 67	SK102土壌実測図	58
Fig. 68	SK104土壌実測図	58

Fig. 69	SE101井戸跡実測図	59
Fig. 70	SE107井戸跡実測図	59
Fig. 71	SE108井戸跡実測図	60
Fig. 72	SE110井戸跡実測図	60
Fig. 73	P-5・P-6柱穴実測図	61
Fig. 74	II区2層(A・B-18・19)木製品出土状況	61
Fig. 75	II区SX110・111杭列実測図	62
Fig. 76	SK102出土土器実測図1	63
Fig. 77	SK102出土土器実測図2	65
Fig. 78	SK104・SK108・P-3・II区遺構検出面出土土器実測図	66
Fig. 79	II区2層出土土器実測図1	67
Fig. 80	II区2層出土土器実測図2	69
Fig. 81	II区3層出土土器実測図	70
Fig. 82	III区2層出土土器実測図	71
Fig. 83	II区2層出土土製品・石器実測図	72
Fig. 84	II区2層出土銅鉄実測図	72
Fig. 85	II区2層SE101出土土製品・石器実測図	73
Fig. 86	II区2層出土木製品実測図	76
Fig. 87	縄文土器実測図	75
Fig. 88	川寄吉原遺跡I区・II区遺構配置図(1/200)	折りこみ
Fig. 89	尾崎土生遺跡周辺地形図(1/3,000)	83
Fig. 90	SE403井戸跡実測図	84
Fig. 91	SB122建物跡実測図	84
Fig. 92	SB123建物跡実測図	85
Fig. 93	SB124建物跡実測図	85
Fig. 94	SB125建物跡実測図	85
Fig. 95	SB126建物跡実測図	86
Fig. 96	SE114井戸跡実測図	87
Fig. 97	SE211井戸跡実測図	87
Fig. 98	SE406井戸跡実測図	87
Fig. 99	SK113土壌実測図	88
Fig. 100	SK118土壌実測図	88
Fig. 101	SK201土壌実測図	89
Fig. 102	SD401溝跡北壁土層図	90
Fig. 103	SE112井戸跡実測図	91
Fig. 104	SE202井戸跡実測図	91
Fig. 105	SK120土壌実測図	92
Fig. 106	SK207土壌実測図	92
Fig. 107	SE403出土土器実測図	94
Fig. 108	SK113出土土器実測図	95

Fig.109	SK118出土土器実測図	97
Fig.110	SE114出土土器実測図	98
Fig.111	SE211出土土器実測図	99
Fig.112	SE406出土土器・木製品実測図	100
Fig.113	SK201出土土器実測図	101
Fig.114	SK206・SD402・SD108・SD103出土土器・木製品実測図	102
Fig.115	SD401出土土器実測図1	103
Fig.116	SD401出土土器実測図2	105
Fig.117	SD401・P-172出土装身具実測	104
Fig.118	SK120・SE112・SE202・SK207出土土器・鉄製品・石製品実測図	107
Fig.119	SK328・SD307出土土器実測図	108
Fig.120	尾崎土生遺跡11区・12区・13区・14区遺構配置図(1/200)	折りこみ

表 目 次

Tab.1	野田遺跡Ⅰ区～Ⅶ区の遺構・遺物	12
Tab.2	野田遺跡弥生時代土壌一覧表	15
Tab.3	野田遺跡弥生時代埋葬墓一覧表	16
Tab.4	野田遺跡古墳時代掘立柱建物跡一覧表	19
Tab.5	野田遺跡古墳時代土壌一覧表	21
Tab.6	野田遺跡平安時代掘立柱建物跡一覧表	26
Tab.7	野田遺跡平安時代井戸跡・土壌一覧表	30
Tab.8	野田遺跡出土弥生土器一覧表	48
Tab.9	野田遺跡出土古墳時代土器一覧表	49
Tab.10	野田遺跡出土平安時代土器・陶磁器一覧表	50
Tab.11	川寄吉原遺跡土壌・井戸跡一覧表	60
Tab.12	川寄吉原遺跡出土弥生土器一覧表	76
Tab.13	尾崎土生遺跡1区～10区の遺構・遺物	82
Tab.14	尾崎土生遺跡古墳時代掘立柱建物跡一覧表	86
Tab.15	尾崎土生遺跡古墳時代土壌・井戸跡一覧表	89
Tab.16	尾崎土生遺跡平安～鎌倉時代土壌・井戸跡実測図	92
Tab.17	尾崎土生遺跡出土弥生土器一覧表	109
Tab.18	尾崎土生遺跡出土古墳時代土器一覧表	110
Tab.19	尾崎土生遺跡出土平安～鎌倉時代土器一覧表	112

図 版 目 次

- PL.1 ①8区全景（東から） ②8区西端（東から）
PL.2 ①8区西側（東から） ②8区・9区全景（東から）
PL.3 ①10区全景（東から） ②11区全景（西から）
PL.4 ①SK059（北から） ②SK097（東から）
③SK099（南から） ④SJ052（東から）
⑤SJ053（南西から） ⑥SJ054（南西から）
⑦SJ055（南西から） ⑧SJ056（北から）
PL.5 ①SB001（西から） ②SB074（北西から）
③SB076（南東から）
PL.6 ①SB077（南東から） ②SB081（上空から）
③SD072・073（上空から）
PL.7 ①SD072（北壁断面南から） ②SD072（南壁断面北から）
③SD072（西から） ④SK005（東から）
⑤SK013（北から） ⑥SK050（南から）
PL.8 ①SB038（上空から） ②SB041（北から）
③SB042・043（上空から）
PL.9 ①SB045（東から） ②SB082（上空から）
③SB086（東から）
PL.10 ①SD048（上空から） ②SD048北側断面（南から）
③SE029（北から）
PL.11 ①SE006（南東から） ②SE016（東から）
③SE031（南から） ④SE033（南から）
⑤SK014（東から） ⑥SK017（南から）
PL.12 SK097・098・099, 10区・11区遺構検出面出土遺物
PL.13 SJ052・056甕棺, 7区・9区遺構検出面出土遺物
PL.14 SK005・013出土遺物
PL.15 SK013, SD072出土遺物
PL.16 SK050・014・017, SB079出土遺物
PL.17 SK017, SE006・016出土遺物
PL.18 SE029出土遺物

- PL.19 SE031・033, SD032・048出土遺物
- PL.20 SD048出土遺物
- PL.21 ①Ⅱ区全景（東から） ②Ⅱ区東側（東から）
- PL.22 ①Ⅱ区東側（南から） ②Ⅱ区中央（北から）
③Ⅲ区全景（西から）
- PL.23 ①SK102（南から） ②SK102（西から）
③SK104（北から）
- PL.24 ①SE101（北から） ②SE107（西から）
③SE108（北から） ④SE110（東から）
⑤P-5（南から） ⑥P-6（南から）
- PL.25 ①Ⅲ層上部 木器出土状況（西から） ②Ⅲ層上部 大足出土状況（東から）
③Ⅲ層上部 銅鉄出土状況
- PL.26 ①Ⅲ層下部 杭列（南から） ②Ⅲ層下部 杭列（東から）
③Ⅲ層下部 杭列（南から）
- PL.27 SK102出土遺物
- PL.28 SK102・SK104・SK108, Ⅲ区出土遺物
- PL.29 SK104, P-3, Ⅱ区遺構検出面, Ⅱ区2層出土遺物
- PL.30 Ⅱ区2層出土遺物
- PL.31 Ⅱ区表土層, Ⅱ区2層, Ⅱ区3層出土遺物
- PL.32 Ⅱ区2層, Ⅱ区3層, Ⅱ区表土層, SE101出土遺物
- PL.33 ①11区全景（南西上空より） ②11区全景（西から）
- PL.34 ①11区西側（南から） ②11区中央（南から）
③11区東側（南から）
- PL.35 ①12区全景（西から） ②12区中央部（南から）
- PL.36 ①13区全景（西から） ②14区全景（西から）
- PL.37 ①SK403（北から） ②SB122（南から）
③SB123（西から）
- PL.38 ①SB124（東から） ②SB125（東から）
③SB126（東から）
- PL.39 ①SE114（南から） ②SE211（西から）
③SE406（南から） ④SK113（東から）
⑤SK118（南から） ⑥SK201（北から）
- PL.40 ①SD001（南から） ②SD002・008（南から）

- ③SD401（南から） ④SD401北壁土層（南から）
⑤SD401遺物出土状況（西から） ⑥SD401発掘後（南から）
⑦SD402（南から） ⑧SD402樋出土状況（西から）
PL.41 ①SK202（西から） ②SE112（南から）
③SK120（北から） ④SK207（南から）
⑤SD315（北から） ⑥SD104・105・106（南から）
PL.42 SK403・SK113出土遺物
PL.43 SK114・SE406・SK118出土遺物
PL.44 SK118・SK211・SK201出土遺物
PL.45 SK201・SK206・SD402・SD103出土遺物
PL.46 SD401出土遺物
PL.47 SD401出土遺物
PL.48 SK120・SE112・SE202・SE207出土遺物
PL.49 SK328・SD307出土遺物

I 立地と環境

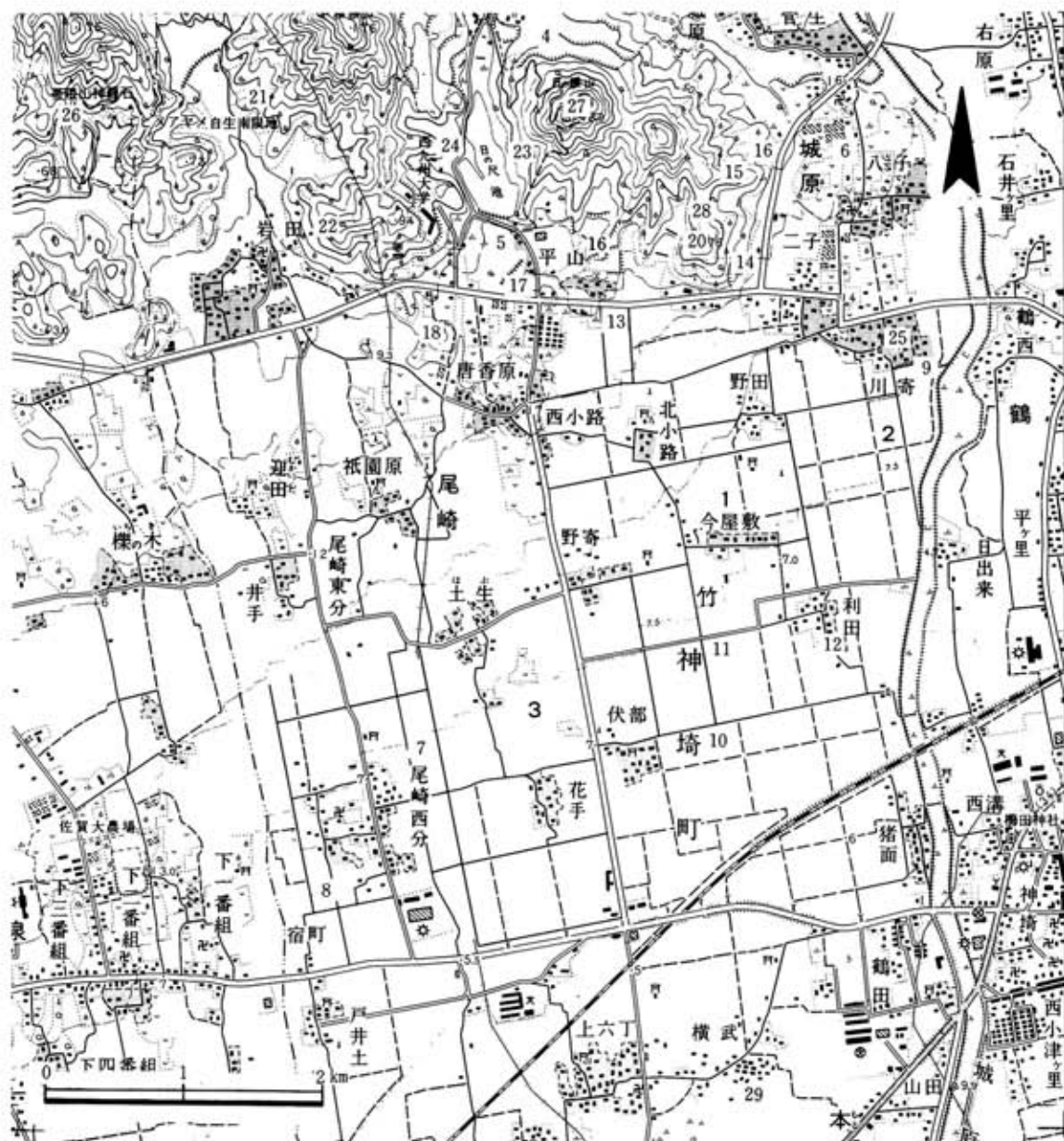


Fig1 野田遺跡・川寄吉原遺跡・尾崎土生遺跡周辺の地形と主な遺跡

1	野田遺跡	弥生時代～鎌倉時代集落跡・墳墓	16	四本黒木遺跡	弥生時代墳墓(支石墓)
2	川寄吉原遺跡	弥生時代集落跡	17	平山遺跡	弥生時代墳墓
3	尾崎土生遺跡	弥生時代～室町時代集落跡	18	岩田丸山古墳	前方後円墳
4	北方遺跡	縄文時代～古墳時代遺物散布地	19	山崎古墳群	円墳・横穴式石室
5	日の尺池底遺跡	縄文時代遺物散布地	20	二子古墳	前方後円墳
6	八子三本黒木・西本黒木遺跡	旧石器時代～室町時代遺物散布地	21	天神尾古墳群	円墳・横穴式石室
7	尾崎西分遺跡	弥生時代～江戸時代集落跡	22	寺山古墳群	円墳・横穴式石室
8	尾崎利田遺跡	弥生時代～室町時代集落跡・墳墓	23	平山古墳群	円墳・横穴式石室
9	川寄若宮遺跡	弥生時代～古墳時代集落跡・墳墓	24	日の尺池古墳群	円墳・竪穴式横口式石室
10	伏部大石遺跡	弥生時代墳墓(支石墓)	25	田上神社古墳	円墳・横穴式石室
11	こだかじま遺跡	弥生時代集落跡・墳墓	26	帯限山神龍石	古墳時代～奈良時代神龍石
12	利田柳遺跡群	弥生時代集落跡・墳墓	27	日の隈烽跡	奈良・平安時代烽跡推定地
13	原の前遺跡	弥生時代墳墓	28	横大路城跡	室町時代山城跡
14	熊谷遺跡	弥生時代～古墳時代墳墓	29	横武城跡	室町時代館跡
15	土善寺遺跡・古墳群	弥生時代～古墳時代墳墓			

I 立 地 と 環 境

1. 自然的環境

神埼町は佐賀県の東部に位置し、東は東脊振村・三田川町、西は佐賀市と接している。町の北部は脊振山系が東西方向に連なる。この脊振山系の⁽¹⁾大高山（515.9m）、⁽²⁾土高山（430m）の南側に城山・日の隈山・早稲隈山などの標高150～200m程の小高い山々が連なっている。町の東側は舌状の低丘陵（洪積台地）である吉野ヶ里丘陵が南北にのびており、東脊振村・三田川町との境界になっている。また町の中央は脊振山系に源を発する城原川が南流し、有明海に注いでいる。

2. 歴史的環境

神埼町周辺には、北部の山麓地帯から南部の平野部にかけて多くの遺跡が存在している。特に城山・日の隈山・早稲隈山の山麓から城原川西側の水田部にかけては遺跡の密集地帯で、旧石器時代から江戸時代にかけての多数の遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡は、城山・日の隈山・早稲隈山の山麓部に早期～晩期の遺物散布地が存在し、押型文土器・曾畑式土器・阿高式土器・北久根山式土器が採集されている。

弥生時代以降の遺跡は山麓部から平野部にかけて広大な範囲に多数分布している。四本黒木遺跡⁽²⁾・伏部大石遺跡⁽³⁾・原の前遺跡⁽⁴⁾・利田柳遺跡⁽⁵⁾は墳墓跡で支石墓・甕棺墓・土壇墓・祭祀土壇が検出されている。利田柳遺跡・尾崎土生遺跡（3区）⁽⁶⁾・川寄吉原遺跡⁽⁷⁾は集落跡で、利田柳遺跡・川寄吉原遺跡からは中期～後期の掘立柱建物跡が、尾崎土生遺跡（3区）からは中期～後期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡が検出されている。

古墳時代の遺跡は、平野部の集落跡と山麓の古墳があり、前者のうち尾崎利田遺跡・尾崎土生遺跡⁽⁷⁾からは5～6世紀代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡・井戸跡・溝等が検出されている。古墳には岩田丸山古墳⁽⁸⁾・二子古墳の前方後円墳や、天神尾古墳群・日の尺池古墳群⁽⁹⁾・山崎古墳群などの群集墳がみられる。群集墳は、ほとんどが小規模な横穴式石室を内部主体にもつ円墳であるが、日の尺池古墳群のように竪穴系横口式石室を内部主体にもつものもみられる。

奈良時代～鎌倉時代の遺跡は、野田遺跡・尾崎利田遺跡などの集落跡、帯神山神籠石、烽跡推定地である日の隈烽跡がある。横大路城・横武城は室町時代の山城・館跡である。

条里制は平野部のほぼ全域にわたり施行されており、石井ヶ里・田道ヶ里・平ヶ里などの地名が残っている。平安時代には勅旨田が設定され、さらに皇室領の荘園「神埼荘」として鎌倉・室町時代にかけて継続し、日末貿易の拠点でもあった。また延喜道の遺構が川寄吉原遺跡の北側にみられる。

参考文献

- 佐賀県史編纂委員会『佐賀県史』上巻 1978年
神埼町史編纂委員会『神埼町史』 1978年
瀬野精一郎『肥前国神埼荘史料』 1975年 吉川弘文館

注

1. 北方遺跡から押型文土器、城原遺跡から北久根山式土器、唐香原遺跡から阿高系土器が出土している。
2. 佐賀県教育委員会「四本黒木遺跡発掘調査報告書」 1972年
3. 1983年度佐賀県教育委員会が調査
4. 1985年度佐賀県教育委員会が調査
5. 岩永政博「利田柳遺跡Ⅲ区」 神埼町教育委員会 1980年
6. 天本洋一「川寄吉原遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第61集 1981年
7. 八尋実「尾崎土生遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書Ⅰ』 佐賀県教育委員会 1983年
8. 佐賀大学考古学研究クラブ「岩田丸山前方後円墳」 1983年
9. 中島直幸「山崎古墳」神埼町教育委員会 1979年

II 発掘調査の経過

II 発掘調査の経過

1. 調査にいたる経過

(1) 昭和53年10月、佐賀県教育委員会は九州農政局筑後川下流農業水利事業所長から「佐賀東部導水路」の路線内の文化財分布調査の依頼を受けた。

県教育委員会文化課は導水路の受益地域が26市町村であり、埋蔵文化財が市町村境を越えて広域にわたるため、文化財調査の円滑化を計るために文化課文化財調査第2係をこれの担当とし、翌年2月路線延長18kmについて踏査を行なった。その結果、延長12kmについて埋蔵文化財の存在が予知される旨を同事業所に回答した。

昭和54年10月、埋蔵文化財の発掘調査費の負担について同事務所・水資源開発公団・県農地整備課および文化課は「水資源開発公団の全額負担」ということで合意した。

昭和56年1月、同公団から昭和56年度からの発掘調査を受ける。文化課は昭和56年度当初予算に「佐賀東部導水路内文化財調査費」として計上した。

また、調査の進め方は同路線内の文化財確認調査を実施して遺跡の範囲等を明確にする。その結果を踏まえて発掘調査計画を立てることとした。

昭和56年6月、同公団は調査費の内「受益者負担分」については昭和57年度以降は文化財保護担当部局で負担する。また、昭和56年度の調査費については全額同公団負担とする旨申し入れがあった。

以来、同公団・県農地整備課・県文化課および文化庁とも協議を繰り返した結果「佐賀東部導水路事業も昭和50年農林省と文化庁の『覚書』にそった方向——公団事業分と文化庁の補助事業分に調査域を分割して発掘調査を実施する」「文化課で対応する受益者負担分は調査費の15%を目途とする」ことで合意に達した。同年11月のことであった。

(2) 第1年次これを受けて昭和56年12月、水資源公団筑後川下流用水建設所長山内一郎は佐賀県知事香月熊雄と同導水路線内の神埼町所在の野田東部遺跡(1,600㎡)の発掘調査について委託契約書を交換したのである。契約金1,000万円。

(3) 第2年次昭和57年4月、水資源開発公団筑後川下流用水建設所長山内一郎は、佐賀県知事香月熊雄と佐賀東部導水路の神埼町所在野田遺跡(1,200㎡)・川寄吉原遺跡(800㎡)、大詫間幹線に係る文化財調査について委託契約書を交換した。契約金1,500万円。

(4) 第3年次昭和58年4月、水資源開発公団筑後川下流用水事業所長山内一郎は、佐賀県知事香月熊雄と佐賀東部導水路線内の神埼町所在尾崎土生遺跡(1,140㎡)・大詫間幹線についての発掘調査について委託契約を交換した。契約金1,300万円。

2. 調査組織

調査主体

佐賀県教育委員会

事務局

局長	藤山 巖	文化課課長（昭和56・57年度）
	中島信行	〃（昭和58年度）
	北村一義	〃（昭和59年度）
次長	川久保松広	文化課課長補佐（昭和56年度）
	山田陸三	〃
	高島忠平	〃
庶務	中野安正	文化課庶務係長（昭和56年～58年）
会計	菊池文夫	〃（昭和59年度）
	山下行夫	文化課庶務係主査
	山口 勝	文化課庶務係主事（昭和57・58年度）
	野口茂実	〃（昭和56年度）
	森由起子	〃（昭和56年度）
	東 英明	〃（昭和57～59年度）
	井原裕子	〃（昭和57～59年度）

調査員

調査主任	木下 巧	文化課文化財調査第2係係長
調査員	天本洋一	〃 文化財保護主事
	岩永政博	〃 指導主事（昭和56年度 現・伊万里高等学校教諭）
	藤井信幸	〃 指導主事（昭和58年度 現・唐津工業高等学校教諭）
	蒲原宏行	〃 指導主事
	森田孝志	〃 囑託（現・文化財保護主事）
	種浦 修	〃（昭和57年度 現・諸富町教育委員会）
	古庄秀樹	〃（昭和58・59年度 現・小城町教育委員会）

調査補助 山口繁・大坪正登・六田育子

発掘作業員

伊藤静子 岩石マツ 岡笑子 川頭久美 川浪としえ 瓦博子 木塚とらぐい 古賀安子 小林スマ子
小淵富代 財静子 境友枝 坂口サチ子 佐藤シゲ子 佐藤ツナ子 佐藤信子 佐藤春子 志岐房子
上滝シツエ 園田ツタ 多伊良スナヨ 多伊良信子 高島キヌ子 手塚君枝 手塚テル 手塚トシ子
手塚ミサ子 手塚美千代 中島茂子 中埜スギヨ 中村三千代 原ヤス子 原口八重子 福井ツタエ
船津アキ子 前田スエ 増田栄 光吉ミス 諸永光枝 八戸野ユクエ 柳川久美子 柳川チヨ
山口なつ子 山崎久江 綿島キミエ 綿島ノブ子 綿島春代

調査協力

水資源開発公団・県農林部・中部農林事務所・神埼町教育委員会・神埼町土地改良課
神埼町竹地区・神埼町尾崎土生地区

3. 調査の経過

〈昭和56年度〉

野田遺跡8区・9区

昭和57年1月29日より発掘調査を開始する。8区西側から掘削機により表土剥ぎを始める。表土剥ぎ終了後、遺構検出作業を行ない多数の遺構を検出した。調査区西側には遺構が密集しており、古墳時代・奈良時代・平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土塋・井戸跡・柱穴・溝跡がみられた。これらの遺構を2月上旬から中旬にかけて掘り下げ、遺構個別実測・写真撮影・遺物取り上げを行なった。調査区東側には弥生時代の環状墓・祭祀土塋・古墳時代の掘立柱建物跡がみられた。これらの遺構を2月下旬から掘り下げ、3月中旬までに遺構の掘り下げ遺構個別実測・写真撮影・遺物取り上げを終了し、3月下旬にクレーン車による遺構全体の写真測量を行なった。3月26日に8区・9区の発掘調査を終了する。発掘調査と併行して出土遺物の整理作業（水洗い・乾燥・註記・選別）を神埼発掘調査事務所において行なった。

野田遺跡8区・9区の発掘調査と併行して、2月中旬から下旬にかけて、掘削機により川寄吉原遺跡Ⅱ区の表土剥ぎを行なう。

〈昭和57年度〉

野田遺跡10・11区

昭和57年度4月22日より発掘調査を開始する。昨年度調査を終了した9区東側に隣接する10区西側より遺構検出を始める。10区は遺構の密度が疎らで、西側は時期不明の溝跡がみられるのみであった。東側からは弥生時代の土塋が検出さ



Fig 2 掘削機による表土剥ぎ（尾崎土生遺跡11区）



Fig 3 遺構検出作業（尾崎土生遺跡12区）



Fig 4 遺構の掘り下げ（野田遺跡8区）



Fig 5 遺構の掘り下げ（川寄吉原遺跡）

れた。5月下旬にかけてこれらの遺構を掘り下げ、5月下旬に遺構実測・写真撮影・遺物取り上げを行なった。5月下旬から11区の遺構検出を始め、弥生時代の土壌・溝跡を検出した。6月上旬にかけてこれらの遺構の掘り下げ、遺構実測・写真撮影・遺物の取り上げを行ない、6月7日に発掘調査を終了した。

川寄吉原遺跡Ⅱ区

昭和57年6月8日より発掘調査を開始する。Ⅲ区より遺構検出を始め、弥生時代の遺物包含層と井戸跡を検出する。6月上旬にⅢ区の調査を終了。6月上旬～中旬にⅡ区の遺構検出を行ない弥生時代の土壌・柱穴・遺物包含層を検出する。梅雨期間中は発掘作業を中断する。7月下旬から8月下旬にかけて遺物包含層を掘り下げ杭列を検出する。多量の土器とともに大足・杭等の木器や銅鏃が出土する。8月中旬から遺構の掘り下げを始め、8月下旬から9月上旬にかけて遺構実測・写真撮影・遺物取り上げを行ない9月6日に発掘調査を終了する。

尾崎土生遺跡11区

昭和58年1月26日より発掘調査を開始する。掘削機により表土を剥ぎ、その後、2月上旬にかけて遺構検出を行なった。調査区の全面にわたり古墳時代～鎌倉時代の掘立柱建物跡・土壌・井戸跡・柱穴・溝跡を検出。2月中旬から3月上旬にかけてこれら遺構の掘り下げを行なう。3月上旬～下旬に遺構写真撮影・遺構実測・遺物取り上げを行ない、3月25日に発掘調査を終了した。

昨年度にひきつぎ昭和57年4月1日より神埼発掘調査事務所において野田遺跡8～11区の遺物整理作業（水洗い・乾燥・選別・註記・接合・



Fig 6 遺構の掘り下げ（尾崎土生遺跡14区）



Fig 7 遺構の掘り下げ（尾崎土生遺跡12区）



Fig 8 遺構の掘り下げ（尾崎土生遺跡12区）



Fig 9 遺構の掘り下げ（尾崎土生遺跡14区）

復元)を開始する。6月下旬からは川寄吉原遺跡II区の遺物、昭和58年1月からは尾崎土生遺跡11区の遺物を加え、発掘調査を併行して、これらの遺物整理作業を昭和58年3月31日まで行なった。

〈昭和58年度〉

尾崎土生遺跡12・13・14区

13区は昭和58年4月20日より発掘調査を開始する。掘削機による表土剥ぎの後、遺構検出を行なう。5月上旬までに鎌倉～室町時代の土壌溝跡・柱穴を検出した。これらの遺構を5月中旬から下旬にかけて掘り下げる。6月上旬から中旬にかけて遺構写真撮影・遺構実測遺物取り上げを行ない、6月15日に発掘調査を終了した。

14区は8月1日より発掘調査を開始する。掘削機による表土剥ぎ後、8月上旬まで遺構検出を行なう。14区は遺構の密度が疎らで、弥生時代の土壌、古墳時代の土壌・溝跡が検出された。これら遺構を8月中旬から9月上旬にかけて掘り下げる。9月上旬から中旬にかけて遺構実測・写真撮影・遺物取り上げを行ない、9月14日に発掘調査を終了した。

12区は9月26日より発掘調査を開始する。掘削機による表土剥ぎ後、遺構検出を行ない古墳時代～平安時代の土壌・柱穴を検出する。10月上旬から中旬にかけて遺構の掘り下げを行なう。10月中旬から下旬にかけて遺構実測・写真撮影・遺物取り上げを行ない、10月27日に発掘調査を終了する。

昭和58年4月より11区および確認調査出土遺物の整理作業を開始する。遺物整理作業は発掘調査を併行して行ない6月からは13区、10月からは12・14区の遺物も加えて、昭和59年3月31日まで行なった。



Fig 10 遺構実測(尾崎土生遺跡12区)



Fig 11 遺物整理(神埼発掘調査事務所)



Fig 12 図面整理・製図(神埼発掘調査事務所)



Fig 13 遺物実測(文化財資料室)

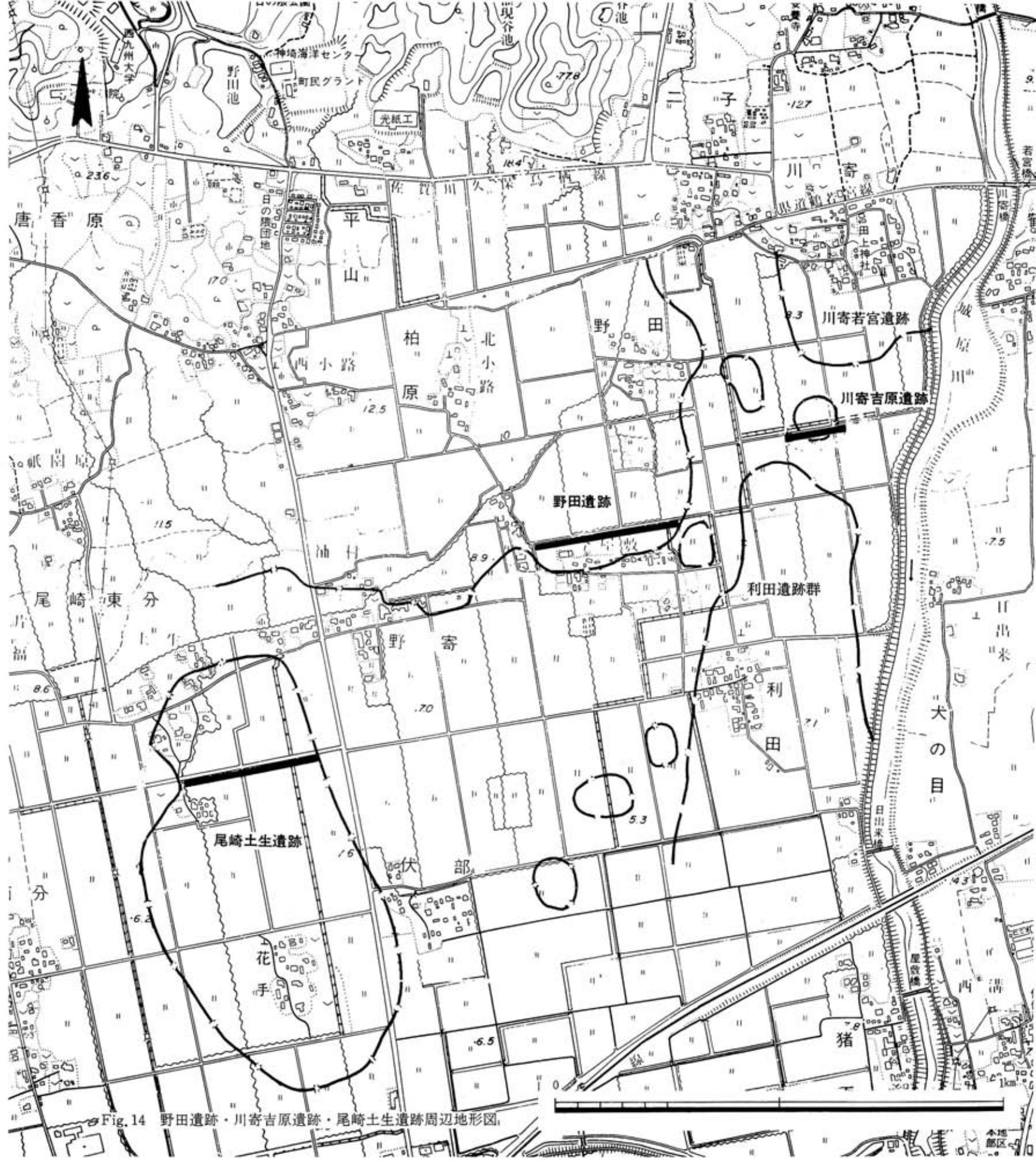


Fig.14 野田遺跡・川寄吉原遺跡・尾崎土生遺跡周辺地形図

III 野 田 遺 跡

野 田 遺 跡

1. 遺跡の概要

野田遺跡は佐賀県神埼郡神埼町大字竹に所在する。遺跡は、日の隈山南方の、城原川により形成された標高8～10mの扇状地上に立地している。遺跡は東西1km以上、南北500m以上の大規模なもので、主に弥生時代から鎌倉時代にかけて営まれている。今回の調査では導水路予定地を、水路および道路を境にして西から8区・9区・10区・11区とした。このうち8区～10区の北側を、県営圃場整備事業に伴い昭和53年度に、県教育委員会が発掘調査を行っており、弥生時代から平安時代にかけての多数の遺構が検出され、遺物が出土している。昭和53年度に調査を行なった地区（Ⅰ区～Ⅶ区）は水路予定地で、このうちⅠ区の南側の東西に走る水路部公の約210mが今回報告する8区～10区と道路を挟んで平行する。Ⅰ区～Ⅶ区の主な検出遺構および出土遺物はTab. 1に記している。

8区～11区から検出された遺構は、弥生時代から鎌倉時代にかけてのものである。8区は遺構の密度が濃く、古墳時代の竪穴住居跡1軒・土壌4基・掘立柱建物跡3棟、平安時代の掘立柱建物跡13棟・柵列5列・井戸跡5基・土壌2基・溝跡4条・柱穴多数、江戸時代以降の溝跡7条を検出した。9区からは弥生時代の土壌2基・甕棺墓6基、古墳時代の掘立柱建物跡7棟・柵列2列・溝跡2条、平安時代の溝跡1条が検出されている。10区は遺構が疎らで弥生時代の土壌8基・時期不明の溝跡4条・柱穴を検出したにすぎない。11区からは弥生時代の土壌2基、柱穴が検出されている。

Tab. 1 野田遺跡Ⅰ区～Ⅶ区（昭和53・54年度調査）の遺構・遺物

区	検 出 遺 構	出 土 遺 物	備 考
Ⅰ 区	弥生時代 甕 棺 墓——3基 土 壌 跡——1条 平安時代 掘立柱建物跡——14棟 井 戸 跡——2基 土 壌 跡——32基 溝 跡——19条	磨製石鏃 土師器（甕）、須恵器（甕・杯）、 手づくね土器・曲物・加工木材 土師器（甕・杯・カマド）、黒色土器 須恵器（甕・杯・円面碗） 青磁（越州窯系）、白磁碗 ヒョウタン製容器・滑石製品（鏃・分銅）	須恵器に「井」の字を篆刻したものが1点、墨書のあるものが1点みられる。
Ⅱ 区	弥生時代 土 壌——1基 古墳時代 溝 跡——2条 平安時代 土 壌——1基 時期不明 土 壌——15基 溝 跡——12条	土器（甕） 土師器（甕） 土師器（杯）	
Ⅲ 区	弥生時代 甕 棺 墓——1基 平安時代 土 壌——9基 溝 跡——14条		
Ⅳ 区	弥生時代 土 壌——6基 時期不明 土 壌——2基 溝 跡——2基	土器（甕・甕）	
Ⅴ 区	平安時代 井 戸 跡——1基 土 壌——8基 溝 跡——2条	土師器（甕・杯）、黒色土器	
Ⅵ 区	平安時代 土 壌——4基 溝 跡——5条		
Ⅶ 区	時期不明 土 壌——2基		



Fig 15 野田遺跡周辺地形図 (1/3,000)

2. 遺 構

検出された遺構は主に弥生時代から平安時代にかけてのもので、甕棺墓・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壇・井戸跡・溝跡・柱穴がみられる。遺構は8区～11区のはほぼ全域に広がっており、特に8区に密集している。

(1) 弥生時代の遺構

9区東側・10区東側・11区から土壇10基、甕棺墓6基が検出されている。

土壇

SK059土壇 (Fig.16, PL.4-1)

9区東側, SJ 056甕棺墓の東側に位置する。上部を削平されており残存状態は良くない。平面形は不整形で長さ2.24m, 幅1.9～2.3m, 壁は斜めに立ち上がり, 深さ0.06～0.23m。床は南側が二段になっている。埋土は黒褐色土で, 遺物は埋土より壺・甕・高杯の破片が出土した。この土壇は甕棺墓群に隣接していることや出土遺物より祭祀土壇と考えられる。

SK097土壇 (PL.4-2)

10区東側, S K 099 土壇の南西に位置する。平面は不整形で上部を削平されており残存状況は良くない。長さ0.9m, 幅0.88m, 深さ0.09m。壁は傾斜して立ち上がる。埋土は黒色土で, 遺物は床面に貼りついた状態で甕が出土した。

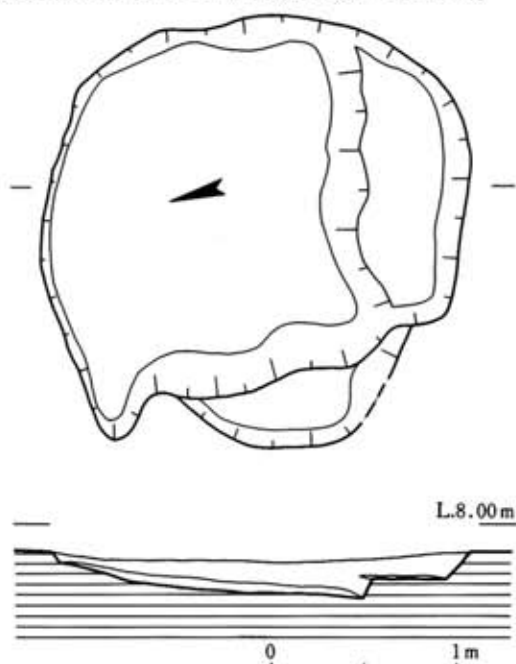


Fig 16 SK059 土壇実測図

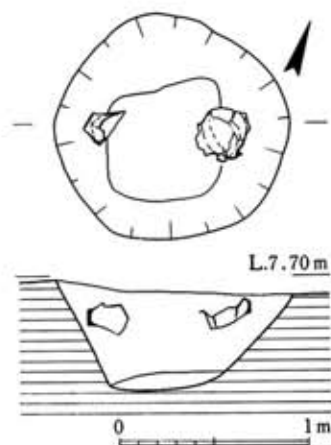


Fig 17 SK099 土壇実測図

SK099土壌 (Fig.17, PL.4-3)

10区東側に位置する。平面形は円形で、径1.2～1.25m、壁は斜めに立ち上がり特に西側は急角度である。深さ0.52m。埋土は4つに分かれ1層は厚さ約20cmの黒色土、2層は厚さ約15cmの暗灰色土、3層は厚さ数cmの木の葉・枝などの植物遺体を多く含む褐色土、4層は厚さ10～15cmの灰黒色土である。遺物は1層と2層の間より壺・甕が出土した。

Tab 2 野田遺跡弥生時代土壌一覧表

遺構番号	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考
		長	幅	深		
SK058	不整形	1.34	1.14	0.19	甕小破片	祭祀土壌
SK059	不整形	2.24	1.90～2.30	0.23	壺・甕・高杯	
SK095	不整形	1.70	1.10	0.18	甕・壺	
SK096	楕円形	1.40	0.7以上	0.06	壺	
SK097	不整形	0.9	0.88	0.09	甕	
SK099	円形	1.25	1.20	0.52	壺・甕	
SK100	楕円形	1.40	0.98	0.25	甕小破片	
SK101	楕円形	1.45	1.20	0.17		
SK102	不整形	2.1以上	1.1以上	0.14	鉢	
SK104		1.2以上	(1.30)	0.42	甕	

甕棺墓

SJ052甕棺墓 (Fig.18, PL.4-4)

9区東側、SJ053甕棺墓の西側に位置する。接口式の小児用複式棺である。上部を削平されており上甕の一部と下甕の約半分程残っている。墓壇は平面が楕円形で、残存部で長さ0.82m、幅0.51m、深さ0.16m。棺は上甕・下甕とも甕を用い傾斜角29°で埋置している。

SJ053甕棺墓 (Fig.19, PL.4-5)

9区東側、SJ052甕棺墓の東側に位置する成人用の複式棺と考えられるが上部の削平が著しく棺はすべて抜き取られている。墓壇は平面が楕円形で、残存部で長さ1.23m、幅0.66m、深さ0.16m。棺は全く残っていないが、抜き跡より推定して、上甕に鉢、下甕に甕を用いて傾斜角約12°で埋置していたと考えられる。

SJ054甕棺墓 (Fig.20, PL.4-6)

9区東側、SK058土壌の西側に位置する接口式の成人用複式棺である。上部が削平され、棺は

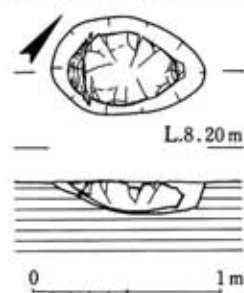


Fig 18 SJ052甕棺墓実測図

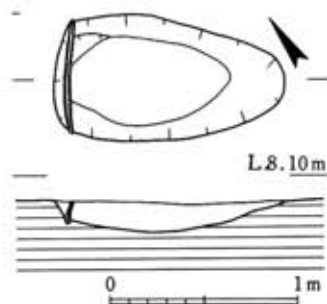


Fig 19 SJ053 甕棺墓実測図

上甕の一部と下甕の約4分の1を残すのみである。墓壇は平面が不整楕円形で、残存部で長さ1.98m、幅1003m、深さ0.17m。棺は上甕に鉢、下甕に大甕を用いて、ほぼ水平に埋置している。上甕と下甕の接口部には目張り粘土がみられる。

SJ055甕棺墓 (Fig.21, PL.4-7)

9区東側、SJ053甕棺墓の東側に位置する接口式の成人用複式棺である。上部の削平が著しく、棺は上甕一部と下甕の約4分の1を残すのみである。墓壇は平面が楕円形で、残存部で長さ1.25m、幅0.60m、深さ0.80m。棺は下甕に大甕を用いて、ほぼ水平に埋置している。上甕は口縁部の一部しか残っていないが鉢もしくは甕と思われる。上甕と下甕の接口部には目張り粘土がみられる。

SJ056甕棺墓 (Fig.22, PL.4-8)

9区東側、SK058土壇の東側に位置する覆口式の成人用複式棺である。上部が削平されているが上甕の約2分の1、下甕の約3分の2が残っており、今回調査をした甕棺墓では最も残りが良い。墓壇は平面が隅丸長方形に近く、長さ1.94m、幅1.11m、深さ0.46m。墓壇の東側は2段になっており、西壁は深行き15cmの掘込みがあり下甕の底部を挿入している。棺は上甕下甕とも大甕を用いており、上甕の口縁部は打ち欠いていた。傾斜角7°で埋置しており、上甕と下甕の隙間には目張り粘土がみられる。

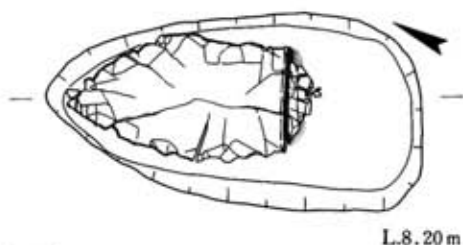


Fig 20 SJ054 甕棺墓実測図

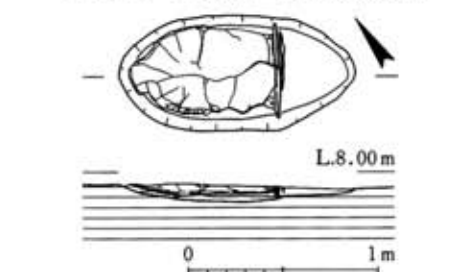


Fig 21 SJ055 甕棺墓実測図

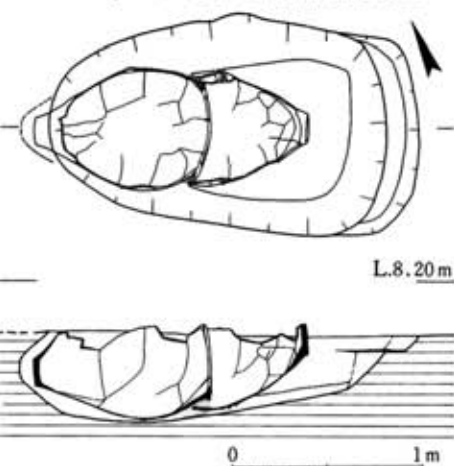


Fig 22 SJ056 甕棺墓実測図

Tab 3 野田遺跡弥生時代甕棺墓一覧表

遺構番号	甕棺型式	器形 上・下	墓壇 (m)			方位	傾斜	備考
			長	幅	深			
SJ052	複式棺・接口式	甕・甕	0.82	0.51	0.16	N-49.5°-E	29°	小児棺
SJ053			1.23	0.66	0.16	N-53°-W	約12°(推定)	墓壇のみ
SJ054	複式棺・接口式	鉢・甕	1.98	1.03	0.17	N-26.5°-W	ほぼ水平	目張り粘土あり
SJ055	複式棺・接口式	・甕	1.25	0.60	0.80	N-54°-W	ほぼ水平	上ガノは口縁部の一部のみ残存・目張り粘土あり
SJ056	複式棺・覆口式	甕・甕	1.94	1.11	0.46	N-66°-W	7°	上ガノは口縁部打ち欠き・目張り粘土あり
SJ057			0.72	0.52	0.22	N-13°-E		棺は小破片のみ出土

(2) 古墳時代の遺構

8区、9区から竪穴住居跡1基・掘立柱建物跡8棟・土壇11基・溝跡2条・柵列2列および柱穴が検出されている。

竪穴住居跡

SB001竪穴住居跡 (Fig.23, PL.5-1)

8区西端に位置し主軸をはば南北にとる。南側をS D 003 溝跡、北側をS K 005 土壇に切られ、また上部は著しい削平をうけ 残存状況は良くない。平面形は方形もしくは長方形と考えられるが、西壁は削平により明らかでない。残存部で長さ5.56m、深さ0.04~0.06mである。

A~Dの4つの柱穴が支柱穴になる可能性がある。南壁に接して、長さ1.44m、幅100m、深さ0.3mの貯蔵穴を伴う。また南壁に長さ1.6m程壁溝が残っていた。遺物は埋土から土師器の小破片が数点出土した。

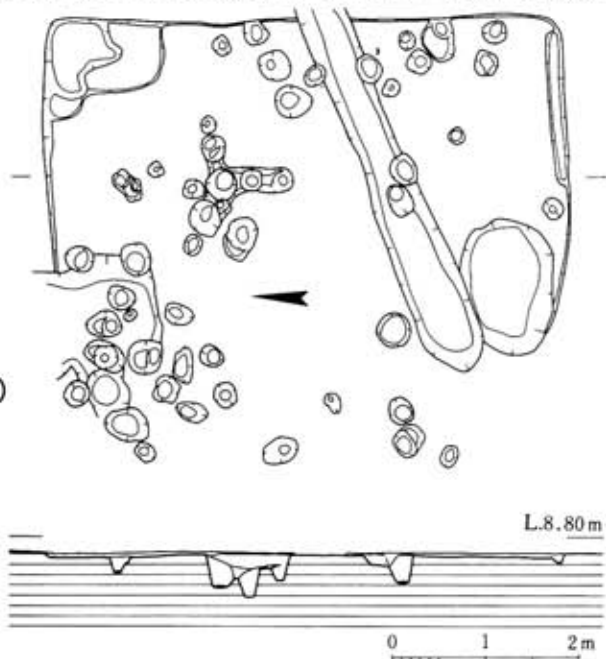


Fig 23 SB001竪穴住居跡実測図

掘立柱建物跡

SB074建物跡 (Fig.24, PL.5-2)

9区中央部に位置する1間×1間の東西棟建物跡である。棟方向をN-73°-Wにとり桁行柱間2.5m、梁行柱間2.4mを測る。柱穴は径32~46cm、深さ32~40cm。2個が単掘りで、他の2個は柱の部分小さく掘り込む二段掘りである。遺物は柱穴の埋土より土師器甕の破片が出土している。

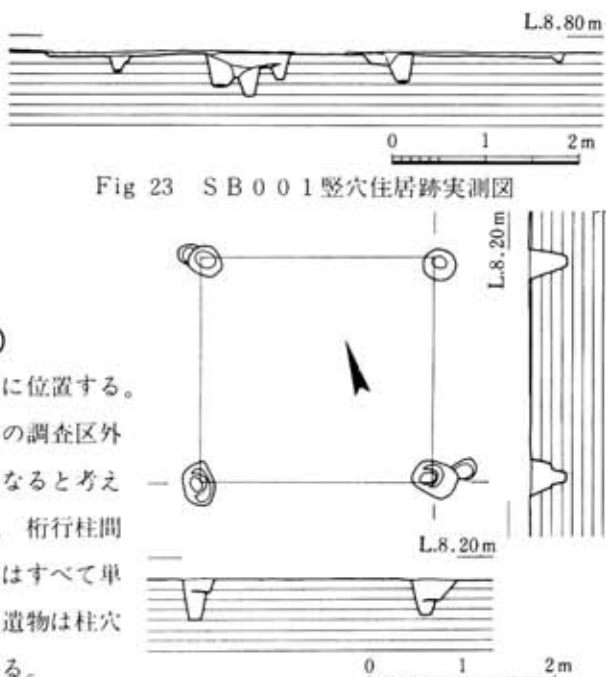


Fig 24 SB074掘立柱建物跡実測図

SB075建物跡 (Fig.25, PL.5-3)

9区中央部、SB074建物跡の東側に位置する。検出したのは1間×1間であるが、南の調査区外に延び、南北棟で2間×1間の規模になると考えられる。棟方向をN-31°-Eにとり、桁行柱間1.8m、梁行柱間2.4mを測る。柱穴はすべて単掘りで、径24~30cm、深さ26~32cm。遺物は柱穴埋土より土師器杯の破片が出土している。

SB076建物跡 (Fig.26, PL.5-3)

9区中央部, SB 075 建物跡の北東に位置する2間×1間の南北棟建物跡である。棟方向をN-27°-Eにとり桁行2.8m, 梁行2.5mで桁行柱間は1.4mの等間隔である。柱穴は径22~34cm, 深さ18~30cmで, 1個のみ二段掘りで, 他はすべて単掘りである。遺物は柱穴の埋土から土師器甕・杯の破片が出土した。

SB077建物跡 (Fig.27, PL.6-1)

9区中央部, SB 076 建物跡の東側に位置する2間×2間の総柱建物跡でSB 078 建物跡と重複している。棟方向をN-39°-Eにとり, 桁行3.8m, 梁行3.6m。桁行柱間1.9m, 梁行柱間1.8mの等間隔である。柱穴は径32~40cm, 深さ16~28cmで, 1個のみ二段掘りで 他はすべて単掘りである。遺物は柱穴の埋土より土師器甕の破片が出土している。この建物跡はSB 078 建物跡と重複しており, SB 078 建物跡の建て直しの可能性がある。

SB078建物跡 (Fig.28, PL.6-1)

9区中央部, SB 076 建物跡の東側に位置する1間×1間の建物跡で棟方向をN-39°-Eにとる。SB077建物跡と重複している。桁行柱間・梁行柱間とも2.8mの等間隔である。柱穴は径26~30cm, 深さ26~30cm, 1個のみ二段掘りで他は単掘りである。

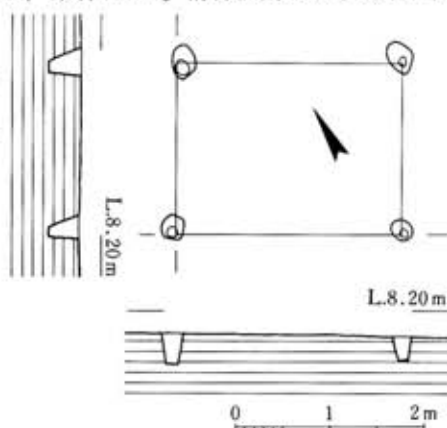


Fig 25 SB075建物跡実測図

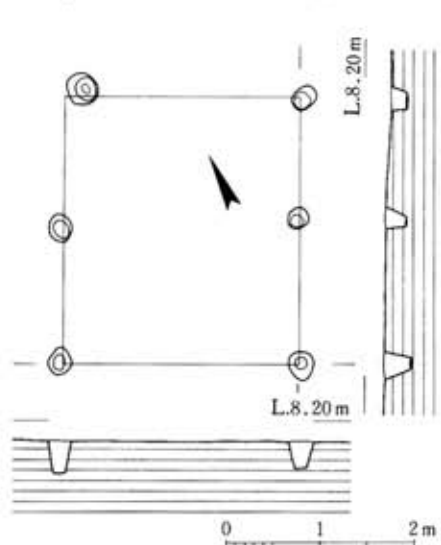


Fig 26 SB076建物跡実測図

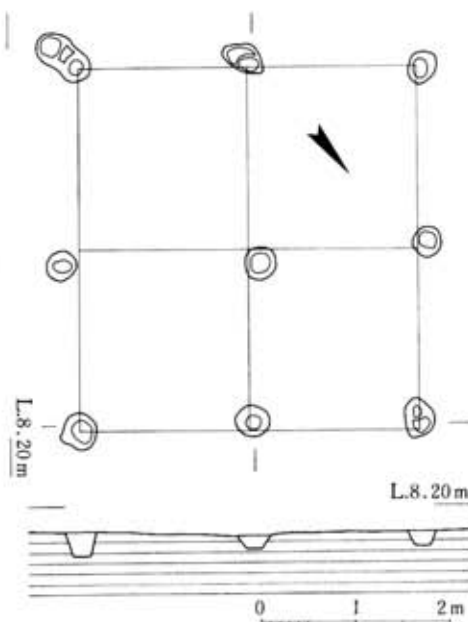


Fig 27 SB077建物跡実測図

SB081建物跡 (Fig.29, PL.6-2)

9区東側, SB080建物跡の東側に位置する1間×1間の建物跡で, 棟方向をN-3°-Wにとる。桁行柱間, 梁行柱間とも2.8mの等間隔である。柱穴は径24~50cm, 深さ19~25cmですべて単掘りである。遺物は出土していない。

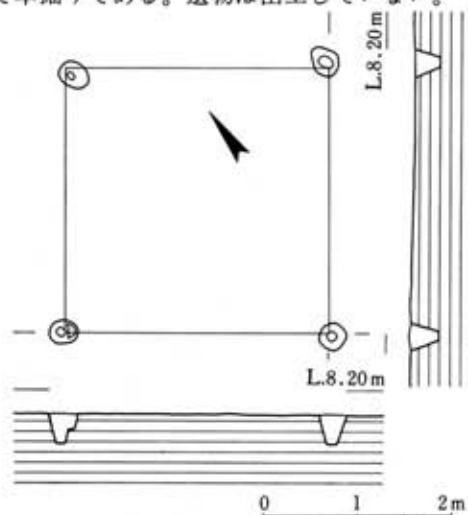


Fig 28 SB078 建物跡実測図

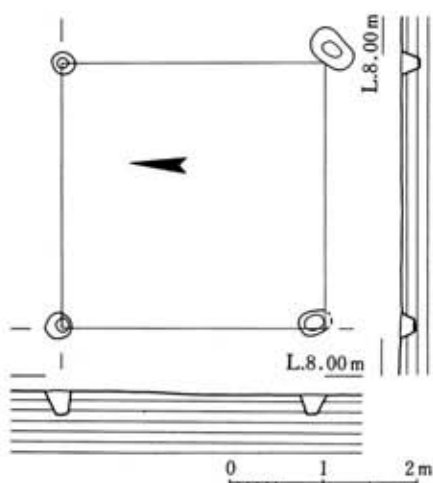


Fig 29 SB081 建物跡実測図

Tab 4 野田遺跡古墳時代掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	長軸方位	規模 桁行×梁行	柱間 (m)		総面積 (㎡)	出土遺物	備考
			桁行	梁行			
SB040	N-74°-E	3×2以上	2.0	1.5		土師器杯	総柱建物跡
SB074	N-73°-W	1×1	2.5	2.4	6.0	土師器甕	
SB075	N-31°-E	1×1以上	1.8	2.4	4.32以上	土師器杯	
SB076	N-27°-E	2×1	1.4	2.5	7.0	土師器甕・杯	総柱建物跡
SB077	N-39°-E	2×2	1.9	1.8	13.68	土師器甕	
SB078	N-39°-E	1×1	2.8	2.8	7.84		
SB079	N-38°-E	1×1	2.8	2.8	7.84	土師器甕	南側にもつ1間広がり総柱建物跡になる可能性あり
SB080	N-18°-W	2×1	1.4・1.9	1.4	9.24	土師器甕	
SB081	N-3°-W	1×1	2.8	2.8	7.84		
SB084	N-73°-W	2×1	1.8・2.2	2.4	9.60	土師器甕	
SB085	N-21°-E	1×1	2.5	2.4	6.0		
SB089	N-55°-E	1×1	2.0	1.8	3.60		

柵列

9区中央部から柵列と考えられる柱穴の並びを2列検出した。SA090はSB074建物跡の北西に3個の柱穴が2mの等間隔でほぼ南北に並んでいる。柱穴の径26~30cm, 深さ12~26cmを測る。SA091はSB077建物跡の北側の桁に隣接して3個の柱穴が2.3mの等間隔で並び, さらに垂直に曲がり, 2m間隔でもう一個の柱穴がみられる。柱穴の径26~35cm, 深さ20~45cmを測る。このSA091はSB077建物跡を遮蔽する柵列と考えられる。

土壌

SK005土壌 (Fig.30, PL.7-4)

8区西端, SB038建物跡の北側に位置する。上部の削平が著しくまた北側をSE006井戸跡により切られており、残存状況は良くない。平面形は不整楕円形で、長さ2.72m、幅1.12~1.72m、深さ0.19mを測る。壁は傾斜して立ち上がり、床はほぼ水平である。遺物は北側の床面上から土師器甕・甗・杯がまとめて出土した。

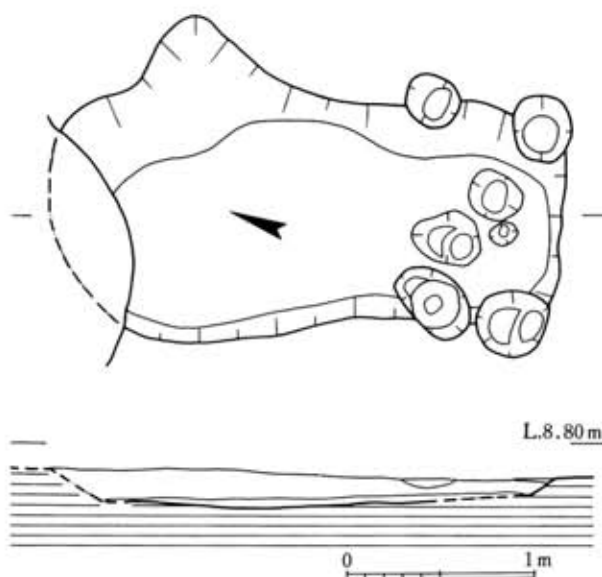


Fig 30 SK005土壌実測図

SK013土壌 (Fig.31, PL.7-5)

8区西側, SB083建物跡の東側に位置する。南側の一部をSD010溝跡により切られている。平面形は楕円形で、長さ1.66m、幅1.22m、深さ0.18mを測る。壁は傾斜して立ち上がり床はほぼ水平である。遺物は床面および床面からやや浮いた状態で土師器甕・杯・ミニチュア土器が出土した。

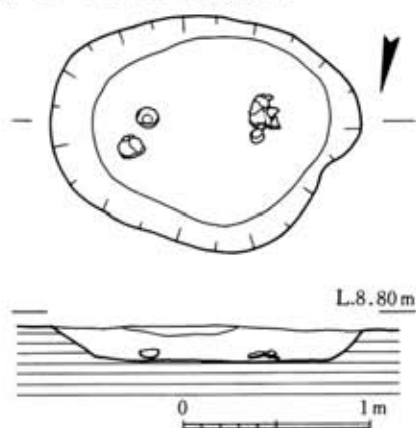


Fig 31 SK013土壌実測図

SK050土壌 (Fig.32, PL.7-6)

9区西側, SB074建物跡とSD073溝跡の中間に位置する。上部の削平が著しく残存状況は良くない。平面形はほぼ円形で径1.3~1.32m、深さ0.12mを測る。壁は急角度に立ち上がり床は傾斜して東側が深い。遺物は北側の床面から完形の須恵器杯が1個体出土した。

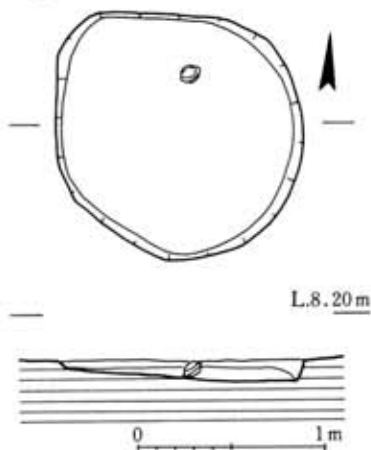


Fig 32 SK050土壌実測図

Tab 5 野田遺跡古墳時代土壌一覧表

遺構番号	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考
		長	幅	深		
SK005	不整形	2.72	1.12~1.72	0.19	土師器甕・甗・杯	SD010に切られる
SK007	不整楕円形	3.50	1.30~0.80	0.65	土師器甕・ミニチュア・鉄片	
SK013	楕円形	1.66	1.22	0.18	土師器杯・甕・ミニチュア	
SK015	隅丸長方形	2.80	1.70~2.0	0.25	土師器杯・須恵器杯・砥石	
SK028	楕円形	1.44	1.22	0.24	土師器・須恵器小片	
SK050	円形	1.32	1.30	0.12	須恵器杯	SD036に切られる
SK051	楕円形	1.26	0.86	0.11	須恵器甕	
SK060	楕円形	1.02	0.84	0.45	須恵器杯	
SK067	楕円形	1.84	1.20	0.10	須恵器杯	
SK070	不整形	2.08	0.58~0.72	0.35	土師器高杯	
SK071	不整形	1.61	0.70~1.0	0.10	土師器甕	

溝跡

SD072溝跡 (PL.6-3, PL.7-1-2)

9区北東に位置する。大規模な溝跡では南北に走る。上面幅3.6~5.2m、深さ1.32~1.48mを測る。断面は逆台形に近く、北側が深くなっている。埋土は黄褐色土・暗褐色土・黒褐色土・灰褐色土の砂質土および粘質土で複雑に堆積していた。遺物は埋土下部より土師器杯・甕・壺、須恵器杯、木製品（大足）が出土した。

SD073溝跡 (PL.6-3)

9区東側に位置し、ほぼ南北に走る。上面幅0.5~0.8m、深さ0.2m。断面は碗形で、埋土は上部が黒褐色土、下部が灰褐色土である。遺物は埋土より須恵器甕・高杯の小破片が出土した。

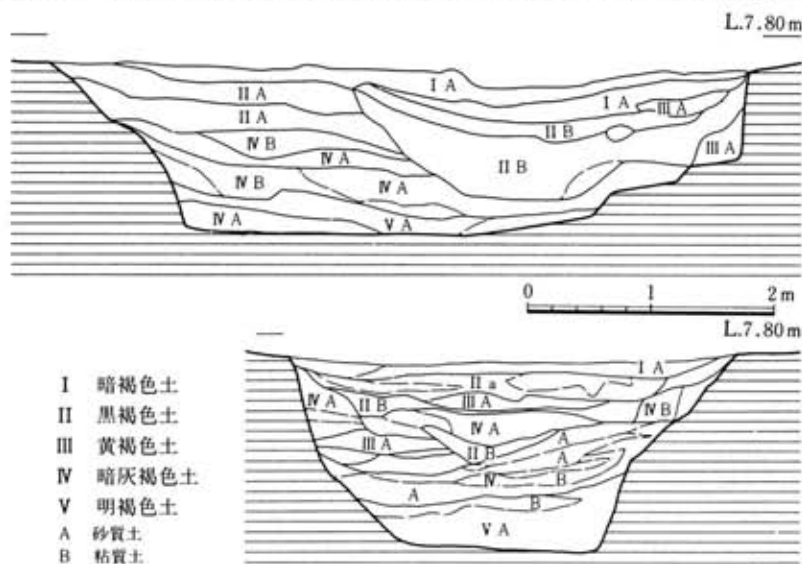


Fig 33 SD072溝跡土層断面図

(3) 平安時代の遺構

8区および9区西端から掘立柱建物跡13棟・井戸跡7基・土塙9基・溝跡5条・柵列3列・柱穴多数を検出した。

掘立柱建物跡

SB038建物跡 (Fig.34, PL.8-1)

8区西端に位置する。身舎の規模が2間×2間の大規模の東西棟建物跡で棟方向をN-86°-Eにとる。北側・南側・西側に庇を有する。身舎の桁行5.6m、梁行4.0mで、桁行柱間2.6m、梁行柱間2.0mの等間隔である。庇の幅はすべて1.3m。身舎の柱穴は径30~40cm、深さ32~40cm、庇の柱穴は径22~34cm、深さ20~30cmを測る。柱穴には単掘りのものと2段掘りのものがみられる。遺物は柱穴から土師器杯が出土した。

SB041建物跡 (Fig.35, PL.8-2)

8区西側、SB083建物跡の南側に位置する。2間×1間の東西棟建物跡で棟方向をN-79°

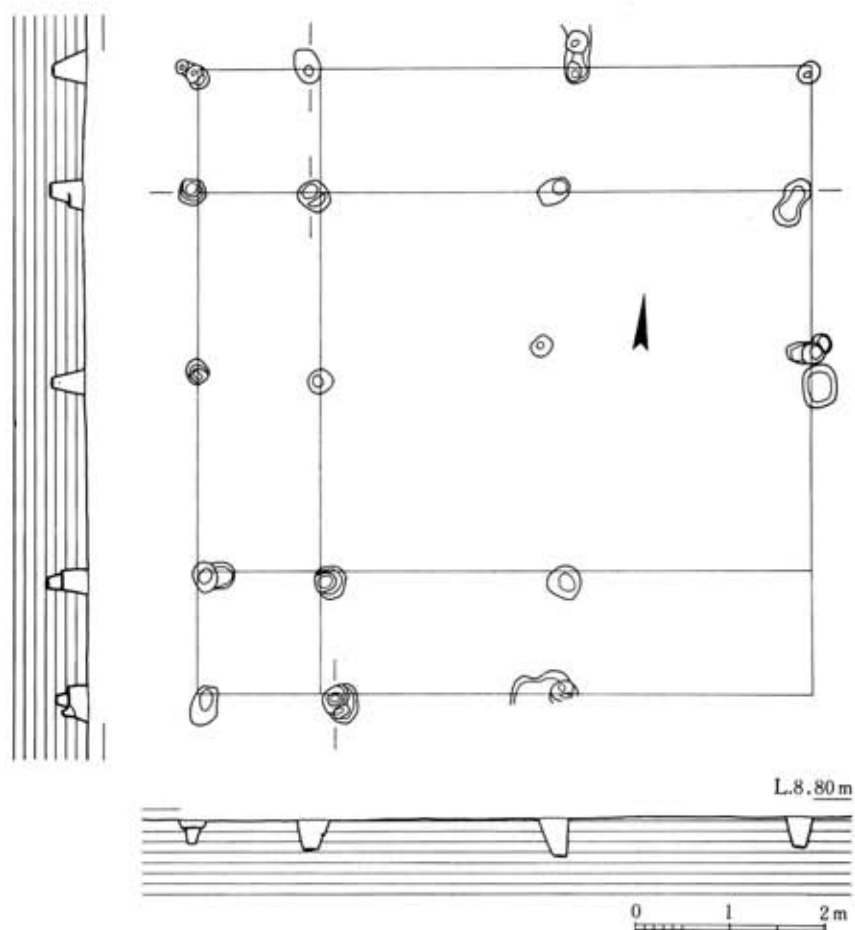


Fig 34 SB038 溝跡実測図

—Eにとる。桁行柱間1.9m，梁行柱間1.8mを測る。柱穴は径21～36cm，深さ26～30cm。1個が2段掘りで他は単掘りである。遺物は柱穴より瓦器・土師器の小破片が出土している。

SB042建物跡 (Fig.36, PL.8—3)

8区東側，SB087建物跡の南側に位置する。5間×2間の大規模な東西棟建物跡で棟方向をN—90°—Eにとる。桁行8.0m，梁行3.8mで梁行柱間は1.9mの等間隔だが桁行柱間は1.4～1.8mと等間隔でない。柱穴は径30～52cm，深さ24～42cmで単掘りのものと2段掘りのものがある。遺物は柱穴から土師器杯の破片が出土している。

SB043建物跡 (Fig.37, PL.8—3)

8区東側，SB087建物跡の南側に位置する。2間×1間の東西棟建物跡で棟方向をN—84°—Wにとる。桁行3.8m，梁行2.2mで桁行柱間は1.9mの等間隔である。柱穴は径21～64cm，深さ20～26cmで1個が2段掘りの他はすべて単掘りである。遺物は柱穴から土師器杯の破片が出土している。

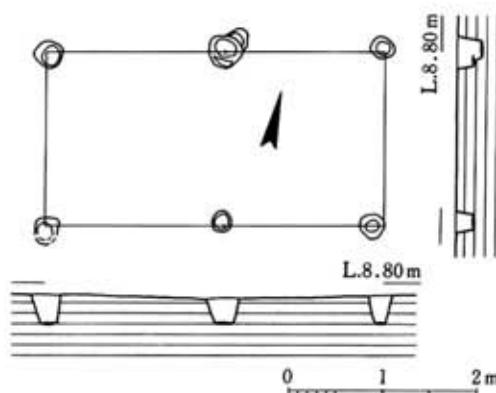


Fig 35 SB041建物跡実測図

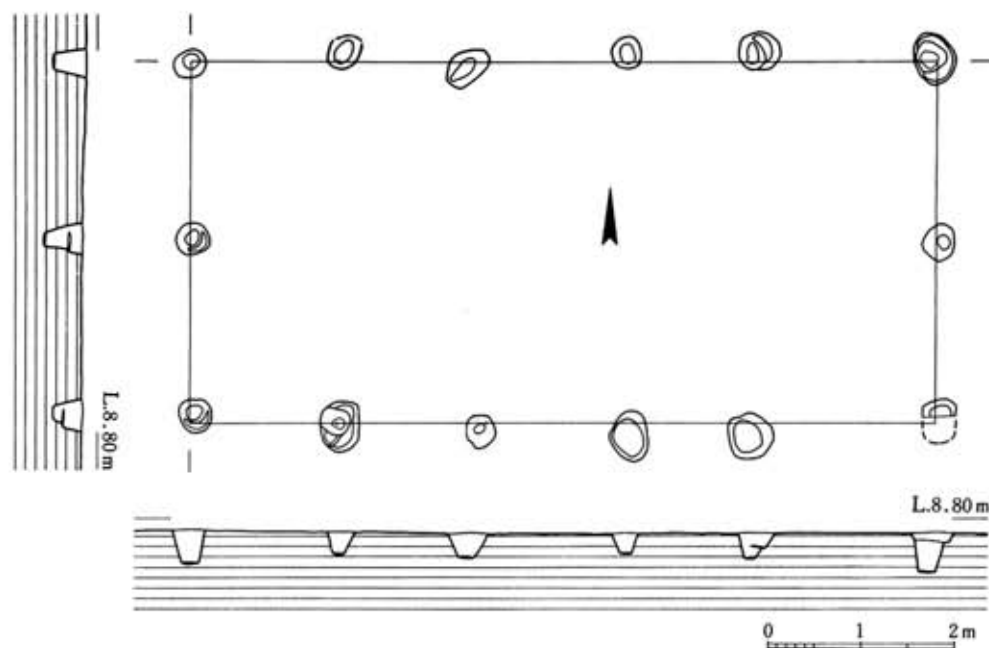


Fig 36 SB042建物跡実測図

SB044建物跡 (Fig.38)

8区西側, SB042建物跡の東側に位置し, SB087建物跡と切り合っている。4間×1間の東西棟建物跡で棟方向をN-81°-Eにとる。桁行6.0m, 梁行2.7m, 桁行柱間は北側の2間が1.1m・1.9mで他はすべて1.5mある。柱穴は径20~48cm, 深さ20~34cm, 1個が2段掘りで他は単掘りである。遺物は柱穴から土師器杯, 須恵器甕の破片が出土している。

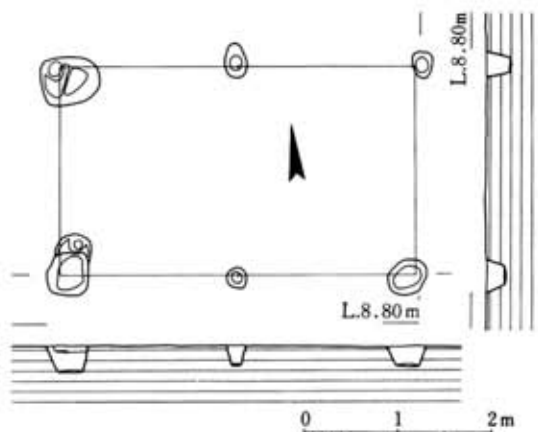


Fig 37 SB043 建物跡実測図

SB045建物跡 (Fig.39, PL.9-1)

8区中央部, SB044建物跡の東側に位置し, 中央をSD019溝跡により切られている。2間×1間の南北棟建物跡で棟方向をN-2°-Wにとる。桁行3.4m, 梁行1.9m, 桁行柱間は1.7mの等間隔である。柱穴は径18~50cm, 深さ15~30cm, 南側の2個が2段掘りで他は単掘りである。遺物は柱穴から土師器杯が出土している。

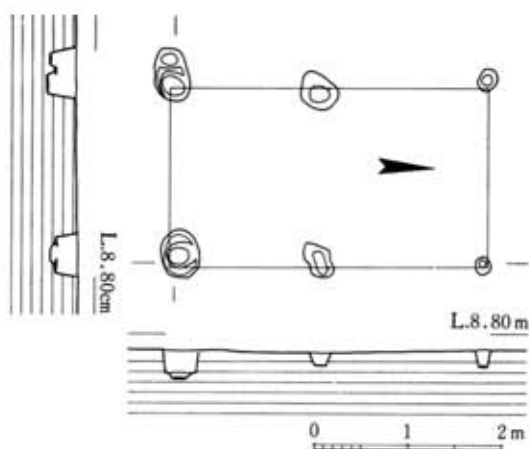


Fig 38 SB045 建物跡実測図

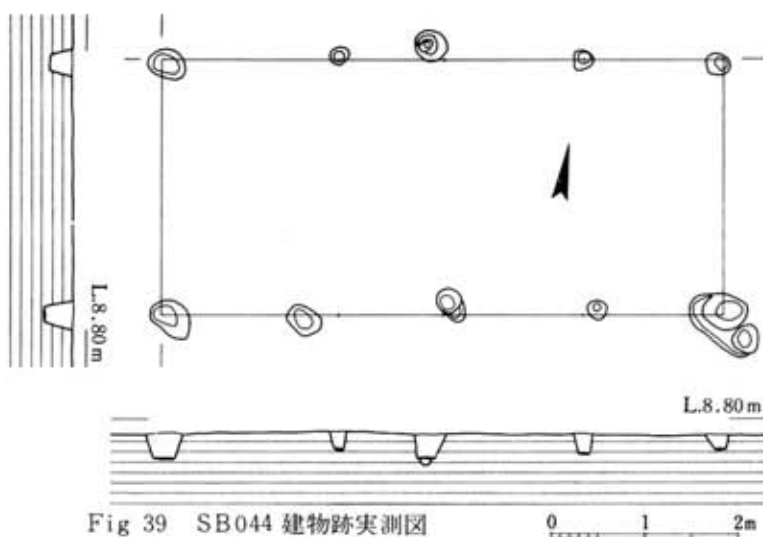


Fig 39 SB044 建物跡実測図

SB082建物跡 (Fig.40, PL.9-2)

8区中央部、SB045建物跡の北東に位置し、中央部をSD025・027溝跡に切られている。2間×1間の南北棟建物跡で棟方向をN-5°-Wにとる。桁行4.0m、梁行2.0m、桁行柱間は1.6mと2.4mで等間隔でない。柱穴は径22~34cm、深さ18~23cm、北東隅の1個が2段掘りで他は単掘りである。遺物は柱穴から土師器杯の破片が出土している。

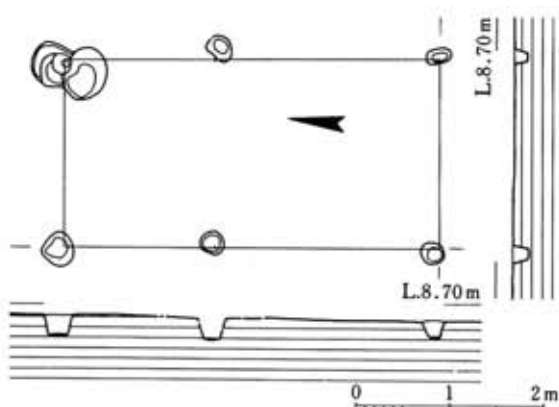


Fig 40 SB082 建物跡実測図

SB083建物跡 (Fig.41)

8区北側、SB041建物跡の北側に位置する。SA095 柵列を挟んで SB041建物跡とはほぼ並列している。中央をSD009・010溝跡に切られ、北側は多数の柱穴と切り合っている。2間×1間の東西棟建物跡で棟方向をN-74°-Eにとる。桁行3.9m、梁行2.4m、桁行柱間は1.95mの等間隔である。柱穴は径22~35cm、深さ20~35cm、南東隅の1ヶ所が2段掘りで他は単掘りである。遺物は柱穴から土師器杯の破片が出土している。

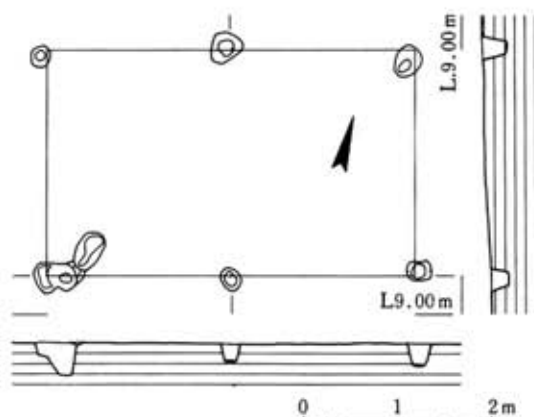


Fig 41 SB083 建物跡実測図

SB086建物跡 (Fig.42, PL.9-3)

8区中央、SB082建物跡の南東に位置し、東側のSE029井戸跡と隣接している。2間×1間の南北棟建物跡で棟方向をN-3°-Wにとる。桁行3.4m、梁行2.4m、桁行柱間は1.7mの等間隔である。柱穴はすべて単掘りで、径26~40cm、深さ15~37cmを測る。遺物は柱穴から土師器杯の破片が出土している。

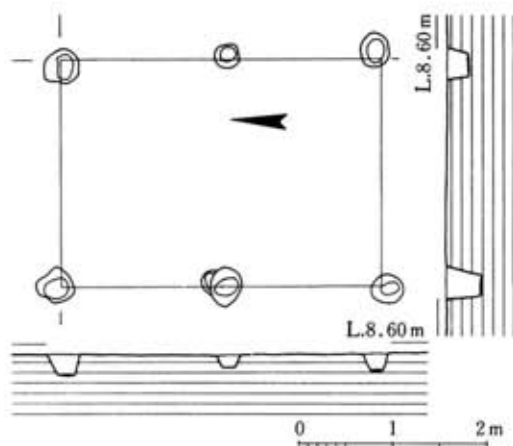


Fig 42 SB086 建物跡実測図

SB088建物跡 (Fig.43)

8区東側、SB084建物跡の東側に位置する。北側に並行してSA098柵列が並んでいる。2間×1間の東西棟建物跡で棟方向をN-2°-Wにとる。桁行4.0m、梁行2.6m、桁行柱間は2.0mの等間隔である。柱穴は径25~48cm、深さ15~34cm、南西隅の1個が2段掘りであり他は単掘りである。遺物は柱穴から土師器杯の破片が出土している。

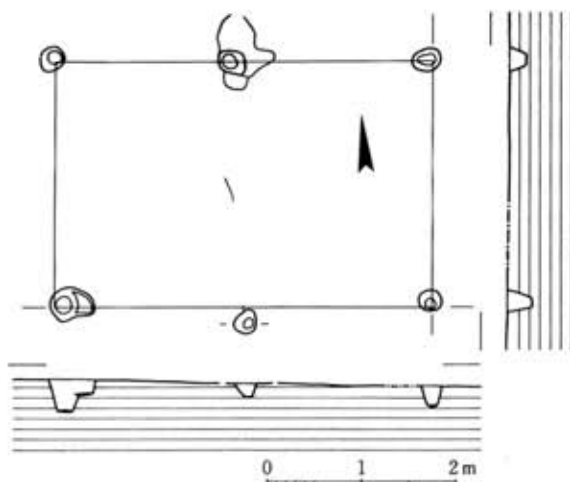


Fig 43 SB088 建物跡実測図

Tab 6 野田遺跡平安時代掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	長軸方位	規模 桁行×梁行	柱間		総面積	出土遺物	備考
			桁行	梁行			
SB038	N-86°-E	2×2	2.6	2.0	42.90	土師器杯	北・西・南庇
SB039	N-70°-E	2×2以上	1.6	1.5		土師器杯	
SB041	N-79°-E	2×1	1.9	1.8	6.84	土師器・瓦器小破片	
SB042	N-90°-E	5×2	1.4~1.8	1.9	30.40	土師器杯	
SB043	N-84°-W	2×1	1.9	2.2	8.36	土師器杯	
SB044	N-81°-E	4×1	1.5	2.7	12.15	土師器杯・須恵器裏	
SB045	N-2°-W	2×1	1.7	1.9	6.46	土師器杯	
SB082	N-5°-W	2×1	1.6~2.4	2.0	8.0	土師器杯	
SB083	N-74°-E	2×1	1.95	2.4	9.36	土師器杯	
SB086	N-3°-W	2×1	1.7	2.4	8.16	土師器杯	
SB087	N-88°-E	5×2	1.2~2.0	2.1	36.96	土師器杯	
SB088	N-2°-W	2×1	2.0	2.6	10.40	土師器	

柵列

8区から7列検出した。SA093柵列とSA094柵列は8区西側に位置し並行して南北に並んでいる。前者は全長6.3m、柱穴は2.1mの等間隔、後者は全長6.3m、柱穴は1.8mの等間隔である。SA095柵列は8区西側に位置し、全長3.0mで柱穴は1.5mの等間隔である。SB041建物跡とSB083建物跡を境界する柵列と考えられる。SA096~099柵列はほぼ東西に並んでいる。8区中央部に位置するSA096柵列は全長4.2m、SA097柵列は全長6.3mでどちらも柱穴間は2.1mの等間隔である。8区東側に位置するSA098柵列とSA099柵列は並行しており、前者は全長12.8mで柱穴は西側の3個が幅2.4m、東側の4個が幅2.1mの間隔である。後者は全長4.2

mで柱穴間は2.1mの等間隔である。

井戸跡

SE006井戸跡 (Fig.44, PL.11-1)

8区西端，SB038建物跡の北側に位置し，南側のSK005土壌を切る。素掘りの井戸跡で壁は3段になっている。上面の平面形は楕円形で東側が突出している。上面の長さ2.2m，幅1.95m，2段目の長さ1.85m，幅1.5m，3段目の長さ1.2m，幅1.05m，深さ1.3を測る。1段目の壁と3段目の壁は傾斜しているが，2段目の壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。井戸枠は出土していない。遺物は埋土のほぼ中部から土師器杯，白磁碗が出土している。

SE016井戸跡 (Fig.45, PL.11-2)

8区西側，SK017の西側に位置し，SB087建物跡と切り合っている。素掘りの井戸跡で，壁は傾斜しておりわずかに段がつく。上面形は楕円形で，上面の長さ1.35m，幅1.30m，2段目の長さ0.86m，幅0.69m，深さ1.22mを測る。井戸枠は出土していない。遺物は埋土の

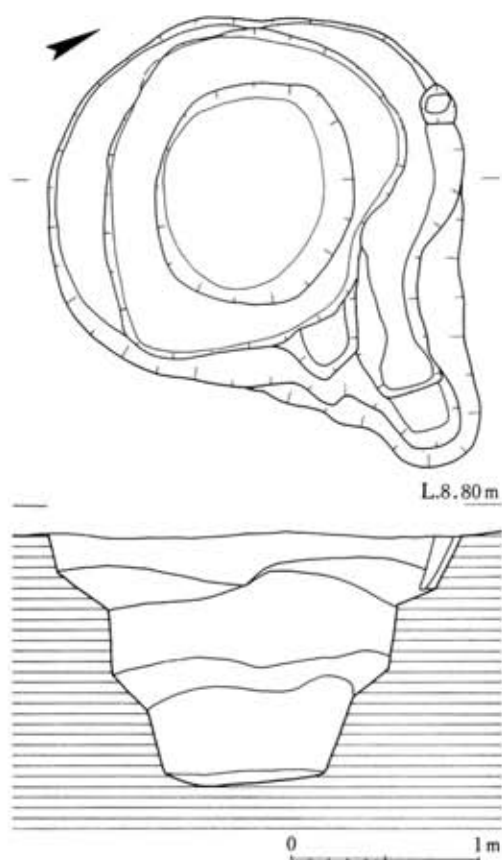


Fig 44 SE006井戸跡実測図

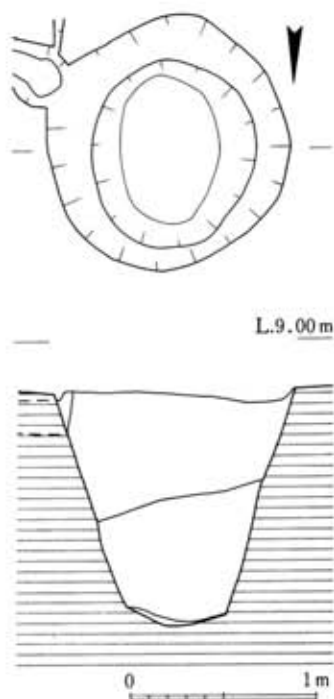


Fig 45 SE016井戸跡実測図

上部から中部にかけて土師器小皿，瓦器碗が出土している。

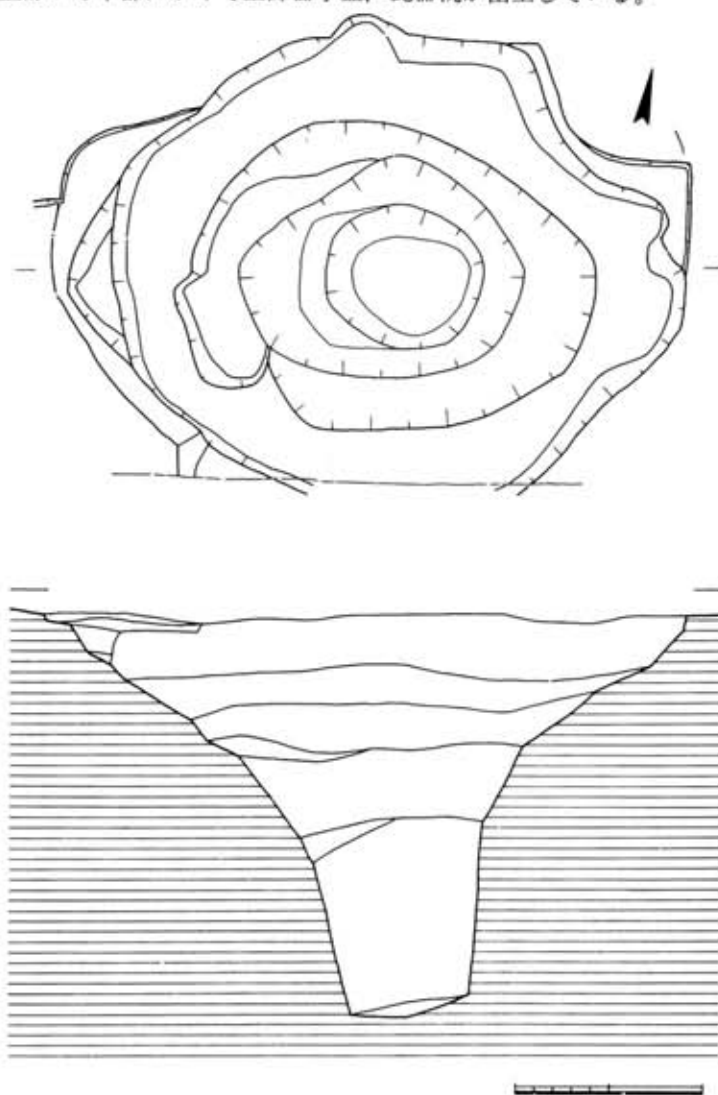
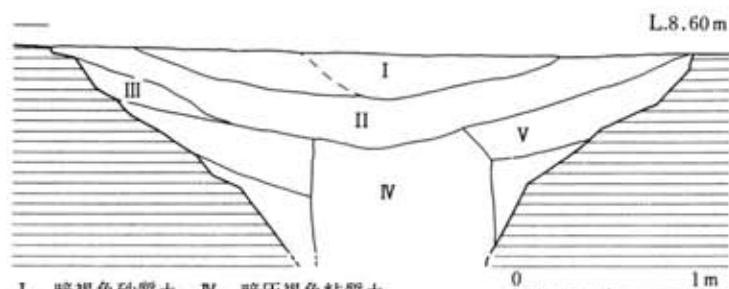


Fig 46 SE029井戸跡実測図



- | | |
|-----------|-------------|
| I. 暗褐色砂質土 | IV. 暗灰褐色粘質土 |
| II. 黒褐色土 | V. 黒褐色粘質土 |
| III. 灰黒色土 | VI. 暗灰褐色粘質土 |

Fig 47 SE029井戸跡実測図

SE029井戸跡

(Fig.46, PL.10-3)

8区中央部，SB086建物跡の東側に隣接して位置する。今回調査をした6基の井戸跡のうち最も大型である。3段掘りの井戸跡と考えられるが壁の上部は崩壊により複雑に段がつく。平面形は楕円形で上面の長さ3.28m，幅2.45m，2段目の長さ1.51m，幅1.18m，3段目の長さ0.92m，幅0.77m，深さ2.1mを測る。壁は1段目，2段目が傾斜し，3段目はほぼ垂直に立ち上がる。埋土の堆積状況（Fig. 47）より井戸枠が存在した可能性が強い。遺物は埋土の中部から下部にかけて多く含まれており，土師器小皿・杯，須恵器甕，瓦器碗，白磁皿・碗・壺，青磁碗，青白磁合子，褐釉陶器壺が出土している。

SE031井戸跡

(Fig.47, PL.11-3)

8区中央部，SE029井戸跡の北側に位置する素掘りの2段掘りの井戸跡

で北側をSD025溝跡に切られている。上面の平面形は楕円形で、上面の長さ1.65m、幅1.35m、2段目の長さ0.86m、幅0.82mを測る。壁は1段目2段目とも、ほぼ垂直に立ち上がっている。井戸跡は出土していない。遺物は埋土から土師器小皿・杯・瓦器碗・白磁碗・青磁碗・褐釉陶器壺が出土している。

SE033井戸跡

(Fig.49, PL.11-4)

8区中央部、SE031井戸跡の東側に位置する素掘りで、2段掘りの井戸跡である。上面の平面形は楕円形で、上面の長さ1.05m、幅0.97m、2

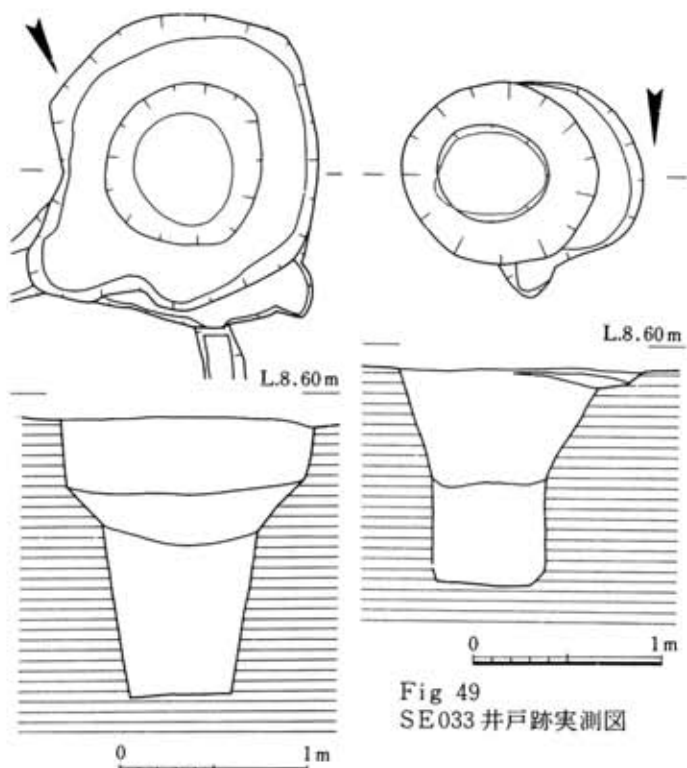


Fig 48
SE031井戸跡実測図

Fig 49
SE033井戸跡実測図

段目の長さ0.6m、幅0.52m、深さ1.15mを測る。壁は1段目は傾斜し、2段目は垂直に立ち上がっている。井戸枠は出土していない。遺物は少く、埋土から土師器杯、瓦器碗・杯が出土している。

土壌

SK014土壌 (Fig.50, PL.10-5)

8区中央、SB042建物跡の北側に位置し、SD009・010溝跡に切られている。平面形は南側が膨らんだ楕円形で、長さ2.34m、幅0.88~1.38m、深さ0.32mを測る。壁は傾斜して立ち上がり、床はほぼ水平である。埋土は黒褐色土で、遺物は埋土の中部から土師器杯・甕が出土している。

SK017土壌 (Fig.51, PL.10-6)

8区中央、SE016井戸跡の東側に位置し、SB087建物跡の柱穴により切られている。土壌の北側半分は調査区域外のため未発掘であるが平面形は楕円形になると思われる。発掘した部分の長さ1.98m、深さ0.30mを測る。壁は東側がゆるやかに傾斜し、西側は急角度に立ち上がる。床はほぼ水平である。埋土は黒褐色土で、遺物は埋土の中部から床面にかけて多数の土師器小皿・杯・甕が出土している。

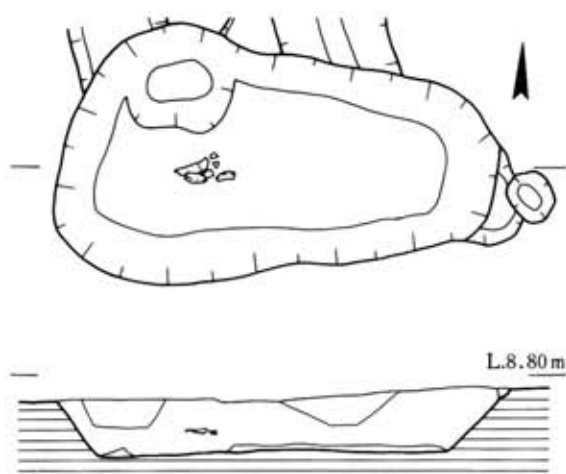


Fig 50 SK014土壌実測図

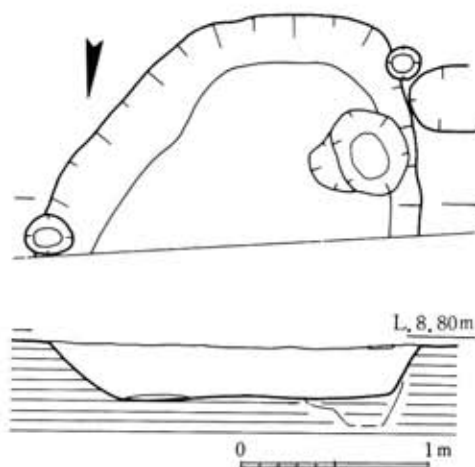


Fig 51 SK017土壌実測図

Tab 7 野田遺跡平安～鎌倉時代土壌一覧表

遺構番号	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考
		長	幅	深		
SE006	楕円形	2.20 1.85 1.20	1.95 1.50 1.05	1.30	土師器杯（ヘラ切）・白磁碗	3段掘り
SE016	楕円形	1.35 0.86	1.30 0.69	1.25	土師器小皿・瓦器碗	
SE029	楕円形	3.28 1.51 0.92	2.45以上 0.18 0.77	2.10	土師器小皿・杯・白磁碗・青磁碗 褐釉陶器壺	3段掘り 褐釉陶器壺SE031出土の破片と接合
SE031	楕円形	1.65 0.86	1.35 0.82	1.45	土師器小皿・杯・瓦器碗・白磁碗 青磁皿・碗・褐釉陶器壺・石鍋・鉄片	2段掘り 褐釉陶器壺SE029出土の破片と接合
SE033	楕円形	1.05 0.60	0.97 0.52	1.15	土師器杯（ヘラ切・糸切） 瓦器碗・杯	
SK014	楕円形	2.34	0.88～1.38	0.32	土師器杯（ヘラ切）・甕	
SK017	楕円形	1.98		0.30	土師器杯・甕	

溝跡

SD034・035・046・047溝跡

この4条の溝跡は8区中央、SE031井戸跡とSE033井戸跡の間に位置し、ほぼ南北に走る。SE034とSE047、SE035とSE046は同一線に並び、しかも幅1.7～2.0mで並列して走っている。溝跡は断面が逆台形で幅は0.3～0.6m、深さ0.1～0.2mを測る。埋土は黒褐色土で、遺物は土師器小皿・杯の小破片が出土してい

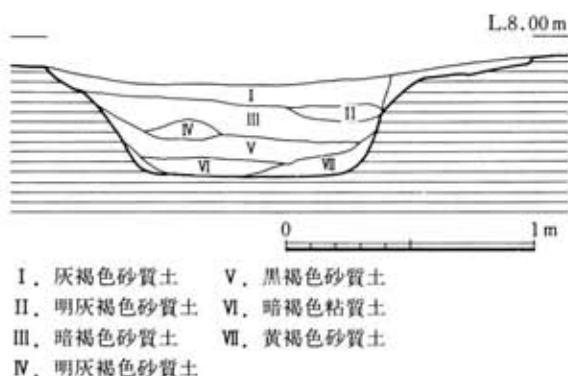


Fig 52 SD048 溝跡実測図

る。これら4条の溝跡は同一時期に営まれたと考えられSE029・031・033井戸跡に関係する溝跡と考えられる。

SD048溝跡 (Fig.52, PL.10-2)

9区西端に位置し、ほぼ南北に走る。上面幅1.7~2.3m、深さ0.4~0.45mで北側が深くなっている。断面は南側が逆台形、北側が浅い碗形で、西側が2段になっている。埋土は、上部が灰褐色土、中部が暗褐色土、黒褐色土、下部が暗褐色土である。遺物は埋土中部からが多く土師器小皿・杯、黒色土器皿、瓦器碗、白磁杯、石鍋が出土している。

3. 遺物

(1) 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物には土器・石器がある。土器には9区・10区・11区の土壌および遺構検出面から出土したものと、9区の甕棺墓の棺に用いられた土器がある。

SK059土壌出土土器 (Fig.53, PL.12)

壺(1) 口縁部で、強く外反する口縁端部が肥厚し、端部外面は平坦に仕上げている。色調は明黄褐色で、器壁は外面がへら磨きされており、暗文がみられる。

甕(2) 底部で、復元底径8.8cm。色調は暗黄褐色で、器壁は外面がハケ目調整されている。

高杯(3) 脚部で、長い筒状になると思われる。色調は明褐色で、器壁は外面がへら磨きされている。

SK097土壌出土土器 (Fig.53, PL.12)

甕(6) 底部で、底径8.3cm。色調は黄褐色で、器壁は外面がハケ目調整されている。

SK098土壌出土土器 (Fig.53, PL.12)

甕(7) 薄手の底部で、底径11.2cm。色調は暗黄褐色で、器壁は外面がハケ目調整されている。

SK099土壌出土土器 (Fig.53, PL.12)

甕(8) 底部で、底径8.05cm。色調は灰褐色で、外面はハケ目調整されている。

壺(9) 底部は小さく上げ底をなし、胴部は肩部が張り、頸部から口縁部にかけて外反する。胴部最大径29.6cm、底径7.1cm。色調は灰褐色で、外面はへら磨きされ、丹塗りが施こされている。

SK102土壌出土土器 (Fig.53)

壺(10) 頸部から口縁部にかけての破片で、口縁部は鋤先状をなす。口縁部上面はほぼ水平で、口縁端部はわずかに凹む。口径24.8cm。色調は黄褐色で外面はヨコナデで、頸部に縦方向の暗文がみられる。

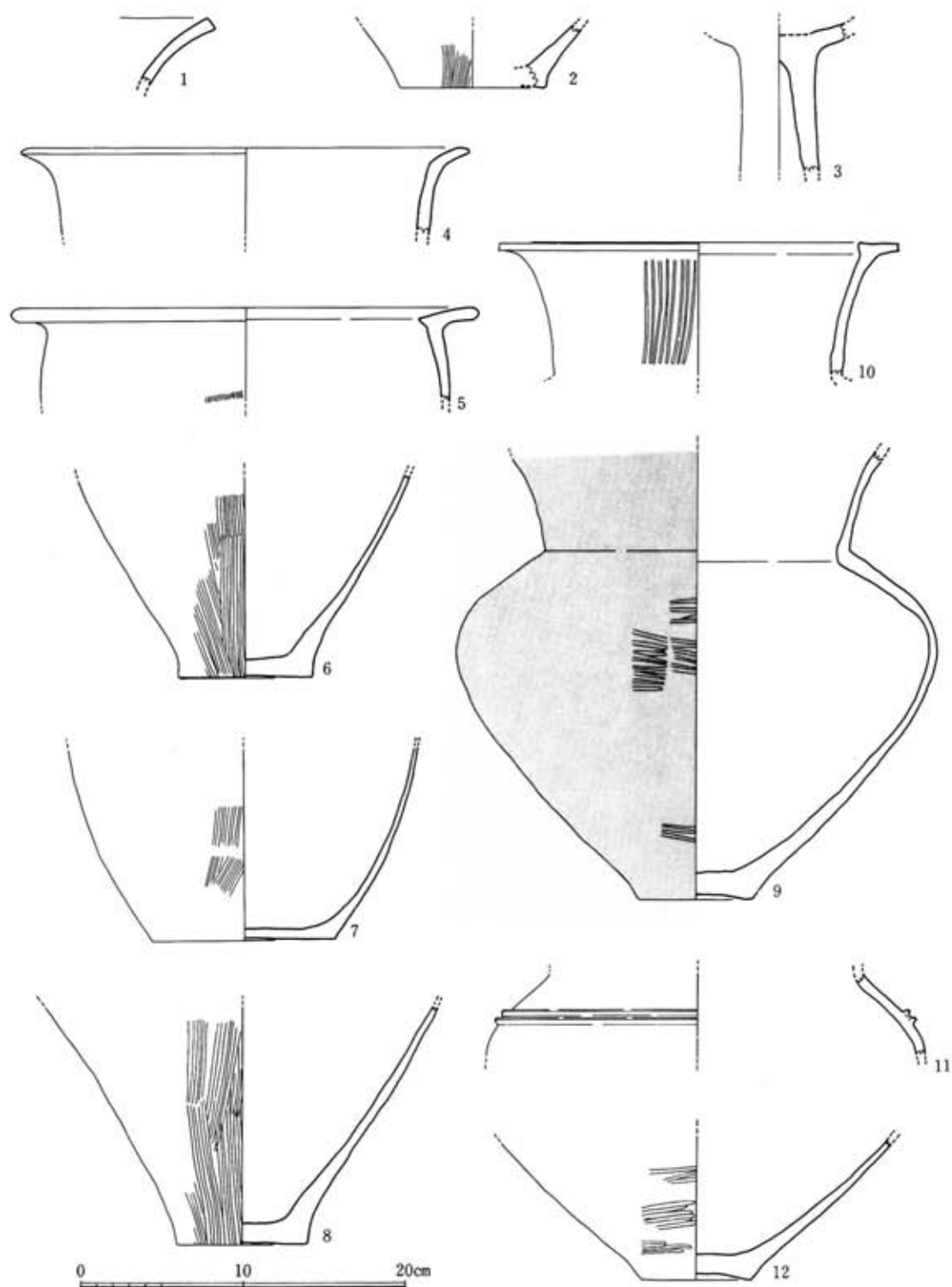


Fig 53 弥生土器実測図 1

遺構検出面出土土器 (Fig. 53・54, PL.12・13)

甕 (5・18) 5は口縁部で、逆L字状をなし、内側がわずかに突出する。口縁端部は丸く仕上げている。色調は灰褐色で、外面はハケ目調整されている。18は口縁部と肩部外面に刻目突帯を巡らしている。色調は黄褐色で、器壁磨滅のため調整不明。

壺 (4・11・12) 4は口縁部で復元口径27.9cm。色調は灰褐色で外面はナデ調整されている。11は肩部で断面M字状の突帯を巡らしている。色調は黄褐色で外面はヨコナデ調整されている。12は底部で、底径6.8cm。色調は明黄褐色で、外面はヘラ磨きされている。

鉢 (13~16・19) 13は底部が平底で、体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる。口縁部はわずかに肥厚して、端部上面が凹んでいる。色調は灰白色で器壁は外面がヘラ磨きされている。14・15は口縁部が鋤先状をなす。14は口縁部上面が傾き、15は水平である。色調は黄褐色~暗黄褐色で器壁はナデ調整。14の外面は丹塗りされている。16は口縁部がT字状をなし、口縁下に断面三角形の突帯を1条巡らす。色調は灰白色で器壁はナデ調整されている。19は口縁部と肩部の外面に突帯を巡らしている。色調は暗黄褐色で、器壁はナデ調整されている。

高杯 (17) 口径25.6cm。口縁部が鋤先状をなし、口縁部上面がわずかに傾く。色調は明褐色で、器壁は内外面ともヘラ磨きされ、丹塗りが施こされている。

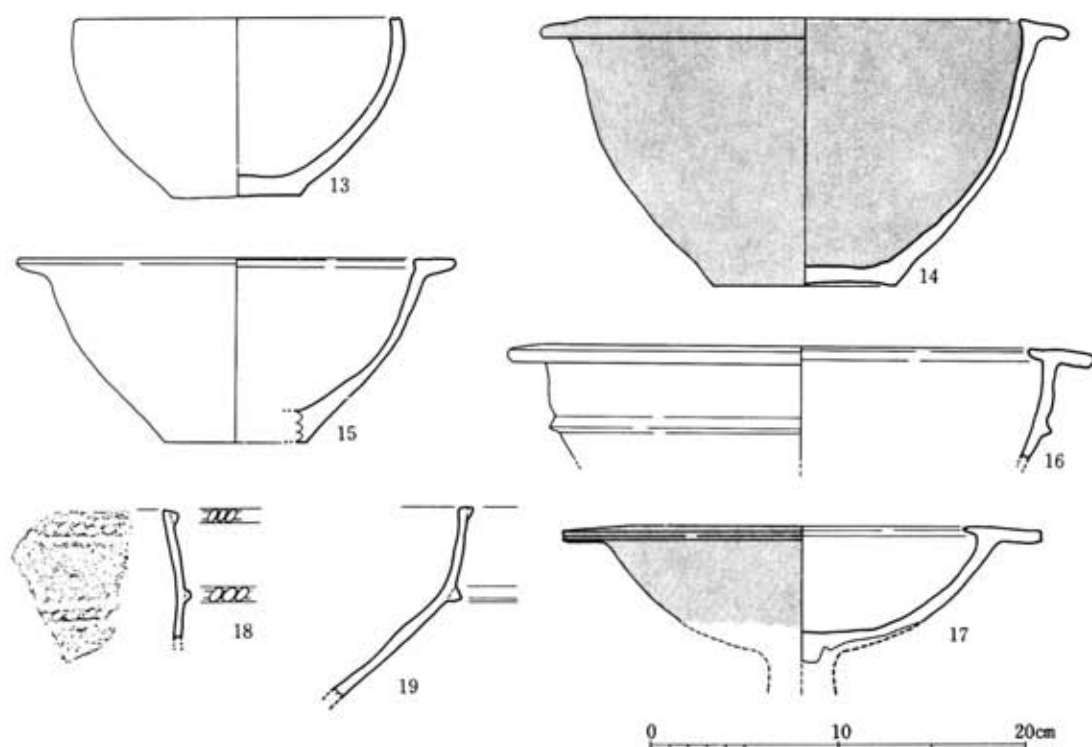


Fig 54 弥生土器実測図2

埋葬に用いられた土器 (Fig.55・56, PL.13)

6基の甕棺墓の棺に用いられた土器は8個体ある。そのうち、鉢が1個体・器種不明のもの1個体で、他の6個体はすべて甕である。

SJ052甕棺(22) 上甕・下甕とも小型の甕だが、上甕は小破片のため図示していない。22は下甕で、口径37.9cm、器高38.0cm。口縁部が逆L字形で、口縁部上面はほぼ水平になる。口縁部下に断面三角形の突帯を1条巡らす。体部は胴が張り、底部はわずかに上げ底である。器壁は外面がハケ目調整されている。

SJ054甕棺(23) 上甕が鉢、下甕が大型の甕だが上甕は小破片のため図示していない。23は下甕で、口径70.2cm、器高は110cm以上になる。口縁部が部厚いT字形で、口縁部上面は内傾する。体部のほぼ中位に断面三角形の突帯を2条巡らす。器壁はナデ調整されている。

SJ055甕棺(21) 上甕は口縁部の一部しか残ってないため器種不明である。21は下甕で、口縁部はT字形である。口縁部下に断面三角形の突帯を1条、体部に断面が丸味を帯びた三角形の突帯を2条巡らす。器壁はナデ調整されている。

SJ056甕棺(25・26) 上甕・下甕とも大型の甕である。25は下甕で口径54.5cm、器高90.5cm。口縁部が幅広いT字形で、内側と外側に傾く。体部は胴が張り、底部は部厚い上げ底である。口縁下に断面M字状の突帯を1条、体部中位に断面が丸味を帯びた三角形の突帯を2条巡らす。24は上甕で、口縁部を打ち欠いているが、25とほぼ同じ器形になると思われる。底部は大きく薄手である。25・26とも器壁はナデ調整されている。

石器

石包丁 (Fig.55)

SD009溝跡の上面から1点出土したが遺構に伴うものではない。幅4.6cm、厚さ0.5~0.6cm。中央部に1個所孔がみられる。

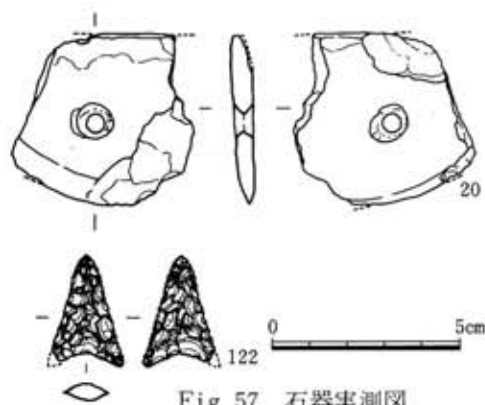


Fig 57 石器実測図

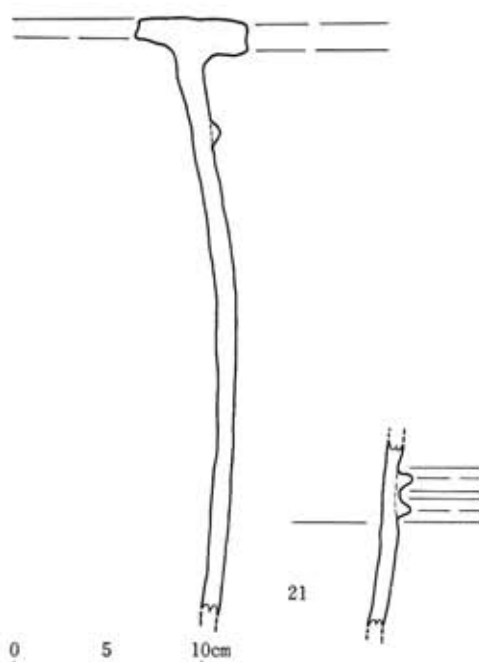


Fig 55 弥生土器実測図 3

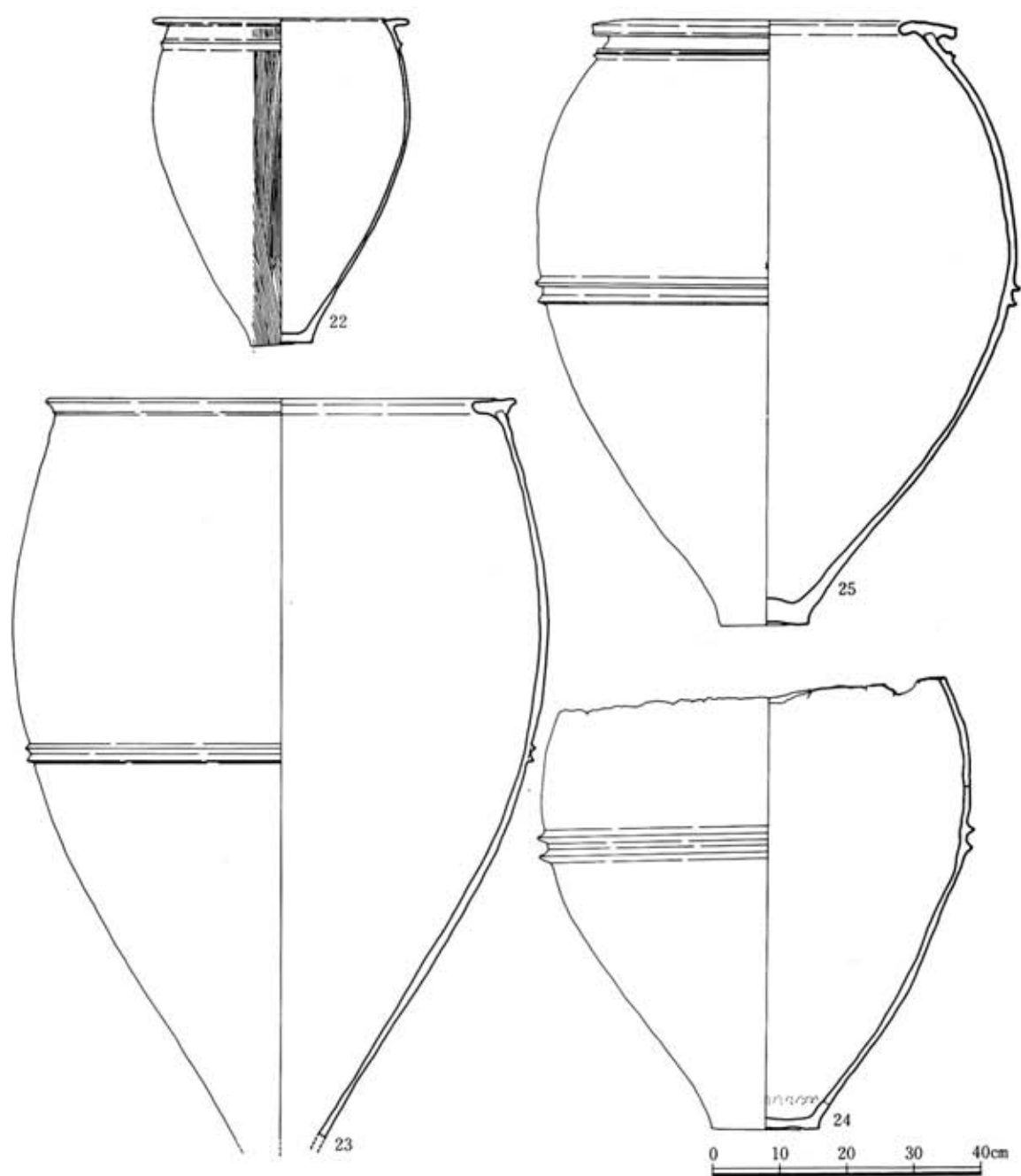


Fig 56 弥生土器実測図 4

(2) 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物には土器・木製品がある。土器は8区・9区の土壌・掘立柱建物跡・溝跡から、木器は9区のSD072溝跡から出土している。

SK005土壌出土土器 (Fig.58, PL.14)

土師器

杯 (26~28) 26は底部が丸味を帯び、体部から口縁部にかけてゆるく内湾して立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げている。色調は明黄褐色~暗褐色で器壁は内外面ナデ調整されている。27・28は体部から口縁部にかけての内湾が強く、口縁端部は尖り気味に仕上げている。28は底部が平底気味になる。色調は黄褐色~暗褐色で器壁は26がナデ調整、27がへう磨きされている。

甕 (29・30) 口縁部がく字状に外反する。29は口径15.0cmで口縁端部を丸く仕上げている。色調は暗黄褐色~明褐色で、器壁はナデ調整されている。30は口径20.1cmで口縁端部は平坦である。色調は暗褐色で器壁はナデ調整されている。

壺 (31~33) 31・32は球形の胴部に外反する口縁部をもつ。口縁端部を31は丸く仕上げ、32は尖り気味に仕上げている。色調は暗黄褐色~暗褐色で器壁は内面がへう削り、外面は摩滅のため調整不明。33は胴部が球形で底部は尖り気味である。色調は暗黄褐色~暗褐色で器壁は内面がへう削り、外面は摩滅のため調整不明。

鉢 (34) 底部は厚手の丸底で、体部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸く仕上げている。色調は赤褐色で、器壁は内面がへう削り、外面がナデ調整されている。

甗 (35・36) 35は丸味を帯びた底部から体部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部近くでゆるく外反する。口縁部はわずかに肥厚し、端部を丸く仕上げている。体部の中央よりやや下位に2ヶ所の把手をもち、底部は2ヶ所に楕円形の孔がみられる。口径16.6cm、器高18.4cm。色調は褐色~暗褐色、器壁は内面がへう削り、外面がハケ目調整後ナデ調整されている。36は体部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げている。口径25.0cm。色調は暗黄褐色~暗褐色で、器壁は内面がへう削り、外面がハケ目調整後ナデ調整されている。

SK013土壌出土土器 (Fig.59, PL.15)

土師器

杯 (37・38) 37は口径12.6cm。底部が丸味を帯び、体部から口縁部にかけてゆるく内湾して立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸く仕上げている。色調は黄褐色~明褐色で、器壁はナデ調整されている。38は口径10.8cm。底部が丸味を帯び、体部から口縁部にかけて強く内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げている。色調は黄褐色~明褐色で、器壁は内面がナデ調整、外面がハケ目調整後ナデ調整である。

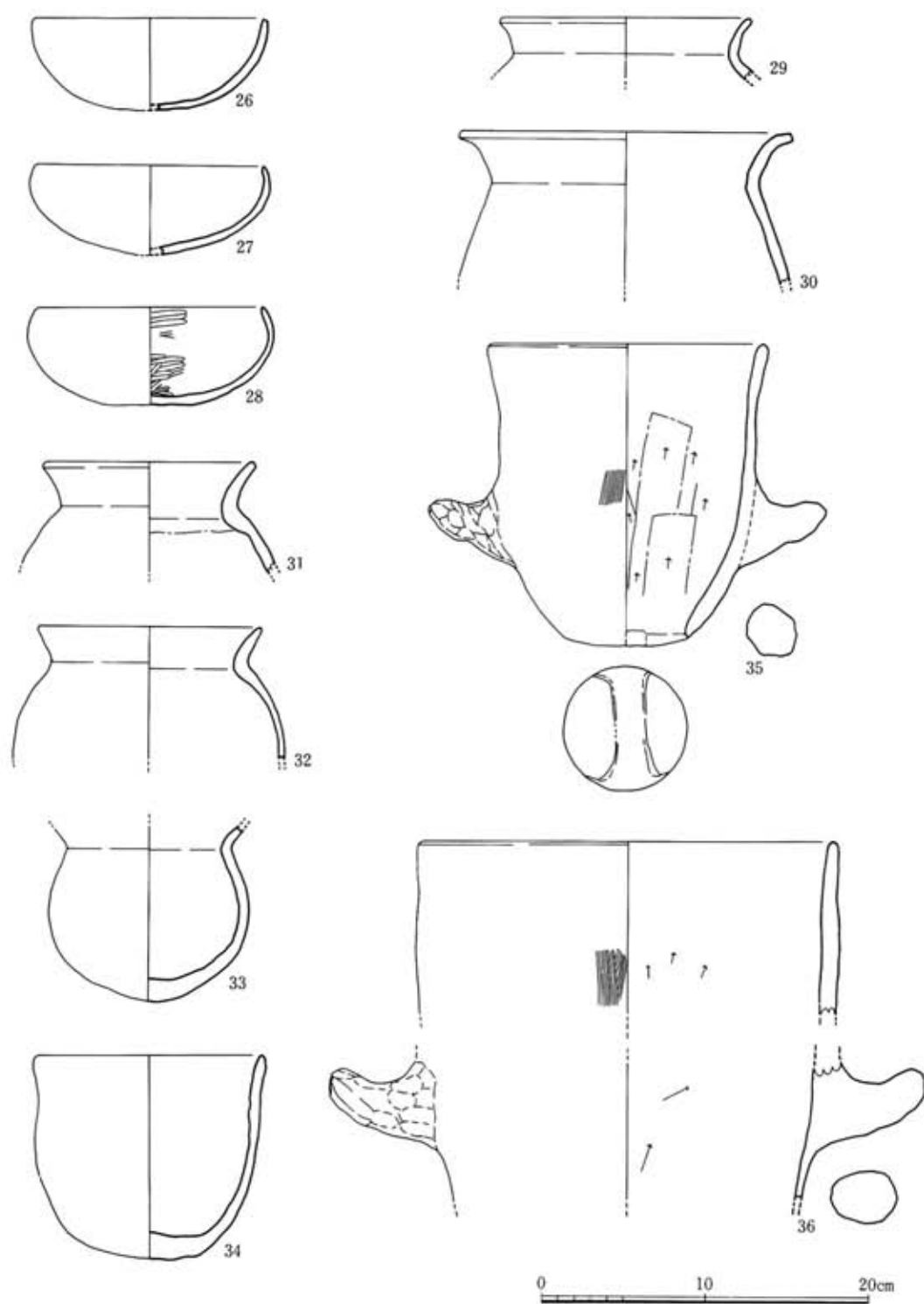


Fig 58 SK005出土土器実測図

甕(42) 球形に近い胴部に外反する口縁部がつくと思われる。色調は黄褐色で、器壁は内面がへら削り後ナデ調整、外面がハケ目調整後ナデ調整されている。

壺(39~41) 39は肩の張らない胴部にゆるく外反する口縁部がつく。口径10.9cmで口縁端部は丸く仕上げている。色調は明褐色~褐色で、器壁は内面が横方向のへら削り、外面がハケ目調整後ナデ調整されている。40は尖り気味の底部で色調は褐色~赤褐色。器壁は内面がナデ調整、外面がハケ目調整後ナデ調整されている。41は丸底で、胴部は球形になる。色調は明褐色~暗褐色で、器壁はナデ調整されている。

鉢(43・44) 43・44とも小型の鉢である。43は口径7.6cm。器高4.8cm。底部はわずかに丸味を帯びた平底で、体部から口縁部にかけて直線的に開き口縁部は丸く仕上げている。色調は暗黄褐色~褐色で、器壁は内面がナデ調整、外面がハケ目調整されている。44は口径6.2cm、器高4.2cm。底部は平底で、体部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は粗雑に仕上げており凸凹している。色調は暗黄褐色~赤褐色で、器壁は内面がナデ調整、外面がハケ目調整されている。

SK050土壌出土土器 (Fig.59, PL.16)

須恵器

杯(45) 完形品で口径10.3cm、器高4.5cm。底部は平坦で、体部が内湾して延びる。立ち上がりはわずかに外反して、ほぼ垂直に延びる。口縁端部は肥厚し、端部上面に段をもつ。体部外面はへら削りされている。

SD072溝跡出土土器・木製品 (Fig.59・60, PL.15)

須恵器

蓋(46・47) 46は口径11.8cm、47は口径14.1cm。天井部が丸味を帯び、口縁部との境に段をもつ。口縁部は46がほぼ垂直に、47はわずかに開いて下方に延びる。口縁端部は46・47とも内側に段をつくる。47の天井部はへら削りされている。

土師器

杯(48・49) 48は口径13cm、器高4.9cm。底部が丸味を帯び、体部から口縁部にかけて強く内湾する。口縁端部は丸く仕上げている。色調は黄褐色~暗褐色で、器壁は外面がへら磨きされている。49は口径14cm、器高5.4cm。底部が丸味を帯び、体部から口縁部にかけてゆるく内湾し、口縁部が強く内傾する。口縁端部は尖り気味に仕上げている。色調は暗褐色で、器壁はナデ調整されている。

壺(50~52) 50は口径10.8cm、器高9.3cm。底部は丸味を帯び、体部は球形である。頸部から口縁部にかけてほぼ直立して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸く仕上げている。色調は暗褐色で、器壁はナデ調整されている。51・52は胴部が球形で、口縁部がゆるく外反する。51は口径13.7cm、52は口径13.2cm。色調は灰褐色で、器壁は内面がへら削りで、

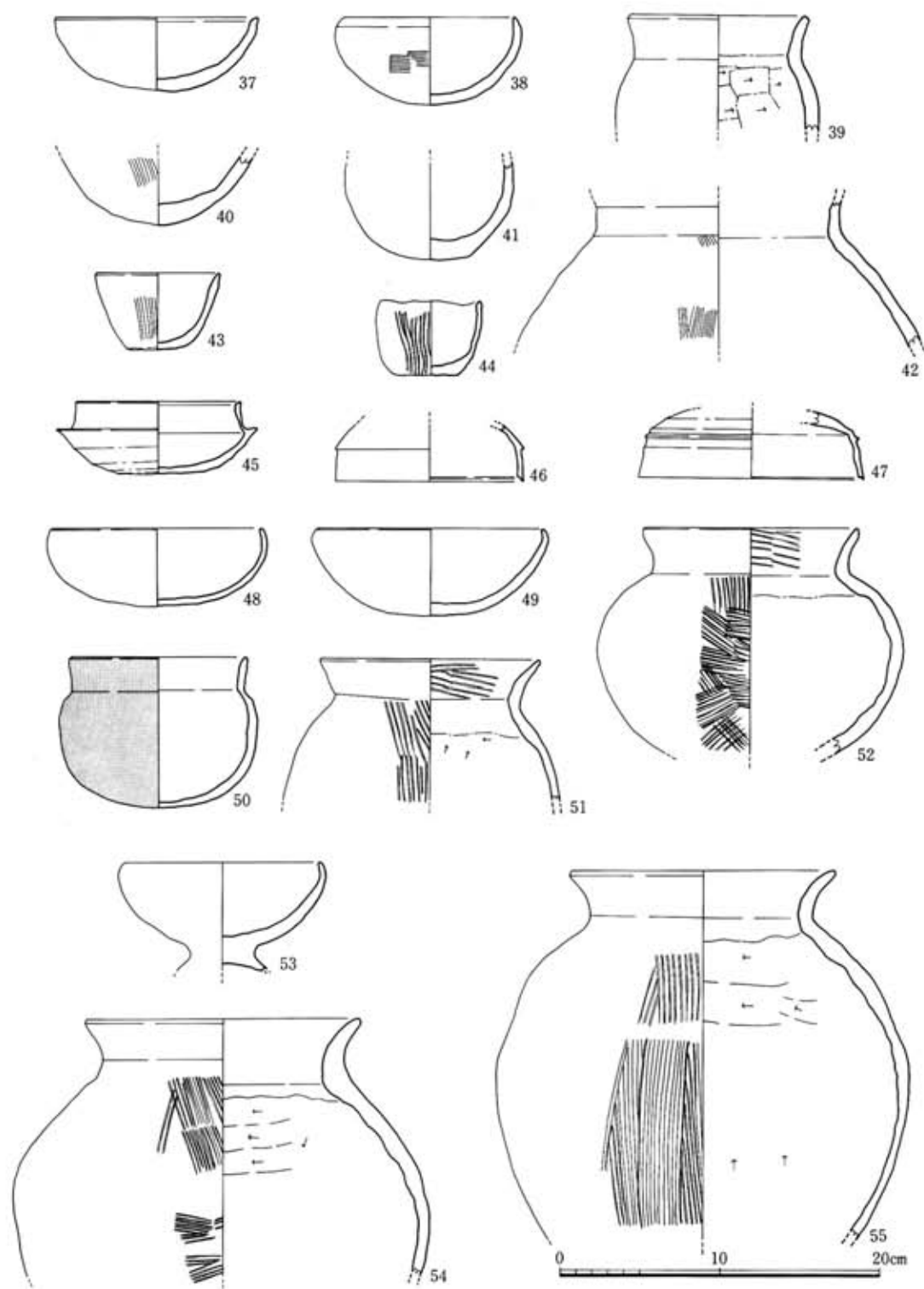


Fig 59 SK013 · SK050 · SD072 · SB079出土土器実測図

外面および口縁部内面が粗いハケ目調整されている。

木製品

糸巻具 (56) 全体の約3分の1を欠損しているが、径5.4cm程の心持材を使用している。長さ13.0cm。両端と中央に削り加工痕がみられる。

大足 (57・58) 大足の木枠の縦木の部分で柾目板を使用している。57と58は出土時はAとBが接合していた。復元長88cm、幅5.8~6.2cm。厚さ0.8~1.6cm。孔は長方形で、ほぼ5cm間隔で13ヶ所に穿たれていたと考えられる。両端には浅い抉りがみられる。

板状木製品 (59) 長方形の板状の木製品で柾目板を使用している。長さ45.4cm、幅8.8~9.0cm、厚さ1.2~1.9cm。両端を両刃状に尖らしている。用途は不明である。

SB079建物跡出土土器 (Fig. 59, PL.16)

土師器

台付鉢 (53) 体部から口縁部にかけて強く内湾する。口縁部は丸く仕上げている。台部は短く、裾広がりになる。色調は明褐色で、器壁はナデ調整されている。口径12.2cm。

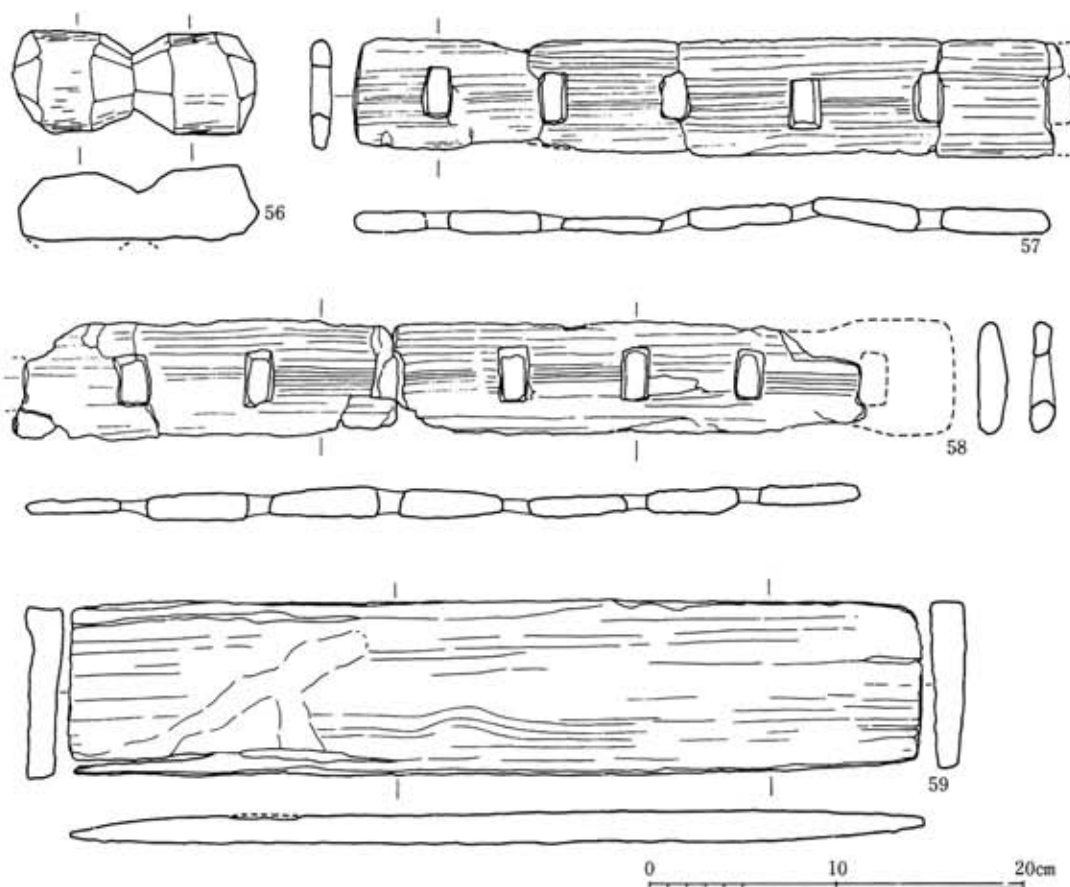


Fig 60 SD072出土木製品実測図

甕(54・55) 体部は球形で、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く仕上げている。54は口径17cm, 55は口径16.6cm。色調は明褐色で、器壁は体部の内面がへら削り、外面が粗いハケ目調整されている。54・55とも外面に煤が付着している。

(3) 平安時代の遺物

平安～鎌倉時代の遺物には土器・陶磁器・石器・石製品・木製品がある。これらの遺物のうち土器・陶磁器の大半と石器は8区の土壌・井戸跡から出土しており、一部の土器・陶磁器・石製品・木製品は9区のSD048溝跡から出土している。

SK014土壌出土土器 (Fig.61, PL.16)

土師器

小皿(60) 底部は平坦で体部との境は丸味を帯びる。体部から口縁部にかけてわずかに内湾して大きく開く。口径14.4cm, 底径8.8cm。器壁はロクロナデ調整。

杯(61) 底部が丸味を帯び、体部から口縁部にかけて外湾気味に開く。口径16.3cm, 底径8.0cm, 器高3.9cm。体部はヨコナデ調整, 底部外面はへら切り離し後ナデ調整されている。

碗(62) 底部が平坦で、体部との境に裾広がりの高台がつく。体部から口縁部にかけて直線的に開く。口径16.3cm, 高台径8.1cm, 器高7.9cm。器壁はヨコナデ調整で、特に体部の内外面は丁寧にナデ調整されている。

甕(63・64) 63は口径28.0cm, 64は口径24.0cm, 体部はどちらも胴がほとんど張らず、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は丸く仕上げている。色調は黄褐色～暗褐色で、器壁は内面が斜方向のへら削り、外面がハケ目調整されている。

SK017土壌出土土器・石器 (Fig.61, PL.16・17)

土師器

小皿(65・66) 65は底部がわずかに上げ底で、口縁部が短く外反する。口径14.4cm, 底径11.6cm, 器高1.4cm。66は底部が平坦で、体部から口縁部にかけて直線的に大きく開く。口径14.3cm, 底径8.0cm, 器高2.1cm。65・66とも器壁は体部がヨコナデ調整で、底部外面はへら切り離し後ナデ調整されている。

杯(67～70) 底部は平坦か、わずかに上げ底になる。67～69は体部から口縁部にかけて直線的に大きく開き、70はわずかに内湾して開く。口径12.4～13.3cm, 底径7.1～8.1cm, 器高3.1～3.3cm。器壁はロクロナデ調整で、底部外面はへら切り離し後ナデ調整されている。

碗(71・72) 底部が平坦で、体部との境に裾がわずかに広がる高台がつく。71は体部から口縁部にかけて直線的に開く。口径15.2cm, 高台径8.5cm, 器高6.4cm。72は体部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁部がわずかに外反する。口径14.2cm, 高台径7.9cm, 器高6.4cm。71・72ともロクロナデ調整で、底部にはへら切り離し痕がみられる。

甕(74~77) 体部は胴がほとんど張らず、頸部もあまりくびれず、口縁部はゆるく外反する。口縁端部は丸く仕上げている。74は口径19.2cm, 75~77は口径25.9~28.2cm。色調は暗褐色で器壁は内面が、横・斜方向のへら削り、外面がハケ目調整されている。

須恵器

壺(73) 頸部がゆるくくびれ、口縁部は短く外反する。口縁端部は面をもつ。器壁は体部内面がナデ調整で、他はヨコナデ調整されている。

石器

砥石(78) 小型の砥石で砂岩製である。幅4.7~5.7cm。両面を使用しており、特に中央は使用により凹んでいる。

SE006井戸跡出土土器 (Fig.62, PL.17)

黒色土器

椀(79・80) 79・80とも黒色土器Bで体部から口縁にかけてゆるく内湾して開く。79は口径14.3cm, 80は口径15.6cm, 器高5.7cmで底部に小さな高台がつく。色調は内外面とも灰黒色で、体部の器壁はへら磨きされている。

SE016井戸跡出土土器・陶磁器 (Fig.62, PL.17)

黒色土器

小皿(81) 黒色土器Bで、底部がわずかに丸味を帯び、口縁部はゆるく内湾して立ち上がる。口径10.2cm, 器高1.7cm。色調は内外面とも灰黒色で、器壁は内外面へら磨きされている。底部外面はへら切り離した後ナデ調整。

椀(83) 黒色土器Bで、体部から口縁部にかけて、ゆるく内湾して開く。口径17.0cm, 器高5.5cm。口縁下に1条の浅い沈線を巡らし、底部に裾広がりの短い高台がつく。色調は内外面とも灰黒色で、器壁は内外面ともヨコナデ調整。

土師器

小皿(82) 底部が平坦で、口縁部はゆるく内湾して立ち上がる。口径8.7cm, 底径5.9cm, 器高1.5cm。色調は灰褐色で、器壁はヨコナデ調整。底部外面はへら切り離した後ナデ調整。

陶磁器

白磁碗(84) 底部が厚く、高台は内側を斜に削った「コ」字状をなす。体部から口縁部にかけてわずかに内湾して大きく開き、口縁部は外側を肥厚し玉縁になる。口径16.8cm, 復元器高7.3cm。器壁は外面の底部がへら削り、胎土は灰白色で、釉は緑色がかった乳白色である。

SE029井戸跡出土土器・陶磁器 (Fig.62, PL.18)

土師器

小皿(85) 底部はわずかに上げ底で、口縁部はわずかに内湾して立ち上がる。口径8.6cm。底径7.3cm, 器高1.3cm。色調は黄褐色で、器壁はヨコナデ調整。底部外面は糸切り離した後ナデ

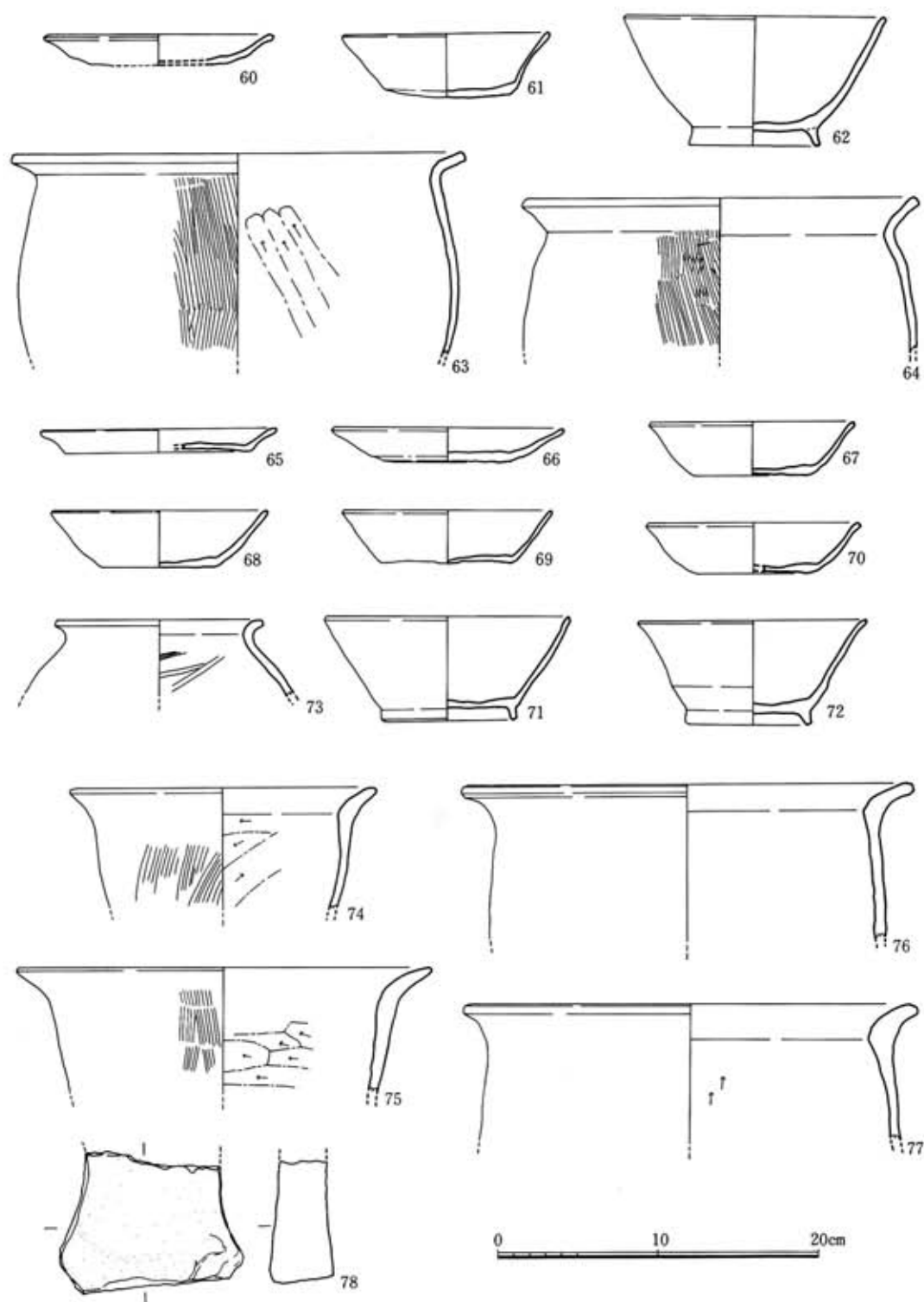


Fig 61 SK014 · SK017出土土器石器实测图

調整。

瓦器

碗（86・87） 体部から口縁部にかけてゆるく内湾して大きく開く。底部はわずかに丸味を帯び、小さな高台がつく。86は口径16.9cm，器高5.1cm。87は口径18.3cm，器高6.4cm。色調は灰色～灰黒色で，器壁は体部が内外面ともへら磨きされている。

須恵器

甕（88） 底部は丸味を帯び，体部は胴が直線的に延び，肩が張る。頸部はゆるくくびれ，口縁部は外反する。胴部最大径23.2cm。色調は灰色～灰黒色で，器壁は，内面が同心円状の叩き，外面が格子目の叩き調整。

陶磁器

白磁碗（93～95） 93は口径15.4cm。体部から口縁部にかけて大きく開き，口縁部は外側が肥厚し玉縁になる。94は口径16.6cm。体部から口縁部にかけて大きく開き口縁部は端部近くでわずかに外反する。内面の口縁下に1条の細い沈線を巡らしている。95は底部で高台径6.8cm。高台は内側を斜に削った「コ」字状で畳付部は傾斜している。器壁は外面がへら削り。胎土は93～95とも灰白色で，釉は緑色がかった乳白色で，93・94の両面および95の内面に施釉している。

白磁皿（96） 体部から口縁部にかけてわずかに内湾して大きく開き，口縁部が肥厚して，ゆるく外反する。口径9.2cm。胎土は灰白色で釉は緑色がかった白色で内面の全面と外面3分の2程施釉している。

白磁壺（97） 小破片のため器形は明らかでないが体部が長い壺になると思われる。胎土は灰白色で，器壁は内面にへら削りの痕が残る。釉は緑色がかった灰白色で両面に薄く施釉している。

青磁碗（90・91） 90は龍泉窯系の青磁で底部が厚く，高台は丸味を帯びた「コ」字状をなす。体部から口縁部にかけて内湾して大きく開く。体部内面をへら描きの沈線により区画し，見込み中央には「金玉満堂」のスタンプを押印している。口径16.8cm，器高6.6cm。胎土は灰色で，釉は暗緑色。全面に施釉し，底部外面から高台畳付部にかけての釉を削り取っている。91は同安窯系の青磁で高台は角ばった「コ」字状をなす。体部内面に沈線文と櫛状の施文具による花文が，外面に細い櫛目文がみられる。胎土は灰色で，釉は黄緑色で薄く，内面と体部外面のみ施釉している。

青磁合子（92） 平型の合子蓋で型押しにより作られている。口径5.8cm。天井部に花卉様の文様，体部に連弁文様がみられる。胎土は灰白色で，釉は淡青緑色。全面に施釉した後，口縁部の釉を削り取っている。

褐釉陶器壺（89） 体部は肩があまり張らず，肩部と頸部の境に段をもつ。頸部から口縁部

にかけて内傾して立ち上がる。口縁部は強く外反する。口径10cm。胎土は暗灰色で、釉は暗緑灰色。全面に施釉している。

SE031井戸跡出土土器・陶磁器 (Fig.63, PL.19)

土師器

小皿 (98) 底部が平坦で、口縁部は短くわずかに内湾して立ち上がる。口径9.0cm。底径7.5cm、器高1.2cm。色調は暗黄褐色で、器壁はヨコナデ調整。

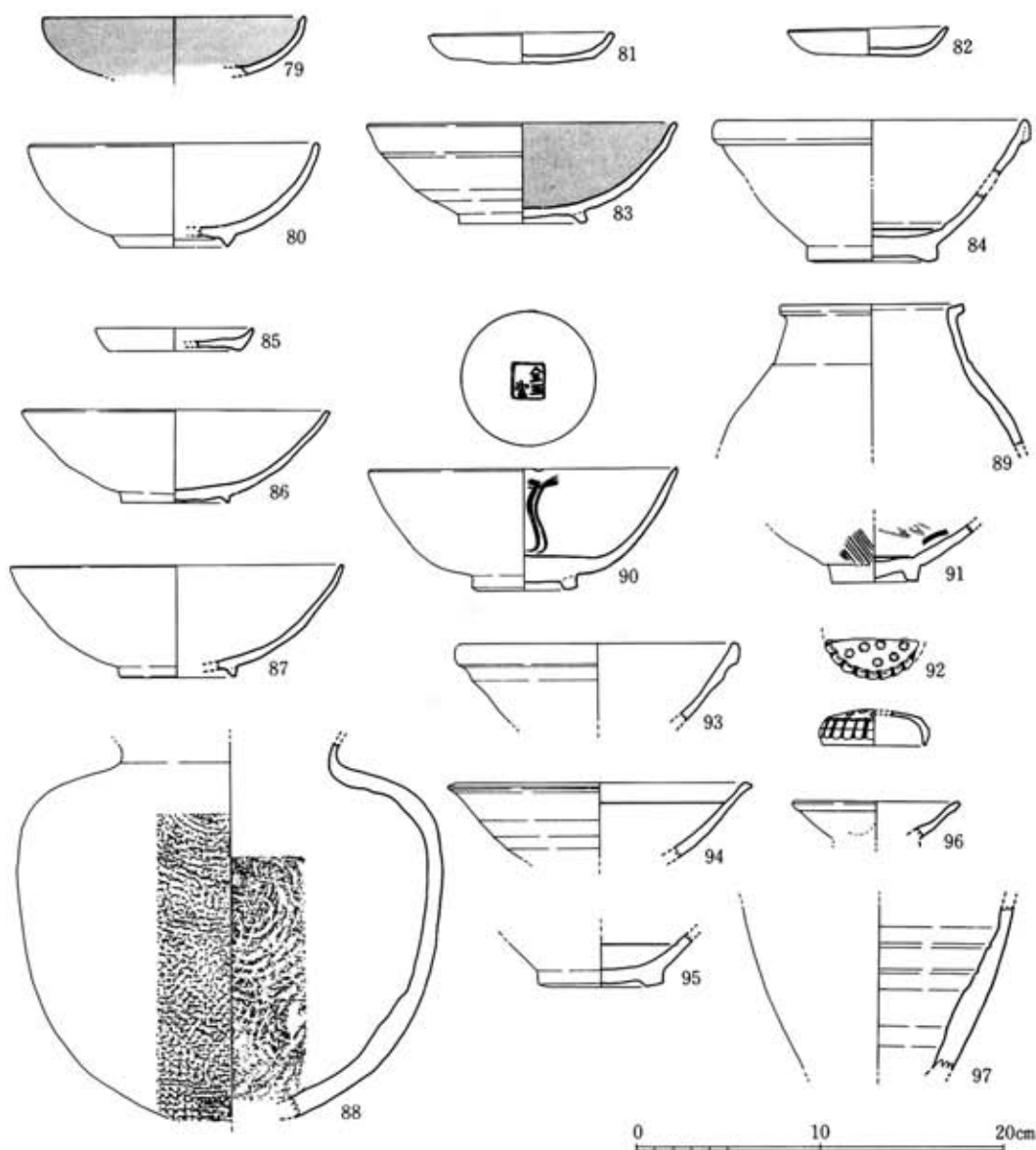


Fig 62 SE006・SE016・SE029出土土器陶磁器実測図

碗(101) 底部が平坦で、体部との境に裾広がり的高台がつく。高台端部は丸く仕上げている。色調は明黄褐色で、器壁はヨコナデ調整されている。

瓦器

碗(99・100) 体部から口縁部にかけてゆるく内湾して大きく開き、底部に小さな高台がつく。99は、口径15.2cm。色調は灰白色～灰黒色で、器壁は99の内面がへう磨きされている。100は磨滅のため調整不明。

陶磁器

白磁碗(102・103) 102は口径15.8cm、体部から口縁部にかけて大きく開き、口縁部は外側が肥厚し玉縁になる。体部外面に1条の沈線を巡らしている。胎土は灰白色で釉は緑色がかかった白色で全面に施釉している。103は底部で、高台は細くて高い。器壁は外面がへう削り。胎土は乳白色で、釉は灰白色で、内面と外面の体部のみに施釉している。

青磁皿(104) 底部の小破片である。内面に沈線による花文と細い櫛目文を組み合わせた文様がみられる。胎土は灰色、釉は暗緑色で、全面に施釉した後、底部外面の釉を削り取っている。

青磁碗(105) 同安窯系の青磁で、底部は厚手で高台は裾が広がる。体部は直線的に大きく開く。体部内面にへうによる花文と櫛目文によるジグザグを組み合わせた文様が、外面に細い櫛目文がみられる。胎土は灰色、釉は黄緑色で、内面と体部外面のみ施釉している。

SE033井戸跡出土土器 (Fig.62, PL.19)

黒色土器

小皿(106) 黒色土器Bで、底部がわずかに丸味を帯び、口縁部はゆるく内湾して立ち上がる。口径10.2cm、器高1.9cm。色調は内外面とも灰黒色で、器壁は内外面へう磨きされている。底部外面はへう切り離した後ナデ調整。

SD048溝跡出土土器・陶磁器・木製品・石製品 (Fig.62, PL.19・20)

土師器

小皿(109) 底部がわずかに上げ底で、口縁部はゆるく外反して立ち上がる。口径8.3cm、底径7.0cm、器高0.9cm。色調は黄褐色で、器壁はヨコナデ調整。底部外面は糸切り離した後ナデ調整で、板目痕が残る。

杯(111) 底部が平坦で、体部から口縁部にかけて直線的に開く。口径12.4cm、底径6.6cm、器高3.7cm。色調は明褐色で、器壁はヨコナデ調整。底部外面はへう切り離した後ナデ調整。

瓦器

小皿(110) 底部がわずかに丸味を帯び、口縁部はゆるく内湾して立ち上がる。口径10.1cm、器高1.9cm。色調は暗褐色で、器壁は体部の内外面ともへう磨きされている。底部外面はへう切り離した後ナデ調整。

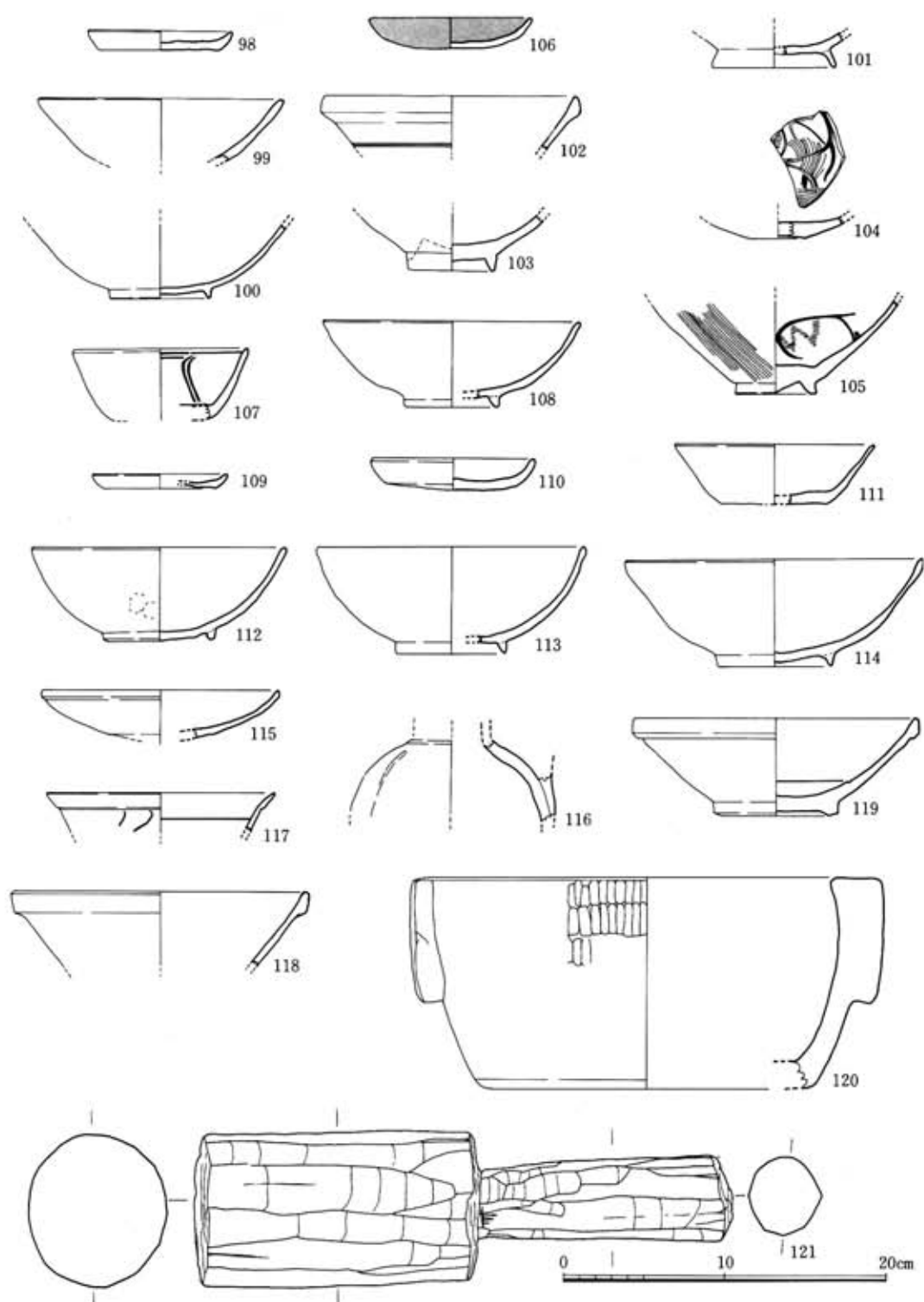


Fig 63 SE031・SE033・SD048出土土器・陶磁器・木製品・石製品実測図

碗（112～114） 底部がわずかに丸味を帯び、体部から口縁部にかけて、ゆるく外反して大きく開く。口径15.7～18.3cm、器高5.8～6.6cm。色調は灰色～暗灰色で、器壁は体部の内外面がへう磨きされている。

陶磁器

白磁碗（117～119） 117は口径14.2cm。体部から口縁部にかけて開き、口縁部は外側に段をもち、ゆるく外反する。体部外面に細い沈線による文様がみられ、体部内面には1条の細い沈線を巡らしている。胎土は灰白色、釉は乳白色で全面に施釉している。118・119は体部から口縁部にかけてわずかに内湾して大きく開き、口縁部は外側が肥厚して玉縁になる。119は見込みに1条の沈線を巡らせ、高台は内側を斜に削った断面「コ」字状で、疊付部は傾斜している。119の口径17.1cm、器高7.7cm、118の口径18.0cm。胎土は灰白色。釉は緑色がかかった白色で、内面と、体部外面のみ施釉している。

青磁皿（115） 越州窯系の青磁である。体部から口縁部にかけて内湾気味に大きく開き、口縁部は端部外側がわずかに肥厚する。口径14.5cm。胎土は灰白色。釉は白色味をおびた灰黄色で内面と、体部外面に施釉している。

青磁水注（116） 越州窯系の水注で肩部から頸部にかけての小破片である。注口部はないが、把手のつけ根の部分が残っている。体部を縦方向の浅い沈線により分割している。頸部は垂直に延びるとされる。胎土は灰白色。釉は115と同じ白色味をおびた灰黄色で、全面に施釉している。

木製品

横槌（121） 全長33.2cm。身と柄の断面は楕円形で、身の径8.6～9.4cm、柄の径4.4～5.2cm。心持材を使用しており、全面に丁寧な削り加工痕が残っている。

石製品

石鍋（120） 滑石製で、口径26.2cm、器高13.0cm、器高の厚さ1.4～1.5cmである。2個所に断面方形の把手がつくものと思われる。器壁は内外面削り調整されており、外面には煤が付着している。

Tab 8 野田遺跡出土弥生土器一覧表

番号	品 種	出土遺構	色 調	①口径 ②器高 ③胴部最大径 ④底径 法量 (cm)	調 整	遺 物 登録番号	備 考
1	壺	SK059	明黄褐色	④ 8.8	外面・へう磨き 内面・ココナデ 内外面・ナデ 外面・へう磨き 内面・ナデ	84-1825	内面に暗文がみられる 外面黒斑あり
2	甕	SK059	暗黄褐色			84-1822	
3	高杯	SK059	明褐色			84-1824	
4	壺	10区東側	灰褐色	①27.9	内外面・ナデ 外面・ココナデ 内面・ナデ	84-0711	
5	甕	10区東側	灰褐色	①29.0		84-0789	

番号	器 種	出土遺構	色 調	①口径 ②器高 ③胴部最大径 ④底径 法量 (cm)	調 整	遺 物 登録番号	備 考
6	甕	SK097	黄褐色	④ 8.3	外面・ハケ目 内面・ナデ	84-0708	外面に丹塗り
7	甕	SK098	暗黄褐色		外面・ハケ目 内面・ナデ	84-0707	
8	甕	SK099	灰褐色	④ 8.05	外面・ハケ目 内面・ナデ	84-0717	
9	壺	SK099	灰褐色	③29.6 ④ 7.1	外面・ヘラ磨き 内面・ナデ	84-0716	
10	壺	SK102	黄褐色	①24.8	外面・ヨコナデ 内面・ナデ	84-0783	
11	壺	10区東側	黄褐色	② 5.55 ③26.4	外面・ヨコナデ 内面・ていねいなナデ	84-0797	外面に暗文がみられる
12	壺	10区東側	明黄褐色	④68.0	外面・ヘラ磨き 内面・ナデ	84-0719	
13	鉢	10区東側	灰褐色	①17.4 ② 9.45 ④ 7.3	外面・ヘラ磨き 内面・ヨコナデ、ナデ	84-0722	
14	鉢	10区東側	黄褐色	①28.3 ②29.95	内外面・ナデ	84-0710	
15	鉢	10区東側	暗褐色	①23.2 ② 9.8 ③ 7.6	内外面・ナデ	84-0785	
16	鉢	10区東側	灰白色	①31.2	外面・ヨコナデ 内面・ナデ	84-0784	丹塗り
17	高杯	10区東側	明褐色	①25.6	内外面・ヘラ磨き	84-0713	
18	甕	10区東側	黄褐色		内外面・調整不明	84-0724	
19	鉢	10区東側	暗黄褐色		外面・不明 内面・ナデ	84-0715	
21	甕	SJ055	明褐色		内外面ナデ	84-1869	
22	甕	SJ052	明黄褐色～暗褐色	①37.9 ③38.0	外面・ハケ目 内面・ナデ	84-1868	
23	甕	SJ054	明褐色～褐色	①70.2	内外面・磨耗している	84-1867	
24	甕	SJ056	黄褐色	③64.2 ④16.2	外面・ナデ、突部ヨコナデ 内面・ナデ	84-1865	
25	甕	SJ056	黄褐色～明褐色	①54.5 ②90.5 ③72.5 ④12.9		84-1866	

Tab 9 野田遺跡出土古墳時代土器一覧表

番号	器 種	出土遺構	色 調	①口径 ②器高 ③胴部最大径 ④底径 法量 (cm)	調 整	遺 物 登録番号	備 考
26	土師器杯	SK005	明黄褐色～暗褐色	①14.0 ② 5.5	口縁部・ヨコナデ 胴部・ナデ	84-0770	
27	土師器杯	SK005	黄褐色～明褐色	①13.8 ② 5.4	外面・不明 内面・ナデ	84-0771	
28	土師器杯	SK005	暗褐色～明褐色	①13.6 ② 5.9	内外面・ヘラ磨き	84-0768	
29	土師器甕	SK005	暗黄褐色～明褐色	①15.0	外面・ヨコナデ 内面・ナデ	84-0776	
30	土師器甕	SK005	暗黄褐色	①20.1	外面・不明 内面・ヨコナデ、ナデ	84-0775	
31	土師器壺	SK005	暗黄褐色～褐色	①12.4 ② 6.8	外面・上部ヨコナデ、下部不明 内面・ヘラ削り	84-0765	
32	土師器壺	SK005	明褐色～暗褐色	①13.5 ② 8.05	口縁部・ヨコナデ、胴部不明 内面・ヘラ削り	84-0767	
33	土師器壺	SK005	暗黄褐色～暗褐色	①11.5 ②10.6	外面・口縁ヨコナデ、胴部不明 内面・ヘラ削り	84-0766	
34	土師器鉢	SK005	赤褐色	①13.6 ②12.3	外面・ナデ 内面・ヘラ削り後ナデ	84-0764	
35	甕	SK005	暗褐色～褐色	①16.6 ②18.4	外面・ナデ 内面・ヘラ削り	84-0781	
36	甕	SK005	暗褐色～暗黄褐色	①25.0 ② 9.55	外面・ナデ 内面・ヘラ削り	84-0782	
37	土師器杯	SK013	明褐色～黄褐色	①12.6 ② 4.55	内外面ナデ	84-0759	
38	土師器杯	SK013	明褐色～黄褐色	①10.8 ② 5.5	外面・ハケ目後ナデ 内面・ヨコナデ、ナデ	84-1805	

番号	器 種	出土遺構	色 調	法量 (cm) ①口径 ②器高 ③胴部最大径 ④底径	調 整	遺 物 登録番号	備 考
39	土師器甕	SK013	明褐色～褐色	①10.9	外面・ハケ目後ナデ 内面・ヘラ削り	84-1809	
40	土師器壺	SK013	赤褐色～褐色		外面・ハケ目後ナデ 内面・ナデ	84-1808	
41	土師器壺	SK013	暗褐色～明褐色		内外面・ナデ	84-1806	
42	土師器甕	SK013	黄褐色		外面・ハケ目後ナデ 内面・ヘラ削り後ナデ	84-1810	
43	土師器鉢 (ミニチュア)	SK013	暗褐色～褐色	① 7.6 ② 4.8 ③ 3.6	外面・ハケ目後ナデ 内面・ナデ	84-1807	
44	土師器鉢	SK013	赤褐色～暗褐色	① 6.2 ② 4.2	外面・ハケ目 内面・ナデ	84-0760	
45	須恵器杯	SK050	黒灰色～灰色	①10.3 ② 4.5	外面・ヘラ削り 内面・ナデ	84-1821	
46	須恵器蓋	SD072	黒灰色	①11.8	内外面・ヨコナデ	84-1852	
47	須恵器蓋	SD072	黒色～灰色	①14.1	外面・ヨコナデ、ヘラ削り 内面・ヨコナデ	84-1851	
48	杯	SD072	黄褐色～暗褐色	①13.0 ② 4.9	外面・ヘラ磨き 内面・ナデ	84-0726	
49	杯	SD072	暗褐色	①14.0 ② 5.4	内外面・ナデ	84-0727	
50	壺	SD072	暗褐色	①10.8 ② 9.3	内外面・ナデ	84-0725	丹塗り
51	甕	SD072		①13.7	外面・ヨコナデ、ハケ目 内面・ナデ、ヘラ削り	84-0734	
52	壺	SD072	灰褐色	①13.2	外面・ヨコナデ、動ハケ目 内面・ヘラ削り	84-0733	外面に煤が付着
53	土師器台付鉢	SB079	明褐色	①12.2	外面・不明 内面・ナデ	84-1802	
54	甕	SB079	明褐色	①17.0	外面・ハケ目、ヨコナデ 内面・指ナデ	84-0737	外面に煤が付着
55	甕	SB079	明褐色	①16.6	外面・ハケ目ヨコナデ 内面・ヘラ削り	84-0738	

Tab 10 野田遺跡出土平安～鎌倉時代土器・陶磁器一覧表

番号	器 種	出土遺構	色 調	法量 (cm) ①口径 ②器高 ③胴部最大径 ④底径	調 整	遺 物 登録番号	備 考
60	土師器小皿	SK014	明黄褐色～黄褐色	①14.4 ② 1.9 ④ 8.8	内外面・ヨコナデ、ナデ	84-1813	
61	土師器杯	SK014	褐色～黄褐色	①12.8 ② 3.9 ④ 8.0	内外面・ヨコナデ	84-1812	ヘラ切り離し
62	土師器碗	SK014		①16.3 ② 7.9 ④ 8.1	外面・ハケ目 内外面・研磨、ナデ	84-1814	
63	土師器甕	SK014	黄褐色	①28.0	外面・ハケ目 内面・ヘラ削り	84-1815	
64	土師器甕	SK014	暗褐色～黄褐色	①24.0	外面・ハケ目 内面・ヘラ削り	84-1816	
65	土師器小皿	SK017	明黄褐色	①14.4 ② 1.4 ④11.6	内外面・ヨコナデ	84-0752	ヘラ切り離し
66	土師器小皿	SK017	明黄褐色～暗灰色	①14.3 ② 2.1 ④ 8.0	内外面・ヨコナデ	84-0746	ヘラ切り離し
67	土師器杯	SK017	明褐色	①12.4 ② 3.3 ④ 7.3	内外面・ヨコナデ	84-0742	ヘラ切り離し
68	土師器杯	SK017	明黄褐色～黄白色	①13.3 ③ 3.3 ④ 7.2	内外面・ヨコナデ	84-0743	ヘラ切り離し
69	土師器杯	SK017	明褐色～黄褐色	①13.0 ② 3.3 ④ 8.1	内外面・ヨコナデ	84-0750	ヘラ切り離し 内面に煤が付着
70	土師器杯	SK017	明黄褐色	①13.1 ② 3.1 ④ 7.1	内外面・ヨコナデ	84-0751	ヘラ切り離し
71	土師器碗	SK017	明黄褐色	①15.2 ② 6.4 ④ 8.5	外面・ヨコナデ 内面・ヨコナデ、ナデ	84-0763	ヘラ切り離し
72	土師器碗	SK017	明黄褐色	①14.2 ② 6.4 ③ 7.9	外面・ヨコナデ 内面・ヨコナデ、ナデ	84-0740	ヘラ切り離し
73	須恵器壺	SK017	黒灰褐色	①12.8	内外面・ヨコナデ	84-0757	

番号	器 種	出土遺構	色 調	①口径 ②器高 ③胴部最大径 ④底径 法量 (cm)	調 整	遺 物 登録番号	備 考
74	土師器甕	SK017	暗褐色	①19.2 ② 7.5	外面・ハケ目、ヨコナデ 内面・ヘラ削り	84-0758	外面煤が付着
75	土師器甕	SK017	暗褐色	①25.9	外面・ハケ目 内面・ヘラ削り	84-0756	
76	土師器甕	SK017	暗褐色	①27.3	外面・磨減のため調整不明 内面・ヘラ削り	84-0754	外面煤が付着
77	土師器甕	SK017	赤褐色～暗褐色	①28.2 ② 8.35	外面・不明 内面・ヘラ削り	84-0755	
79	黒色土器碗	SK006	灰黒色	①14.3	内外面・ヘラ磨き	84-1856	
80	黒色土器碗	SK006	灰黒色	①15.6 ② 5.7 ④ 5.7	内外面・ヘラ磨き	84-0795	
81	土師器小皿	SE016(下部)	灰黒色	①10.2 ② 1.7	内外面・ヘラ磨き	84-0797	糸切り離し。板目痕
82	土師器小皿	SE016(下部)	灰褐色	① 8.7 ② 1.5 ④ 5.9	内外面・ヨコナデ	84-0791	糸切り離し
83	黒色土器	SE016	暗黄褐色 (内面灰黒褐色)	①17.0 ② 5.5	外面・ヨコナデ 内面・ナデ	84-1862	
84	白磁碗	SE016(下部)	胎土白灰色	①16.8 ④ 7.3	外面・底部ヘラ削り	84-0796	
85	土師器小皿	SE029	黄褐色	① 8.6 ② 1.3 ④ 7.3	内外面・ヨコナデ	84-1828	底部板目痕あり
86	瓦器碗	SE029	灰色～暗灰色	①16.9 ② 5.1 ④ 5.9	内外面・ヘラ磨き	84-1830	
87	瓦器碗	SE029	灰黒色	①18.3 ② 6.4 ④ 6.1	内外面・ヘラ磨き	84-1829	
88	須恵器壺	SE029	灰色～黒灰色	③23.2	内外面・叩き、ナデ	84-1849	内面同心円文叩き
89	褐釉陶器壺	SE029	釉暗緑灰色	①10.0	内外面・ヨコナデ	84-1841	外面格子目叩き
90	青磁碗	SE029	胎土灰色・釉暗緑色	①16.8 ② 6.6 ④ 5.8	内外面・ヨコナデ 底部・ヘラ削り	84-1838	内外面とも施釉
91	青磁碗	SE029	胎土灰色・釉黄緑色	④ 4.7	底部・ヘラ削り	84-1832	
92	青磁合子(蓋)	SE029	胎土灰白色・釉黄緑色	① 5.8	内外面とも施釉	84-1837	
93	白磁碗	SE029	灰白色	①15.4	内外面とも施釉	84-1834	
94	白磁碗	SE029	灰白色	①16.6	内外面とも施釉	84-1833	
95	白磁碗	SE029	灰白色	④ 6.8	外面底部・ヘラ削り	84-1836	
96	白磁皿	SE029	灰白色	① 9.2	内外面とも施釉	84-1835	
97	磁器壺	SE029	灰白色	③14.8	内外面とも施釉	84-1839	
98	磁器小皿	SE031	黄褐色	① 9.0 ② 1.2 ④ 7.5	内外面・ヨコナデ	84-0793	底部は調整不明
99	瓦器碗	SE031	灰白色	①15.2	外面・ヘラ磨き 内面・不明	84-1857	
100	瓦器碗	SE031	灰黒色～白灰色	② 4.6 ④ 6.3	内外面・不明	84-0794	
101	土師器碗	SE031	明黄褐色	① 7.7	内外面・ヨコナデ	84-1858	
102	磁器碗	SE031	胎土灰白色・釉白色	①15.8		84-1859	
103	白磁碗	SE031	胎土乳白色・釉灰白色	④ 5.4		84-1861	周囲に釉がかかっている
104	青磁皿	SE031	胎土灰白色・釉暗緑色	④ 3.4		84-1860	
105	磁器碗	SE031	胎土灰色・釉黄緑色	④ 5.15	内外面に釉	84-1831	
106	黒色土器小皿	確認面	黒灰色～灰色	①10.2 ② 1.9	内外面・ヘラ磨き	84-1855	
107	青磁碗	SD003		①10.8		84-1854	
108	瓦器碗	SD032	黒色～白灰色～黒灰色	①16.0 ② 5.3 ④ 5.6	外面・磨減のため不明 内面・ヘラ磨き	84-1850	
109	土師器小皿	SD048	黄褐色	① 8.3 ② 0.9 ④ 7.0	外面・ヨコナデ、ナデ 内面・ナデ	84-1848	糸切り離し。板目痕
110	土師器小皿	SD048	暗褐色	①10.1 ② 1.9	内外面・ヘラ磨き	84-0729	ヘラ切り離し
111	土師器杯	SD048	明褐色	①12.4 ② 3.7 ④ 6.6	内外面・ヨコナデ、ナデ	84-0730	
112	瓦器碗	SD048	暗灰色	①15.7 ② 5.8 ④ 6.3	外面・指押え後ヘラ磨き 内面・ヘラ磨き	84-0732	
113	瓦器碗	SD048	灰色～暗灰色	①16.4 ② 6.6 ④ 6.7	内外面・ヘラ磨き	84-1845	
114	土師器碗	SD048	灰色	①18.3 ② 6.6 ④ 7.0	内外面・不明	84-1847	
115	青磁杯	SD048		①14.5	釉がかかっている	84-1864	
116	越州窯水注	SD048			釉がかかっている	84-1863	
117	白磁碗	SD048	釉乳白色・胎土灰白色	①14.2		84-1842	
118	白磁碗	SD048	釉乳白色	①18.0	施釉している	84-1843	
119	白磁碗	SD048	底部白灰色・釉乳白色	①17.1 ② 6.02	釉がかかっている	84-0731	底部の面に墨が塗られている

4. 小 結

野田遺跡8区～11区は広範囲な野田遺跡群の南端近くに位置する。今回の調査では、幅8m、東西317mの部分のほぼ全面から遺跡が検出されている。遺構は弥生時代から鎌倉時代にかけてのものがみられ、遺物は弥生時代から鎌倉時代にかけての土器・陶磁器・石器・木製品が出土している。

弥生時代の遺構は甕棺墓と土壇がある。甕棺墓は6基で、すべて9区東側に存在する。成人用4基、小児用2基で、上部の削平が著しく棺の残存状態は良くない。墓域は北側および南側に広がるようである。昭和53年度に調査された9区北側のI区からも3基の甕棺墓⁽⁹⁾が検出されており、これら9区とI区の甕棺墓群は北西から南東へ細長く延びる墓域を構成する同一の墓地群と考えられる。成人棺であるSJ054甕棺墓とI区のSJ169甕棺墓は主軸をほぼ同一方向にとり、どちらも下甕に大甕、上甕に鉢を用いている。また小児棺であるSJ055甕棺墓とII区のSJ167甕棺墓も主軸がほぼ同一方向である。甕棺墓の時期は、SJ053・SJ055・SJ056の棺に用いた土器の特徴から「須玖式」⁽²⁾に相当し中期中頃～後半に位置づけられる。

土壇は10基で、2基が9区東側に、他は10区東側、11区に存在する。このうちSK058・059土壇の2基は甕棺墓群に隣接しており、埋葬に関係する祭祀土壇と考えられる。どちらも上部が削平されており残存状態は良くない。遺物はSK059土壇から、壺・甕・高杯の破片が出土しており、時期は甕棺墓と同じく中期中頃～後半に位置づけられる。他の土壇は、性格が不明である。中期中頃～後半の土器（壺・甕・高杯・鉢）が出土している。遺構に伴わない遺物であるが18の刻目突帯を有する甕と19の鉢は前期に位置づけられる土器である。石器は石包丁と打製石鏃が1点ずつ出土している。

古墳時代の遺構は竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壇・溝跡・柵列がある。竪穴住居跡は1軒で、上部の削平が著しく、残存状態は悪い。特に西側は壁が完全に削平されている。残存部分より平面が方形もしくは長方形、長さ5.5m程で、主体穴が4本と推定される。内部に壁溝と貯蔵穴を伴っている。遺物は土師器小破片しか出土しておらず時期が明確にできないが、5世紀後半のSK013土壇に切られている。

掘立柱建物跡は12棟で、9棟が8区に、3棟が7区に存在する。規模は1間×1間が7棟、2間×1間が3棟、2間×2間（総柱）が1棟みられる。SB074～SB079建物跡が棟方向がほぼ同じで、整然と並んでいる。総柱建物跡であるSB077建物跡はSB078建物跡の建て直しの可能性がある。このSB077建物跡の北東側から南東側にかけて逆L字形にSA092柵列があり、このSA092柵列はSB077建物跡に付属し、建物を遮蔽していた堀と考えられる。掘立柱建物跡の時期は、SB079建物跡が、柱穴から出土した土器甕の特徴から5世紀後半で、このSB079建物跡およびSB079建物跡と同一方向に並ぶSB074～SB078建物跡はほぼ同時期と考え

られる。他の建物跡については遺物が土師器小破片しか出土しておらず時期を明確にできないが、SB079建物跡や、後述する土壇とはほぼ同時期か近い時期であると考えられる。

土壇は11基あり、5基が8区に、7基が9区に存在する。平面が不整形のものが多く、また削平も著しく性格は不明である。遺物はSK050土壇から完形の須恵器蓋が、SK013土壇から土師器杯・甕がまとまって出土している。これらの土壇の時期は5世紀後半から6世紀前半と考えられる。

溝跡は2条で、すべて9区に存在する。2条ともほぼ南北に走り、調査区の北側と南側に延びている。特にSD072溝跡は幅3.6～5.2mの大きな溝跡で9区北側のI区で検出されたSD162溝跡と繋がる。遺物はこのSD072溝跡から多数の土師器杯・壺・甕・須恵器蓋とともに、大足・糸巻き貝・板状加工品などの木製品が出土している。出土した土師器・須恵器は5世紀後半に位置づけられる。大足は片側の縦木のみで横木や足板は出土していないが、長さ80cm程の梯子形⁽³⁾の木枠を取りつけた大型のものになると思われる。この大足は、大阪府八尾市、友井東遺跡⁽³⁾の古墳時代前期の遺物包含層から出土している大足とよく類似している。またI区のSD102溝跡からは百済土器⁽⁴⁾（三足土器）が出土しており注目される。

平安時代の遺構は掘立柱建物跡・井戸跡・土壇・溝跡・柵列がある。掘立柱建物跡は12棟あり、すべて8区に存在する。規模は2間×1間が7棟、2間×2間が2棟、4間×1間が1棟、5間×2間が1棟みられる。これらの建物跡は棟方向をほぼ東西にとるものと、ほぼ南北にとるものがみられ、II区で検出されている平安時代の建物群と同一の方向性をもっている。特にSB087建物跡とSB090建物跡の北側柱列、SB090建物跡の東側妻とSB045建物跡の西側柱列およびSD090建物跡の南側柱列とSB082建物跡の南側妻は一直線に並んでおり、建物の配置に規則性がみられることは注目される。また建物同士の切り合いはほとんどなく、これらの建物群が同時期もしくは近い時期に存在した可能性が強い。SB038建物跡・SB042建物跡・SB087建物跡が規模が大きく、中心的な建物と考えられる。SB038建物跡は3面に庇が確認されており、東側にも庇がつき4面庇になる可能性がある。建物跡の時期は出土遺物が土師器や瓦器の小破片しかないため明確にできないが、土壇や井戸跡の時期と同じく9世紀後半から12世紀にかけてのものと考えられる。

柵列は7列あり、すべて8区に存在する。このうちSA095柵列はSB041建物跡とSB083建物跡の間を境界する柵列もしくは塀と考えられる。SA098柵列は延長がSB087・090建物跡の北側柱列と一致し注目される。

土壇は2基、井戸跡は5基で、どちらも8区に存在する。井戸跡は、すべて素掘りのもので井戸枠等は出土していない。SE029井戸跡が3段掘りで規模が大きい。このSE029井戸跡とSE031井戸跡から同一個体の褐釉陶器が出土しており、この2つの井戸跡が同時期に存在した可能性が強い。土壇・井戸跡からは多くの土師器・黒色土器・陶磁器が出土している。これら

の土壌・井戸跡から出土した遺物の時期は、SK014土壌・SK017土壌が9世紀後半、SE006井戸跡・SE016井戸跡・SE033井戸跡が11世紀前半、SE029井戸跡・SE031井戸跡が12世紀後半に位置づけられる。

溝跡は5条で、4条が8区、1条が9区に存在する。並行して南北に走るSD034・035・046・047溝跡は出土遺物がほとんどないため時期が不明であるが、SE029井戸跡・SE031井戸跡・SE033井戸跡と関係する溝跡もしくは、ほぼ等間隔で並行していることから道の側溝になる可能性がある。SD048溝跡はI区のSD159溝跡と繋がる。このSD048溝跡からは11世紀前半～後半に位置づけられる土師器・瓦器・陶磁器・須恵器が出土している。

今回報告した8区～11区と昭和53・54年度に調査したI区～VII区の調査結果により、広大な野田遺跡群の性格を知る上で多くの資料が得られている。今後の課題として、I区～VII区の調査結果の報告とともに8区～11区および周辺遺跡を含めた遺跡の各時代ごとの性格および遺物の分類整理を行なう必要がある。

注

1. 成人用が1基、小児用が2基検出されている。
2. 高島編年のVI式、橋口編年のKⅢa式に相当する。
高島忠平「褒棺の編年」『立岩遺跡』立岩遺跡調査委員会 1977年
橋口達也「褒棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道路関係埋蔵文化財調査報告XXXI』福岡県教育委員会 1979年
3. 上西美佐子「友井東遺跡」埋蔵文化財研究会第14回研究集会資料 1983年
4. 昭和53年度の発掘調査により出土している。報告書未刊。昭和60年2月に来佐された釜山大学助教授鄭澄元先生、同大学博物館学芸員申敬澈先生、北九州市立博物館小田富士夫先生の御教示による。

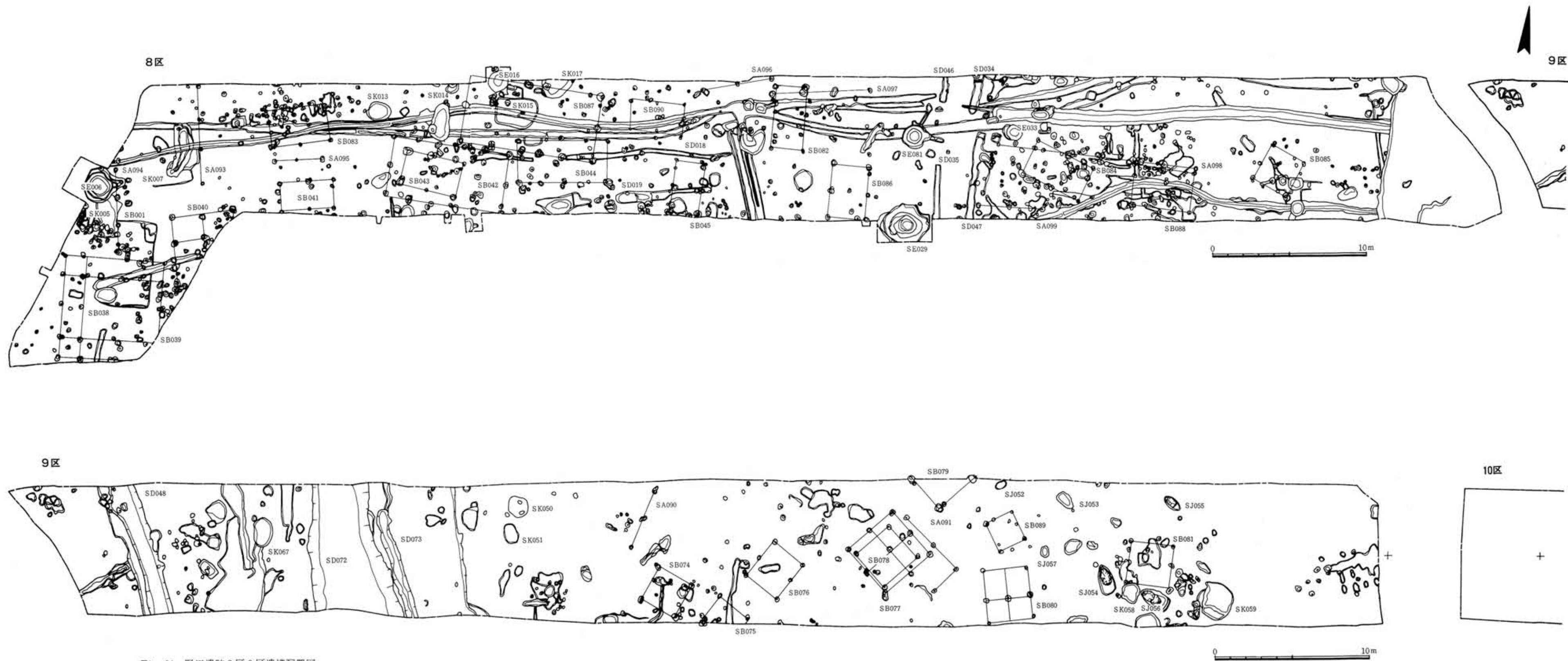
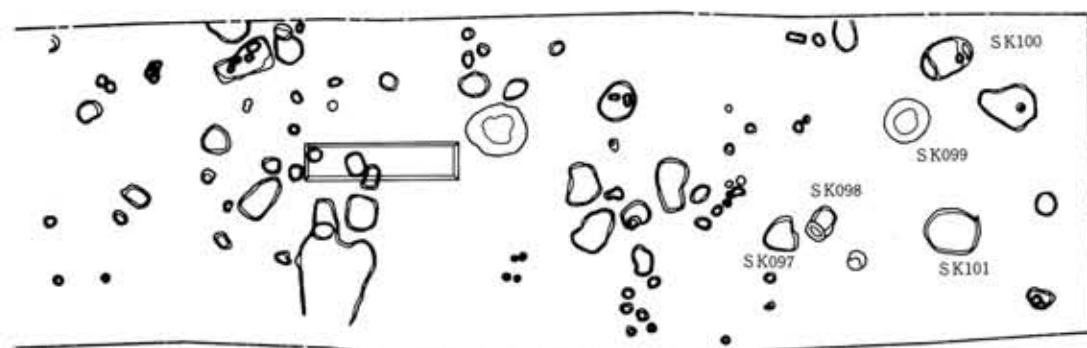
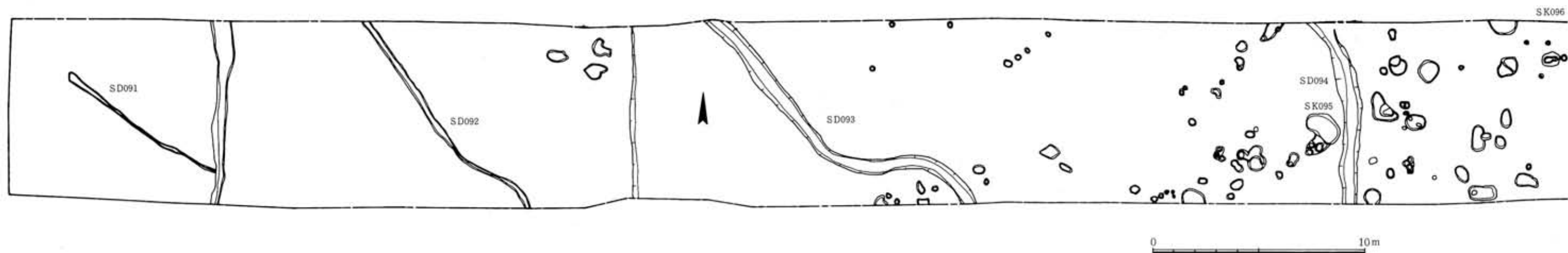


Fig 64 野田遺跡 8区 9区遺構配置図

10区



11区

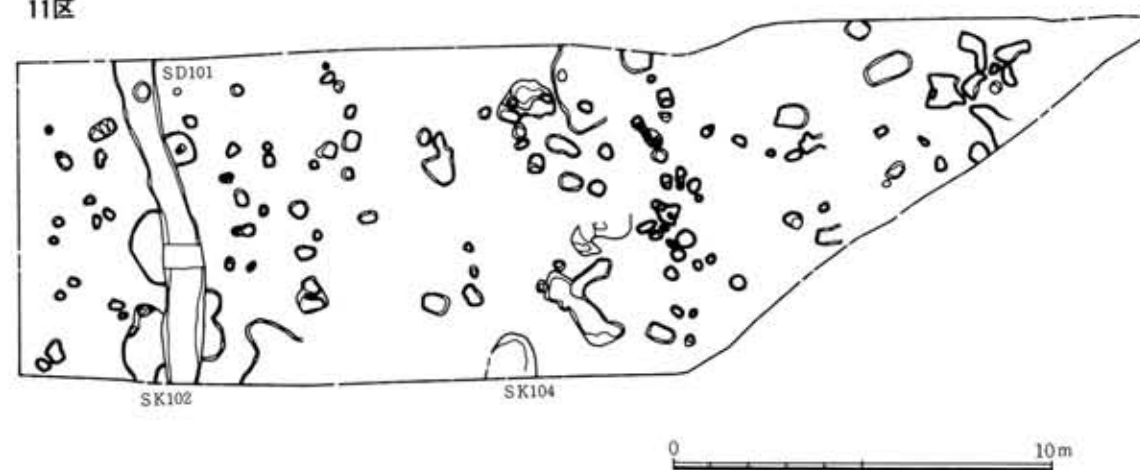


Fig 65 野田遺跡10区・11区遺構配置図

IV かわ川 より寄 よし吉 わら原 遺跡

川 寄 吉 原 遺 跡

1. 遺跡の概要

川寄吉原遺跡は佐賀県神埼郡大字竹に所在する。遺跡は、日の隅山南方の城原川により形成された標高7～8mの扇状地上に立地している。周辺は遺跡の密集した地域であり、北側には弥生時代中期の竪穴住居跡・祭祀土壌が検出され、多数の筒形器台と鐸型土製品が出土した川寄若宮遺跡が、南側には弥生時代中期の甕棺墓・土壌墓が検出された利田遺跡群が存在する。川寄吉原遺跡は、この2つの広大な遺跡群のほぼ中央に位置する。遺跡は東西約80m、南北約50mの範囲に広がり、弥生時代後期前半の短い時間営まれている。

今回調査を行なったのは遺跡の南端に近い部分にあたり、道路を挟んで西側の調査区をⅡ区、東側の調査区をⅢ区とした。このⅡ区Ⅲ区北側の現在水路になっている部分は、県営圃場整備事業に伴い、佐賀県教育委員会が昭和55年度に発掘調査を行なっている。この昭和55年度の調査区をⅠ区とする。Ⅰ区は、Ⅱ区・Ⅲ区北側の全長80mの調査区で、道路を挟んでⅡ区・Ⅲ区と平行している。

Ⅰ区から検出された遺構は、弥生時代後期前半の掘立柱建物跡19棟、井戸跡8基、円形周溝1基、溝跡3条である。掘立柱建物跡は3間×1間、2間×1間、1間×1間のものがあり、柱穴の大半は、柱根・横木が残っていた。遺物は、甕・壺・高杯・鉢・器台などの土器、石包丁・磨製石斧などの石器、鍬・杵・鎌の柄・斧の柄などの木製品、鐸型土製品、土製品が出土している。土器には、瀬戸内系の甕や、甕を半截し底部を袋状に仕上げた鍋型土器があり注目される。鐸型土器製品は柱穴から出土しており、武人像・動物像が線刻されている。

Ⅱ区は全長100mの調査区で、弥生時代後期前半の土壌5基、井戸跡3基、柱穴、杭列を検出している。遺構はⅡ区の東側の小高い部分に集中しており、西側はしだいに低くなり湿地帯となっている。この湿地帯の部分から杭列と遺物包含層が確認されている。遺物は遺構から甕・壺・高杯が出土している。特にSK102土壌からは多量の土器が一括して出土している。遺物包含層からは多量の土器とともに銅鏃、大足・棒状具・杭などの木製品、獣骨が出土している。

Ⅲ区は全長20mの調査区で、井戸跡1基を検出している。地山上面には枝や葉などの植物遺体を含む厚さ約10cmの黒褐色土の遺物包含層（2層）が確認されている。井戸跡から磨石が出土している。遺物包含層からは壺・甕・高杯・鉢・器台が出土している。



Fig 66 川寄吉原遺跡周辺地形図(1/3,000)

2. 遺 構

検出された遺構はすべて弥生時代後期のもので、土壌5基、井戸跡4基、柱穴、杭列がある。

土 壌

SK102土壌 (Fig.67, PL.23-1・2)

II区東側，SK106土壌の西側に位置する。上面が削平されており残存状況は良くない。平面が楕円形で、長さ1.72m、幅1.24m、深さ0.07~0.15mを測る。壁は東側と西側がほぼ垂直で、北側と南側は傾斜している。床は傾斜しており、南側が深くなっている。埋土は黒褐色土で炭の細片を含んでいた。遺物は床面から浮いた状態で、壺・甕・鉢が出土した。これらの土器は壊れて破片になっていたが比較的ま

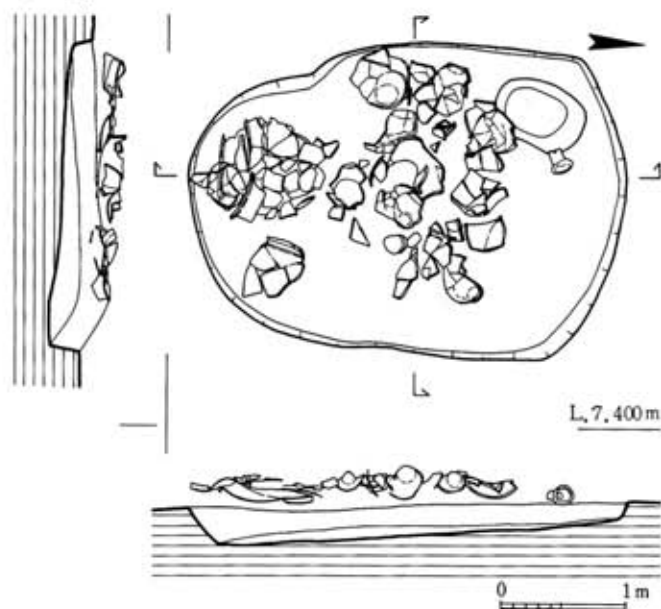


Fig 67 SK102土壌実測図

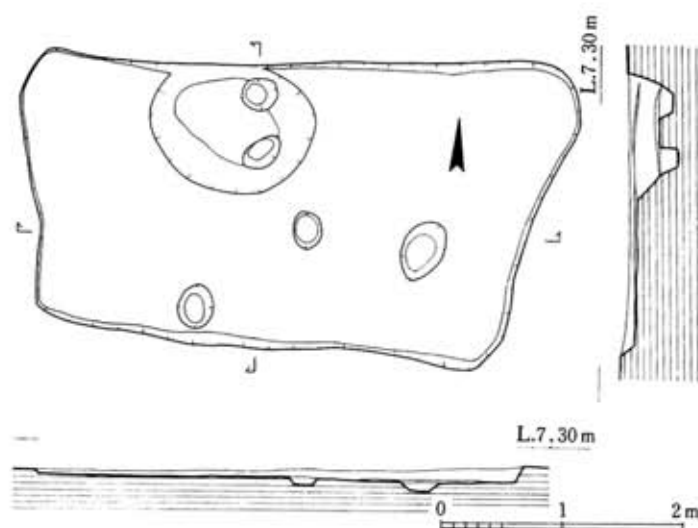


Fig 68 SK104土壌実測図

まとまった状態で出土しており接合すると完形品に近くなるものが多い。完形品もしくは完形に近い土器をこの土壌内に打ち割って投げこんだものと考えられる。

SK104土壌 (Fig.68, PL.23-3)

II区東側, SK106土壌の北側に位置する大型の土壌である。上部の削平が著しく, 残存状況は良くない。平面が隅丸長方形に近く, 長さ1.95~2.31m, 幅1.16~2.26m, 深さ0.05~0.11mを測る。壁は傾斜しており, 床は平坦である。床面の中央よりやや南側の北壁に接して, 平面楕円形で長さ1.38m, 幅1.08m, 深さ0.19mの土壌がある。埋土は黒褐色で, 遺物は埋土か壺・甕の小破片が出土している。

井戸跡

SE101井戸跡 (Fig.69, PL.24-1)

III区の北西端に単独で位置する。素掘りの井戸跡で北側の約三分の一は調査区域外のため未発掘である。平面が隅丸長方形に近い楕円形で, 推定長1.64m, 幅0.92m, 深さ0.79mを測る。壁はほぼ垂直になる。埋土は, 上部が暗褐色土, 下部が黒褐色土で, どちらも植物遺体を多く含んでいた。地山は上部が黄褐色土, 下部は黄白色粘土から砂礫層になり湧水がある。遺物は床面近くから磨石が2点出土している。

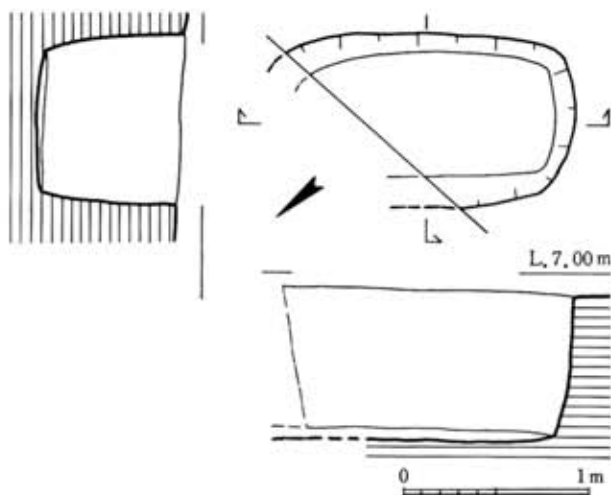


Fig 69 SE101井戸跡実測図

SE107井戸跡 (Fig.70, PL.24-2)

II区の東端近くに位置する。素掘りの井戸跡である。平面が歪な隅丸長方形に近い楕円形で, 長さ1.3m, 幅1.04m, 深さ1.0mを測る。壁はほぼ垂直になる。埋土は大きく3層に分けられ, 1層が黒褐色土で厚さ約20cm, 2層が暗褐色土で厚さ約35~40cm, 3層が暗灰色土で厚さ35~40cmである。1層と2層には植物遺体を含んでいた。地山の下部は灰白色粘土で, 砂礫を多く含み湧水がある。遺物は1層から土器の細片が出土したのみである。

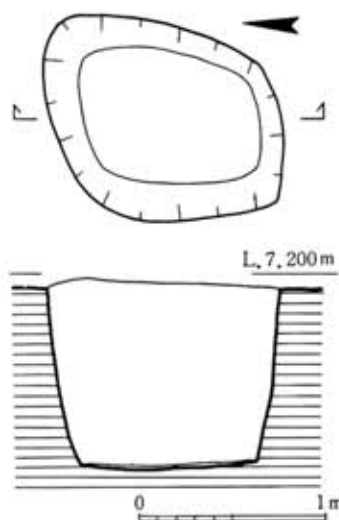


Fig 70 SE107井戸跡実測図

SE108井戸跡 (Fig. 71, PL.24-3)

II区東側, 小高い部分の縁辺近くに位置する。素掘りの井戸跡で, 南側の約半分は調査区域外のため未調査である。平面は円形もしくは楕円形になると思われる。長さ1.82m, 幅1.0m以上で, 深さは0.5mと他の井戸跡に比べて浅い。壁は二段になっており, 上段はゆるく傾斜し, 下段は急角度に傾いている。埋土は上部が灰褐色土, 下部が植物遺体を多く含む暗褐色土である。遺体は床面近くから甕の破片と, 木材が出土している。

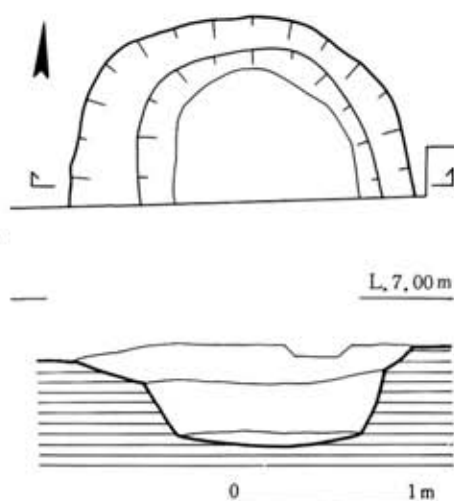


Fig 71 SE108井戸跡実測図

SE110井戸跡 (Fig. 72, PL.24-4)

II区東側, SK102土壌の南側に位置する。素掘りの井戸跡で, 北東部を柱穴によって切られている。平面が隅丸長方形で, 長さ1.08m, 幅0.74m, 深さ1.03mを測る。壁はほぼ垂直になりSE107井戸跡と形態がよく似ている。埋土は上部が黒褐色土, 下部が暗褐色土で, どちらも植物遺体を多く含んでいた。地山の下部は砂礫層に近い灰白色粘土で, 湧水がある。遺物は埋土上部から土器の細片が出土したのみである。

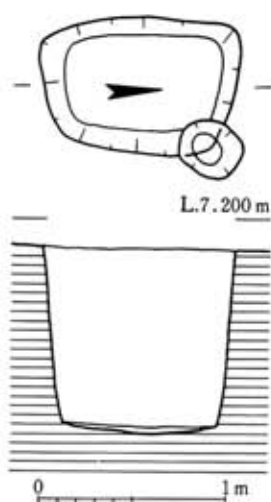


Fig 72 SE110井戸跡実測図

柱穴

P-5・P-6柱穴 (Fig. 73, PL.24-5・6)

II区東側から約100ヶ所の柱穴と思われる小穴を検出したが, 柱根の残っていたのはこのP-5・P-

Tab 11 川寄吉原遺跡土壌・井戸跡一覧表

遺構番号	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考
		長	幅	深		
SK 102	楕円形	1.72	1.24	0.07~0.15	壺・甕・鉢	
103	楕円形	3.4	8.8	0.05~0.2		
104	隅丸長方形	1.95~2.31	1.16~1.26	0.1~0.28	壺・甕	
105	不整形	3.1	1.9	0.05~0.17		
106	不整形	1.8	1.48	0.05~0.15		
SE 101	楕円形	(1.64)	0.92	0.79	磨石	
107	不整楕円形	1.3	1.04	1.0		
108	—	1.5	1.0以上	0.5	甕・木材	
110	隅丸長方形	1.08	0.74	1.03		

6の2ヶ所のみである。どちらも平面が隅丸長方形に近い。P-5は長さ0.46m, 幅0.4m, 深さ0.3mで、東側が二段になっている。柱根は丸太をそのまま用いており、底に削り加工痕がみられる。径10cmで、長さ28cm程残っており西側に傾いている。P-6は長さ0.7m, 幅0.54m, 深さ0.36m。柱根は丸太をそのまま用いており、底に削り加工痕がみられる。径12~14cmで長さ30cm程残っており東側に傾いている。

杭列 (Fig. 75, PL. 25・26)

II区の中央部から検出している。大きく3群(S X 110・111・112)に分けられる。

II区の東側から中央部にかけてはA・B-13あたりからゆるやかに落ちこみ、杭列の存在するII区中央部は湿地帯となっており、粘質土が厚く堆

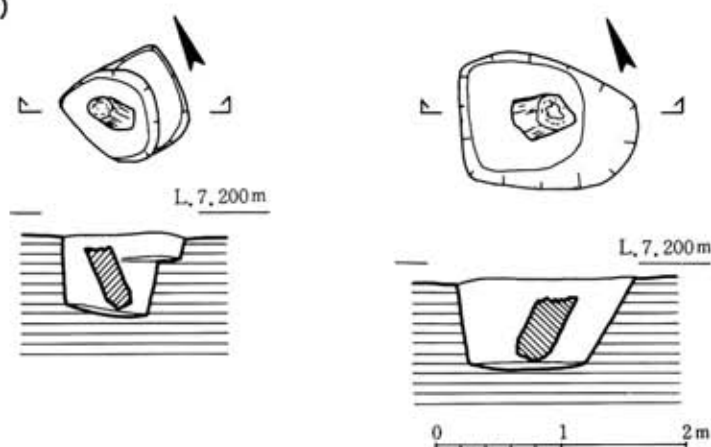


Fig 73 P-5・P-6 柱穴実測図

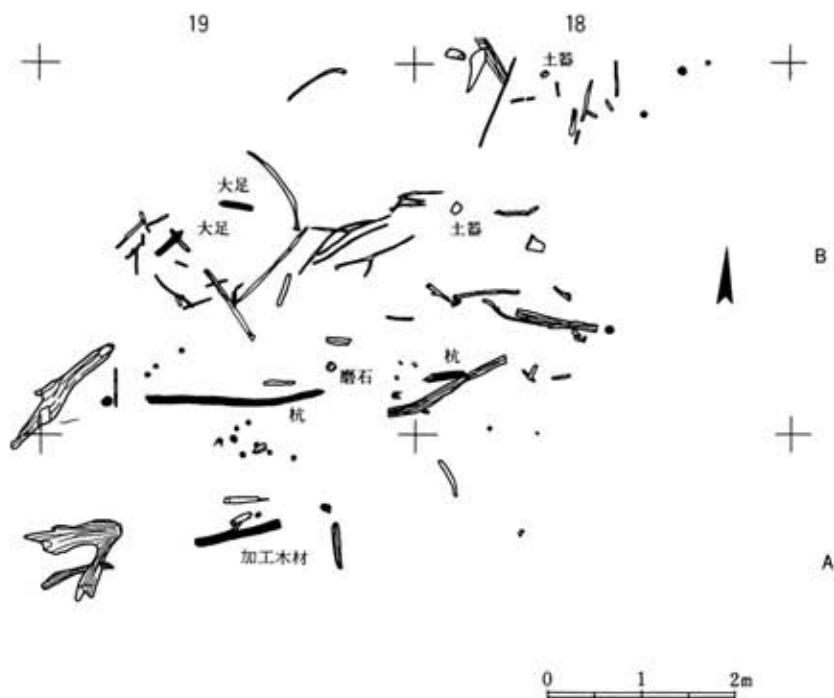


Fig 74 II区2層 (A・B-18・19) 木製品出土状況

積している。この堆積土は大きく2つの層(2層・3層)に分かれる。2層は灰褐色粘質土で厚さ約20cm, 木の葉や枝などの植物遺体を多く含む。遺物は壺・甕・高杯・鉢・器台など多量の土器とともに, 石器・銅鏃・木製品・獣骨が出土している。3層は暗灰色粘質土で, 2層と同様に植物遺体を多く含む。遺物は壺・甕・鉢などの土器が出土しているが2層に比べ小破片が多く量も少ない。

杭列は3層の上部で検出され, 地山の灰白色粘土に打ちこまれていた。S X 110は, 約70cmの間隔をおいて2列の杭列が並び, S X 111も約70~80cmの間隔で2列の杭列が並ぶ。S X 110・111の2つの杭列の上部2層下部から先述したように多くの木片・枝とともに, 大足・棒状具・鋤・加工木材などの木製品, 銅鏃が出土している。杭に用いられている木材は, ほとんどが丸木で, 角材を利用したものも若干みられた。先端を鋭利な刃物で加工して尖らせている。杭はみな上部を欠損しており直径2.5cm~12cm, 残存部の長さ20~45cmである。

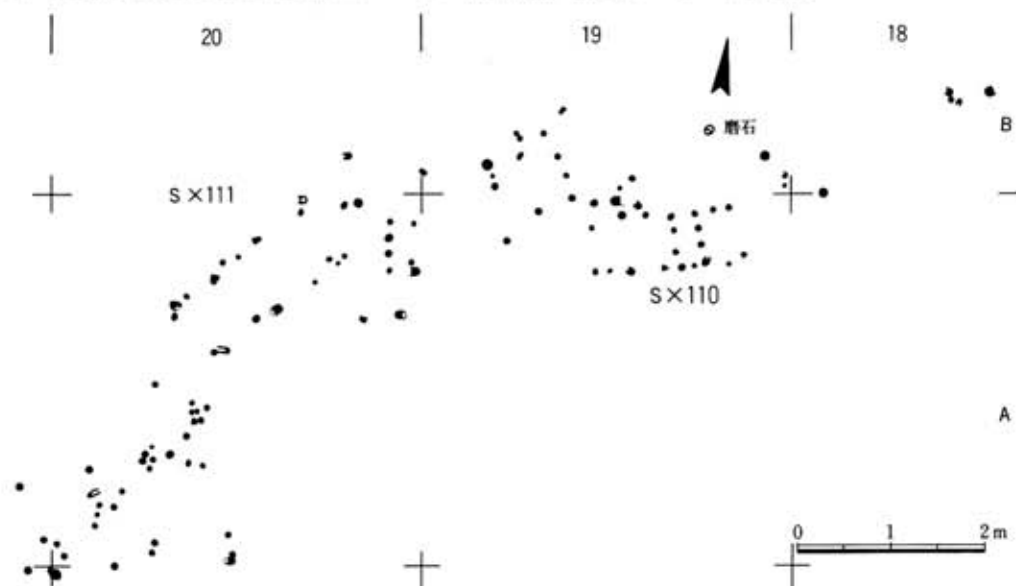


Fig 75 II区 S X 110・111杭列実測図

3. 遺物

遺物は1点の縄文土器を除き, すべて弥生時代のもので土器・石器・土製品・木製品・青銅器がある。土器はII区・III区の遺構, 遺構検出面, II区2層・3層, III区2層から出土している。石器はII区2層・III区SE101井戸跡から, 土製品・木製品・青銅器はII区2層から出土している。

(1) 土器

SK102土壇出土土器 (Fig. 76・77, PL.27・28)

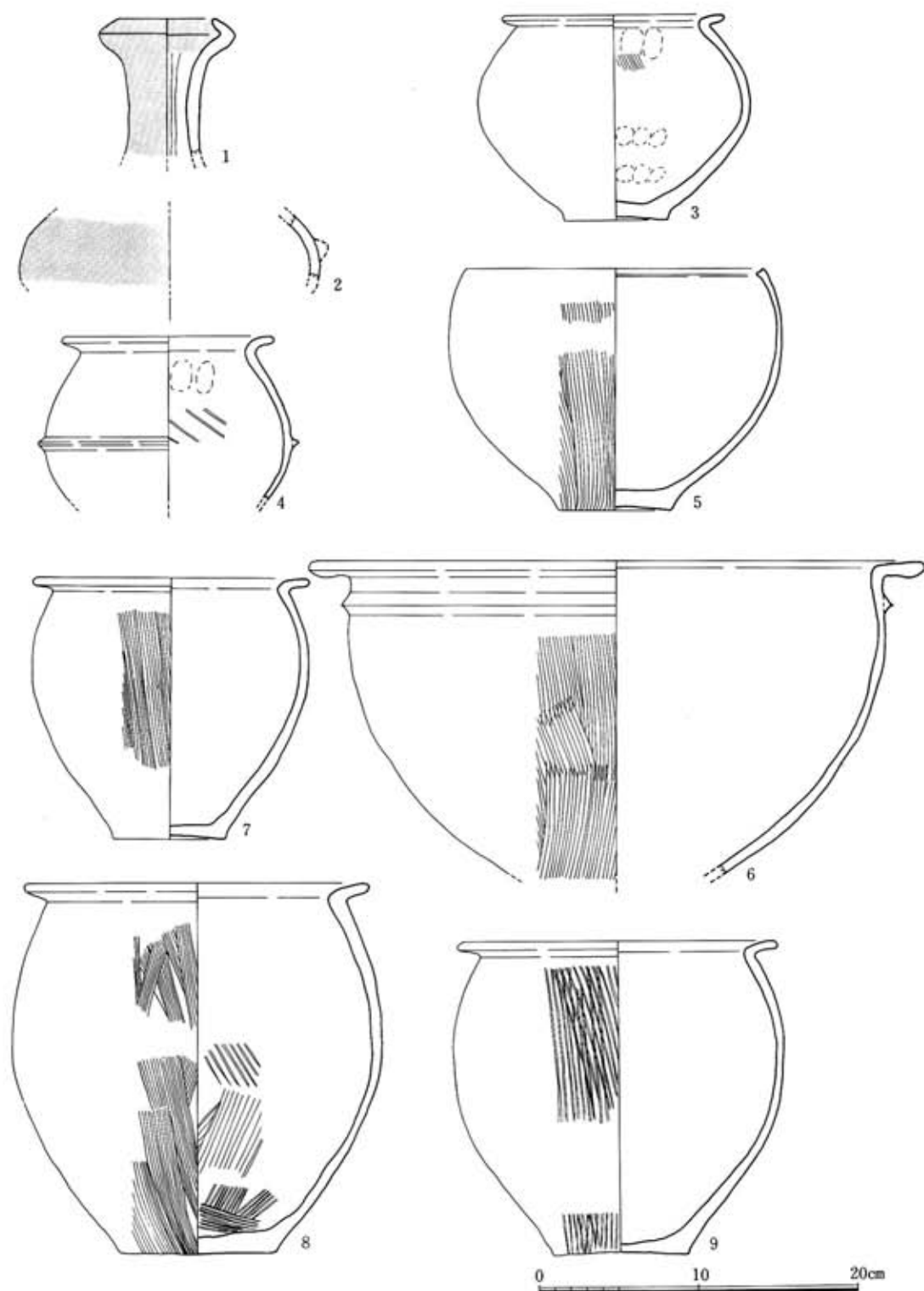


Fig 76 SK102出土土器実測図 1

壺(1~4) 1は頸部が円筒状で、口縁部はわずかに稜がつく袋状口縁になる。口縁端部は丸く仕上げている。色調は黄褐色で器壁は外面がへう磨きされている。外面および口縁部内面が丹塗りである。2は体部の破片で、突帯が剥落している。外面が丹塗りで1と同一個体と思われる。3・4は短頸壺で、3は体部が球形で口縁部が外側に短く外反する。底部はやや上げ底気味になる。色調は黄褐色で器壁は内外面ともナデ調整されている。内面に指頭圧痕とハケ目が一部残る。4は胴部が球形で断面三角形の突帯を1条巡らし、口縁部はゆるく外反する。色調は灰褐色で、器壁は外面がハケ目調整後ナデ調整されている。

甕(7~14) 7は口縁部が逆し字状に外反する。体部は胴が張り、底部は薄手で上げ底になる。色調は黄褐色で、器壁は体部外面があらひハケ目調整されている。8は口縁部がくの字形で、体部は胴が張る。底部は厚手である。色調は黄褐色。器壁は体部外面がハケ目調整で、体部内面はハケ目調整後上半部をナデ調整している。外面に煤が付着している。9は口縁部がくの字形で、体部は胴が張り、底部は薄手である。色調は黄褐色で、器壁は体部外面があらひハケ目調整である。10~14は口縁部がくの字形になる。10の体部は胴が張る。底部は厚手で上げ底になる。色調は明黄褐色で器壁は体部外面があらひハケ目調整されている。11は口縁端部が肥厚し、体部は胴がやや張る。色調は黄褐色で、器壁は体部外面がハケ目調整されている。12は底が薄手で、体部は胴が張る。色調は黄褐色で、器壁は体部外面および口縁部内面がハケ目調整されている。13は口縁端部が肥厚し、体部は胴が張る。底部は薄手で裾が広がりやや上げ底になる。色調は黄褐色で器壁は体部外面がハケ目調整されている。14は口縁端部を肥厚させ丸く仕上げている。体部は胴が張り、底部は上げ底になる。色調は黄褐色で、器壁は体部外面がハケ目調整されている。

鉢(5・6) 底部が上げ底をなし、体部から口縁部に掛けて内湾する。口縁部は端部内側を肥厚させ、端部上面は凹む。色調は黄褐色で、器壁は体部外面がハケ目調整されている。6は口縁部がL字状に外反し、口縁部直下に断面三角形の突帯を1条巡らす。色調は黄褐色で、器壁は体部外面がハケ目調整されている。

SK104土壙出土土器 (Fig. 78, PL.28)

壺(15・18) 15は胴部の破片で、外面に3条の沈線を巡らす。色調は明褐色で、器壁はナデ調整されている。18は体部がつぶれた球形で、口縁部がくの字形に短く外反する。口縁端部は丸く仕上げている。色調は明褐色で、器壁はナデ調整されている。

甕(16) 16は口縁部および肩部に小さな刻目突帯を巡らす。色調は灰褐色で、器壁は外面がナデ調整されている。

SK108土壙出土土器 (Fig. 78, PL.28)

甕(19) 口縁部が断面三角形で上面が傾く。色調は明褐色で器壁は内外面ともへう磨きされている。

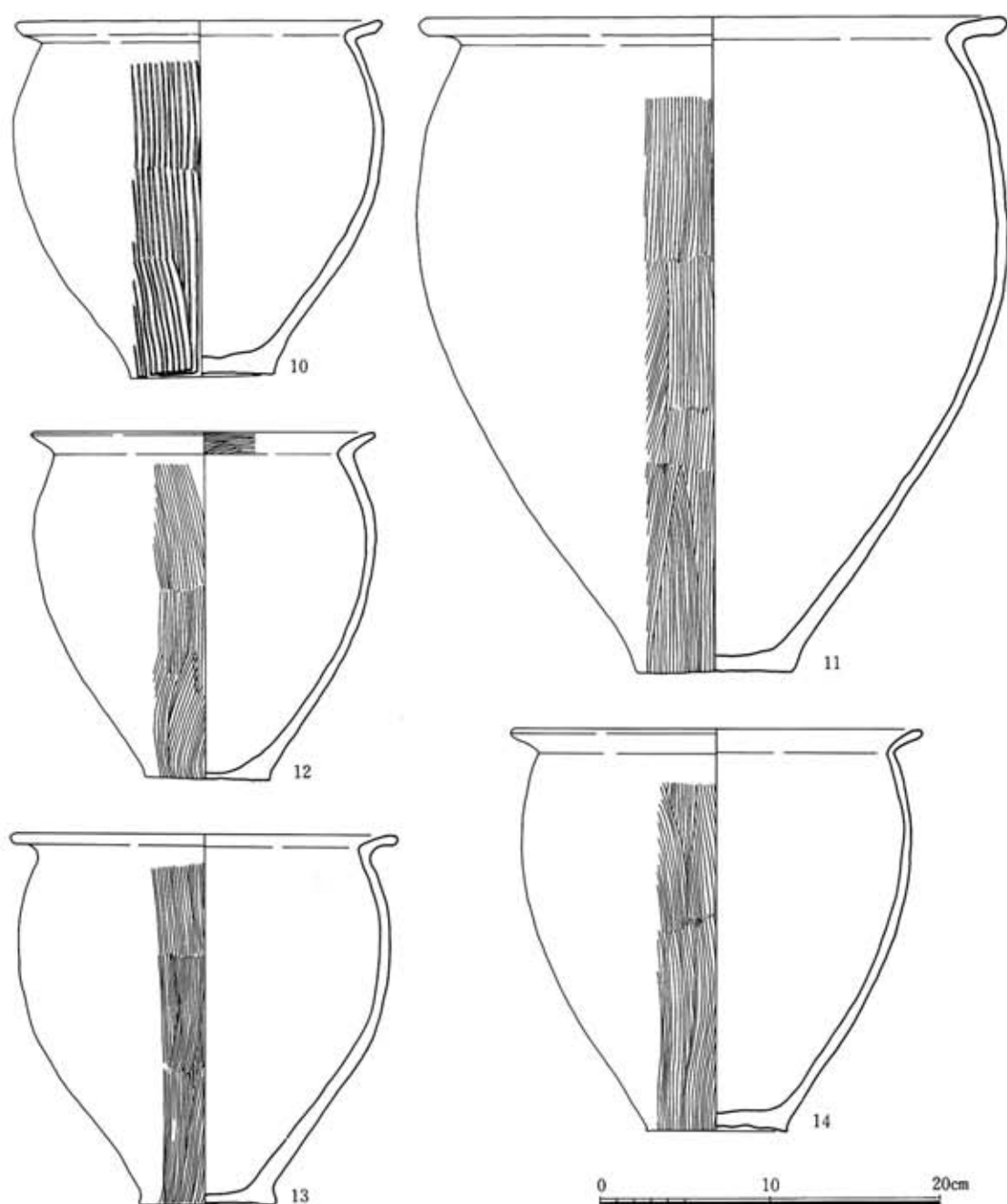


Fig 77 SK102出土土器実測図 2

II区遺構検出面出土土器 (Fig. 78, PL.29)

壺 (22・23・27) 22は口縁部が逆L字状をなし口縁端部は平坦に仕上げている。外面と口縁部内面は丹塗りされている。色調は黄褐色で、器壁はへら磨きされている。23は頸部が円筒

状で口縁部は外反する。肩部に断面三角形の突帯を1条巡らす。色調は明褐色で、器壁はハケ目調整後ナデ調整されている。外面に丹塗りの痕がみられる。27は底部で、平底になる。外面が丹塗りされている。色調は黄褐色で、器壁は外面がへう磨きされている。

甕 (24・25・28) 24・25は口縁部がくの字形をなし、口縁部下に1条の突帯を巡らしている。突帯は24が断面三角形で、25は断面台形である。色調は明黄褐色で、器壁は体部外面がハケ目調整されている。28は底部で、上げ底になる。色調は暗黄褐色で器壁は外面がハケ目調整されている。

高杯 (26) 脚部で、細い筒状をなし、裾部にかけてラップ状に開く。色調は黄褐色で、器壁は外面がナデ調整されている。

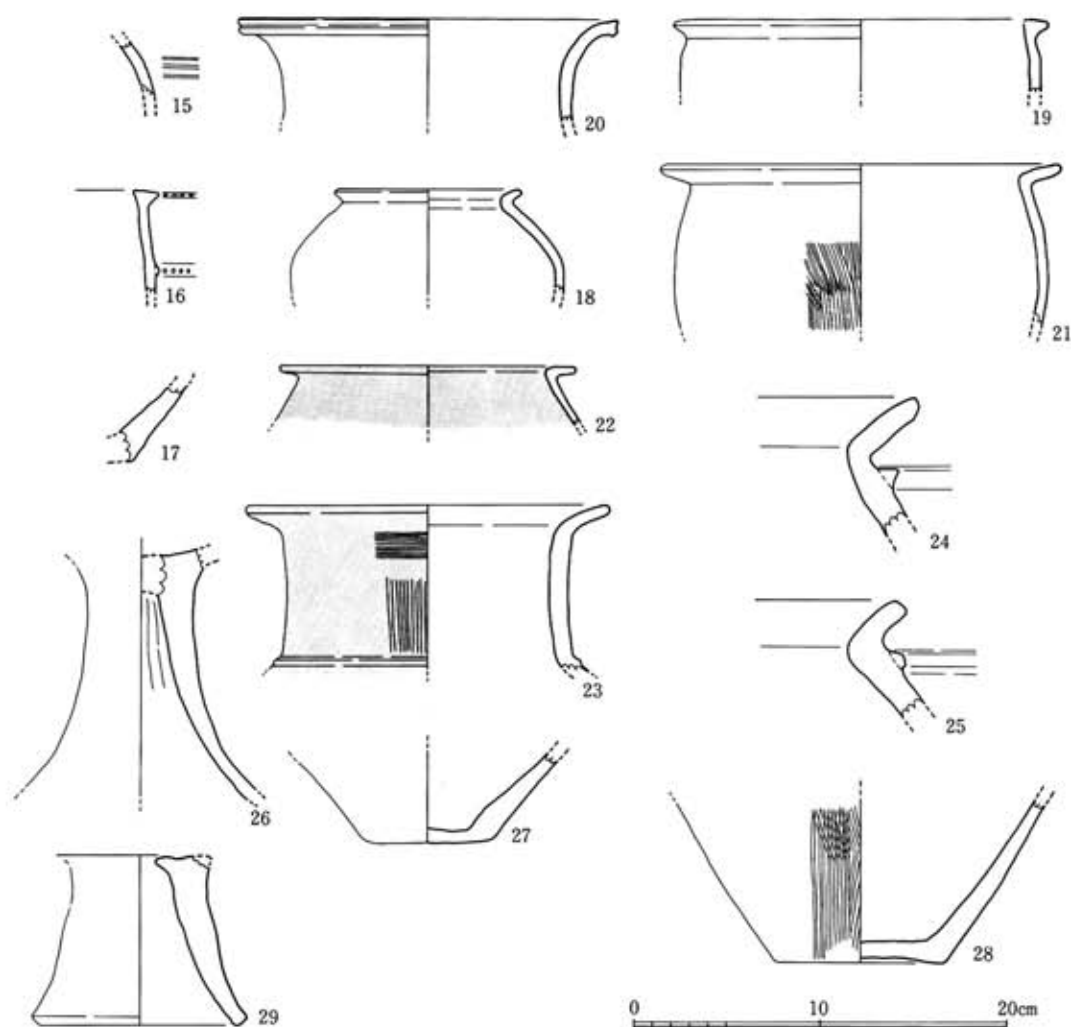


Fig 78 SK104・SK108・P-3・II区遺構検出面出土土器

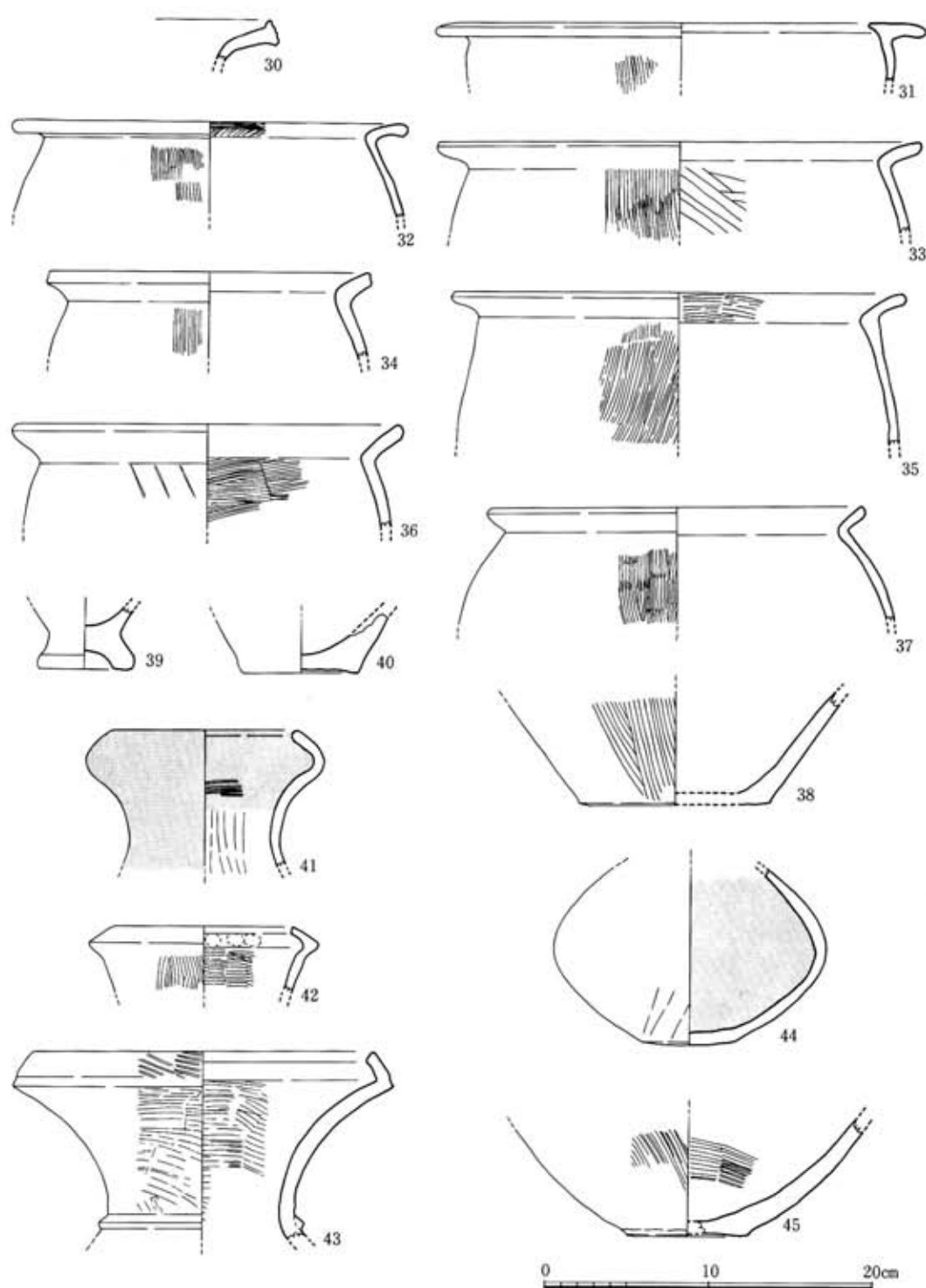


Fig 79 II区・2層出土土器実測図1

器台(29) 全体に厚手で、脚部は裾が広がり、裾端部は内側がわずかに肥厚する。色調は黄褐色で、器壁は外面がハケ目調整されている。

II区2層出土土器 (Fig.79・80, PL.29~31)

壺(41~46) 41は口縁部が袋状をなし、口縁端部は丸く仕上げている。外面および口縁部内面が丹塗りされている。色調は明褐色。42・43も口縁部が袋状をなすが、口縁部の内傾が鋭く稜をもつ。口縁端部は平坦に仕上げており、43は頸部に断面三角形の突帯を1条巡らしている。色調は明褐色~褐色で、器壁は42の内外面および43の内面がハケ目調整、43の外面がナデ調整されている。44は胴部が算盤玉形に近く、底部はわずかに丸味を帯びる。色調は褐色で、器壁は内面および外面上半がナデ調整、外面下半がへう削り後ナデ調整されている。45は底部がわずかに上げ底をなす。色調は灰褐色で、器壁は内外面ハケ目調整で、外面はその後ナデ調整されている。46は短頸壺で、口縁部が短く外反する。色調は灰褐色で、器壁は体部内面がハケ目調整、外面がハケ目調整後ナデ調整されている。

甕(30~40) 30は口縁部が強く外反し、口縁端部は内外とも肥厚し、外面に3条の凹線を巡らす。色調は褐色で、器壁はヨコナデ調整されている。瀬戸内系の甕と思われる。31は口縁部がT字形をなす。口縁部上面は平坦で端部は丸く仕上げている。32~37は口縁部がくの字をなし、34は口縁端部上面がわずかに凹む。色調は灰褐色~暗褐色で、器壁は体部外面がハケ目調整されている。36の外面に煤が付着している。39・40は底部で、39は上げ底で裾が広がり、40はわずかに上げ底になる。色調は黄褐色~暗褐色で、器壁はナデ調整されている。38は色調が黄褐色で、器壁は外面がハケ目調整されている。

高杯(52~55) 52は口縁部が逆L字状で、内側がわずかに突出する。口縁部上面は平坦になる。色調は褐色で、器壁は内外面ともナデ調整されている。53~55は口縁部がゆるくくびれて外反する。口縁端部は53がわずかに凹み、54・55は丸く仕上げている。色調は灰褐色で、器壁は体部外面および55の内面がハケ目調整されている。

鉢(47~51) 47は口縁部がゆるく外反する。色調は灰褐色で、器壁は体部がナデ調整されている。外面に一部ハケ目が残る。48・49は体部から口縁部にかけて内湾して開く。底部は48が平底で、49が丸味を帯びる。色調は黄褐色~明褐色で、器壁は体部外面および48の内面がナデ調整、49の内面がハケ目調整後ナデ調整されている。50は厚手で、口縁部がゆるく外反する。色調は暗黄褐色~灰黒色で、器壁は体部内外面ともナデ調整されている。51は口縁部がくの字状に外反する。色調は明褐色で、器壁は外面がハケ目調整されている。

器台(56) 厚手で、体部が直立し、裾部が広がる。色調は明黄褐色で、器壁はナデ調整されている。

支脚(58) 厚手で、受部は丸味を帯び、体部から裾部にかけて開く。色調は灰褐色で、器壁はナデ調整されている。内外面に指頭圧痕が残る。

II区3層出土の土器 (Fig.81, PL.31・32)

壺 (74・75) 底部が平坦で体部が内湾気味に開く。色調は暗褐色～赤褐色で、器壁は内外面ナデ調整されている。75は外面が丹塗りで、底部外面に糠の圧痕がみられる。

甕 (59～67) 59は口縁部に断面三角形の刻目突帯を巡らす。色調は暗黄褐色で、器壁は内外面ともナデ調整されている。60は口縁部下に断面三角形の刻目突帯を巡らす。色調は黄褐色で、器壁は内外面ともナデ調整されている。61・63は口縁部がT字形で、61は口縁部上面が平坦になる。

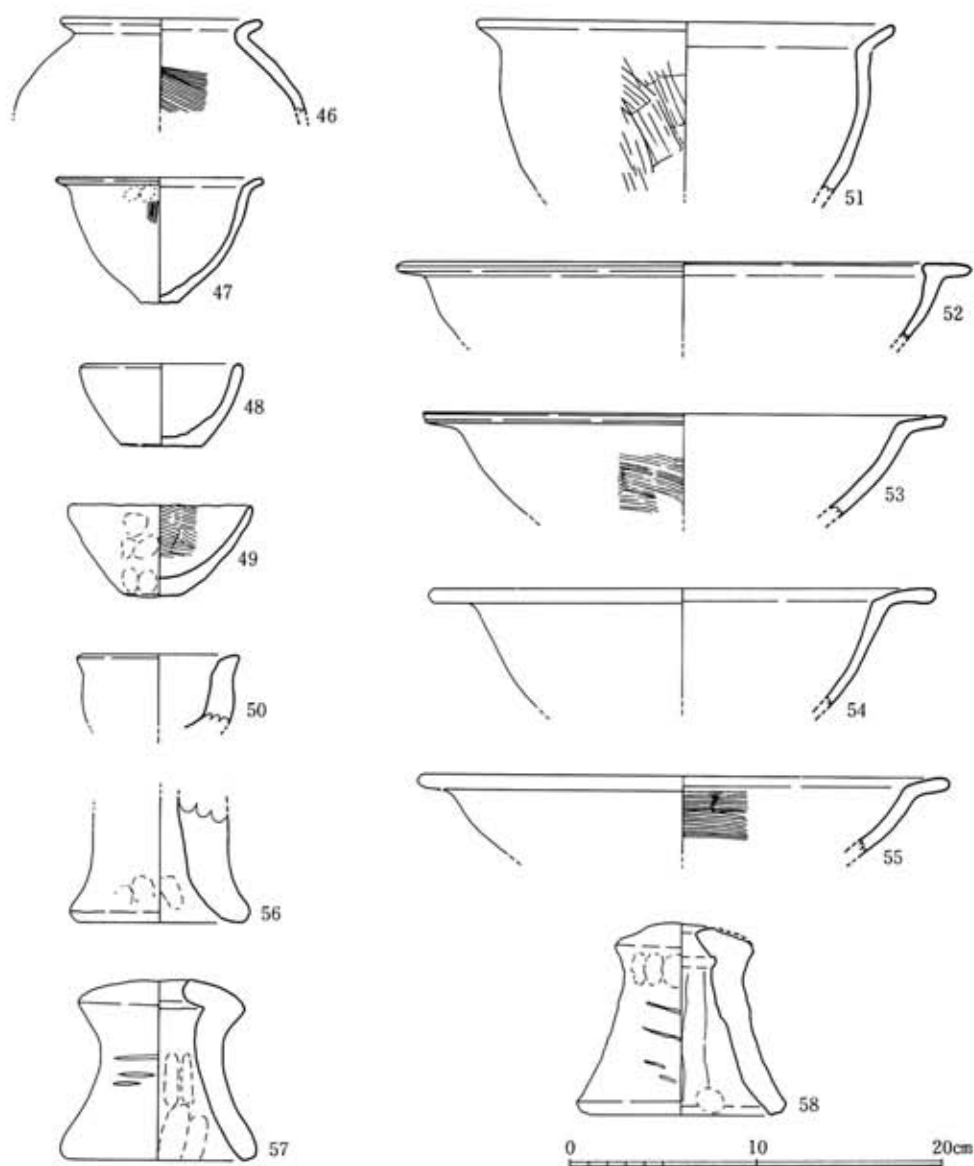


Fig 80 II区2層出土土器実測図2

担になる。口縁端部は丸く仕上げている。63は口縁端部が肥厚する。62は口縁部が逆し字形で口縁部内側がわずかに突出する。64は口縁部が逆し字形で口縁部先端が上方にわずかに湾曲する。器壁は外面がハケ目調整されている。65～67は底部の破片で65は籐手の平底である。色調は灰褐色で器壁は内外面ともハケ目調整の後ナデ調整されている。66はやや上げ底気味になる厚手の底部である。色調は暗黄褐色で器壁外面はハケ目調整およびナデ調整されている。内面に煤が付着している。67は平底の底部で裾がやや外側に広がる。色調は暗褐色で器壁は内、外面ともナデ調整されている。

高杯(69) 口縁部が直立し、端部が肥厚してT字形になる。色調は灰褐色で器壁は内、外面ともナデ調整されている。

蓋(68) 体部上面とつまみ部がくびれ、天井部が凹む。外面はハケ目調整されている。

鉢(70～73) 71はやや内湾する。体部からそのまま口縁部に移行する。色調は黄褐色で器壁は内、外面ともナデ調整されている。70は口縁がやや直立する。色調は暗褐色で器壁は内、外面ともナデ調整。72は小型の鉢で口縁は体部からそのまま移行する。色調は黄褐色で器壁はハケ目調整されている。器壁は指押えの後ナデ。73は体部がやや内湾し、口縁部がわずかに凹む。色調は暗褐色で器壁は外面がハケ目調整されている。

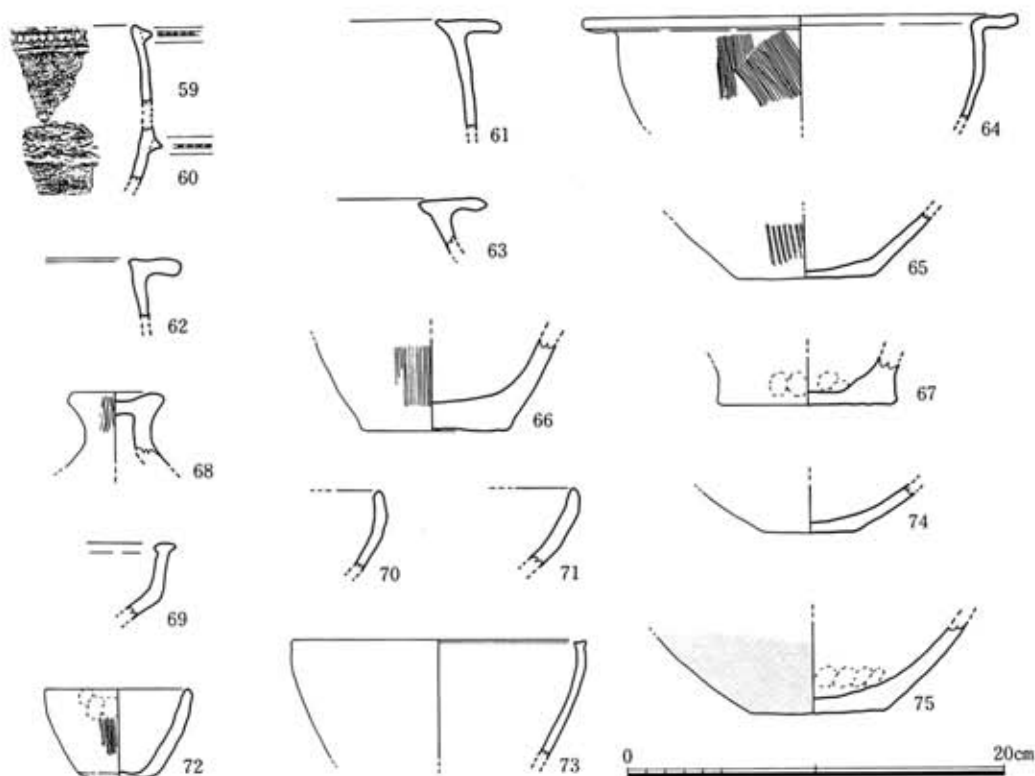


Fig 81 II区3層出土土器実測図

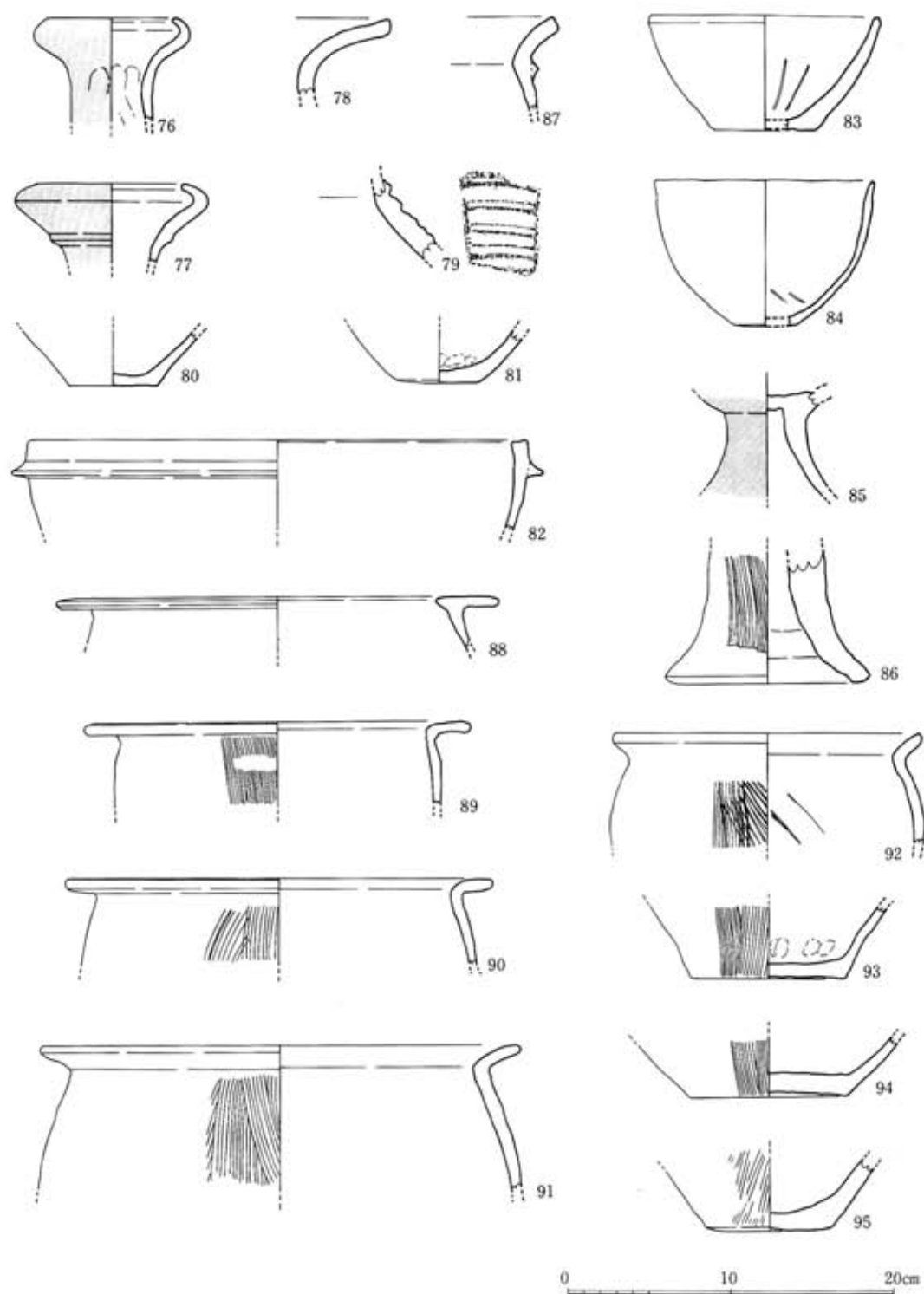


Fig 82 III区2層出土土器実測図

III区2層出土土器 (Fig. 82)

壺 (76~81) 76・77は頸部が細い円筒状で、口縁部が袋状になる。77は口縁部下に断面三角形の突帯を1条巡らす。色調は明褐色~明黄褐色で器壁は76の外面がナデ調整、77の外面がへら磨きされ丹塗りである。78は口縁が大きく外反し、口縁端部は面取りしている。色調は灰褐色で、器壁は内外面ともハケ目調整されている。79は肩部で、断面台形の削り出し突帯を巡らす。色調は黄褐色で器壁はナデ調整されている。80・81は底部で、80は平底、81はやや丸味を帯びる。器壁は80の外面がへら磨き、81の外面がナデ調整されている。

甕 (87~95) 88は口縁部がT字形で、口縁部上面は平坦になる。色調は黄褐色で、器壁は体部の内外面ともナデ調整。89・90は口縁部が逆L字形で端部は丸く仕上げている。色調は明黄褐色で、器壁は体部外面がハケ目調整されている。87・91・92は口縁部がくの字形に外反し、87は口縁部下に断面三角形の突帯を1条巡らす。色調は黄褐色~灰褐色で、器壁は91・92の体部外面がハケ目調整されている。93~95は底部で、93・94はわずかに上げ底になる。色調は93が暗灰褐色、94が黄褐色で、器壁は外面がハケ目調整。95は底部がわずかに丸味を帯びる。色調は赤褐色で器壁は外面がハケ目調整で、煤が付着している。

鉢 (82~84) 82は口縁部が直立し、端部が肥厚し、上面が凹む。口縁部下に断面三角形の突帯を1条巡らす。色調は赤褐色で、器壁は内外面へら磨きされている。83・84は小型の鉢で底部から口縁部にかけて内湾気味に開く。色調は83が灰褐色、84が明黄褐色で器壁は体部の内外面がナデ調整されている。

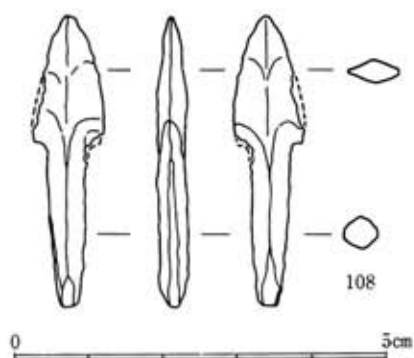


Fig 84 II区2層出土銅鉄実測図

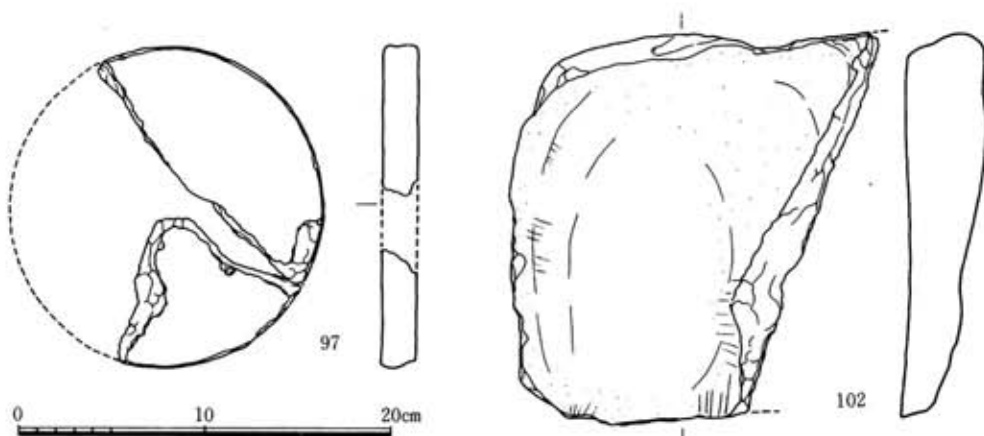


Fig 83 II区2層出土土製品・石器実測図

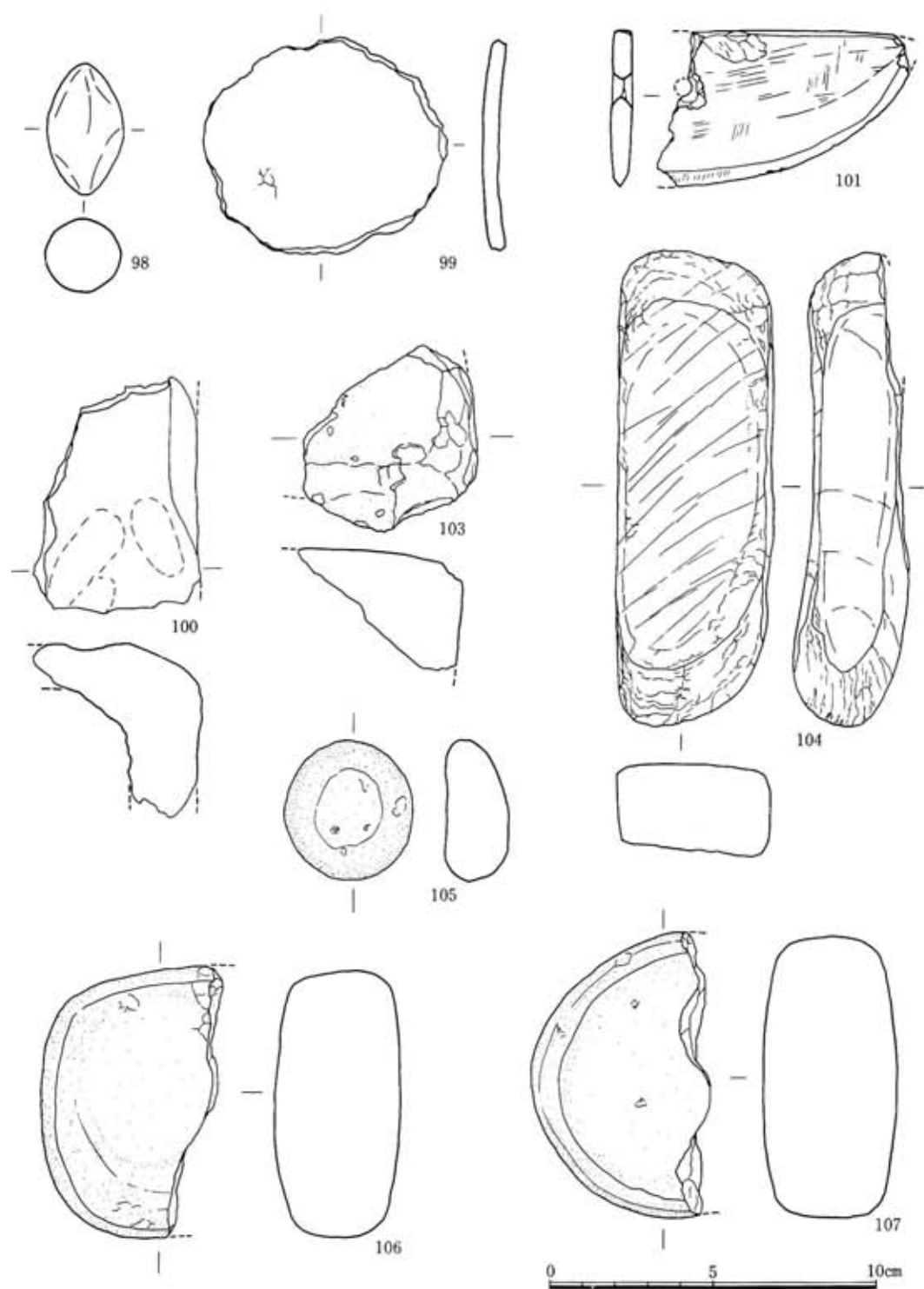


Fig 85 II区2層 SE101出土製品・石器実測図

高杯(85) 脚部の破片で、大きくラッパ状に広がる。色調は黄褐色で、器壁は外面がハケ目調整後ナデ調整されている。

器台(86) 厚手で、裾が開き、端部は内側がわずかに肥厚する。色調は黄褐色で、器壁は外面がハケ目調整されている。

(2) 土製品 (Fig.83・85, PL.31・32)

円盤形土製品(97・99) 97は扁平な円盤形土製品で、平面は円形になると思われる。復元径16.4cm、厚さ2.0cmで、外縁部はわずかに凹んでいる。色調は暗褐色～黒褐色で、表面および縁辺部は丁寧にナデ調整されている。Ⅱ区A・B—15・16, 2層出土。99は壺の体部の破片を利用している。平面が楕円形で、長さ7.4cm、幅6.4cm、厚さ0.5cm。周囲を打ち欠いて整形している。器壁は外面がへら磨き、内面がナデ調整で、外面に黒色顔料が塗られている。Ⅱ区B—20, 3層出土。

土弾(98) 長さ4.0cm、径2.3～2.4cm、重量20g。色調は黄褐色で、表面はナデ調整されている。Ⅱ区B—18, 3層出土。

土製品(100) 小破片のため全体の形は不明であるが、柱状の土製品になると思われる。表面はナデ調整され、指頭圧痕が残る。Ⅱ区A—20, 3層出土。

(3) 石器 (Fig.83・85, PL.32)

石包丁(101) 全体の二分の一程を欠損している。外湾刃半月形で肩部は直線になる。孔は肩部よりになり、両側より穿孔されている。残存長7.7cm、幅4.8cm。Ⅱ区A—14, 2層出土。

磨石(105～107) 105は表土層出土。小型品で、平面が円形に近い。径3.9～4.3cm、厚さ1.9cm、重量39.5g。片面のみ使用されており、中央がわずかに凹んでいる。106・107はSK101井戸跡出土。どちらも二分の一程欠損している。106は平面が隅丸方形に近く、残存部の長さ8cm、厚さ3.9cm。107は平面が円形に近くなると思われる。径8.7cm、幅4.1cm。106・107は両面および周辺を使用している。3点の磨石の石材はすべて安山岩である。

石皿(102) 二分の一程欠損している。長さ20.6cm、厚さ2.0～4.4cm。片面を使用しており、使用面は中央が凹んでいる。Ⅱ区A—14, 2層出土。

砥石(103・104) 103はⅡ区B—21, 2層出土。砂岩製で、両面および側面を使用している。104はほぼ完形品で、長さ14.5cm、幅4.8cm、厚さ2.7～3.2cm。片面および両側面を使用している。

(4) 木製品 (Fig.87, PL.32)

大足(109・110) 大足の足板で2点ともⅡ区A—19, 2層より出土。柁目板を使用している。

109はほぼ完形品で、長さ37.9cm、幅8.2cm、厚さ1.0～1.4cm。数ヶ所に径0.2～0.4cm程の孔がみられる。表面には削り加工痕が残っている。110は残存長36.0cm、幅6.7cm、厚さ0.6～1.2cm。数ヶ所に径0.2～0.5cmの孔がみられる。

叉鋏(111) 叉鋏の刃部と思われる。残存長22.7cm、幅2.2～3.0cm、厚さ1.8～2.6cm。断面は蒲鉾形をなし、表面に削り加工痕が残っている。Ⅱ区B-14,2層出土。

箸状木製品(112) 完形品でやや湾曲する。全長14.6cm、断面は円形で径0.5cm。全体に削り加工痕がみられ、先端は尖らせている。

弧状木製品(113) 直径2.4～2.6cm程の枝を円形に曲げ、その内側を削り加工している。全体の二分の一程欠損しており、復元すると径30cm程になる。Ⅱ区A-14.2層出土。

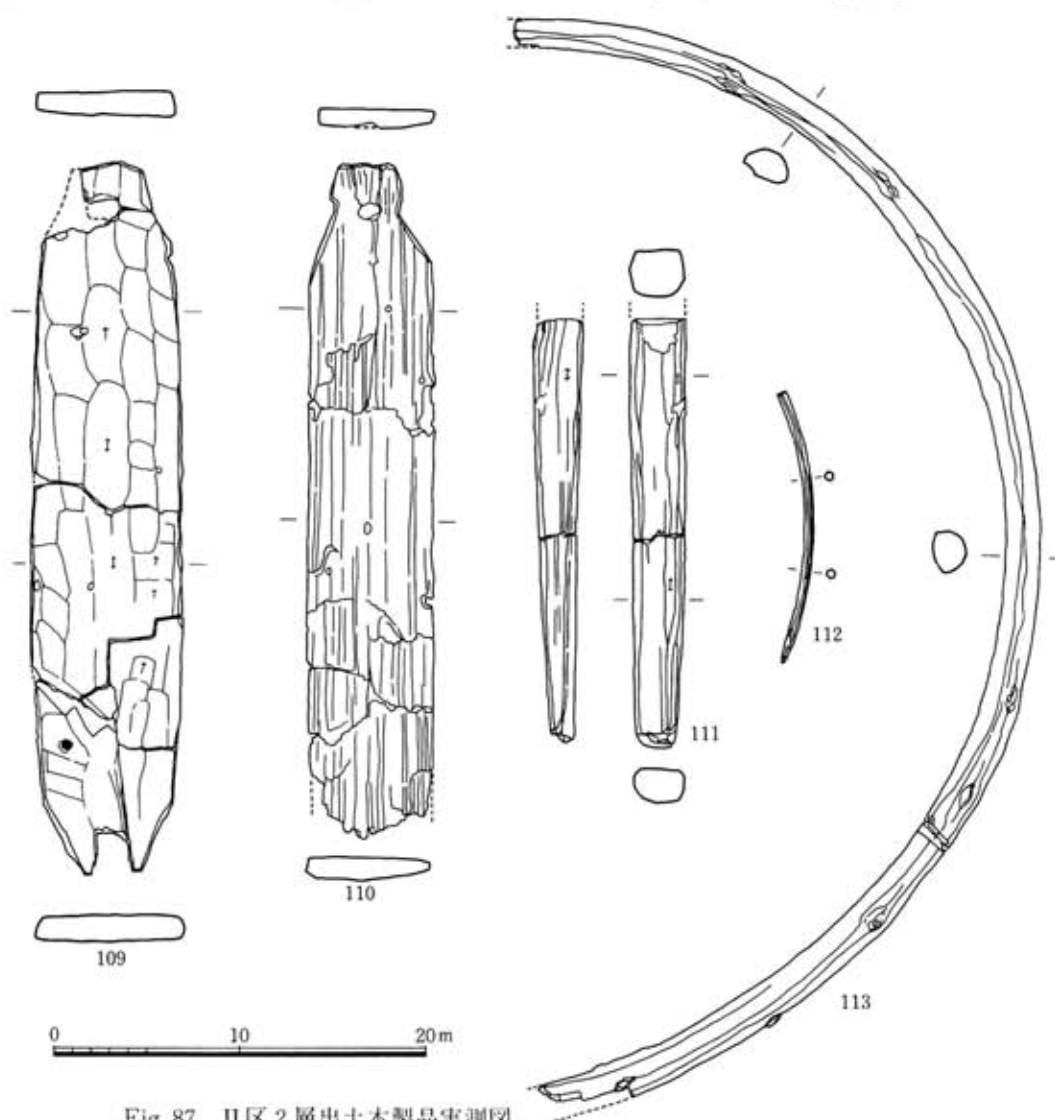


Fig 87 Ⅱ区2層出土木製品実測図

(5) 青銅器 (Fig.84, PL.32)

銅鏃 (108) II区B-18.2層から先述の土器・木製品とともに出土。身は三角形で茎を有する。全長3.97cm。身の断面は菱形で厚さ0.4cm。側辺が鋭く、身と茎の境が明確につく。茎は断面が六角形(一部八角形)に近く厚さ0.4cm。重量4.3g。全体に錆化が進んでなく部分的に金色である。

(6) その他の遺物 (Fig.86, PL.31)

縄文土器 (114) 深鉢の口縁部である。口縁端部を指頭により押えた波状口縁をなす。色調は黒褐色で、器壁はナデ調整されている。



Fig 86 縄文土器実測図

Tab 12 川寄吉原遺跡出土弥生土器一覧表

番号	器種	出土遺構	色調	口縁部 注記 (口縁部) 注記	調整	遺物登録番号	備考
1	壺	SK102	黄褐色	①6.0	内面 しほり痕 外面 ヘラ磨き	84-1745	外面(口縁内部)丹塗り
2	"	"	赤褐色	③19.0	内面 ナデ 外面 ヘラ磨き	84-1746	外面丹塗り
3	"	"	黄褐色 (一部黒色)	①13.4 ②12.95	内、外面ともナデ	84-0998	内面に指頭圧痕 とハケ目調整が 残る
4	"	"	灰褐色	①12.8	内面 ナデ 外面 ハケ目調整後ナデ	84-0999	指頭痕あり
5	鉢	"	明黄褐色	①18.8 ②16.2	内面 ナデ 外面 ハケ目	84-1000	
6	甕	"	黄褐色	①37.6	内面 ナデ 外面 ハケ目	84-1752	
7	"	"	黄褐色(黒斑)	①16.9 ②16.35	内面 ナデ 外面 ハケ目	84-0995	
8	"	"	黄褐色～灰褐色	①20.9 ②23.2	内、外面 ハケ目調整後ナデ	84-0996	外面に煤付着
9	"	"	黄褐色～灰褐色	①19.4 ②19.6	内面 ナデ 外面 ハケ目、ナデ	84-1747	
10	"	"	明黄褐色(黒斑)	①21.0 ②20.7	内面 ナデ 外面 ハケ目、ナデ	84-1753	
11	"	"	黄褐色	①33.4 ②34.1 ③9.1	内面 ナデ 外面 ハケ目、ナデ	84-0997	
12	"	"	黄褐色(黒斑)	①19.8 ②20.2	内面 ナデ 外面 ハケ目、ナデ	84-0994	
13	"	"	黄褐色	①22.0 ②21.65	内面 ハケ目調整後ナデ 外面 ハケ目、ナデ	84-1749	
14	"	"	黄褐色	①23.8 ②23.45	内面 ナデ 外面 ハケ目、ナデ	84-1750	
15	壺	SK104	明褐色		内、外面ともナデ	84-0073	
16	甕	"	灰褐色		内、外面ともナデ	84-0070	全体に丹塗り
17	"	"	明褐色		内、外面ともナデ	84-0072	
18	壺	"	明褐色(黒斑)	①9.6	内面 ナデ 外面 ハケ目調整後ナデ	84-0071	
19	甕	SK108	明褐色	①17.6	内、外面ともヘラ磨き	84-0074	
20	壺	SK109	灰褐色	①20.1	内、外面ともヨコナデ	84-0075	

番号	器種	出土遺構	色調	口部 直径 (cm)	注 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿	調整	遺物登録番号	備考
21	甕	A-11 P-3	暗褐色	①21.0		内面 ナデ 外面 ハケ目、ヨコナデ	84-0076	外面に煤付着
22	壺	遺構検出面	黄褐色	①15.2		内面 ナデ 外面 ヘラ磨き	84-1782	外面、口縁部内 面丹塗り
23	"	"	暗褐色	①19.1		内面 ナデ 外面 ハケ目調整後ヨコナデ	84-1784	外面丹の痕あり
24	甕	"	明黄褐色			内面 ハケ目調整後ナデ 外面 ハケ目、ヨコナデ	84-1780	
25	"	"	暗黄褐色			内面 ナデ 外面 ハケ目	84-1781	
26	高杯	"	黄褐色			内面 シボリ痕あり 外面 ナデ	84-1779	
27	壺	"	黄褐色	④7.0		内面 ハケ目調整後ナデ 外面 ヘラ磨き、ナデ	84-1777	
28	甕	"	黄褐色	④9.0		内面 ナデ 外面 ハケ目、ナデ	84-1776	
29	器台	"	黄褐色	④10.5		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-1783	
30	壺	A-15II層	褐色			内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、ナデ	84-0096	
31	甕	A-16II層	明灰褐色	①27.2		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-0080	
32	"	"	灰褐色(黒斑)	①22.6		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-0081	
33	"	A-18II層	暗褐色	①29.4		内面 ハケ目調整後ナデ 外面 ハケ目	84-0078	
34	"	"	灰褐色	①19.4		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-0079	
35	"	A-16II層		①27.4		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-0085	
36	"	"	灰褐色	①23.2		内、外面ともハケ目	84-0083	外面煤付着
37	"	"	灰褐色(黒斑)	①22.6		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-0087	
38	"	A・B-14II層	黄褐色(黒斑)	④11.7		内面 ナデ 外面 ハケ目、ナデ	84-1665	
39	"	A-18II層	黄褐色～褐色	④5.7		内、外面ともナデ	84-1667	
40	"	A・B-14・15	黄褐色	④7.0		内、外面ともナデ	84-1666	
41	壺	A・B-14II層	明褐色(黒斑)	①11.2		内面 ハケ目調整後ナデ 外面 ナデ	84-0094	口縁内部～外面 に丹塗り
42	"	"	明褐色	①10.8		内面 ハケ目 外面 ハケ目調整後ナデ	84-0095	
43	"	"	褐色	①20.6		内面 ハケ目 外面 ヘラ状工具のナデ	84-0097	
44	"	A-16II層	褐色(黒斑)			内面 ナデ 外面 ナデ	84-0098	内面丹塗り
45	"	"	灰褐色	④7.4		内面 ハケ目(一部ナデ) 外面 ハケ目調整後ナデ	84-1668	
46	"	A-18II層	黄褐色	①10.8		内面 ナデ、ハケ目 外面 ナデ	84-1674	
47	鉢	A-16II層	灰褐色	①11.4 ②6.75 ③2.1		内、外面ともヘラケズリ 後ナデ	84-1672	外面一部ハケ目 調整痕あり
48	"	"	黄褐色(黒斑)	①8.7 ②4.4 ③4.5		内面 ヨコナデ、ナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	84-1671	
49	"	A-18II層	明褐色～黄褐色	①9.6 ②5.0 ③3.2		内面 ハケ目調整後ナデ 外面 指押え、ナデ	84-1673	
50	"	A・B-14II層	暗黄褐色～灰黒色	①8.7		内、外面ともにナデ	84-1669	
51	"	B-20II層	灰褐色～褐色	①22.0		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-0091	
52	鉢	A-16II層	黄褐色	①30.8		内、外面ともにナデ	84-1676	

番号	器種	出土 遺構	色 調	①口 径 ②高 ③底 径 ④最大 径 ⑤重量 (g)	注 意 点	調 整	遺物登録番号	備 考
53	高杯	A・B-18Ⅱ層	灰 褐 色	①28.0		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-0088	
54	鉢	A-18Ⅱ層	灰 褐色(黒斑)	①26.7		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-0090	
55	"	A・B-18Ⅱ層	明 灰 褐色	①26.7		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-0089	
56	器台	A-16Ⅱ層	明 黄 褐色	④8.8		内面 指押え 外面 指押え、ヨコナデ	84-1670	
57	支脚	表 採	黄 褐 色	②9.65 ④9.4		内面 指押え、ナデ 外面 タタキ後ナデ	84-1773	
58	"	A・B-14Ⅱ層	灰 褐 色	②10.3 ④10.2		内面 ナデ(しぼり痕あり) 外面 ヘラ状工具調整後ナデ	84-1675	
59	甕	A-18Ⅲ層	暗 黄 褐色			内面 ナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	84-1756	
60	"	B-16Ⅲ層	黄 褐 色			内面 ナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	84-1757	
61	"	A-19Ⅲ層	暗 黄 褐色			内面 ナデ 外面 ナデ、ハケ目	84-1760	
62	"	B-19Ⅲ層下部	明 黄 褐色			内、外面ともにナデ	84-1771	
63	"	A-19Ⅲ層	黄 褐 色			内、外面ともにヨコナデ	84-1761	
64	"	A-20Ⅲ層下部	黄 褐 色	①22.4		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-1762	
65	"	B-16、北ウレンキ部	灰 褐 色	④7.4		内、外面ともにナデ、ハケ目後ナデ	84-1766	
66	"	A-18Ⅲ層	暗 黄 褐色	④7.1		内面 ナデ 外面 ハケ目、ナデ	84-1754	内面に煤付着
67	"	A-18、B-18Ⅲ層	暗 褐 色	④9.0		内面 指押え後ナデ 外面 ナデ	84-1763	
68	蓋	B-19Ⅲ層下部	暗 黄 褐色	④4.2		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-1772	
69	鉢	A-20Ⅲ層下部	灰白色(一部黒色)			内、外面ともにナデ	84-1765	
70	"	B-19Ⅲ層下部	黄 褐 色			内、外面ともにナデ	84-1768	
71	"	"	暗 褐 色			内、外面ともにナデ	84-1769	
72	"	A-20Ⅲ層	黄 褐 色	①7.6 ②5.0		内面 ナデ 外面 ハケ目、指押え後ナデ	84-1764	
73	"	A-21層山内面(灰土)	暗 灰 色	①15.6		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-1775	
74	壺	B-21Ⅲ層	灰 褐 色	④5.0		内、外面ともにナデ	84-1767	
75	"	A-17Ⅲ層	暗褐色～赤褐色	④7.0		内面 指押え後ナデ 外面 ナデ	84-1755	外面丹塗り 底部に糠の圧痕あり
76	"	Ⅲ区、Ⅱ層	明 褐 色	①7.6		内面 ナデ、しぼり痕 外面 ナデ	84-1663	外面丹塗り
77	"	"	黄褐色～明褐色	①8.6		内面 ヨコナデ 外面 丹塗り磨研	84-1662	外面丹塗り
78	"	"	灰白色～黄褐色			内、外面ともにハケ目	84-1658	
79	"	"	褐色～黄褐色			内面 ナデ	84-1659	削り出し突帯
80	"	"	黄褐色～灰白色 (一部黒色)	④5.4		内面 ナデ 外面 ヘラ磨き	84-1642	
81	"	"	暗 灰 褐色	④5.3		内面 指押え後ナデ 外面 ナデ	84-1643	
82	鉢	"	赤 褐 色	①30.6		内、外面ともに丹塗り磨研	84-1651	内、外面丹塗り
83	"	"	黄 褐 色	①14.1 ②7.1		内面 ナデ(ヘラあての痕あり) 外面 ナデ	84-1652	
84	"	"	明 黄 褐色	①13.5		内面 ナデ(ヘラあての痕あり) 外面 ヘラケズリ後ナデ	84-1653	
85	高杯	"	黄 褐 色			内面 ナデ、しぼり痕あり 外面 ハケ目後ナデ	84-1649	外面丹塗り
86	器台	"	黄 褐 色	④12.6		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-1650	
87	甕	"	灰 褐 色			内面 ナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	84-1657	
88	"	"	灰褐色～灰色	①27.2		内、外面ともにナデ	84-1661	
89	"	"	明 黄 褐色	①23.8		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-1656	
90	"	"	明 黄 褐色	①26.4		内面 ナデ(一部ハケ目) 外面 ハケ目	84-1654	
91	"	"	暗灰色～灰褐色	①29.6		内面 ナデ 外面 ハケ目	84-1660	
92	"	"	灰黄褐色～黄褐色	①19.0		内面 ナデ(ヘラあての痕あり) 外面 ハケ目	84-1655	
93	"	"	暗 灰 褐色	④9.5		内面 指押え後ナデ 外面 ハケ目、ナデ	84-1648	外面に煤付着
94	"	"	灰黄褐色(黒斑)	④9.9		内面 ナデ 外面 ハケ目、ナデ	84-1647	
95	"	"	黄褐色～明赤褐色	④10.5		内面 指押え後ナデ 外面 ハケ目、ナデ	84-1645	内面に煤付着

4. 小 結

川寄吉原遺跡は、東西約80m、南北約50mの範囲に広がる遺跡である。今回調査を行なったⅡ区・Ⅲ区は遺跡の南端部にあたり、遺構は少ない。検出した遺構は土壌・井戸跡・柱穴・杭列で、Ⅱ区東側の小高い部分に土壌5基・井戸跡3基・柱穴があり、Ⅲ区西端に井戸跡1基がある。Ⅱ区東側の低い部分には杭列がみられた。これらの遺構は出土した土器の特徴から、弥生時代後期前半のものと考えられる。またⅡ区の西側およびⅢ区から遺物包含層（Ⅱ区2層・3層、Ⅲ区2層）が検出されており、多数の土器とともに大足・又鋏などの木製品・土製品・石器・青銅器（銅鏃）が出土している。

土壌は5基あり、すべてⅡ区に存在する。みな上部の削平が著しく残存状況は良くない。SK102土壌は土器溜り状の遺構で甕10個体以上・壺3個体・鉢2個体が一括して出土している。これらの土器は完形もしくは完形品に近いものが多いが、すべて打ち割られて土壌内に投げ込まれており、祭祀的な用途が考えられる。SK104土壌は大型で、内部に小土壌を伴っている。埋土から出土した土器には前期の特徴をもつ甕と壺（Fig.78-15・16）がそれぞれ1点ずつみられた。他の3基は平面が不整形で、遺物も土器の小破片が出土しているのみで性格については不明である。

井戸跡は4基あり、3基がⅡ区に、1基がⅢ区に存在する。すべて素掘りの井戸跡で井戸枠はみられない。SE101・SE107・SE110の3基の井戸跡は平面が楕円形もしくは隅丸長方形に近い。規模は長さ1.08～1.64m、幅0.74～1.04m、深さ0.79～1.3mと小さく、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。SE108井戸跡は2段掘りで、長さ1.82mで、他の井戸跡に比べて大きい、深さは0.5mと浅い。

柱穴は約100ヶ所あり、このうちP-5・P-6の2ヶ所に柱根が残っていた。P-5・P-6は掘り方は平面が隅丸長方形に近く、柱は底を粗く削った丸太をそのまま使用し、構木、枕木はみられなかった。昭和53年度に調査を行なったⅠ区からは19棟の掘立柱建物跡が検出されているが、Ⅱ区は遺跡の南端にあたることと、調査区の幅が狭いために建物跡は確認できなかった。

杭列は、Ⅱ区東側の低い湿地帯の部分に多数みられる。大きく3つの群（SX111・112・113）に分けられ、このうちSX111とSX112は同一方向に並んでおり、またSX110とSX111の個々の杭は、約30cmの幅で直線的に並んでおり注目される。これらの杭列は3層の上面で検出され、地山である灰白色粘土に打ちこまれていた。3層の上部に堆積していた2層は弥生時代後期前半の土器を多く含む遺物包含層であり、杭列が形成されたのは弥生時代後期前半頃と考えられる。杭列の上部の2層からは大足・又鋏などの木製農耕具も出土しており、これらの杭列は水田遺構に関係するものと考えられる。

Ⅱ区東側の遺物包含層（Ⅱ区2層）はⅠ区西端部の溝状遺構上面に堆積している遺物包含層⁽³⁾と同一の層になり、Ⅲ区の遺物包含層（Ⅲ区2層）と同時期の堆積と考えられる。

出土した遺物には土器・石器・土製品・青銅器（銅鏃）がある。土器は1点の縄文土器およびSK104土層・Ⅱ区3層出土のものに数点の弥生前期土器がみられる他は、すべて弥生後期前半に位置づけられる。SK102土層から完形品および完形に近い甕・壺・鉢が一括して出土しており良好な資料となる。他の遺構・遺物包含層から出土した土器は小破片が多く、全体の器形がわかるものは少ない。Ⅱ区2層出土土器の中に1点ではあるが瀬戸内系の甕（Fig. 79 - 30）があり注目される。この瀬戸内系の甕は昭和55年度に調査されたⅠ区西端の遺物包含層から出土しており、山陽地方のⅦa⁽⁵⁾期に位置づけられる。

木製品には、大足・又楯の農耕具と、用途不明の箸状木製品・弧状木製品がある。他に図示していないが板状木製品・杭が出土している。

銅鏃は茎を有する三角形鏃で完形品である。泥質土内から出土したため錆化が進んでおらず保存状態はきわめて良好であった。弥生時代の銅鏃は、佐賀県下では三津永田遺跡・詫田貝塚⁽⁶⁾から、それぞれ1点ずつ出土している。2例とも茎を有しない型式である。佐賀県以外の北部九州での出土例は、長崎県カラミ遺跡・原の辻遺跡・根獅子遺跡、福岡県今川遺跡などから12例報告されている。本遺跡出土の銅鏃は、カラミ遺跡・原の辻遺跡の出土例に類似しており、時期もほぼ同じである。

川寄吉原遺跡は、弥生時代後期前半の短い期間に営まれた遺跡である。昭和55年度のⅠ区および今回報告するⅡ区・Ⅲ区の調査により、多数の掘立柱建物跡・井戸跡等が検出され、武人像の線刻された鐔型土製品・銅鏃・多数の土器・木製品が出土している。このことから本遺跡は、この地域の中心的な集落跡であった可能性が強い。今後野田遺跡⁽⁸⁾・利田遺跡群⁽⁹⁾など周辺地域の同時期遺跡との比較検討が必要であろう。

註

1. 天本洋一編「川寄吉原遺跡」佐賀県文化財調査報告書第61集。1981年。
2. 3×2間のものが1棟、2×1間のものが3棟、1×1間のものが15棟検出されている。
3. 註1の報告で（6）その他の遺構として報告されている。
4. 特徴から後期前半に位置づけられる。
5. 高橋護「弥生土器—山陽1—」考古学ジャーナル173号。1980年。
6. 金関丈夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」日本農耕文化の生成。1960年。
7. 松尾禎作「東肥前の先史遺跡」1935年。
- 8・9. 県営圃場整備事業に伴い佐賀県教育委員会が昭和53・54年度に発掘調査を行なっている。報告書未刊。

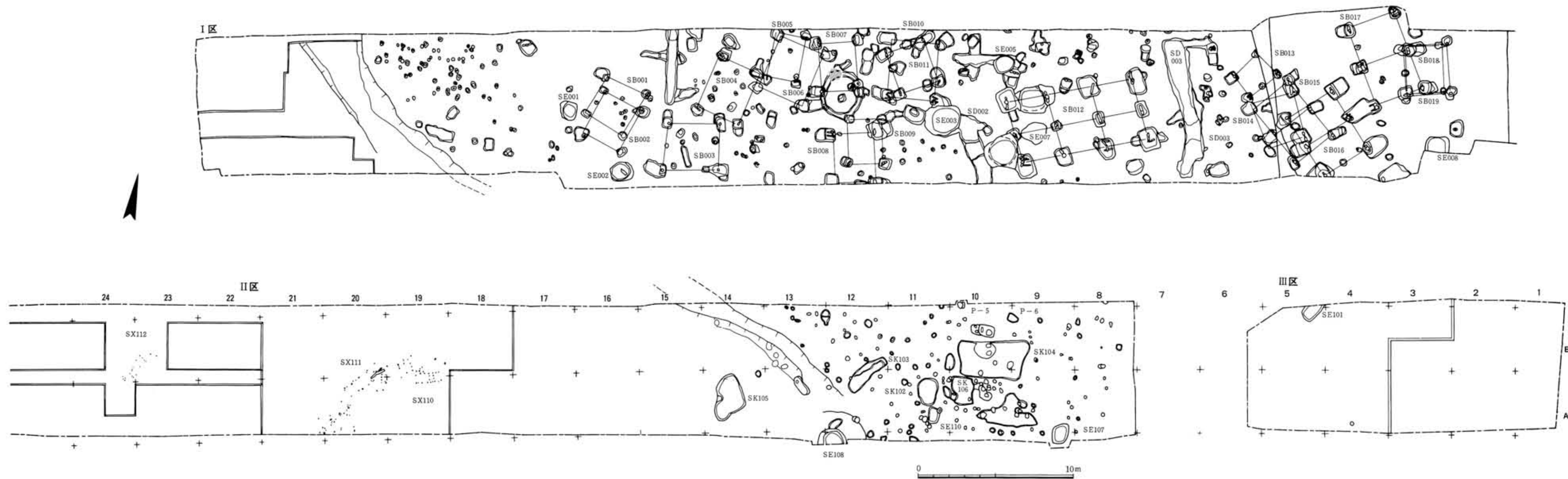


Fig 88 川寄吉原遺跡 I 区・II 区・III 区遺構配置図

V お尾さき崎は土ぶ生遺跡

尾崎土生遺跡

1. 遺跡の概要

尾崎土生遺跡は佐賀県神埼郡大字尾崎に所在する。遺跡は、日の隈山南側の城原川水系により形成された標高5～8mの扇状地に立地している。遺跡は南北約950m、東西約300～500m範囲に広がる広大なもので、弥生時代から江戸時代にかけて長期間営まれている。遺跡の東側には、弥生時代前期から中期にかけての甕棺墓・土墳墓・支石墓が検出されて伏部大石遺跡・伏部こだかじま遺跡が存在する。

今回調査を行なったのは、遺跡の北側部分にあたり、調査区は、道路、水路を境にして西から13区・12区・11区・14区とした。この11区～14区の北側および南側は、県営圃場整備事業に伴い昭和56年度に神埼町教育委員会が発掘調査を行なっており(1区～10区)、弥生時代から江戸時代にかけての多数の遺構が検出されている。(Tab.13参照)

11区～14区から検出された遺構は弥生時代から室町時代にかけてのものである。11区・12区は遺構の密度が濃く、古墳時代の掘立柱建物跡9棟・土壇5基・井戸跡3基・溝跡4条および平安時代～鎌倉時代の土壇7基・井戸跡4基が検出されている。13区からは平安時代の土壇1基、鎌倉～室町時代の溝跡7条が検出されている。14区からは遺構の密度が疎らで、弥生時代の土壇1基、古墳時代の井戸跡2基、溝跡2条が検出されている。

Tab 13 尾崎土生遺跡1区～10区の遺構・遺物

	遺 構	遺 物	備 考
1区	古墳時代 鎌倉～室町時代 時代不明	井戸跡 溝跡 円形周溝	土師器破片 土師器杯
2区	鎌倉～室町時代	溝跡	
3区	弥生時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 井戸跡	弥生土器(壺・甕・高杯)
	古墳時代 鎌倉時代	掘立柱建物跡 井戸跡・土壇	土師器(甕・甗), 須恵器(柄) 土師器(小皿・杯), 青磁・白磁(碗)
4区	古墳時代 時代不明	井戸跡 掘立柱建物跡	土師器(甕・高杯)
5区	弥生時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 井戸跡・土壇	土器(壺・甕・高杯), 木製品(石斧柄・粘鉢車・糸巻き具・火鼠白・鋤)
	古墳時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 井戸跡	土師器(壺・甕・甗・杯), 須恵器(杯・甕・高杯), 木製品(斧柄)
6区	古墳時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 井戸跡	土師器(甕・甗), 須恵器(杯), 木製品(把頭飾)
	平安時代 鎌倉～室町時代	井戸跡 掘立柱建物跡 井戸跡・溝跡	黒色土器(碗) 土師器(小皿・杯), 瓦器(碗)
7区	江戸時代 鎌倉～室町時代 江戸時代	土壇 掘立柱建物跡・土壇	染付磁器(皿・碗・甗) 土師器(小皿) 染付磁器
8区	弥生～古墳時代 古墳時代	竪穴住居跡 竪穴住居跡 土壇・井戸跡・溝跡	土器(壺・甕・高杯) 土師器(壺・甕)
9区	弥生～古墳時代 古墳時代 平安時代	竪穴住居跡・土壇 土壇 土壇 墓	土器(壺・甕・高杯・鉢) 土師器(壺・甕), 須恵器(杯・甕) 黒色土器(碗), 土師器(碗)
10区	弥生～古墳時代 平安～鎌倉時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 井戸跡・土壇墓・溝跡	土器(壺・甕・高杯) 土師器(小皿・杯), 黒色土器(碗)



Fig 89 尾崎土生遺跡周辺地形図(1/3,000)

2. 遺 構

検出された遺構は主に弥生時代から室町時代にかけてのもので、掘立柱建物跡・土壇・井戸跡・溝・柱穴がみられる。遺構は11～14区のはほぼ全域に広がっており、そのうち11区・12区に密集しており、14区は遺構が疎らである。

(1) 弥生時代の遺構

14区東側から井戸跡1基のみ検出されている。

井戸跡

SE403井戸跡 (Fig.90, PL.36-1)

14区西端近くに位置する。素掘りの井戸跡で、上部は削平されている。平面が隅丸長方形に近い楕円形で、長さ1.47m、幅1.06m、深さ0.5mを測る。壁は北西部を除いて、ほぼ垂直になる。北西部の壁は傾斜している。埋土は灰黒色粘質土で炭の細片を含んでいた。地山は、遺構上面より約45cm程で砂層になり、湧水がはげしい。遺物は、埋土下部から床面にかけてより、甕・鉢・甗・高杯・支脚が出土した。破碎したこれらの土器を投げ込んだものと思われる。

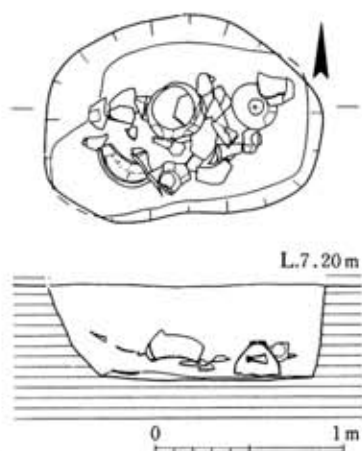


Fig 90 SE403井戸跡実測図

(2) 古墳時代の遺構

11区～14区から掘立柱建物跡9棟、土壇5基、井戸跡5基、溝跡10条および柱穴が検出されている。

掘立柱建物跡

SB122建物跡

(Fig.89, PL.36-2)

11区中央部に位置する東西棟の総柱建物跡である。規模は2間×2間で、棟方向をN-87°-Wにとり、桁行4.0m、梁行柱間1.8mの等間隔である。柱穴は、すべて柱の部分小さく掘り込む二段掘りで、径50～80cm、深さ44～56cm。

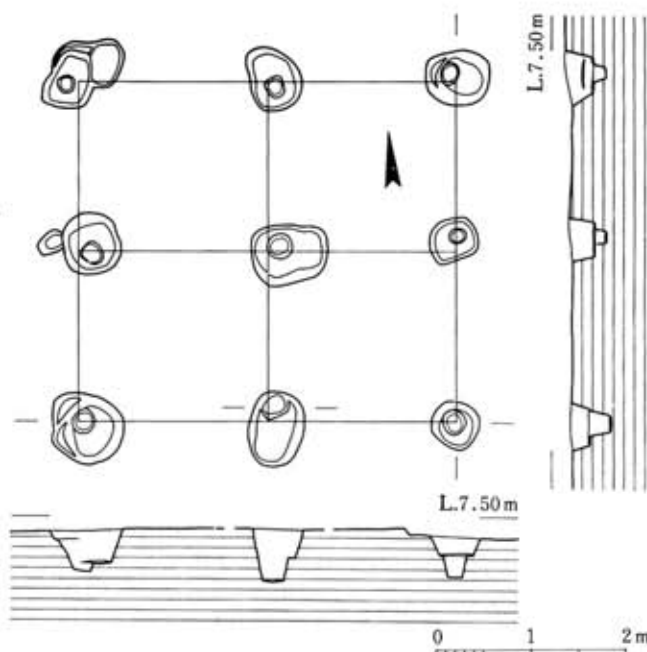


Fig 91 SB122建物跡実測図

遺物は柱穴から土師器の破片が出土している。

SB123建物跡 (Fig.92, PL.36-3)

11区中央部に位置する南北棟の総柱建物跡である。規模は2間×2間で、棟方向をN-5°-Eにとる。桁行3.0m、梁行2.8mを測り、桁行柱間は1.5mの等間隔である。柱穴はすべて柱の部分小さく掘り込む二段掘りで、径40~80cm、深さ45~60cm。遺物は出土していない。

SB124建物跡 (Fig.93, PL.36)

11区中央部に位置する東西棟の建物跡である。中央部をSD102溝跡に切られており、総柱建物跡の可能性がある。規模は2間×2間で棟方向をN-85°-Eにとる。桁行柱間は0.9m・1.4mと等間隔でない。柱穴は5個が二段掘りで、径30~60cm、深さ20~50cm。遺物は柱穴から土師器小破片が出土している。

SB125建物跡 (Fig.94, PL.37-2)

11区中央部に位置する東西棟建物跡でSB026建物跡と切り合っている。規模は

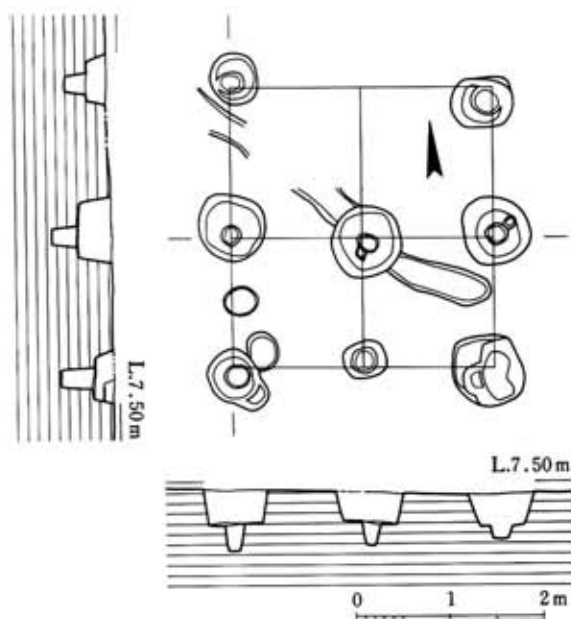


Fig 92 SB123建物跡実測図

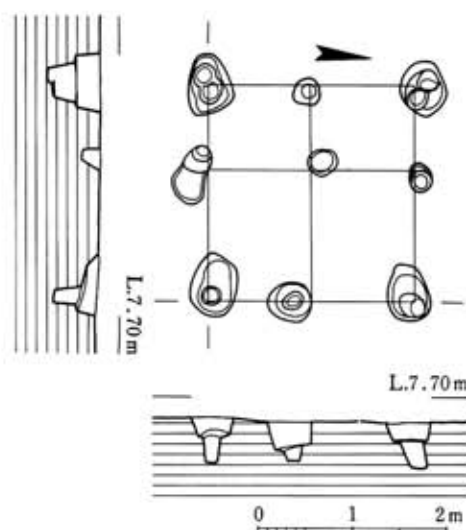


Fig 93 SB124建物跡実測図

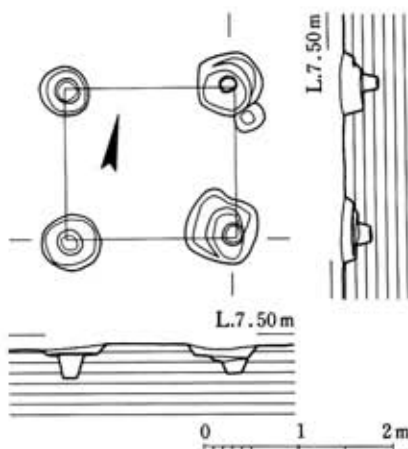


Fig 94 SB125建物跡実測図

1間×1間で棟方向をN-79°-Eにとる。桁行1.8m、梁行1.6mを測る。柱穴はすべて、柱の部分小さく掘り込んだ二段掘りで径52~70cm、深さ30~38cm。遺物は、柱穴から須恵器杯の破片、土師器小破片が出土している。

SB126建物跡 (Fig.95, PL.37-3)

11区中央部に位置する南北棟の建物跡である。規模は4間×3間で棟方向をN-3°-Eにとる。桁行5.8m、梁行3.9mを測り、桁行柱間1.45m、梁行柱間1.3mの等間隔である。柱穴は素掘りのものと二段掘りのものがみられ、径20~50cm、深さ26~40cm。遺物は柱穴から須恵器杯の破片、土師器小破片が出土している。

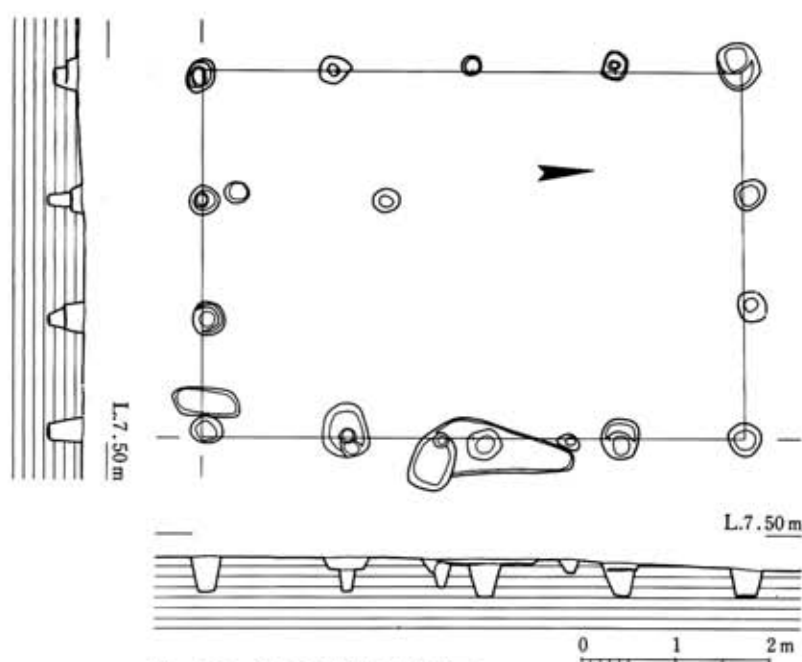


Fig 95 SB126建物跡実測図

Tab 14 尾崎土生遺跡古墳時代掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	長軸方位	規模 桁行×梁行	柱 間		総面積 (㎡)	出土遺物	備 考
			桁 行	梁 行			
SB121	N-48°-W	2×2	2.0	1.8	14.4		
122	N-87°-W	2×2	2.0	1.8	14.4	土師器甕	総柱建物跡 "
123	N-5°-E	2×2	1.5	1.4	8.4	土師器甕	
124	N-85°-E	2×2	0.9・1.4	1.1	4.84	土師器小破片	
125	N-79°-E	1×1	1.8	1.6	2.88	須恵器杯、土師器小破片	
126	N-3°-E	4×3	1.45	1.3	22.62	須恵器杯、土師器小破片	
127	N-88°-E	1×1	1.7	1.5	2.55		
213	N-32°-E	2×1以上	1.9	2.0	7.60以上		
214	N-61°-E	2×1以上	1.9	1.6	6.08以上		

井戸跡

SE114井戸跡 (Fig.96, PL.38-1)

11区東側に位置する素掘りの井戸跡である。壁が急角度に傾斜しており、南側に段がつく。平面は楕円形で、上面の長さ1.1m、幅0.99m、2段目の長さ0.5m、幅0.45m、深さ0.99mを測る。埋土は上部が黒色土、下部が灰黒色～暗灰色粘質土で、地山の下部は砂質土になり湧水がある。遺物は埋土中部から土師器壺・甕・高杯がまとまって出土している。

SE211井戸跡 (Fig.97, PL.38-2)

12区西側に位置する素掘りの井戸跡で、上部が削平され、西側をSK012土壌により切られている。二段掘りになっており、上段の壁は北側と東側が垂直で、南側と西側が急角度に傾斜している。下段の壁は傾斜している。上面は平面がほぼ円形で径1.0～0.9m、二段目は平面が楕円形で長さ0.5m、幅0.28m、深さ0.65mを測る。埋土は上部が暗褐色土、下部が灰黒色粘質土で、地山の最下層に近い部分から砂質土になり湧水がある。遺物は埋土の下部から土師器甕・甔、須恵器杯・甕が出土している。

SE406井戸跡

(Fig.98, PL.38-3)

14区の西端近くに位置する素掘りの井戸跡で上部が削平されている。壁が急角度に傾斜しており、東側に段がつく。平面は不整楕円形で長さ1.7m、幅1.32m、深さ1.22mを測る。埋土は上部が黒色粘質土、下部が灰黒色粘質土で、どちらも木の枝、種子などの植物遺体や木片を多く含む。地山は、遺構上面より約70cmで砂

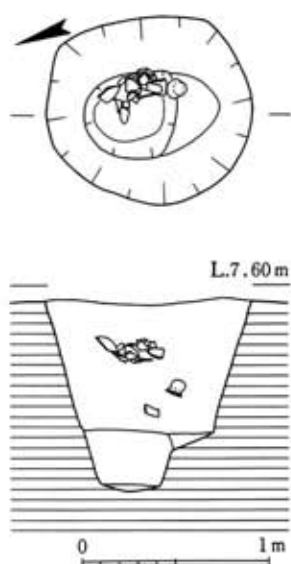


Fig 96 SE114井戸跡実測図

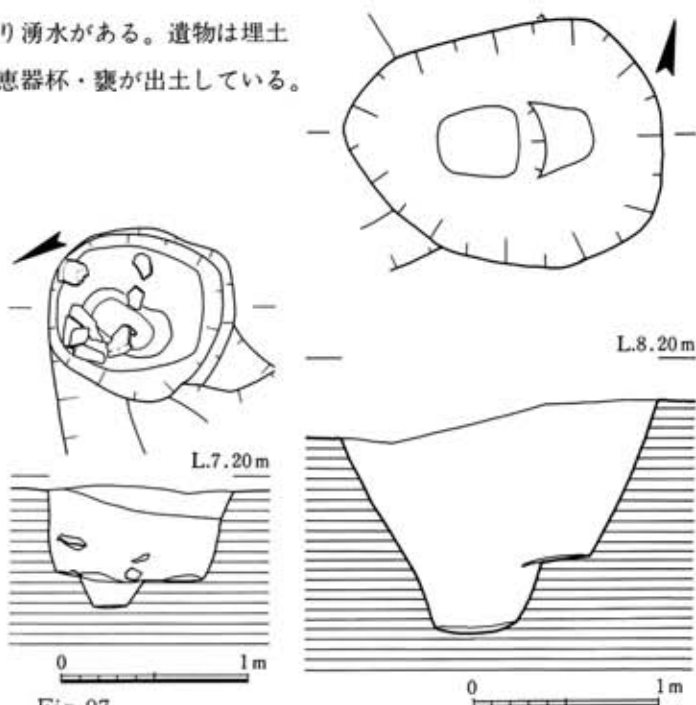


Fig 97
SE211井戸跡実測図

Fig 98 SE406井戸跡実測図

質土になり、湧水がある。遺物は埋土下部より土師器高杯と刀装具（木製）が出土している。

土壌

SK113土壌 (Fig.99, PL.38-4)

11区中央部，SB022建物跡の東側に位置する。二段掘りの土壌で東側をSD101溝跡により切られている。平面は楕円形になると思われる。上面の長さ1.8m，幅1.4m以上，二段目の長さ0.6m以上，幅0.55mで，深さは0.43mを測る。二段目の床面南側に平面が楕円形で長さ0.32cm，幅0.15mの小さな穴がみられる。壁は上段，二段目ともに急角度に傾斜している。埋土は黒色土で，遺物は床面から埋土中部にかけてより多数の土師器壺・甕・高杯・ミニチュア土器が出土している。これらの土器はすべて破片で，しかもバラバラの状態であった。

SK118土壌 (Fig.100, PL.38-5)

11区西側，SB021建物跡の東側に位置する。平面が隅丸長方形に近く，長さ1.71m，幅1.26m，深さ0.5mを測る。壁は傾斜しており，床はほぼ平坦である。埋土は，上部が黒褐色土，下部が暗褐色土で，どちらも炭と焼土の細片を多く含んでいた。遺物は埋土上部から中部より土師器壺・甕・甗・須恵器蓋・杯・甕・平瓶・高杯がバラバラの状態出土している。

SK201土壌 (Fig.101, PL.38-6)

12区中央部に位置する。二段掘りの土壌で南側の一部は調査区域外のため未発掘である。平面は上面が不整楕円形で，二段目は隅丸方形に近い。上面の長さ4.0m，幅2.1m以上，二段目の長さ2.5m，幅1.7m以上，深さ0.74mを測る。壁は上段の西側が垂直に近く，他は傾斜している。埋土は暗褐色土で，炭と焼土の小塊を含んでいた。遺物は埋土上部から中部にかけてより，土師器甕・甗・カマド，須恵器蓋・杯・甕・壺・高杯，砥石がバラバラの状態出土している。

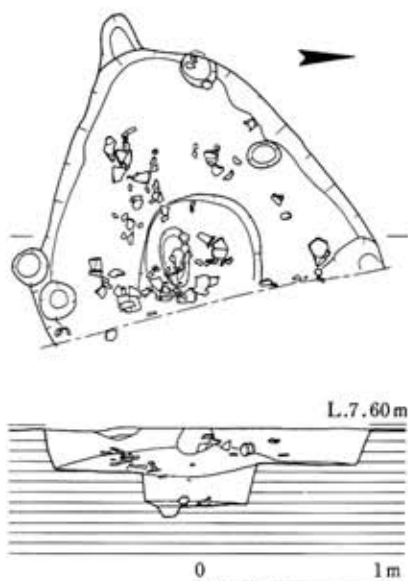


Fig 99 SK113土壌実測図

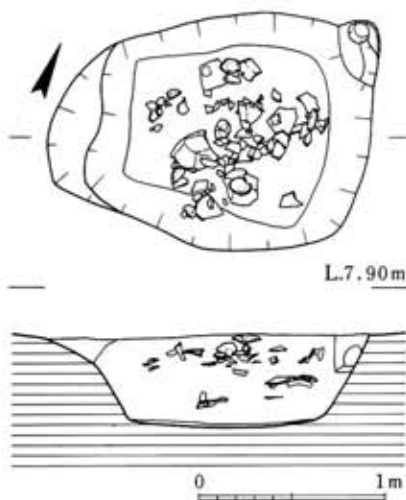


Fig 100 SK118土壌実測図

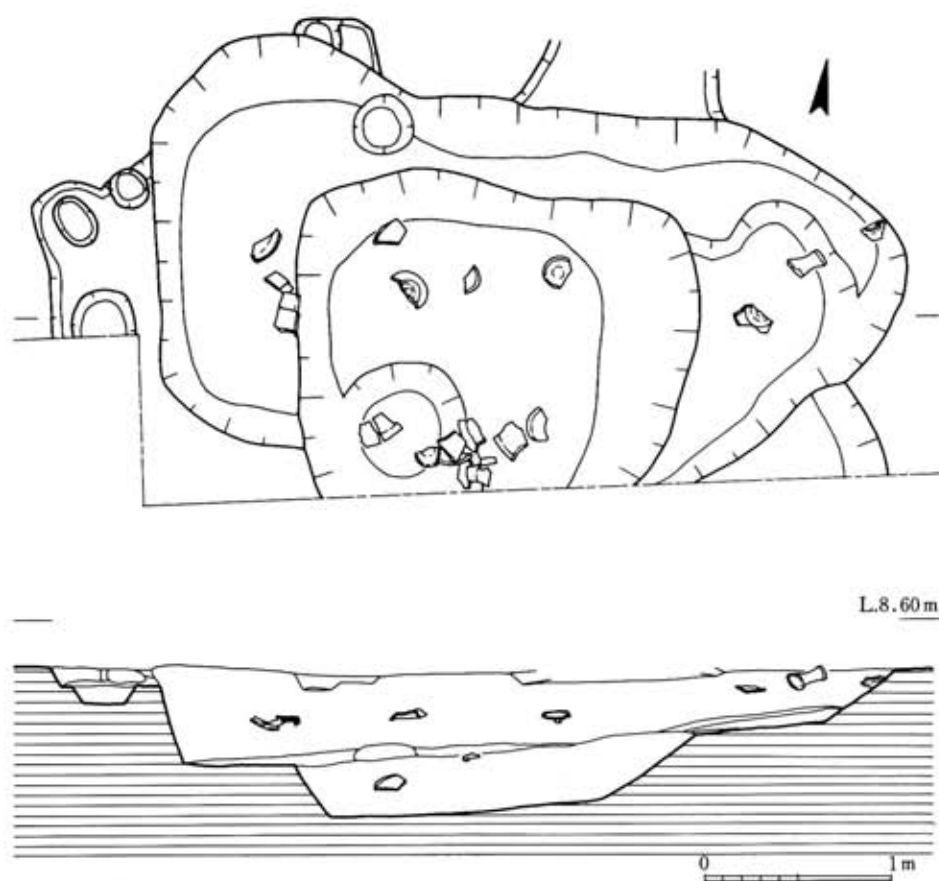


Fig 101 SK201土壌実測図

Tab 15 尾崎土生遺跡古墳時代土壌井戸跡一覧表

遺構番号	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考
		長	幅	深		
SK113	—	1.8	1.4以上	0.43	土師器壺・甕・高杯	二段掘り
118	隅丸長方形	1.71	1.26	0.50	土師器壺・甕・甌、須恵器蓋・杯・甕 平瓶・高杯	二段掘り
201	不整楕円形	4.0	2.1以上	0.74	土師器甕・甌・カマド、須恵器蓋・杯 甕・壺・高杯・砥石	
206	楕円形	1.66	0.8	0.53	土師器甕・高杯、須恵器蓋・杯・甕	
209	楕円形	1.14	0.68以上	0.45	土師器杯・甕、須恵器蓋・杯・甕	
SE111	円形	1.12	0.98	0.91	須恵器蓋・杯、土師器小破片	二段掘り
114	楕円形	1.1	0.99	0.99	土師器壺・甕・高杯	
211	ほぼ円形	1.0	0.9	0.65	土師器甕・甌、須恵器杯・甕	
405	楕円形	0.84	0.78	0.60	土師器甕	
406	不整楕円形	1.7	1.32	0.22	土師器高杯・刀装具（木製）	

溝跡

SD101溝跡 (PL.40-1)

11区中央部に位置し、ほぼ南北に走り、調査区の北側・南側へ延びる。検出した長さ8mで、幅0.7~0.9m、深さ0.2~0.3mを測る。断面は逆台形である。埋土は黒褐色土で、遺物は埋土より土師器小破片が出土している。

SD102溝跡 (PL.39-2)

11区中央部に位置し、北西から南東にかけて走り、ゆるい弧状になる。全長8.6m、幅0.6~0.8m、深さ0.2~0.25m。断面は浅い碗形である。埋土は黒褐色土で、遺物は埋土より土師器甕・甔、須恵器甕の破片が出土している。

SD108溝跡 (PL.39-2)

11区中央部、SD102溝跡の北側に位置し、ほぼ南北へ走り、調査区北側へ延びる。検出した長さは6mで、幅0.5~1.3m、深さ0.1~0.15mを測る。断面は浅い碗形である。埋土は灰褐色土で遺物は埋土より土師器甕・瓶・高杯、須恵器杯が出土している。

SD401溝跡 (Fig.100, PL.39-3~6)

14区西側に位置し、ほぼ南北にかけて走り、調査区の北側・南側へ延びる大溝である。壁は傾斜しており東側が二段になる。西側の壁は調査区域外になり確認ができない。検出したのは長さ8mで、幅は上面が4.5m以上、二段目で、3.0~3.8mで、深さは約1mである。埋土は大きく6層に分けられる。遺物はI層・II層から土師器破片・須恵器杯、III層・IV層から土師器壺・甕・高杯、管玉がIV層~VI層から摩滅した弥生中期後半~後期前半の壺・甕が出土している。

SD402溝跡 (PL.39-7・8)

14区東側に位置し、やや西側に偏して南北に走り調査区の南側・北側へ延びる。後述するSD404溝跡と平行している。検出したのは長さ7.0mで、幅0.3~0.8m、深さ0.2~0.35mを測る。断面は逆台形に近い。埋土は黒色土で、遺物は中央近くの床面から完形の須恵器蓋が南側の床面から横槌が出土している。

SD404溝跡

14区西側に位置し、やや西側に偏して南北に走り、調査区の南側へ延びる。SK405井戸跡を切っており北側は一部覚乱されており明らかでない。検出したのは長さ6.2mで、幅0.3~0.7m、深さ0.2~0.3mを測る。断面はU字形に近い。埋土は灰褐色土で、遺物は埋土より土師器小破片が出土してい

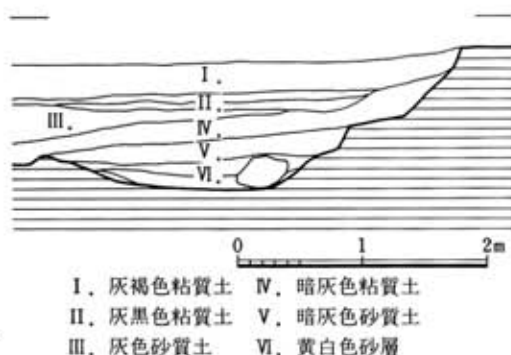


Fig 102 SD401溝跡北壁土層図

る。

以上の6条の溝跡の他に13区から古墳時代の可能性がある溝跡を4条検出しているが出土遺物が土師器の細片のみであるため明確でない。SD301・302・303溝跡が13区東側に位置し、東側に偏って南北に走り、SD304溝跡がB区中央に位置し北西から南東に走る。

(3) 平安～鎌倉時代の遺構

11区・12区・13区から井戸跡4基、土壇7基、溝跡7条、および柱穴を検出している。

井戸跡

SE112井戸跡 (Fig.103, PL.41-1)

11区中央部に位置する素掘りの井戸跡である。二段掘りと思われるが、上部が削平されており、上段は基底部と西側の壁がわずかに残っているにすぎない。平面はほぼ円形で、上面径1.23～1.24m、二段目の径0.9～0.95m、深さ1.06mを測る。上段の壁は傾斜しており、二段目の壁はほぼ垂直である。埋土は暗褐色土で炭の小片を含む。地山は下部が砂質土であり湧水がある。

遺物は埋土中部より土師器小皿・杯が出土している。

SE202井戸跡 (Fig.104, PL.41-2)

12区東側に位置する素掘りの井戸跡である。二段掘りと思われるが、部分的に三段になっている。平面は円形に近く、上面径1.2～1.24m、深さ0.51mを測る。壁は上段がほぼ垂直で、二段目は急角度に傾斜している。埋土は上部が黒褐色土、下部が灰黒色土で、床面近くの地山より湧水がある。遺物は埋土下部から床面近くにかけてより、土師器甕、黒色土器碗、鉄鎌が出土している。

土壇

SK120土壇 (Fig.105, PL.41-3)

11区中央部南側に位置する。平面が楕円形で、上部の削平が著しく残存状況は良くない。長さ1.23m、幅0.56m、深さ0.15mを測る。壁は傾斜しており、床は東側が深くなっている。埋土は灰褐色土で、遺物は東側の埋土より、土師器小皿・碗、黒色土器碗がまとめて出土している。土壇墓の可能性はある。

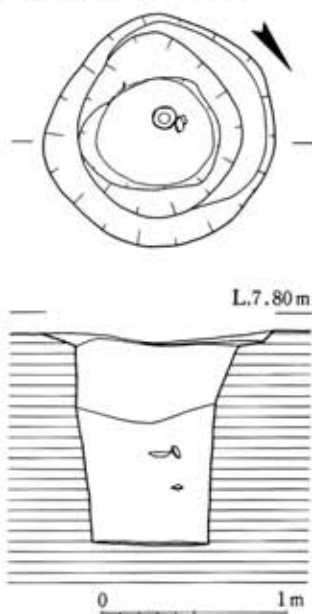


Fig 103 SE112井戸跡実測図

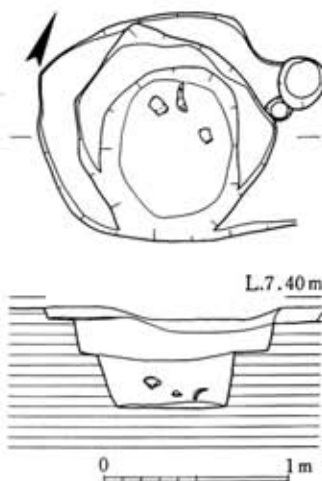


Fig 104 SE202井戸跡実測図

SK207土坑 (Fig. 106, PL. 41-4)

12区中央南側に位置する。平面が不整形円形で、長さ2.76m、幅1.4m、深さ0.3～0.46mを測る。壁は傾斜しており、複雑な段がつく。床面の北東部に長さ0.83m、幅0.74mの隅丸長方形に落ちこむ部分が見られる。埋土は灰黒色土で、遺物は埋土中部から床面にかけてより、土師器小皿・杯、石製模造鏡が出土している。

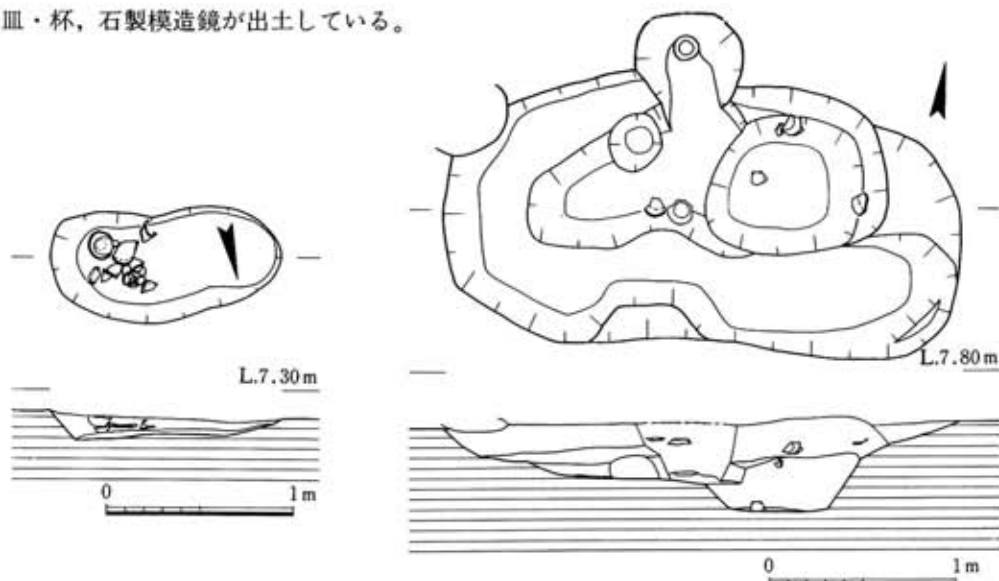


Fig 105 SK120土坑実測図

Fig 106 SK207土坑実測図

Tab 16 尾崎土生遺跡平安～鎌倉時代土坑・井戸跡一覧表

遺構番号	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考
		長	幅	深		
SK115	不整形	0.94	0.86	0.36	土師器小破片	
120	楕円形	1.23	0.56	0.15	土師器小皿 (へら切)・碗, 黒色土器碗	
203	楕円形	1.14	0.85	0.25	白磁・滑石片	
204	不整形	2.4以上	1.8～2.1	0.18	土師器杯・小皿 (へら切), 黒色土器碗	
205	楕円形	1.16	1.0	0.25	土師器甕, 黒色土器碗	
207	楕円形	2.76	1.4	0.2～0.46	土師器杯・小皿, 石製模造鏡	
208	楕円形	1.08	0.88	0.73		
SE112	円形	1.24	1.23	1.06	土師器小皿・杯 (へら切)	二段掘り
116	ほぼ円形	1.21	1.14	0.77	瓦器碗, 黒色土器碗, 土師器杯 (へら切)	
117	ほぼ円形	1.18	1.10	0.91	須恵器甕・青磁・滑石製品	
202	ほぼ円形	1.2 (1.3)	1.07 (1.2)	0.51	土師器小破片 黒色土器碗・鉄鎌	二段掘り

溝跡

SD103溝跡

11区東側に位置し、ほぼ東西に走る。西側は調査区域外へ延びている。検出した長さ6.2m

で、幅0.2～0.7m、深さ0.1～0.2mを測る。断面は浅い碗形である。埋土は灰褐色土で遺物は土師器杯、土師質土器の小破片が出土している。

SD104溝跡 (PL.41-6)

11区東側に位置し、SD105溝跡・SD106溝跡と平行してほぼ南北に走り、調査区北側・南側へ延びる。検出した長さは8mで、幅0.2～0.4m、深さ0.05～0.07mを測り、断面はU字形に近い。埋土は暗褐色土で、遺物は、埋土より土師器小破片が出土している。

SD105溝跡 (PL.41-6)

11区東側に位置し、ほぼ南北に走り、調査区北側・南側へ延びる。検出した長さは8mで、幅0.55～0.9m、深さ0.1～0.22mを測り、断面は逆台形に近い。埋土は暗褐色土で、遺物は埋土より土師器杯、土師質土器土鍋、白磁碗の小破片が出土している。

SD106溝跡 (PL.41-6)

11区東側に位置し、ほぼ南北に走り、調査区北側・南側へ延びる。検出した長さは8mで、幅1.0～1.3m、深さ0.25～0.35mを測り、断面は逆台形に近い。埋土は暗褐色土で、遺物は埋土より土師器細片が出土している。

以上の4条の溝跡の他に13区から鎌倉時代以降と考えられる溝跡を3条 (SD305～SD307) 検出している。このうちSD306溝跡から瓦質土器鉢が出土している。

3. 遺 物

(1) 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物には土器がある。土器は14区のSE403井戸跡から出土したものと、図示していないが、14区のSD401溝跡から出土したものがある。

SE403土壇出土土器 (Fig.107, PL.42)

甕 (1～9) 1～5は口縁部が逆L字状をなし、2は口縁部内側が小さく突出し、1・3～5は口縁部内側が尖り気味になる。口縁部上面は2・4・5が平坦で、1・3は外側にやや垂れる。みな口縁端部を丸く仕上げている。口径26～33cm、色調は黄褐色～暗褐色。器壁は外面がハケ目調整されている。6は口縁部が逆L字状をなし、口縁端部はわずかに凹む。体部は胴部中央付近が張り、ここに断面三角形の突帯を1条巡らしている。口径29.8cm、突帯部径32.2cm。色調は黄褐色～褐色で、器壁はナデ調整されている。7～9は底部で底部から体部がゆるやかに開く。7・8はわずかに上げ底をなし、9はほぼ平坦である。底径7.3～8.1cm。色調は黄褐色～褐色で、器壁は外面がハケ目調整されている。

甗 (10) 甕を転用したもので、底部の中央に直径0.6cm程の孔を穿いている。器形は先述した甕の底部とはほぼ同様で、底径9.0cm。色調は明褐色～褐色で、器壁は外面がハケ目調整されている。

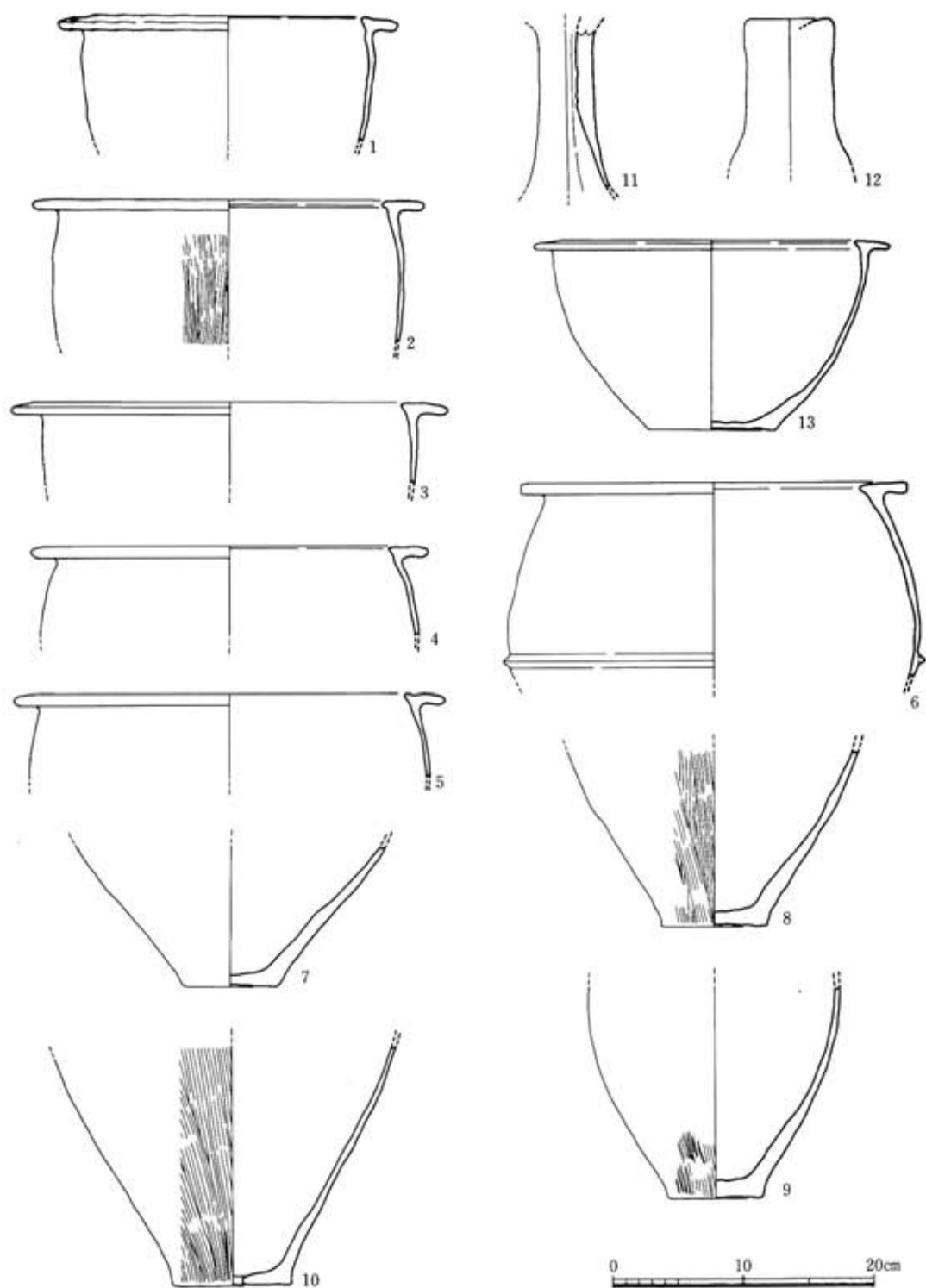


Fig 107 SE403出土弥生土器实测图

高杯(11) 長脚の高杯脚部で、細い円筒状をなす。色調は褐色～赤褐色で、器壁は摩滅しているが、外面がへら磨きされている。内面にしほり痕が残る。

鉢(13) 口縁部がT字状で、口縁部上面が外側にわずかに傾く。胴部はゆるく内湾して開き、底部はわずかに上げ底をなし、底部外面が凸凹している。口径27.4cm、器高14.6cm、底径9.8cm、器壁はナデ調整されている。

支脚(12) 円筒状の支脚で、上面が凹み裾近くで広がる。色調は褐色で、器壁はナデ調整されている。

(2) 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物には土器・木製品・土製品・石製品がある。このうち土器は主に11区・12区・14区の土壌・井戸跡・溝跡から、木製品は14区のSE406井戸跡・SD402溝跡から出土している。

SK113土壌出土土器 (Fig.108, PL.42)

壺(14・15) 14・15は小型丸底壺である。14は胴部が球形で、口縁部が直線的に開く。口径は8.2cmで、胴部最大径とはほぼ同じである。色調は黄褐色～暗褐色で器壁はナデ調整されている。体部内面に強い指ナデ痕が残っている。15は口径8.7cm、胴部が球形で、口縁部が直線的に開き、口縁端部は尖り気味に仕上っている。色調は明褐色～灰褐色で器壁はナデ調整されてお

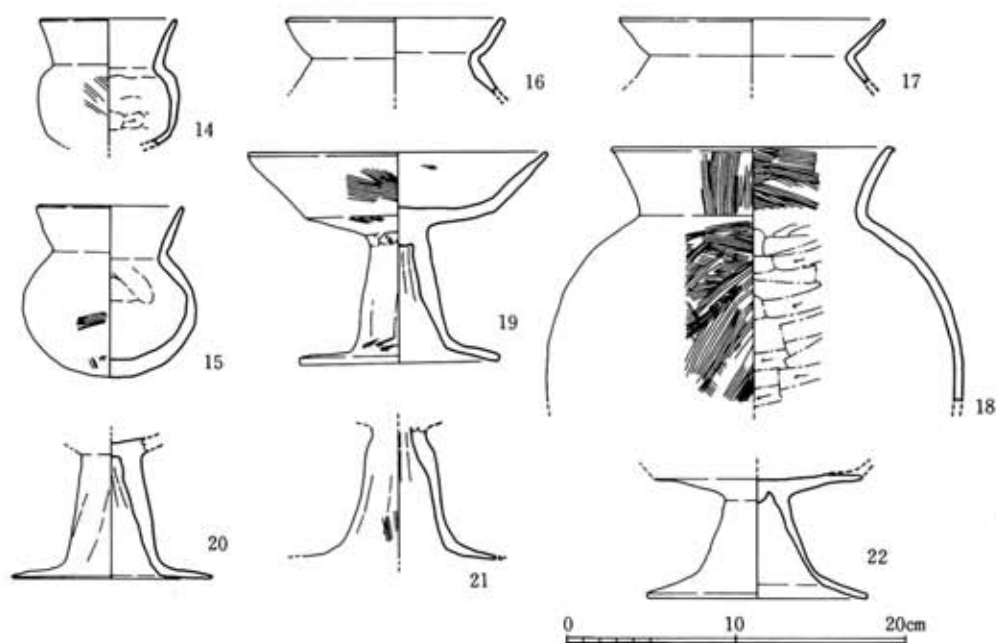


Fig 108 SK113出土土器実測図

り、体部内面に強い指ナデ痕が残る。

甕(16~18) 16・17は口縁部がわずかに内湾しながら開く。16は口径13.0cmで口縁端部に面をもつ。17は口径15.4cmで口縁端部を丸く仕上げている。器壁は体部内面がへら削り、外面がナデ調整されている。18は体部が球形で、口縁部がゆるく外反し、端部外面がわずかに肥厚する。口径16.7cm。器壁は体部内面がへら削りで、外面と口縁内部がハケ目調整されている。

高杯(19~22) 19は杯部が屈折して、口縁部が大きく直線的に開く。脚部は裾近くで屈折して開く。色調は明黄褐色で、器壁は体部外面がハケ目調整、体部内面および脚部外面がハケ目調整後ナデ調整されている。口径17.8cm、器高12.5cm。20・21も19と同様の器形になると思われるが脚端部が尖り気味に仕上げられている。22は脚の底い高杯で、脚の開きが大きく屈折がゆるい。脚端部が面をもつ。色調は明褐色で、器壁は脚部外面がナデ調整されている。

SK018土墳出土土器・土製品 (Fig.109, PL.43)

須恵器

蓋(23) 天井部がわずかに丸味を帯び、体部から口縁部にかけて直線的に延びる。口縁部内側に短いかえりを有する。口径8.6cm。器壁は天井部および体部内外面がロクロナデ調整されている。

杯(24) 底部が平坦で、体部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。口径9.9cm、器高3.0cm。器壁は底部がへら削り、体部内外面がロクロナデ調整されている。

壺(25) 口縁部が直線的に開き、口縁端部を尖り気味に仕上げている。口径7.2cm。器壁は内外面ともロクロナデ調整されている。

土師器

甕(33~36) 33・34・36は体部がふくらみ、口縁部がゆるく外反する。口径17~21.6cm。口径は胴部最大径より小さい。色調は黄褐色で、器壁は体部内面がへら削り、外面がハケ目調整されている。35は体部があまり張らず、口縁部がゆるく外反する。口径18.5cm。口径は胴部最大径より大きい。色調は暗黄褐色で器壁は、体部内面がへら削り、外面がハケ目調整されている。

鉢(30・31) 30は体部が丸味を帯び、頸部がくびれ口縁部がわずかに外側に開く。口径10.2cm。色調は明褐色で器壁は摩滅のため不明であるが内面はナデ調整されている。31は底部が小さく、わずかに上げ底をなし、体部が直線的に大きく開き、口縁部がゆるく外反する。口径19.8cm。色調は明褐色で、器壁は内外面ナデ調整されている。

高杯(26~29) 26は杯部が屈折して、口縁部が直線的に大きく開く。口径17.3cm。色調は黄褐色で、器壁は、外面がハケ目調整、内面がハケ目後ナデ調整されている。27は脚部で、裾近くで強く屈曲して大きく広がる。色調は暗褐色で、器壁は内外面ナデ調整されている。28・29は杯部が内湾して開き、胴部は太くて直線的にゆるやかに広がり裾近くで強く屈曲する。ど

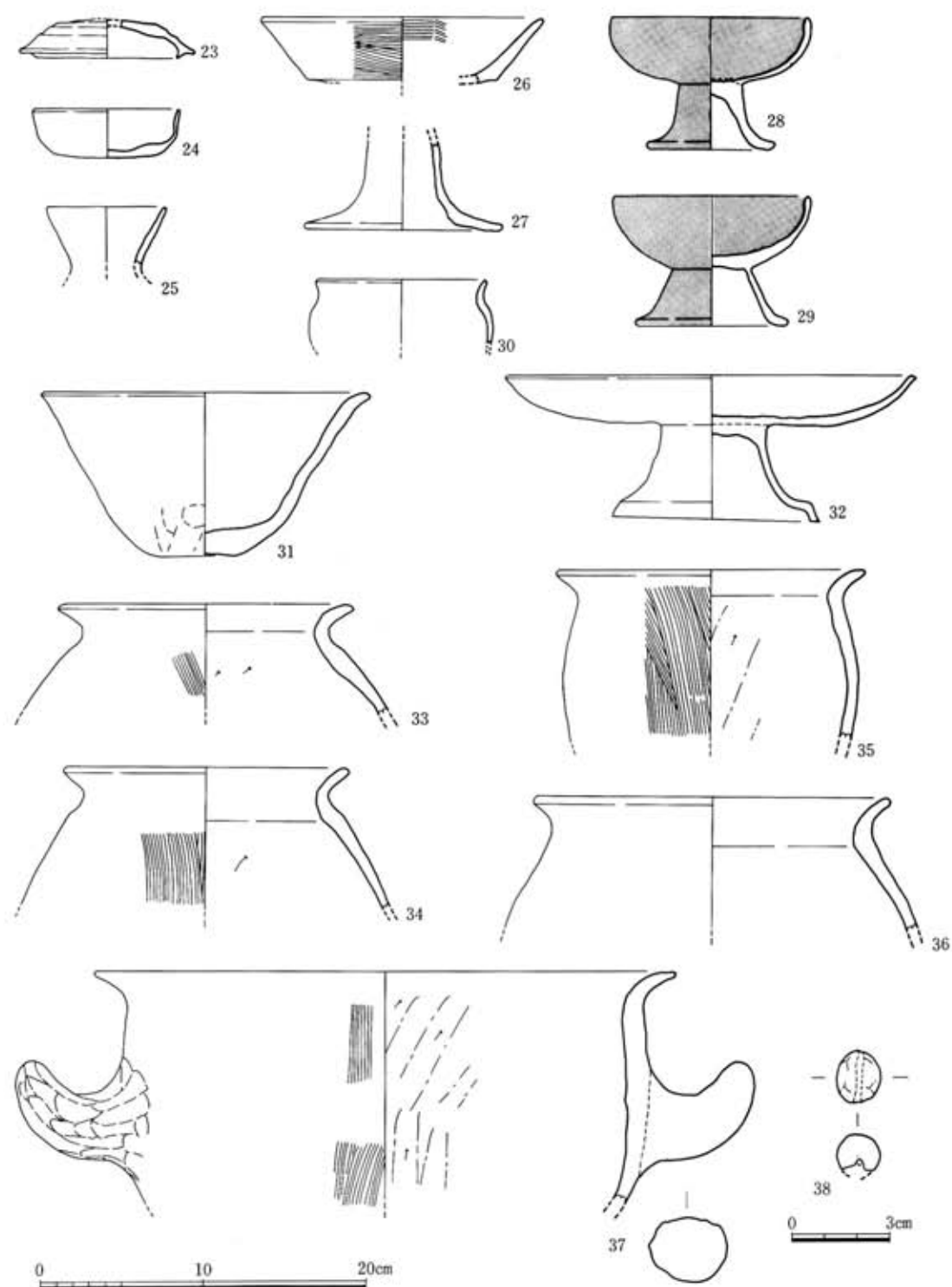


Fig 109 SK118出土土器实测图

ちらも口縁端部と脚端部は丸く仕上げている。

脚付皿(32) 皿部が、ゆるく内湾して大きく開き口縁部は端部が平坦になる。脚部は太くてゆるく屈曲して開き、裾近くで屈折し、裾端部が平坦で全面が接地する。口径24.6cm、器高9.0cm。色調は明黄褐色で、器壁はナデ調整されている。

甌(37) 体部はほとんど張らず、口縁部がゆるく外反する。体部の上位に1対の把手がつくものと思われる。口径35.5cm。色調は褐色で器壁は体部内面がへら削り、外面がハケ目調整されている。把手は指頭によりナデ調整されている。

土製品

玉(38) 全体の約四分の一程を欠損している。断面はほぼ円形で長さ1.6cm、径1.3cmを測る。色調は明黄褐色で器面はナデ調整されている。

SE114井戸跡出土土器 (Fig.110, PL.44)

土師器

壺(39) 小型丸底壺である。胴部が球形で、頸部が強くくびれ、口縁部が直線的に開く。口径8.3cm、器高7.8cmで、口径は胴部最大径より大きい。色調は明褐色で、器壁は口縁部内外面がへら磨き体部内面がナデ調整されている。

甕(42・43) 42は頸部が「く」字状に屈折し、口縁部が直線的に強く開き口縁端部が平坦になる。口径17.9cm。色調は灰褐色で、器壁は体部の内外面がハケ目調整されている。43は体部が丸味をもち球形に近く、口縁部は、わずかに内湾しながら開く。口縁端部は外側がわずかに肥厚する。口径18.2cm。色調は褐色で、器壁は体部内面がへら削り、外面がハケ目調整されている。

高杯(40・41) 40は体部が屈折して口縁部が外反して大きく開く。口径16.5cm。色調は明褐色で器壁は内外面ともハケ目調整されている。41は脚部で、裾近くで屈曲して大きく開くと

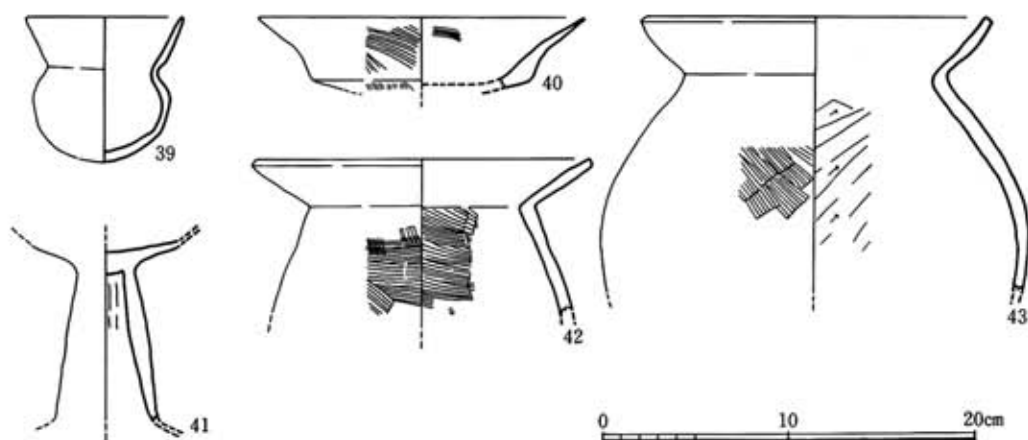


Fig 110 SE114出土土器実測図

思われる。色調は明褐色で、器壁は外面がへう磨きされている。

SE211井戸跡出土土器 (Fig.111, PL.44)

土師器

甕 (44~46) 体部が丸味を帯び、口縁部がゆるく外反する。44の底部はわずかに丸味を帯びた平底である。口径は44が17.6cm, 46が18.4cm。色調は黄褐色~暗褐色で器壁は体部の内面がへう削り、外面はハケ目調整されている。

甔 (47・48) 47は小型の甔で体部がやや張り、口縁部が外反する。体部中位に1対の突帯

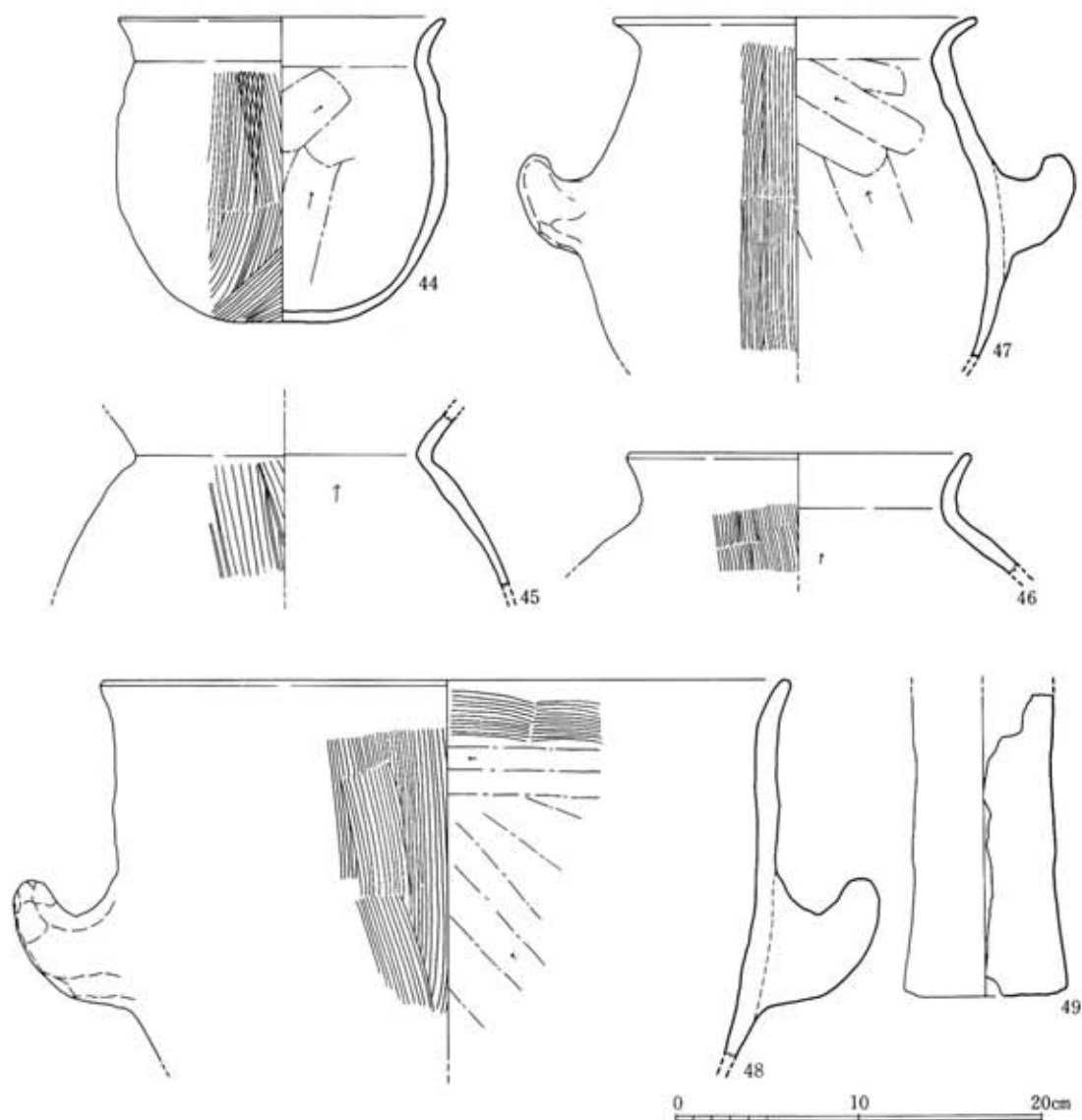


Fig 111 SE211出土土器実測図

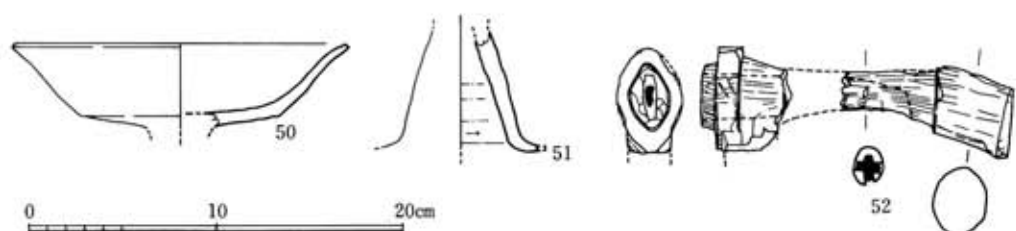


Fig 112 SE406出土土器・木製品実測図

を有する。口径19.6cm。色調は赤褐色で、器壁は体部内面がへら削り、外面がハケ目調整されている。48は体部が張らず、口縁部はわずかに外反する。体部に1対の突帯を有すると思われる。口径37.3cm。色調は赤褐色で、器壁は体部内面がへら削り、口縁部内面と体部外面はハケ目調整されている。

支脚(49) 円筒状の支脚で、裾がわずかに広がる。裾部径38cm。色調は暗褐色で、器面はナデ調整されている。

SE406井戸跡出土土器・木製品 (Fig.112, PL.43)

土師器

高杯(50・51) 50は杯部が屈折して、口縁部にかけて大きく開く。口縁部がわずかに外反し、端部がわずかに凹む。口径17.6cm。色調は暗褐色で器壁は外面がハケ目調整後ナデ調整されている。51は脚部で直線的に開き、裾近くで屈曲する。色調は暗褐色で器壁は内面がへら削り後ナデ調整されている。

木製品

刀装具(52) 柄の一部を欠損しているが、柄頭・柄間・顎・鞘口が一体となる。木造りで全長16cm程になると思われる。鞘口は断面が菱形に近い楕円形で、幅2.3cm、厚さ2.1cmを測る。顎は上部は断面が菱形に近い楕円形で下方にさらに延びる。柄頭は断面が楕円形で幅3.7cm、厚さ2.8cmで下方に垂れている。顎・柄頭と柄間の境は段がつく。柄間は断面が楕円形で、幅2.0～2.8cm、厚さ1.6cmで一ヶ所の目釘穴がみられる。下方には茎を差し入れるための溝を掘りこんでいる。鞘口から顎にかけての内部には木製の茎が目釘穴には目釘が残存していた。全体に丁寧な削り加工がみられる。

SK201土壇出土土器 (Fig.113, PL.44・45)

須恵器

蓋(53～58) 53は天井部がわずかに丸味を帯び、体部から口縁部にかけて強く広がる。口縁部内側に短いかえりを有する。口径12.3cm。器壁は外面の天井部近くがカキ目調整、他はロクロナデおよびナデ調整されている。54～58は天井部がほぼ平坦で、体部から口縁部にかけてわずかに内湾して開き、口縁端部が短く下に延びる。天井部に低いボタン状のつまみを有する。口径13.5～17.6cm、器高2.5～2.6cm。器壁は天井部がへら削りで、他はロクロナデ調整および

ナデ調整されている。

杯 (59・60・62～64) 59・60は体部から口縁部にかけて内湾気味に開き、立ち上がりは短く内側に傾く。口径は59は8.1cm, 60が10.2cm。器壁はロクロナデ調整されている。62～64は底部がほぼ平坦で体部から口縁部にかけてわずかに内湾して開く。63・64は底部に短い高台を有する。口径15.3～17.8cm。器壁は体部がロクロナデ調整されている。63は底部外面に「メ」のヘラ記号がみられる。

皿 (61) 底部はほぼ平坦で、口縁部がゆるく外反する。口縁部の一部分はつまみ出して片口状にしている。口径14.6cm, 器高2.1cm。体部はロクロナデおよびナデ調整されている。

壺 (66) 長頸壺で、頸部が円筒状に上方に延び、口縁部近くでゆるく外反する。頸部は強く屈折し体部移行する。内外面ロクロナデ調整でしほり痕が残っている。

甕 (65) 頸部から口縁部にかけて内湾して開く。端部外側は肥厚し、2条の凹線を巡らしている。

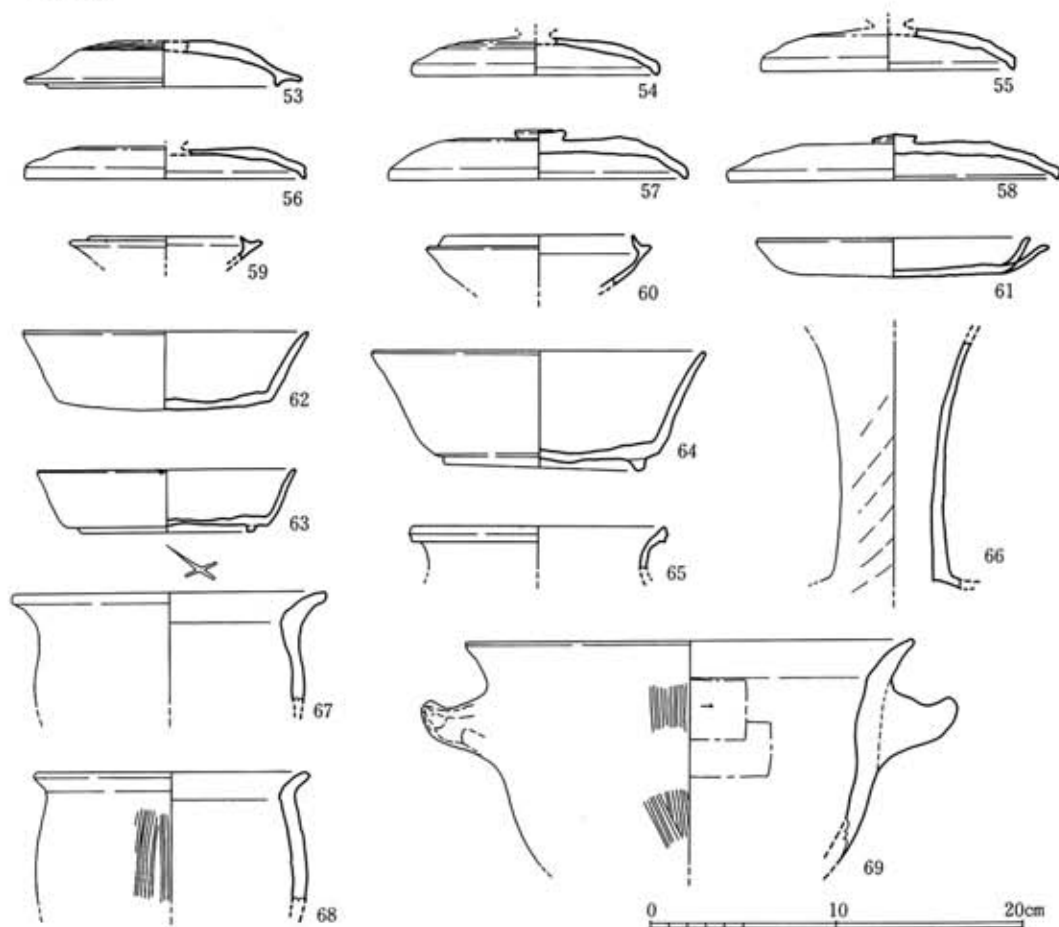


Fig 113 SK201出土土器実測図

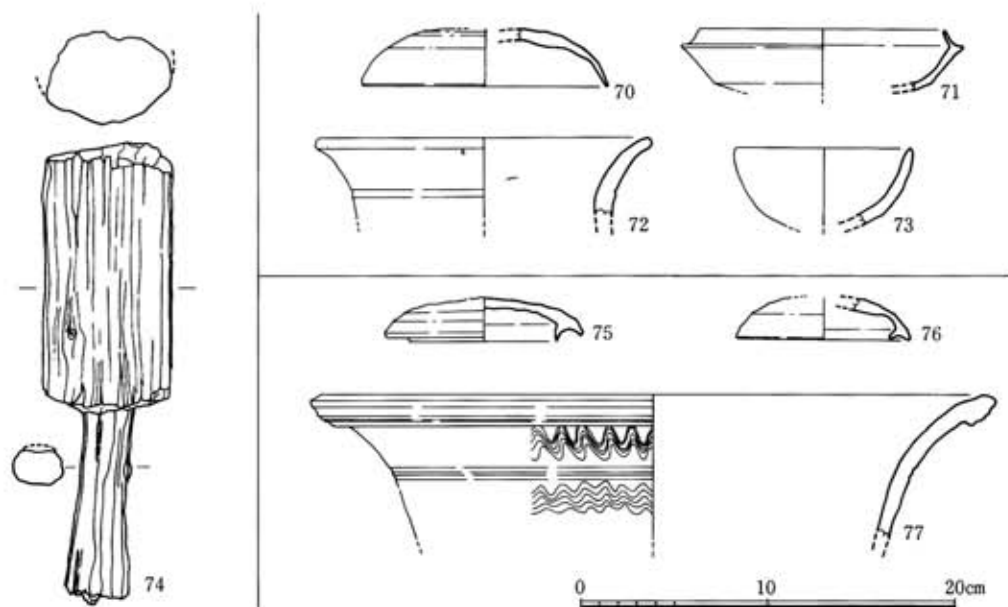


Fig 114 SK206・SD402・SD108・SD103出土土器・木製品実測図

土師器

甕 (67・68) 体部がわずかにふくらみ、口縁部がゆるく外反する。口径は67が16.7cm, 68が14.3cmで器壁は体部内面がへら削り後ナデ調整, 外面がハケ目調整されている。

甔 (69) 小型の甔で、体部から口縁部にかけてわずかに内湾して開き、口縁部がゆるく外反する。体部上面に1対の把手がつくと思われる。口径23.8cm。器壁は体部内面がへら削り後ナデ調整, 外面がハケ目調整されている。

SD402溝跡出土土器・木製品 (Fig.114, PL.45)

須恵器

蓋 (75) 天井部が丸味を帯び、体部から口縁部にかけて内湾気味に開く。口縁部内側に短いかえりを有する。口径10.4cm。器壁は天井部および体部外面がへら削りされている。

木製品

横槌 (74) 身と柄の一部を欠損している。全長24.4cm。身と柄の断面は楕円形である。残存部で身の径5.0~6.6cm, 柄の径2.0~2.7cm。柄部に削り加工痕が残っている。

SD401溝跡出土土器 (Fig.115・116, PL.46・47)

土師器

壺 (78~83・105~107) 78は長い口縁部が直線的に広がる。口径12.8cm。色調は暗黄色~黒褐色で、器壁は内外面ともハケ目調整後ナデ調整されている。外面に黒色顔料が塗られている。79~82は体部が球形で、頸部がくびれ、口縁部が直線的に開く。82は頸部のくびれがゆるく、口縁部は内湾気味に開く。口径は79が8.6cm, 82が11.7cmでどちらも口径が胴部最大径より小さ

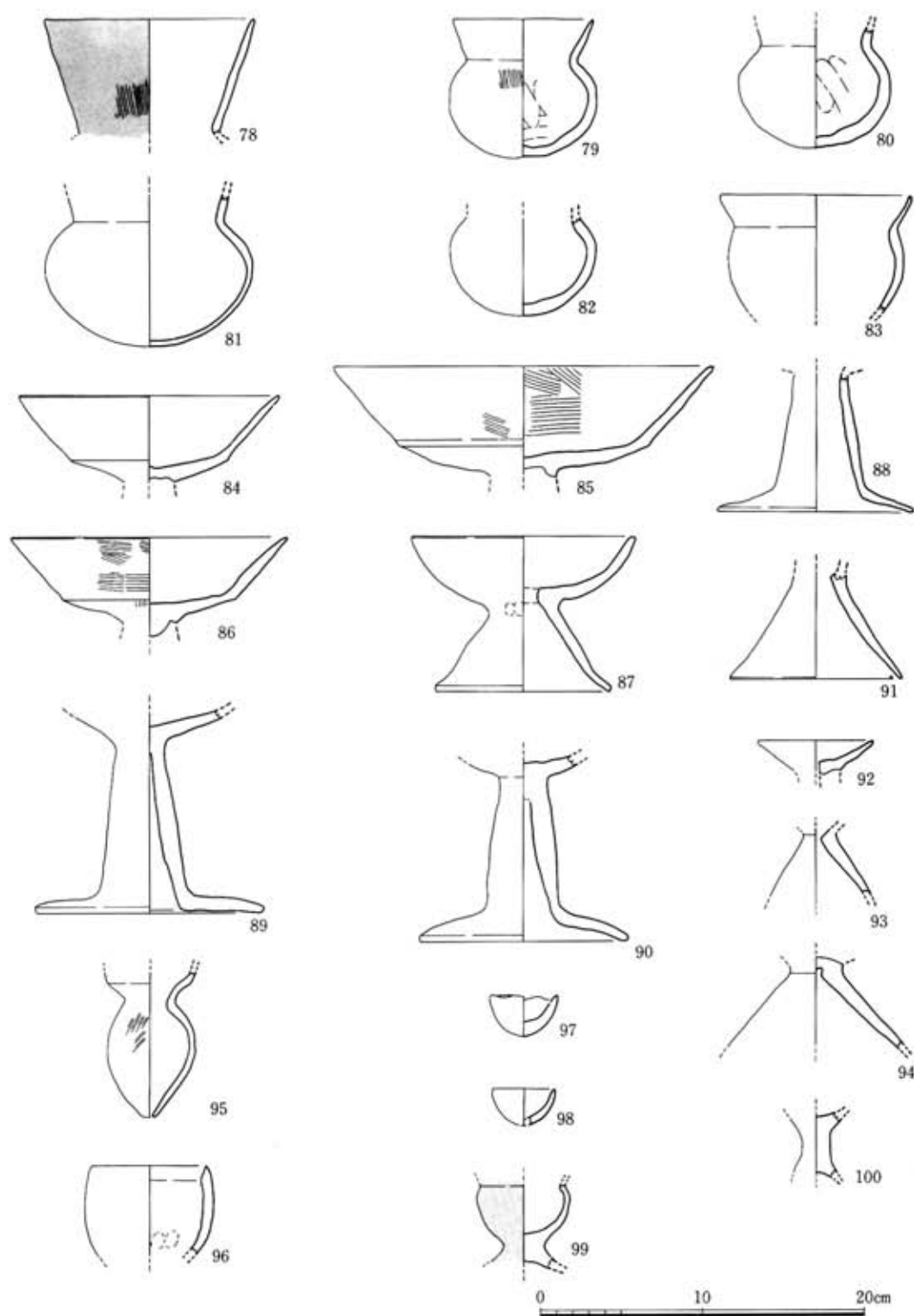


Fig 115 SD401出土土器実測図 1

い。色調は褐色～灰褐色で器壁は体部が主にナデ調整されている。79の体部外面にハケ目が残っている。105は口縁部に二重口縁の名残りがわずかに残る。口径24.0cm。色調は暗褐色で器壁はヨコナデ調整されている。106は頸部と口縁部の境が強く屈曲する二重口縁をなす。口径22.6cm。色調は暗黄褐色～暗褐色で器壁はヨコナデ調整されている。107は短頸壺で、体部は胴が張り、短く外反する口縁部がつく。口径11.1cm、胴部最大径20.4cm、色調は黄褐色で、器種はナデ調整されている。

甕（101～104）体部は、底部がやや尖り気味で、胴部が卵形をする。口縁部がわずかに内湾して開く。口縁端部は101と103は丸味をもち、102は端部上面がわずかに凹み、102は肩部に一条の沈線を巡らしている。口径12.7～14.7cm、色調は明褐色～黒褐色で器壁は体部内面がへら削り、外面がハケ目調整されている。103・104の外面に煤が付着している。

高杯（84～90）84～86は杯部が屈折して口縁部が直線的に大きく開く。口径16.0～23.6cm。色調は暗黄褐色～暗褐色で器壁は86の外面および85の内外面がハケ目調整されている。87は杯部がゆるく内湾して開き、脚は太くて大きく広がる。杯の中央は焼成前に穿孔している。口径13.8cm、器高9.6cm。色調は黄褐色で器壁は脚部内面がへら削りされている。87～90は脚部で90は裾まで直線的に広がるが、87～89は裾近くで強く屈曲している。色調は黄褐色～暗褐色で器壁は内面がナデ調整されている。

鉢（108）体部は丸味を帯び、頸部はわずかにくびれ、口縁部がゆるく外反する。口径22.0cm。色調は黄褐色で器壁は体部の内面がへら削り、外面がハケ目調整されている。

器台（91～94）受部がわずかに内湾して大きく広がり、脚部は裾が大きく開く。色調は黄褐色～暗褐色で、器壁は内外面ともへら磨きされている。

ミニチュア土器（95～100）壺・鉢・台付碗・器台がみられる。95の壺は底部に穿孔している。色調は褐色～暗褐色で、器壁は主にナデ調整されている。99は外面が丹塗りである。

須恵器

杯（109～111）109・110は底部がわずかに丸味を帯び、体部から口縁部にかけて内湾気味に開き、立ち上がりは短く内側に傾く。口径は109が9.8cm、110が9.9cm、器壁は底部外面がへら削りで他はロクロナデおよびナデ調整されている。111は底部が平坦で、体部から口縁部にかけてゆるく屈曲する。口縁部はほぼ直立し端部近くでわずかに外反する。口径10.2cm。底部外面がへら削りで他はロクロナデおよびナデ調整されている。

壺（112）短頸壺で外部は扁平な球形で肩が張り、口縁部は垂直に立ち上がる。口径9.2cm。器壁は底部外面

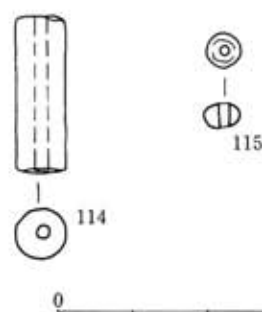


Fig 117 SD401・12区P-172出土
装身具実測図

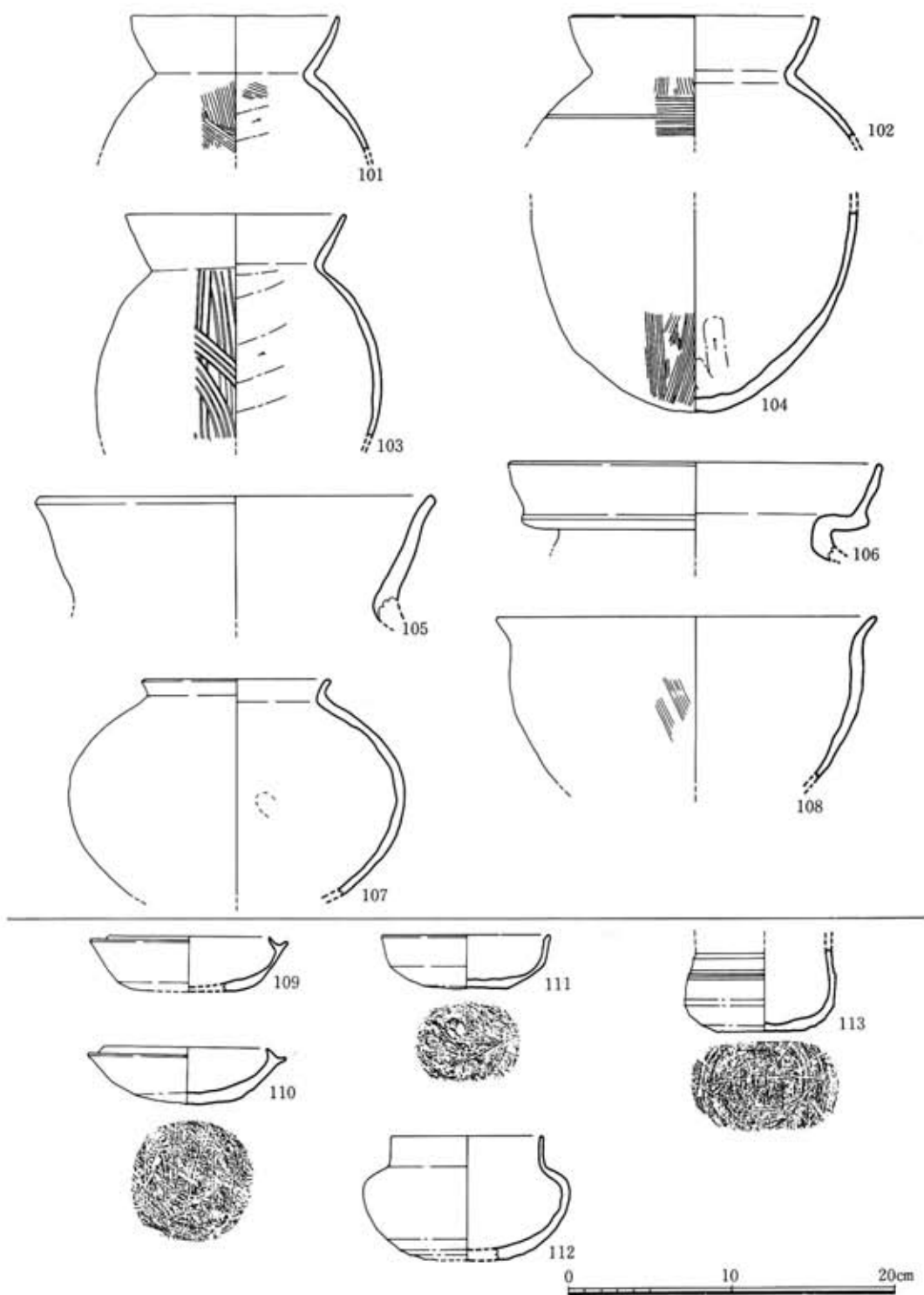


Fig 116 SD401出土土器実測図 2

がヘラ削りで、他はロクロナデ調整されている。

碗（113）底部は平坦で体部との境が丸味を帯び、体部から口縁部にかけてほぼ垂直に延びる。体部に3条の沈線を巡らす。器壁は体部下半がヘラ削り、体部上半がカキ目調整されている。

装身具

管玉（Fig.117・114）

全長4.1cm、径1.4cm、孔の直径0.3～0.4cmを測る。色調は緑色であるが表面は風化が著しい。

（3）平安～鎌倉時代の遺物

平安～鎌倉時代の遺物には土器・鉄製品・石製品がある。土器は主に11区・12区の土壌・井戸跡・溝跡から、鉄製品・石製品は12区のS E 202 井戸跡および、207土壌から出土している。

SK120土壌出土土器（Fig.118, PL.48）

土師器

小皿（116）底部がわずかに上げ底で、口縁部はゆるく内湾して立ち上がる。口径10.7cm、底径7.4cm、器高1.8cm。色調は黄褐色で、器壁はロクロナデ調整、底部外面はヘラ切り離した後ナデ調整されている。

碗（117・120）底部に裾広がり的高台を有す。体部から口縁にかけてゆるく内湾して大きく開く。120は口縁端部がわずかに肥厚する。色調は黄褐色～明褐色で、器壁はどちらも摩減がはげしく調整不明である。

鉢（121）底部がわずかに上げ底で、1ヶ所焼成前の穿孔がある。体部は内湾気味に開くと思われる。底径19.2cm。色調は黄褐色～明褐色で器壁はナデ調整されているが凹凸している。

黒色土器

碗（118・119）底部に裾広がり的高台を有し、体部から口縁部にかけてゆるく内湾して開く。118は口縁端部外側がわずかに肥厚し、119は体部の下部にゆるい稜をなす。口径は118が14cm、119が15.2cm。色調は灰黒色で器壁は体部の内外面がヘラ磨きされている。

SE112井戸跡出土土器（Fig.118, PL.48）

土師器

小皿（122）底部がほぼ平坦で、口縁部が直線的に大きく開く。口径12.2cm、底径6.0cm、器高1.7cm。色調は黄褐色で器壁はロクロナデ調整。底部外面はヘラ切り離して板目痕が残る。

杯（123）底部は平坦で体部から口縁部にかけて直線的に大きく開く。口径12.4cm、底径5.9cm、器高3.5cm。色調は明褐色で、器壁はロクロナデ調整。底部外面はヘラ切り離して板目痕が残る。

SE202井戸跡出土土器・鉄製品 (Fig.116, PL.48)

土師器

甕 (25) 頸部がゆるくくびれ、口縁部が外反する。口径20.2cm。色調は赤褐色で器壁は体部内面がへら削り、外面がハケ目調整されている。

黒色土器

椀 (24) 底部に裾広りの長い高台を有し、体部から口縁部にかけてゆるく内湾して開く。

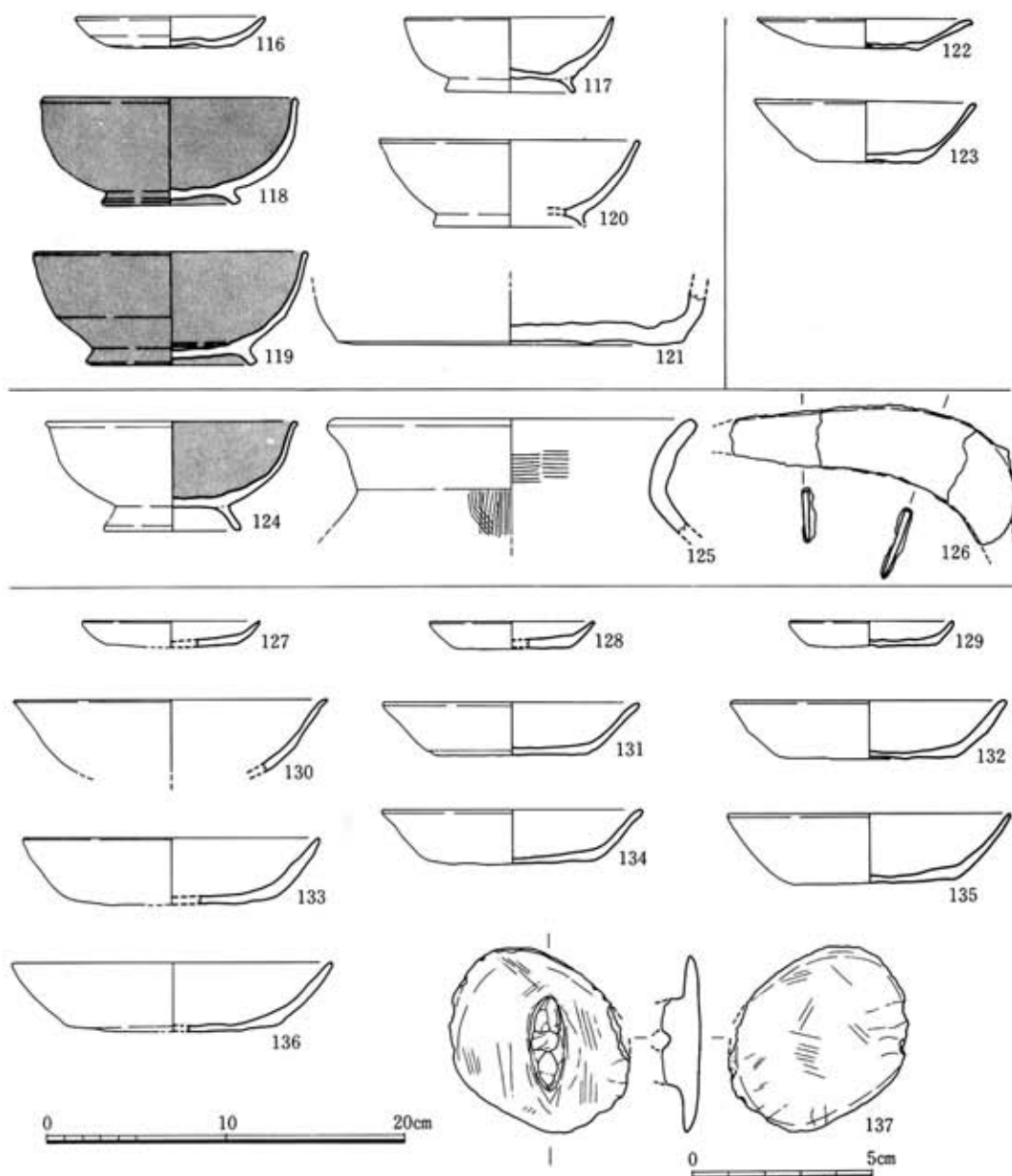


Fig 118 SK120・SE112・SE202・SK207出土土器・鉄製品・石製品実測図

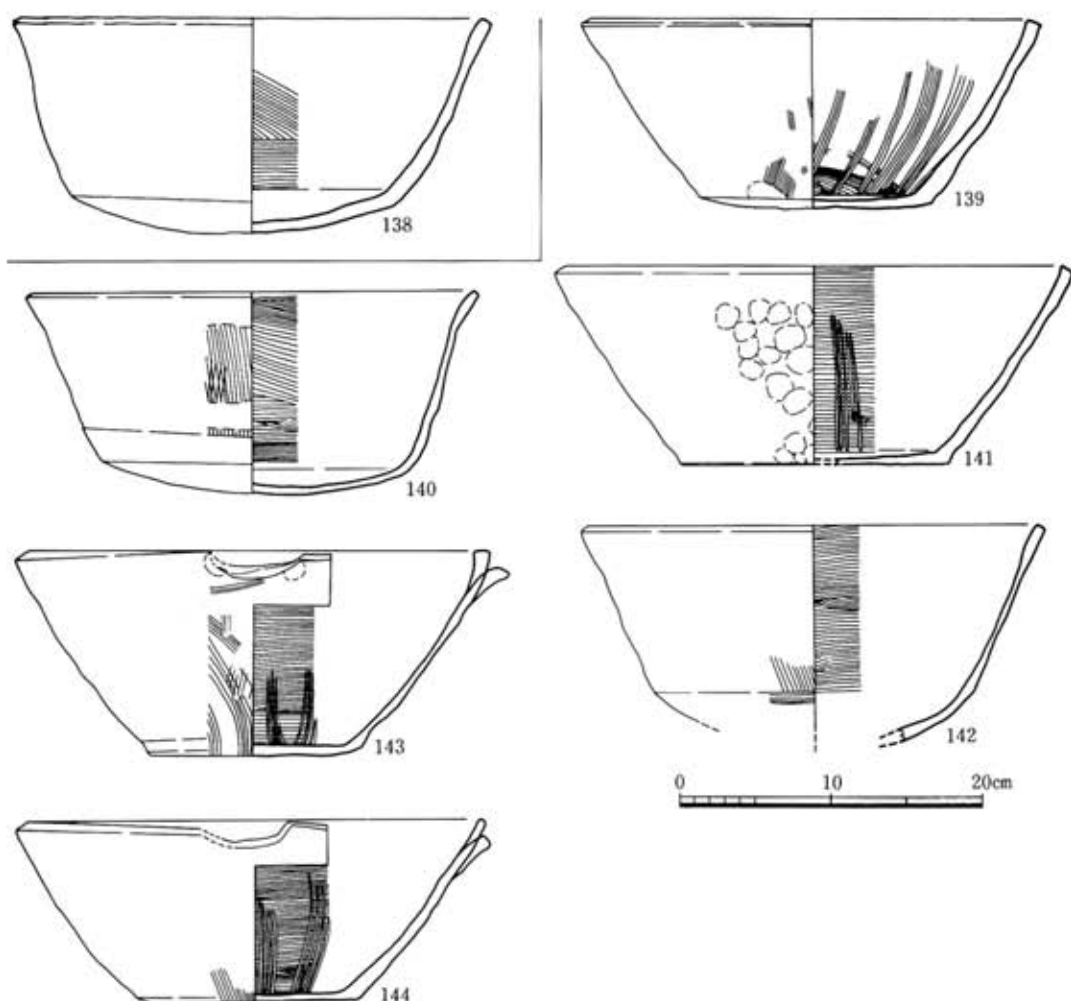


Fig 119 SK328・SD307出土土器実測図

口縁部は端部近くでわずかに外反する。口径14.0cm。色調は黄褐色～灰黒色で、器壁はヘラ磨きされている。

鉄鎌（126） 先端部と茎の部分を欠損している。刃部は両刃で身の幅2.2～4.2cm、厚さ0.4cmを測る。

SK207土壌出土土器・石製品（Fig.116, PL.48）

土師器

小皿（127～129） 底部がほぼ平坦で、口縁部がわずかに内湾して立ち上がる。口径9.2～9.9cm、底径6.5～7.1cm、器高1.4～1.5cm。色調は黄褐色～暗黄褐色で、器壁はロクロナデ調整。底部外面は糸切り離して、129に板目痕が残る。

杯（131～136） 底部がほぼ平坦で、体部から口縁部にかけてわずかに内湾して大きく開く。



Fig 120 尾崎土生遺跡11区・12区・13区・14区遺構配置図

口径14.3～16.5cm, 底径8.4～10.4cm, 器高3.0～3.9cm。色調は明黄褐色～暗黄褐色で, 器壁はロクロナデ調整。底部外面は132～134がへら切り離し, 131・135が糸切り離しである。

石製品

模造鏡(137) 滑石製で, 長さ56cm, 幅4.4cm。周縁部は尖り気味に仕上げている。背面には細長い紐がつく。紐は欠損しているが横に孔が穿たれている。

SK328土壌・SD307溝跡出土土器 (Fig.119, PL.49)

須恵質土器

鉢(138～144) 138・140・142は底部が丸く他はほぼ平坦である。体部から口縁部にかけてわずかに内湾して開き, 140は口縁部をゆるく外反させている。143・144は口縁部の一部をつまみ出して片口になっている。口縁端部はみな平坦に仕上げている。口径29.0～30.5cm, 器高13.2～14.2cm。色調は暗灰色～灰黒色で器壁は体部外面はハケ目調整後ナデ調整。体部内面はハケ目調整で, 139・141・142・144は数条を1単位とする縦方向の条線を巡らしている。

Tab 17 尾崎土生遺跡出土弥生土器一覧表

番号	器種	出土遺構	色 調	①口径 ②器 法量 (cm) ③胴部最大径 ④底	径 高 最大 径	調 整	遺 物 登録番号	備 考
1	甕	SE403	黄 褐 色	①26.0		外面 ハケ目 内面 ナデ	84-2001	甕を転用
2	"	"	黄褐色～暗褐色	①30.0		外面 ハケ目 内面 ナデ	84-2002	
3	"	"	白黄褐色～暗褐色	①33.4		外面 不明 内面 ナデ	84-1300	
4	"	"	黄褐色～暗黄褐色	①30.4		外面 ハケ目 内面 ナデ	84-2004	
5	"	"	褐 色	①33.0		外面 不明 内面 ナデ	84-1299	
6	"	"	黄褐色～褐色	①29.8		内, 外面ともにナデ	84-2003	
7	"	"	褐 色	④ 7.4		内, 外面ともにナデ	84-2005	
8	"	"	黄褐色～褐色	④ 8.1		外面 ハケ目 内面 ナデ	84-2008	
9	"	"	褐 色	④ 7.3		外面 ハケ目 内面 ナデ	84-2007	
10	甗	"	褐色～暗褐色	④ 9.0		外面 ハケ目 内面 ナデ	84-2009	
11	高杯	"	赤褐色～褐色			外面 へら磨き 内面 ナデ, しほり	84-2011	
12	支脚	"	褐 色	① 6.0		内, 外面ともにナデ	84-2012	
13	鉢	"	明 褐 色	①27.4 ②14.6 ④ 9.8		内, 外面ともにナデ	84-2010	

Tab 18 尾崎土生遺跡出土古墳時代土器一覽表 (23-25・53-66・70-72・75-77・109-113は須恵器, 他は土師器)

番号	器種	出土遺構	色 調	①口 径 ②底 径 ③高さ (cm)	調 整	遺物登録番号	備 考
14	壺	S K 113	暗 褐 色	① 8.2 ② 8.4	外面 ヨコナデ、ハケ目 内面 指押え後ナデ	84-1686	
15	"	"	黄褐色~暗褐色	① 8.7 ② 10.2 ③ 10.1	外面 ヨコナデ、ハケ目 内面 ヨコナデ、ナデ	84-1687	
16	甕	"	明 褐 色	① 13.0	内、外面ともにナデ	84-1684	
17	"	"	明 褐 色	① 15.4	外面 ヨコナデ、ナデ 内面 ヘラ削り後ナデ	84-1685	
18	"	"	明褐色~灰褐色	① 16.7	外面 ハケ目 内面 ハケ目、ヘラ削り	84-1692	
19	高杯	"	明 黄 褐 色	① 17.8 ② 11.8 ③ 12.5	外面 ハケ目、ナデ 内面 ヘラ削り、ナデ	84-1689	丹塗り
20	"	"				84-1688	
21	"	"	明橙褐色~黄褐色		外面 ヘラ削り後ナデ 内面 ヘラ削り	84-1690	内面にしほり痕 が残る
22	"	"	明 黄 褐 色	④ 13.0	外面 ハケ目、ナデ 内面 ヘラ削り後ナデ	84-1691	"
23	蓋	S K 118	暗 灰 色	① 8.6 ② 2.4	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-2231	
24	杯	"	明 灰 色	① 9.9 ② 3.0	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-2230	ヘラ記号
25	壺	"	褐 色	① 7.2	内、外面ともにヨコナデ	84-2232	
26	高杯	"	黄 褐 色	① 17.3	外面 ハケ目、ヨコナデ 内面 ハケ目後ナデ	84-2236	
27	"	"	暗 褐 色	④ 11.9	外面 ヨコナデ 内面 ナデ	84-2234	
28	"	"	明 黄 褐 色	① 12.0 ② 8.2	内、外面ともにナデ	84-2239	外面 杯部内面 丹塗り
29	"	"	"	① 12.1 ② 8.0	外面 ヨコナデ、ナデ 内面 ナデ	84-2238	
30	鉢	"	"	① 10.2	外面 磨滅のため不明 内面 ナデ	84-2233	
31	"	"	"	① 19.8 ② 10.1	外面 ヘラ削り後ナデ 内面 ナデ	84-2246	
32	脚付皿	"	"	① 24.6 ② 9.0	内、外面ともにナデ	84-2237	
33	甕	"	黄 褐 色	① 17.0	外面 ヨコナデ、ハケ目 内面 ヘラ削り	84-2240	
34	"	"	暗 褐 色	① 17.0	外面 ヨコナデ、ハケ目 内面 ヘラ削り後ナデ	84-2244	
35	"	"	暗 黄 褐 色	① 18.5	外面 ヨコナデ、ハケ目 内面 ヘラ削り	84-2242	
36	"	"	黄 褐 色	① 21.6	外面 ヨコナデ 内面 磨滅のため不明	84-2241	
37	甕	"	褐 色	① 35.5	外面 ヨコナデ、ナデ 内面 ヘラ削り	84-2245	
39	壺	S K 114	明 褐 色	① 8.3 ② 7.8	外面 不明 内面 ヘラ磨き、ナデ	84-2321	
40	高柄	"	"	① 16.5	内、外面ともにハケ目	84-2319	
41	"	"	褐 色		外面 ヘラ磨き後ナデ 内面 ハケ目後ナデ	84-2320	内面にしほり痕 が残る
42	甕	"	灰 褐 色	① 17.9	内、外面ともにヨコナデ ハケ目	84-2322	
43	"	"	褐 色	① 18.2	外面 ハケ目調整後ナデ 内面 ヨコナデ、ナデ、ヘラ削り	84-2323	
44	"	S K 111	赤 褐 色	① 17.6 ② 16.6	外面 ハケ目 内面 ヘラ削り	84-2225	
45	"	"	暗 褐 色		外面 ハケ目後ナデ 内面 ヨコナデヘラ削り	84-2226	
46	"	"	黄 褐 色	① 18.4	外面 ヨコナデ、ハケ目 内面 ハケ目後ナデ	84-2227	
47	甕	"	赤 褐 色	① 19.6	外面 ヨコナデ、ハケ目 内面 ヘラ削り	84-2228	
48	"	"	"	① 37.3	外面 ヨコナデ、ハケ目 内面 ヘラ削り	84-2229	
49	支脚	"	暗 褐 色	④ 8.8	外面 ナデ	84-2224	
50	高杯	S K 406	"	① 17.6	外面 ハケ目、ナデ 内面 ヨコナデ	84-2013	
51	"	"	"		外面 不明 内面 ヘラ削り	84-2014	
53	蓋	S K 401	暗 黄 灰 色	① 12.3 ② 3.0	外面 ヨコナデ、ハケ目、ヘラ削り 内面 ヨコナデ、ナデ	84-1792	
54	"	"	白 灰 色	① 13.0	外面 ヘラ削り 内面 ヨコナデ	84-1785	
55	"	"	黄 灰 色	① 13.5	外面 ヘラ削りヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-1789	
56	"	"	白 灰 色	① 15.0	外面 ヨコナデ、ヘラ削り 内面 ヨコナデ、ナデ	84-1786	
57	"	"	"	① 16.0 ② 2.6	外面 ヨコナデヘラ削り 内面 ヨコナデ、ナデ	84-1787	

番号	器種	出土遺構	色調	①口部径 ②口径 ③底径 ④高さ (cm)	注記 最大径	調整	遺物登録番号	備考
58	蓋	S K 401	明 灰 色	①17.6 ②2.5		外面 ナデ、ヘラ削り、ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-1788	内面にしほり痕 がみられる
59	杯	"	"	①8.1		内、外面ともにヨコナデ	84-1796	
60	"	"	黄 褐 色	①10.2		内、外面ともにヨコナデ	84-1798	
61	皿	"	明 灰 色	①14.6 ②2.1		外面 ヨコナデ、ナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-1791	
62	杯	"	白 灰 色	①15.3 ②4.2		外面 ヨコナデ、ナデ 内面 ヨコナデ	84-1790	
63	"	"	暗 灰 色	①13.8 ②3.35		内、外面ともにヨコナデ ナデ	84-1793	
64	"	"	白 灰 色	①17.8 ②6.4		内、外面ともにヨコナデ	84-2201	
65	壺	"	暗 灰 色	①13.6		内、外面ともにヨコナデ	84-1797	
66	長頸壺	"	"			内、外面ともにヨコナデ	84-2202	
67	甕	"	赤 褐 色	①16.7		外面 ヨコナデ、ハケ目 内面 ヘラ削り後ナデ	84-2204	外面に煤付着
68	"	"	"	①14.3		外面 ヨコナデ、ハケ目 内面 ヘラ削り後ナデ	84-2203	
69	甕	"	"	①23.8		外面 ハケ目 内面 ヘラ削り後ナデ	84-2205	
70	蓋	S K 206	暗 灰 色	①13.0		外面 ヘラ削りヨコナデ 内面 ヨコナデ	84-2211	
71	杯	"	"	①15.5		外面 ヨコナデヘラ削り 内面 ヨコナデ	84-2210	
72	甕	"	赤 黄 褐 色	①17.5		内、外面ともにヨコナデ	84-2208	
73	杯	"	明 赤 黄 褐 色	①9.3		内、外面ともにヨコナデ	84-2209	
75	蓋	S D 402	外面緑灰色～暗黄灰色 内面緑灰色	①10.4		外面 ヘラ削り 内面 ナデ	84-2015	頸部外面に櫛描 波状文 外面に黒色顔料
76	"	S D 108	灰 色	①9.3		外面 ヨコナデヘラ削り 内面 ヨコナデ、ナデ	84-1679	
77	甕	S D 103	黒灰色～灰色	①36.6		外面 ヨコナデ、ナデ 内面 ヘラ削り後ナデ	84-1683	
78	壺	S D 401	暗黄褐色～黒色	①12.8		外面 ハケ目調整後ヨコナデ 内面 ハケ目	84-2018	
79	"	"	褐 色	①8.6 ②8.6		外面 ヨコナデ、ハケ目 内面 ナデ	84-2143	
80	"	"	灰 褐 色	③9.4		外面 ヨコナデ、ナデ 内面 ナデ	84-2142	
81	"	"	灰 褐 色			内、外面ともにヨコナデ ナデ	84-2141	
82	"	"	"			外面 ナデ 内面 不明	84-2144	
83	"	"	乳 褐 色	①11.7		内、外面ともにナデ	84-2145	
84	高杯	"	明褐色～黄灰色	①16.0		内、外面ともに不明	84-1895	外面丹塗り
85	"	"	暗褐色～暗黄褐色	①23.6		外面 不明 内面 ハケ目	84-1896	
86	"	"	"	①17.0		内、外面ともにハケ目調 整後ナデ	84-1894	
87	"	"	"	①13.8③30.8 ②9.6		外面 磨滅のため不明 内面 脚部ヘラ削り	84-1892	
88	"	"	黄 褐 色	④12.2		内、外面ともに不明	84-1888	
89	"	"	暗褐色～灰色	④12.9		外面 ナデ 内面 ナデしほり痕あり	84-1891	
90	"	"	暗黄褐色～暗褐色	④12.8		内、外面ともにナデ	84-1889	
91	器台	"	暗褐色～黄灰色	④10.6		内、外面ともに不明	84-1890	
92	"	"	暗 褐 色	①7.2		内、外面ともにヘラ磨き	84-2149	
93	器台	"	"			内、外面ともにヘラ磨き	84-2154	
94	器台	"	"			外面 ヘラ磨き 内面 ヘラ削り	84-1893	
95	甕	"	"			外面 ハケ目、ナデ、ヨコナデ 内面 ナデ、ヨコナデ	84-2150	
96	壺	"	灰 褐 色	①7.0		内、外面ともにナデ	84-2146	
97	器台	"	"	①4.2 ②2.55		内、外面ともにナデ	84-2151	
98	"	"	暗 褐 色	①3.8 ②2.25		内、外面ともにナデ	84-2152	
99	高杯	"	褐 色			外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-2148	
100	器台	"	"			内、外面ともにナデ	84-2153	
101	壺	"	暗白色～黒褐色	①12.7		外面 ハケ目後ヨコナデ 内面 ナデ、ヘラ削り	84-2019	

番号	器種	出土遺構	色調	①口 径 (cm) ②底 径 ③最大 径 ④高さ	調整	遺物登録番号	備考
102	甕	S D 401	黒褐色	①15.2	外面 ハケ目 内面 ヘラ削り		
103	"	"	暗褐色～黒色	①13.25	外面 ハケ目 内面 ヘラ削り	84-2120	外面に煤付着
104	"	"	褐色～明褐色		外面 ハケ目調整後ナデ 内面 強いナデ	84-2021	
105	壺	"	暗褐色	①24.0	内、外面ともにヨコナデ	84-2016	
106	"	"	暗褐色～暗黄褐色	①22.6	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデヘラ削り	84-2024	
107	"	"	暗褐色～黒灰色	①11.1 ③20.4	内面 ナデ	84-2025	
108	"	"	黄褐色	①22.0	外面 ハケ目 内面 ヘラ削り	84-2023	
109	杯	"	灰色	①9.8 ②3.35	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-2301	
110	"	"	白灰色	①9.9 ②3.5	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-0100	
111	"	"	灰色	①10.2 ②3.3	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-0099	
112	壺	"	"	①9.2	外面 ヨコナデヘラ削り 内面 ヨコナデ	84-2302	
113	碗	"	"	④7.2	外面 カキ目、ヘラ削り	84-2303	ヘラ記号

Tab 19 尾崎土生遺跡出土平安～鎌倉時代磁器・陶磁器一覧表

番号	器種	出土遺構	色調	①口 径 (cm) ②底 径 ③最大 径 ④高さ	調整	遺物登録番号	備考
116	土師器皿	S K 012	黄褐色	①10.7 ④7.4	内、外面ヨコナデ	84-1884	
117	土師器碗	"	黄褐色～明褐色	①11.7 ④7.4 ②4.2	内、外面摩滅のため不明	84-1886	
118	黒色土師器碗	"	灰黒色	①14.1 ④8.7 ②6.05	内、外面ヘラ磨き	84-1883	
119	"	"	"	①15.2 ④9.6 ②6.3	外面 磨滅のため不明 内面 ヘラ磨き	84-1882	
120	土師器碗	"	明褐色～黄褐色	①14.6 ④9.9	内、外面磨滅のため不明	84-1885	
121	土師器	"	黄褐色～明褐色	④19.0	外面 ナデ 内面 指押え後ナデ	84-1887	穿孔が1カ所ある
122	土師器皿	S K 112	黄褐色	①12.2 ④6.0 ②1.7	外面 ヨコナデ 内面 ナデ	84-1678	ヘラ切り離し 板目痕が残る
123	土師器杯	"	明褐色	①12.4 ④5.9 ②3.51	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-1677	
124	黒色土師器碗	S K 102	黄褐色～灰黒色	①14.0 ④7.6 ②6.15	外面 ヘラ磨き 内面 ヘラ磨き、ロクロナデ	84-2207	ヘラ切り離し
125	土師器甕	"	赤褐色	①20.2	外面 ヨコナデ、ハケ目後ナデ 内面 ハケ目後ナデ、ヘラ削り後ナデ	84-2206	
127	土師器小皿	S K 107	黄褐色	①9.9 ④7.2 ②1.5	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ、ナデ	84-2213	糸切り離し
128	"	"	"	①9.2 ④6.5 ②1.55	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-2214	
129	"	"	暗黄褐色	①9.4 ④7.1 ②1.4	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-2215	糸切り離し 板目痕が残る
130	土師器碗	"	黒色	①17.5	内、外面ヘラ磨き	84-2222	
131	土師器杯	"	明黄褐色	①14.3 ④8.4 ②3.0	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-2217	糸切り離し
132	"	"	黄褐色	①15.3 ④9.8 ②3.3	外面 ヨコナデ、ヘラ削り後ナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-2218	
133	"	"	明黄褐色	①16.5 ④10.4 ②3.7	"	84-2219	
134	"	"	"	①14.5 ④9.4 ②3.0	"	84-2220	
135	"	"	暗黄褐色	①15.8 ④9.2 ②3.9	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	84-2221	糸切り離し
136	"	"	黄褐色	①17.8 ④9.5 ②3.85	"	84-2223	糸切り離し後ナ デ板目痕が残る
138	瓦質土師器鉢	S K 328	灰黒色	①30.5 ④21.2 ②14.2	外面 ナデ 内面 ナデ、ハケ目	84-0902	
139	"	S D 307	暗灰色	①29.0 ④15.4 ②12.8	内、外面ハケ目	84-0901	
140	"	"	"	①29.1 ④20.3 ②13.4	外面 ナデ、ハケ目 内面 ハケ目	84-0905	
141	"	"	灰黒色	①33.0 ④18.0 ②13.2	内、外面指押え	84-0907	
142	"	"	灰褐色	①30.0 ④21.3 ②13.7	外面 ナデ？ハケ目 内面 ハケ目、ナデ	84-0903	
143	"	"	灰黒色	①29.4 ④14.2 ②13.7	内、外面ナデ、ハケ目	84-0904	
144	"	"	暗灰色	①29.7 ④13.5 ②12.0	外面 ナデ、ハケ目 内面 ハケ目	84-0906	

4. 小 結

尾崎土生遺跡は、南北約950m、東西約300～500mの範囲に広がる遺跡である。今回報告する11区～14区は、この広範囲な遺跡の北側に位置する。遺構は弥生時代から鎌倉時代にかけてのものがみられ、11区～14区のほぼ全面から検出されている。遺構は11区・12区に密集している。13区・14区は遺構が疎らで、遺跡の東端および西端に近いと考えられる。遺物は弥生時代から鎌倉時代にかけての土器・石器・木製品・石製品・装身具が出土している。

弥生時代の遺構は、14区西端から井戸跡が1基のみ検出されている。平面が楕円形の素掘りのもので上部が削平されている。遺物は床面近くより中期中頃の土器（甕・甗・鉢・高杯・支脚）が出土している。

古墳時代の遺構は掘立柱建物跡・井戸跡・土壇・溝跡がある。掘立柱建物跡は9棟で、11区・12区に存在する。規模は1間×1間が2棟、2間×1間が2棟、2間×2間が4棟、4間×3間が1棟みられる。4棟ある2間×2間の建物跡のうちSB121～SB123の3棟は総柱建物跡で、残る1棟（SB124）も総柱建物跡の可能性がある。これら2間×2間の総柱建物跡および1間×1間のSB125・SB127は倉庫跡と考えられる。建物跡のうちSB122～SB126・SB127の6棟は、ほぼ同一の方向性をもって並んでおり、同時期もしくは近い時期に存在していた可能性が強い。建物跡の時期は、柱穴から土師器・須恵器の小破片しか出土していないため明確にできないが、5世紀～6世紀代と考えられる。

井戸跡は5基あり、11区・12区・14区に存在する。平面が円形・楕円形で、すべて素掘りで井戸枠等は出土していない。SE114・SE211・SE406は二段掘りで、SE114とSE406は形態がよく似ている。井戸内からは土師器壺・甕・高杯・甗、須恵器蓋・杯、木製品（刀装具）が出土している。これらの出土遺物から井戸跡の時期はSE114・SE405・SE406が5世紀前半、SE111・SE211が6世紀後半と考えられる。

土壇は5基あり、11区・12区に存在する。平面が隅丸長方形・楕円形で、SK113・SK201は二段掘りである。遺物は埋土から多量の土師器壺・甕・高杯・甗・カマド、須恵器蓋・杯・皿・壺・甕が出土している。土壇の時期は出土遺物より、SK113が5世紀前半、SK206・SK209が6世紀前半、SK118が6世紀後半、SK201が7世紀末～8世紀前半と考えられる。

溝跡は10条あり、11区・13区・14区に存在する。SD101・SD108・SD401・SD402・SD404がほぼ南北に走り、SD301・SD302・SD303は東側に偏って南北に走る。SD102は短く弧状になる。これらの溝跡のうちSD401は上面幅が4.5m以上の大溝で、埋土から多量の土師器・須恵器が出土している。Ⅰ・Ⅱ層から6世紀後半の須恵器杯・壺・碗、Ⅲ・Ⅳ層から5世紀前半の土師器壺・甕・高杯・ミニチュア土器が出土している。他の溝跡の時期は出土土器より、SD404が5世紀前半、SD101・SD102・SD108・SD402が6世紀後半～7世紀前半と考えられる。

平安～鎌倉時代の遺構は井戸跡・土壇・溝跡・柱穴がある。井戸跡は4基で11区・12区に存在する。平面が円形もしくはほぼ円形で、すべて素掘りで井戸枠等は出土していない。SE112・SE202の2基が二段掘りである。遺物は土師器小皿・杯、瓦器碗、黒色土器碗、須恵器甕、青磁、鉄鎌、滑石製品が出土している。これらの出土遺物から井戸跡の時期はSE112・SE202が10世紀前半、SE116が11世紀前半と考えられる。

土壇は7基あり11区・12区に存在する。平面が楕円形・不整形で性格の不明なものが多い。SK120は土壇墓の可能性があり。遺物は土師器小皿・杯・碗、黒色土器碗、白磁、石製模造鏡が出土している。これらの遺物から土壇の時期はSK120・SK205が10世紀前半、SK204・SK207が12世紀前半と考えられる。SK115・SK203・SK208は土師器や白磁の小破片しか出土していないため時期が明確でない。

溝跡は7条あり、11区・13区に存在する。11区に存在する4条の溝跡のうちSD103は東西に走り、SD104・SD105・SD106の3条は隣接しており南北に走る。13区に存在する3条の溝跡は不規則に蛇行しており、旧河川の可能性がある。遺物はSD103～SD106の埋土から土師器杯、土師器土器鍋、白磁碗が出土している。これらは11世紀代のものと考えられるが小破片のため明確でない。SD307からは瓦質土器鉢が出土しており、13世紀以降と考えられる。

今回報告した11区～14区は、広範囲な尾崎土生遺跡のほんの一部分にしかすぎない。狭い範囲の調査ではあったが、弥生時代から鎌倉時代にかけての多くの遺構・遺物を検出している。今回報告した11区～14区と昭和56年度に発掘調査した1区～10区⁽¹⁾の調査結果により尾崎土生遺跡の性格を知るうえでの多くの資料が得られている。今後の課題として、1区～10区の調査報告とともに遺跡の各時代ごとの性格の解明および、各時代の遺物の分類整理を行なう必要がある。

注

1. 県営園場整備事業に伴い神埼町教育委員会が調査。報告書未刊。

図 版 I

野 田 遺 跡



1. 8区全景〈東から〉
2. 8区西端〈東から〉



1

1. 8区西側〈東から〉
2. 8区・9区全景〈東から〉

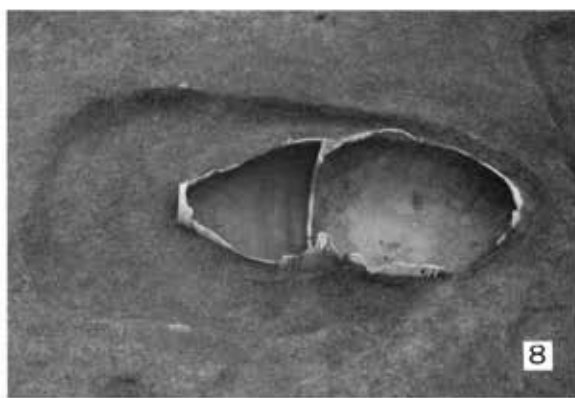
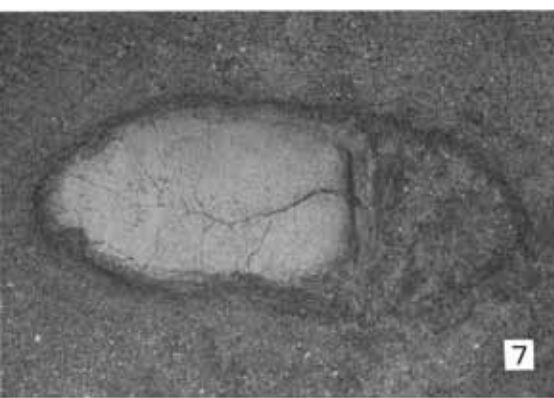
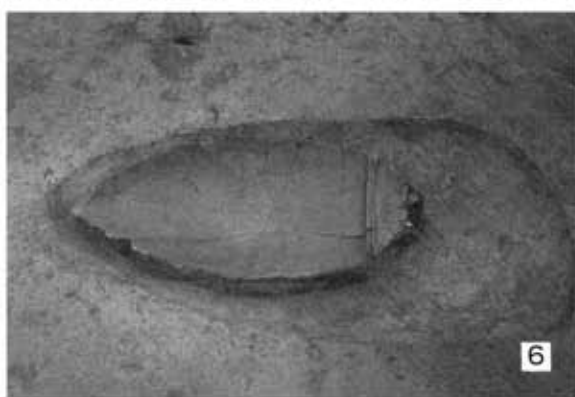
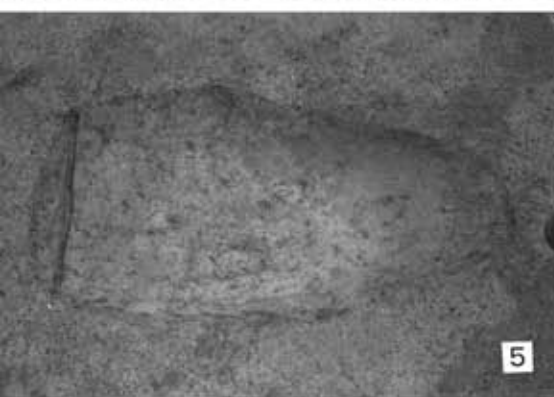
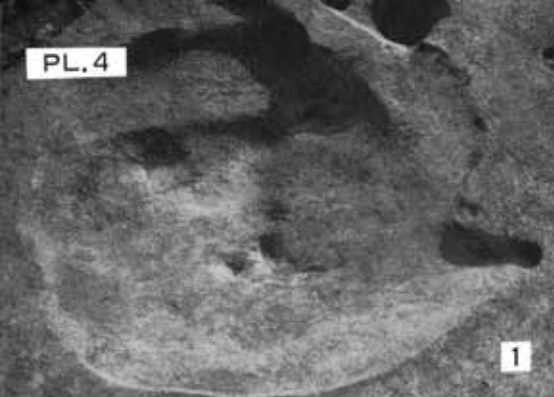


2



1. 10区全景〈東から〉
2. 11区全景〈西から〉





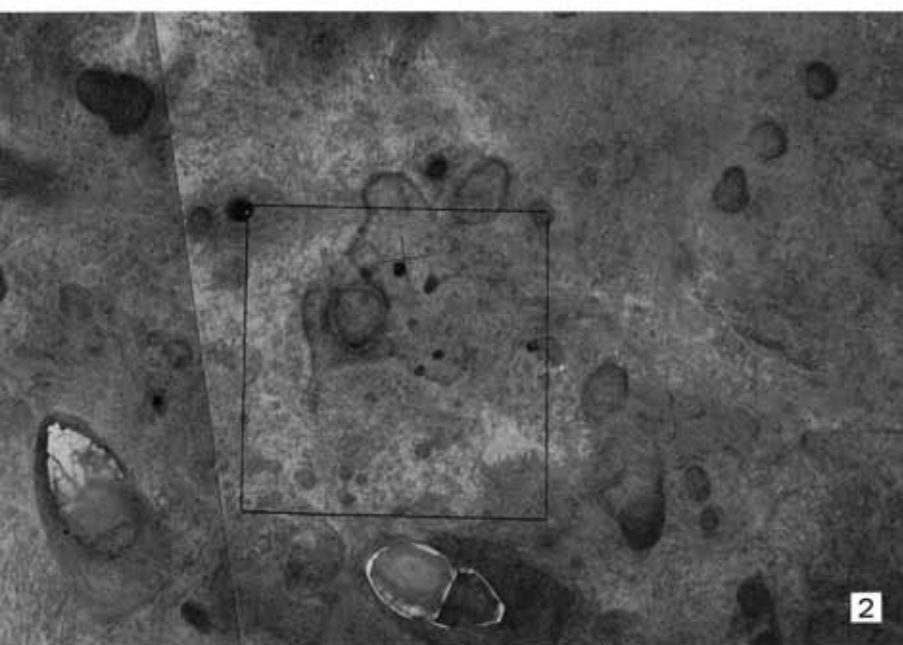
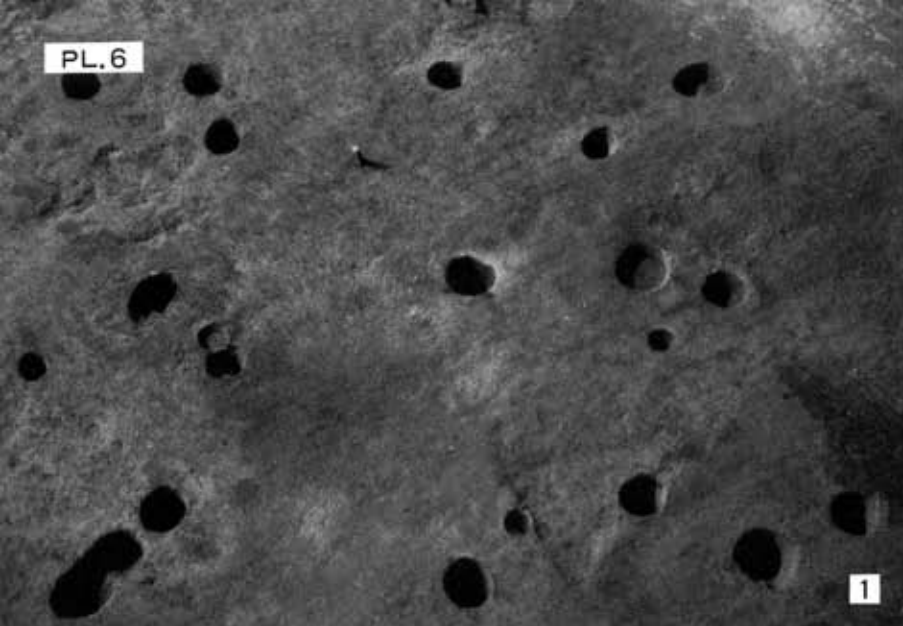
1. SK059土壙 〈北から〉
2. SK097土壙 〈南から〉
5. SJ053甕棺墓 〈南西から〉
7. SJ055甕棺墓 〈南西から〉

2. SK097土壙 〈東から〉
4. SJ052甕棺墓 〈南東から〉
6. SJ054甕棺墓 〈南西から〉
8. SJ056甕棺墓 〈北から〉

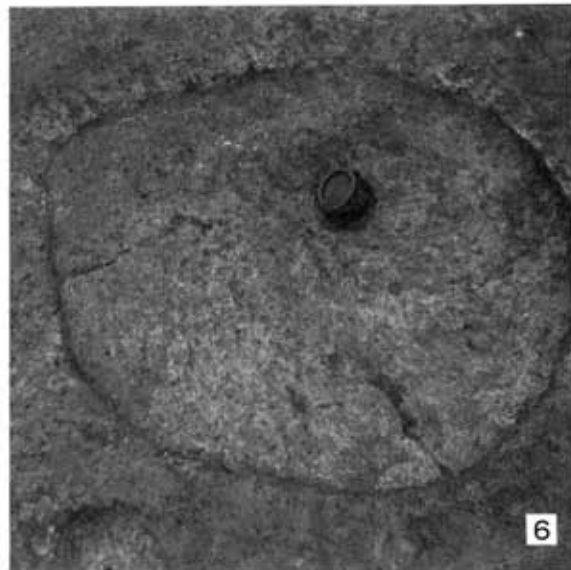
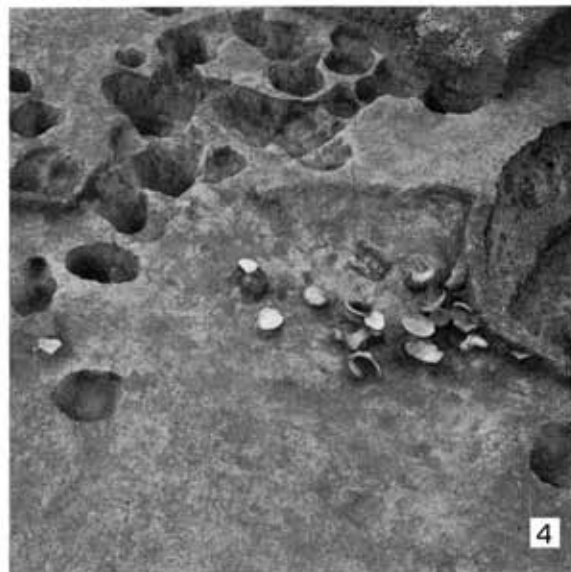


1. SB001住居跡 〈西から〉
2. SB074建物跡 〈北西から〉
3. SB076建物跡 〈南東から〉

PL.6

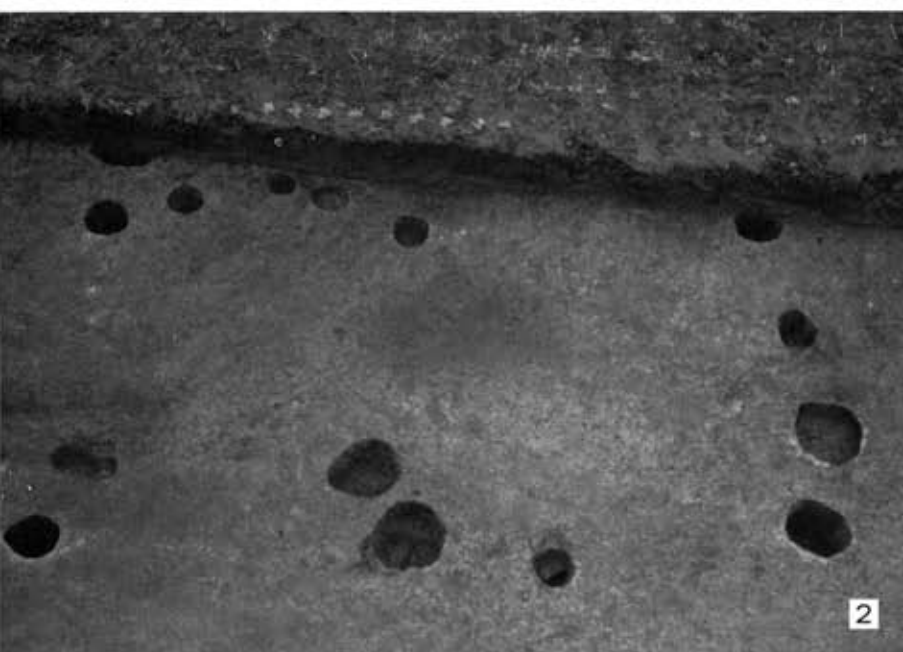
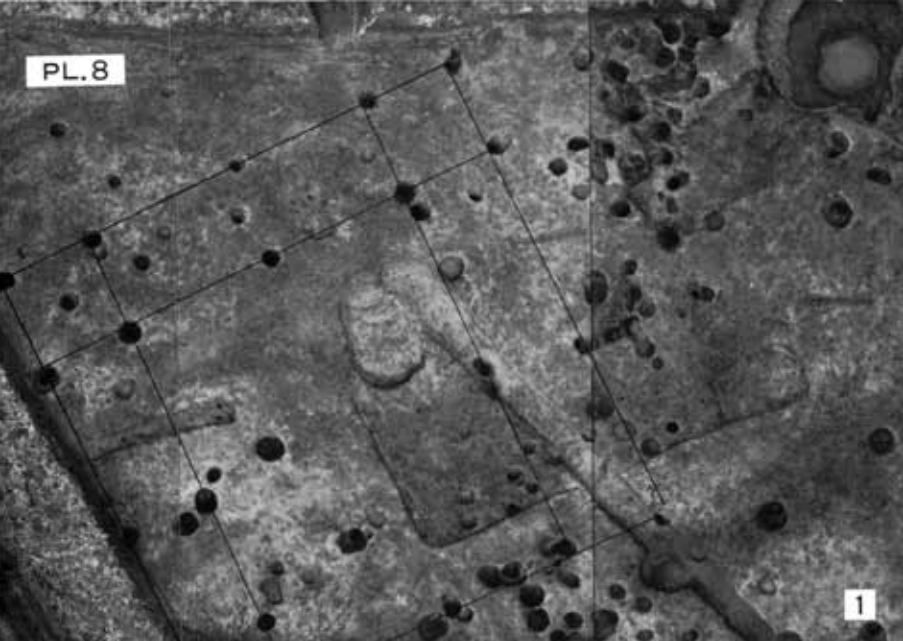


1. SB077建物跡 〈南東から〉
2. SB081建物跡 〈上空から〉
3. SD072・073溝跡 〈上空から〉

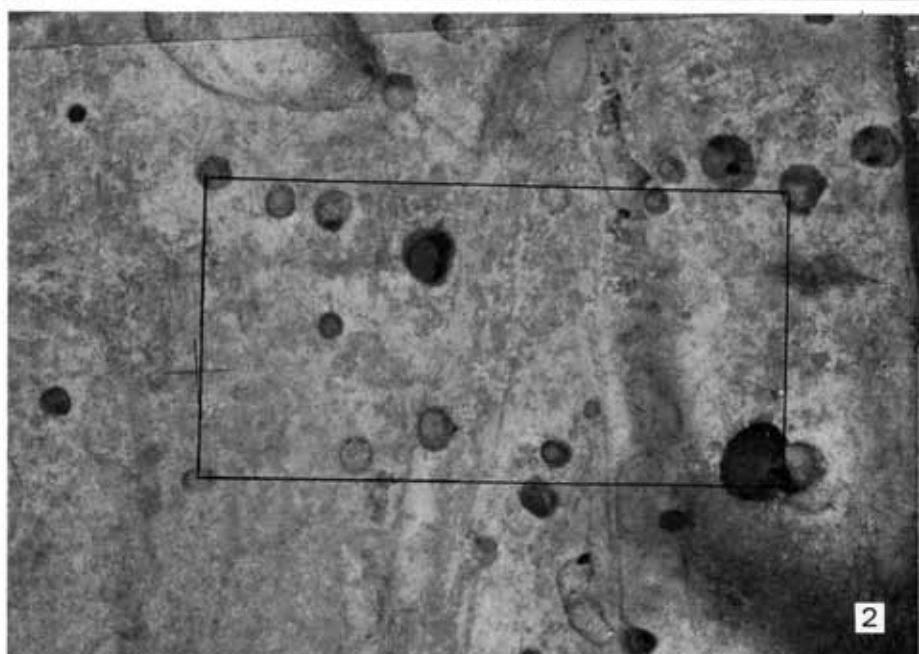
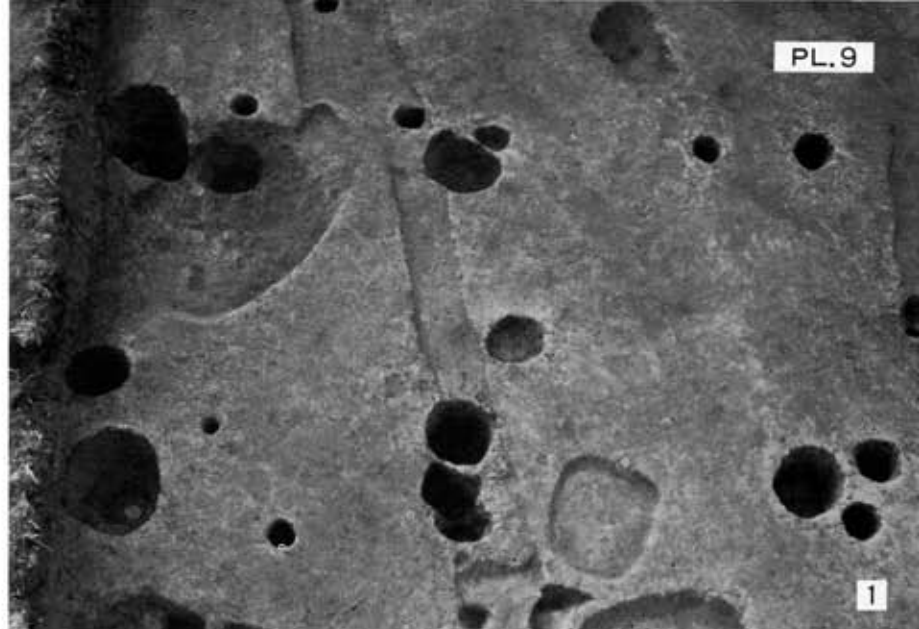


1. SD072溝跡 〈北壁断面南から〉
 3. SD072溝跡 〈西から〉
 5. SK013土壇 〈北から〉

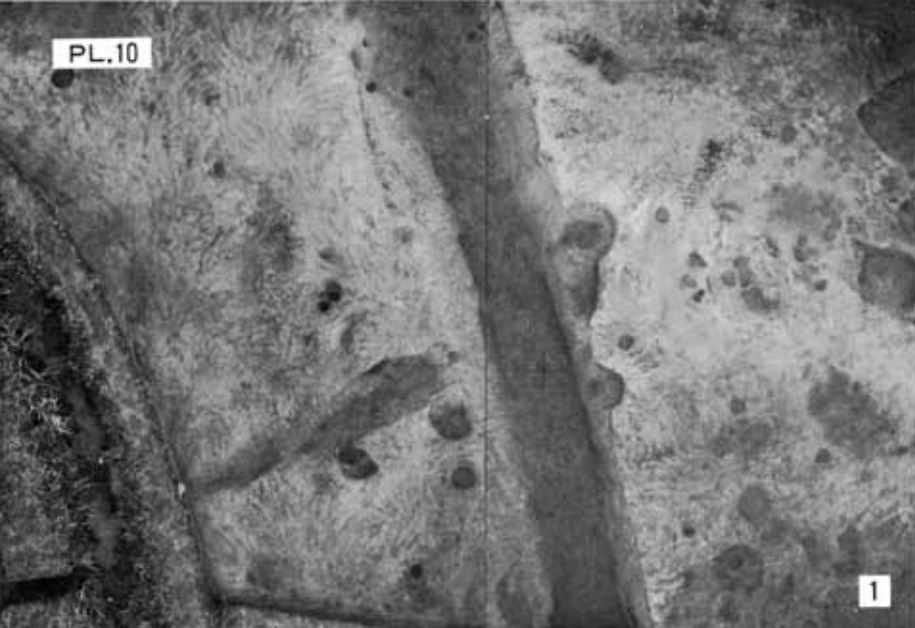
2. SD072溝跡 〈南壁断面北から〉
 4. SK005土壇 〈東から〉
 6. SK050土壇 〈南から〉



1. SB038建物跡
〈上空から〉
2. SB041建物跡
〈北から〉
3. SB042・043建物跡
〈上空から〉



1. SB045建物跡
〈東から〉
2. SB082建物跡
〈上空から〉
3. SB086建物跡
〈東から〉



1

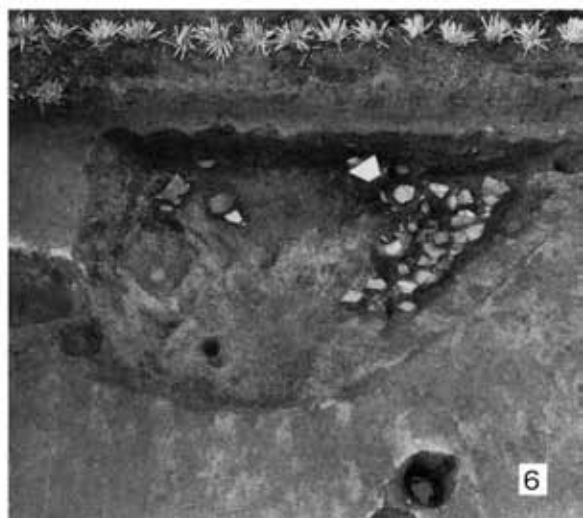
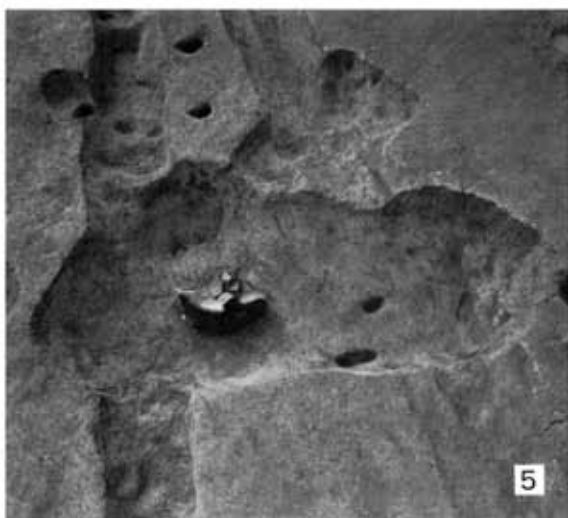
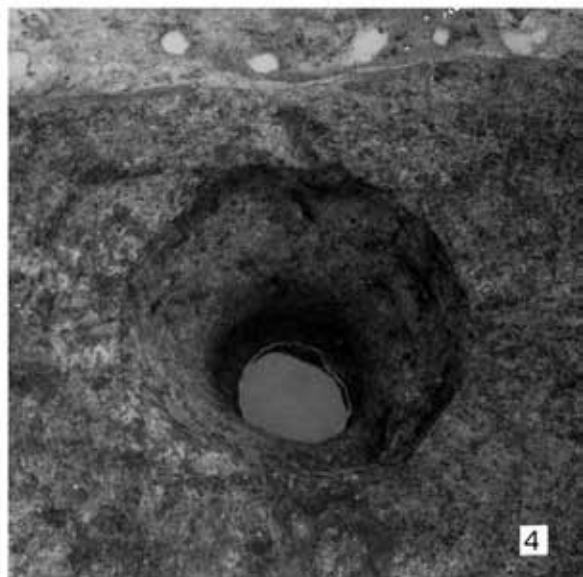
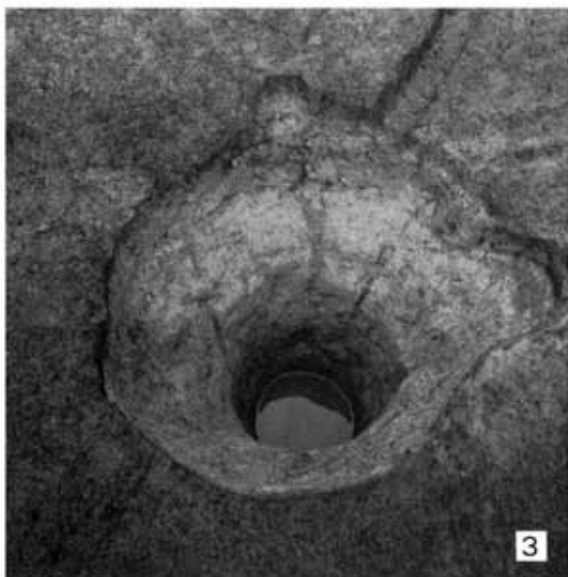
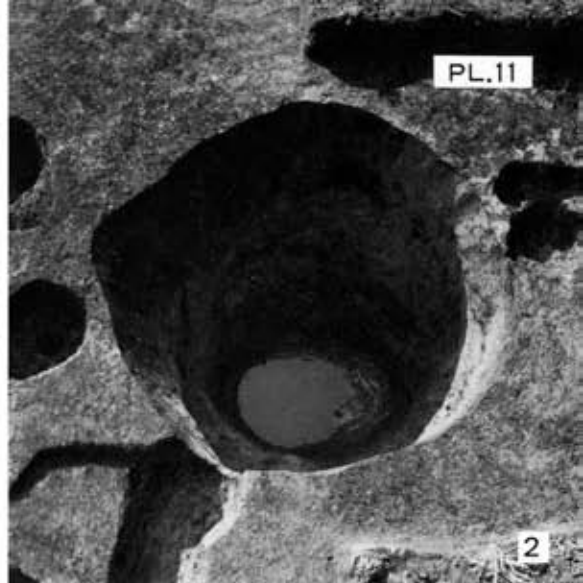
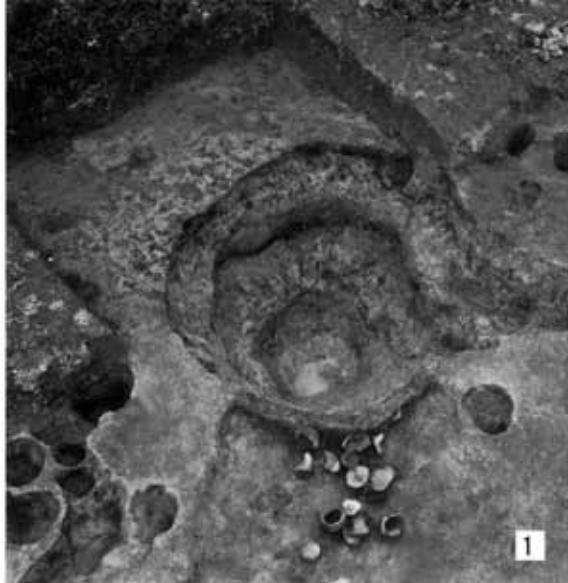


2



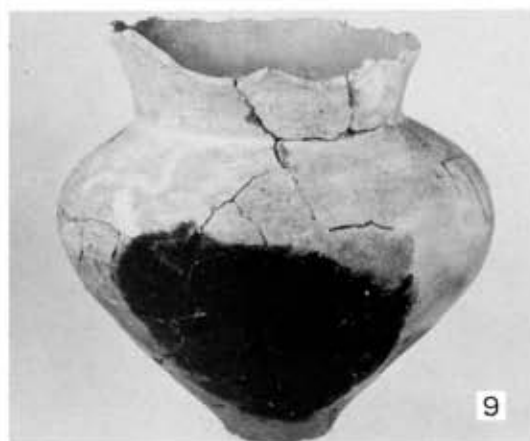
3

1. SD048溝跡
〈上空から〉
2. SD048溝跡北側断面
〈南から〉
3. SE029井戸跡
〈北から〉



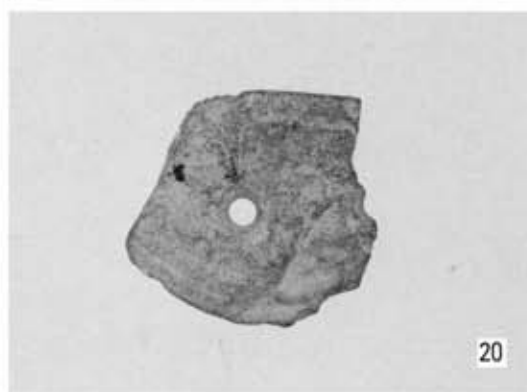
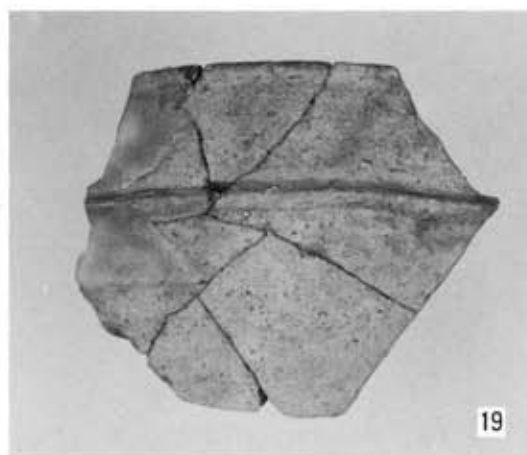
1. SE006井戸跡 〈南東から〉
3. SE031井戸跡 〈南から〉
5. SK014土塋 〈東から〉

2. SE016井戸跡 〈東から〉
4. SE033井戸跡 〈南から〉
6. SK017土塋 〈南から〉



6. SK097出土
7. SK098出土
13. 11区遺構検出面出土

8・9 SK099出土
12・13 10区遺構検出面出土



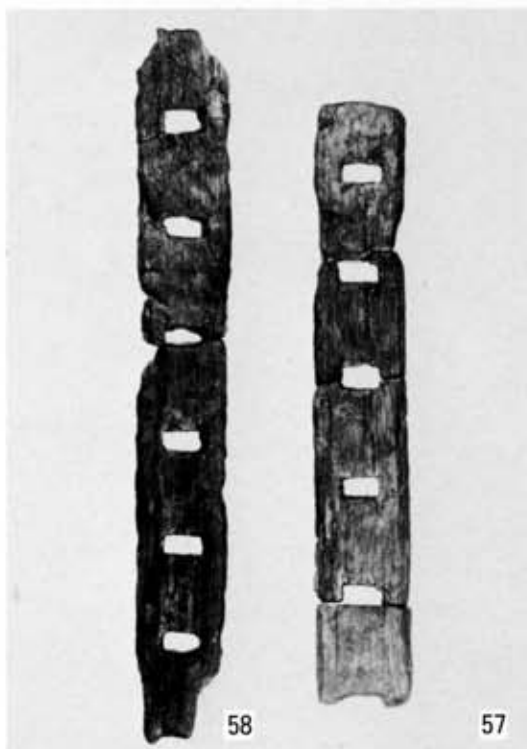
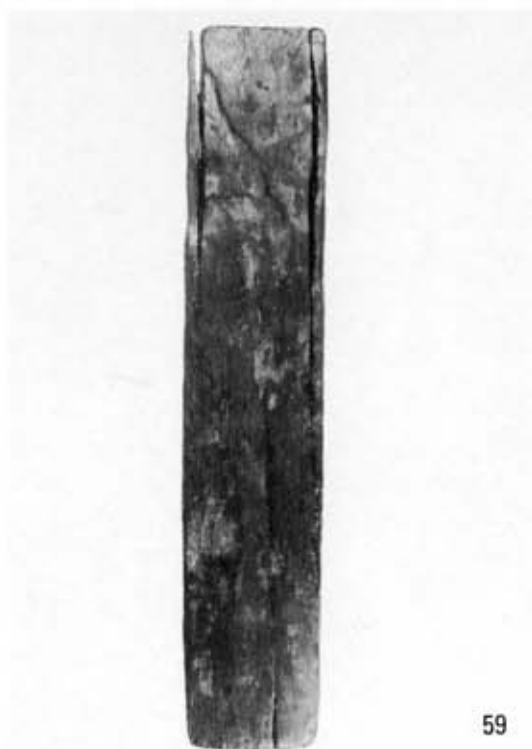
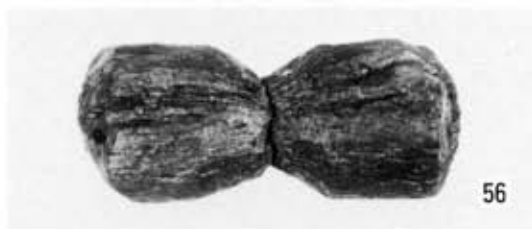
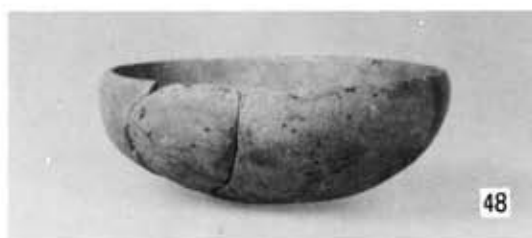
22. SJ052下腹
24. SJ056上腹
20. 8区出土

18·19 9区遺構検出面出土
25. SJ056下腹



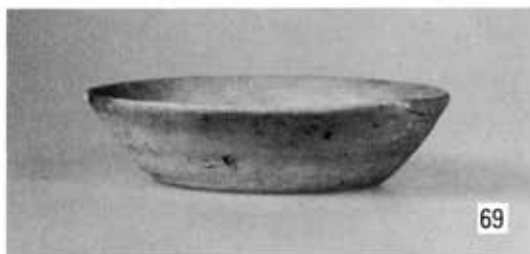
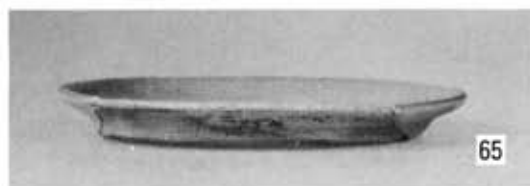
27・28・31・32・34・35 SK005出土

37・38・43・44 SK013出土



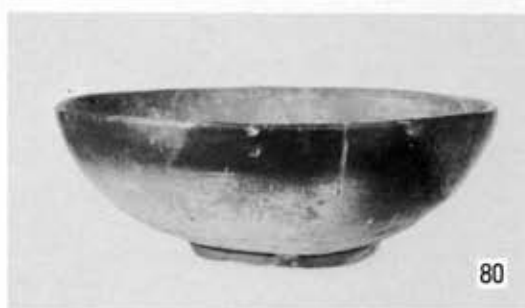
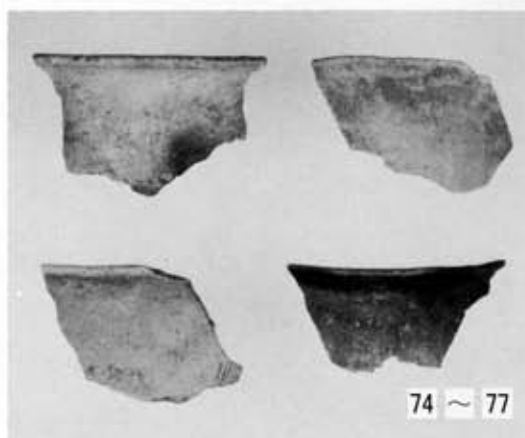
48・52 SK013出土

49・50・56～59 SD072出土



45. SK050出土
61・62・64 SK014出土

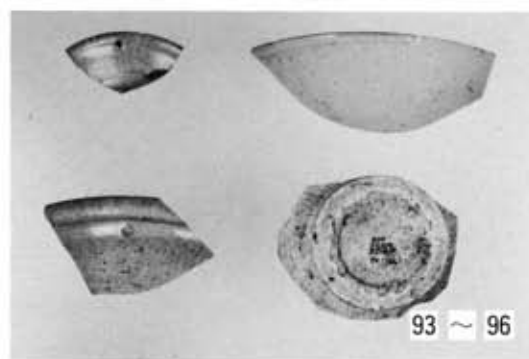
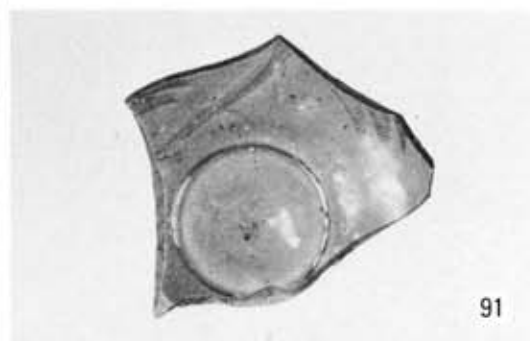
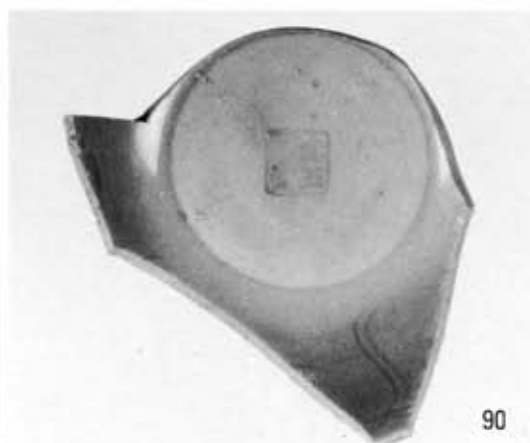
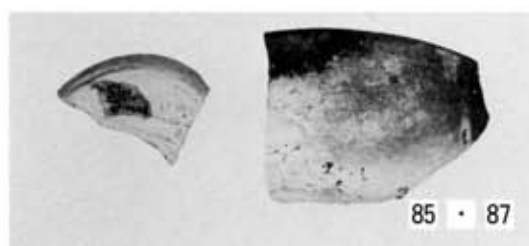
53~55 SB079出土
65~67・69 SK017出土



70~78 SK017出土

81~84 SE016出土

80. SE006出土





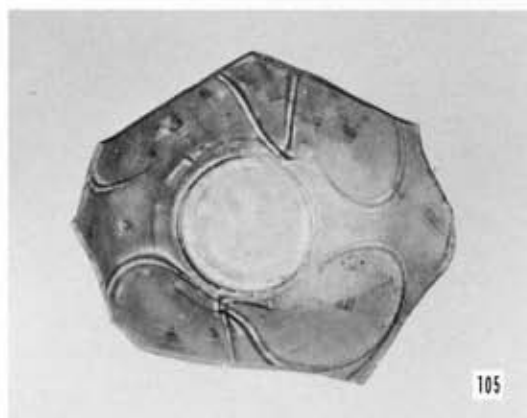
98



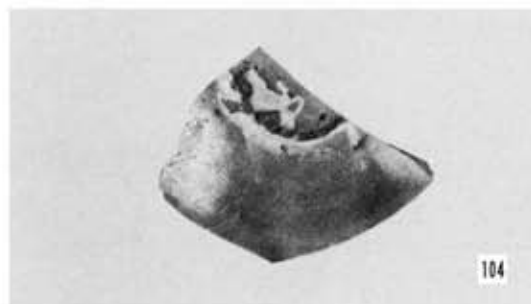
106



104



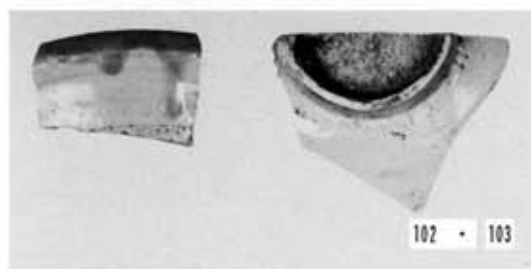
105



104



105



102 • 103



108



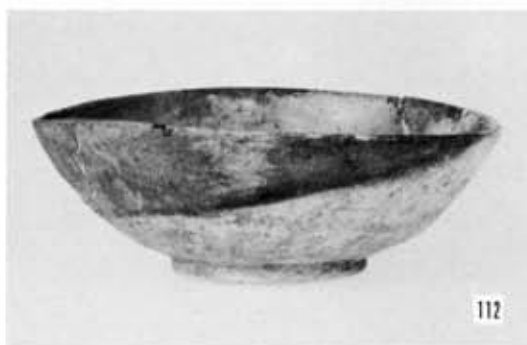
109



110



111



112

98・102～105 SE031出土

108. SD032出土

106. SE033出土

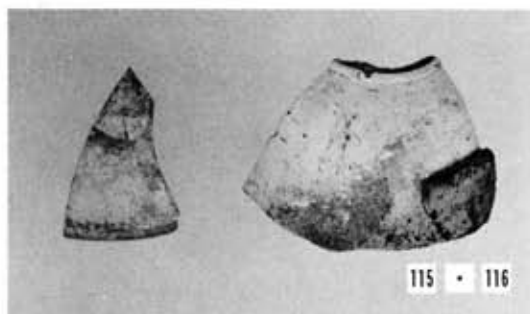
109～112. SD048出土



113



114



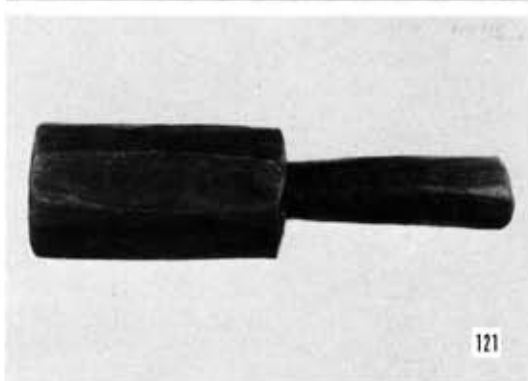
115 • 116



119



120



121



124

124



122



123

113~116・119~122 SD048出土
123・124 表土層出土

図 版 II

川 寄 吉 原 遺 跡



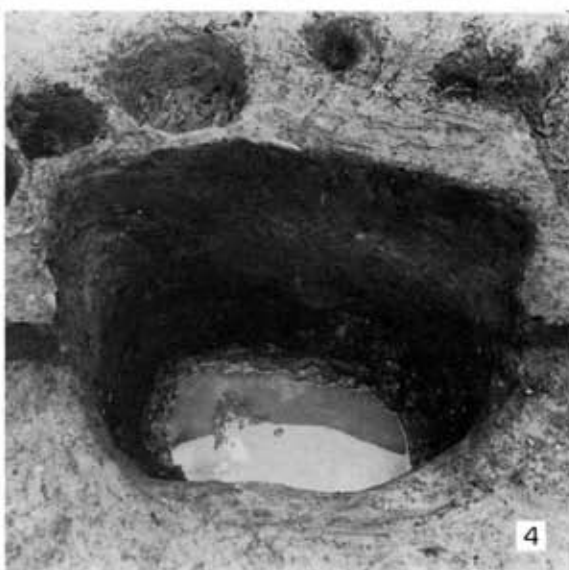
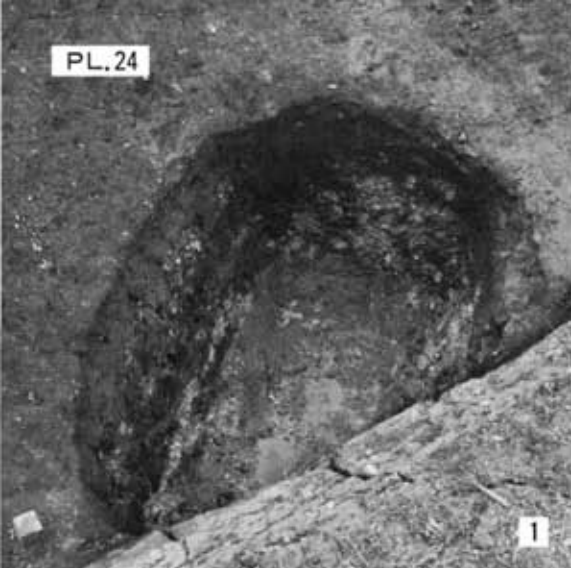
1. II区全景〈東から〉
2. II区東側〈東から〉



1. II区東側〈南から〉
2. II区中央〈北から〉
3. III区全景〈西から〉

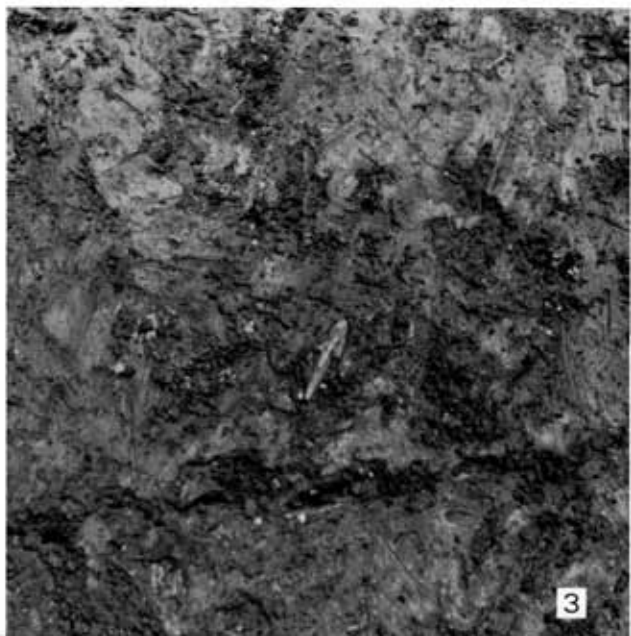


1. SK102 〈南から〉
2. SK102 〈西から〉
3. SK104 〈北から〉

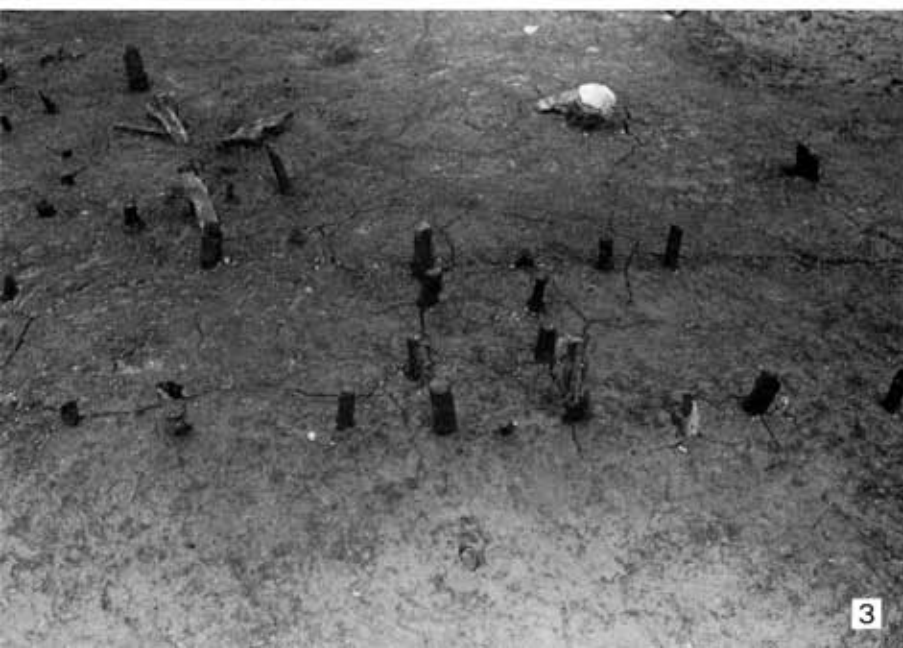


1. SE101 <北から>
3. SE108 <北から>
5. P-5 <南から>

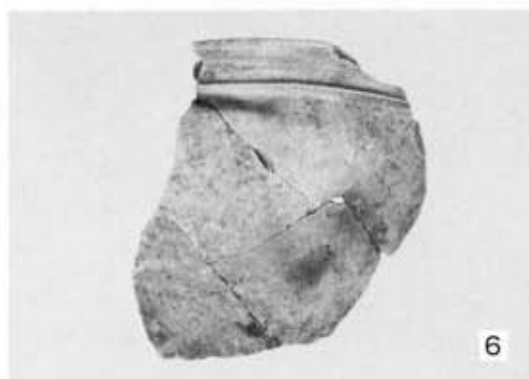
2. SE107 <西から>
4. SE110 <東から>
6. P-6 <南から>



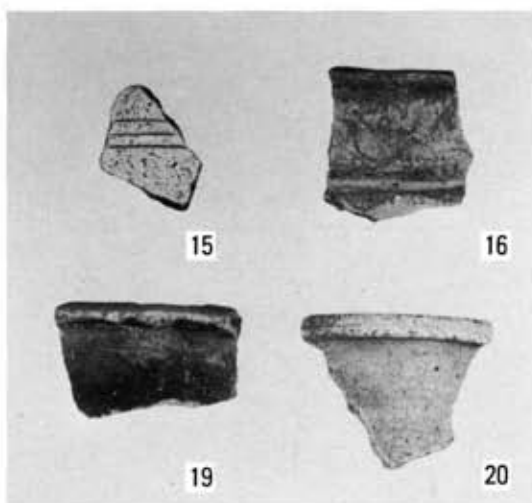
1. II層下部 木器出土状況〈西から〉
2. II層下部 大足出土状況〈東から〉
3. II層下部 銅鏃出土状況〈東から〉



1. III層下部 抗列
〈南から〉
2. III層下部 抗列
〈東から〉
3. III層下部 抗列
〈南から〉



1・3・4～9 SK102出土

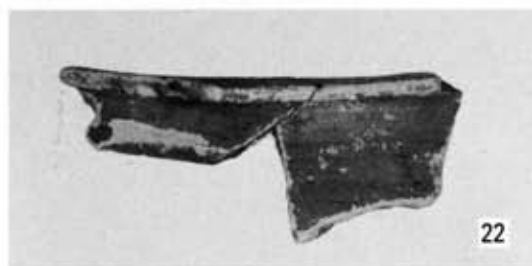


10~14 SK102出土
19. SK108出土

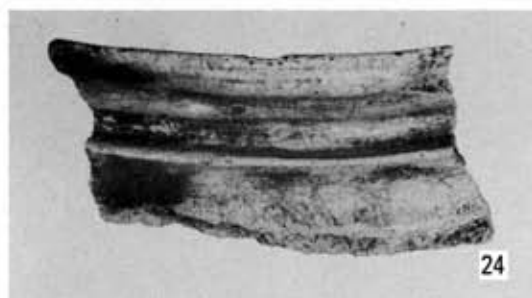
15・16 SK104出土
20. SK109出土



18



22



24



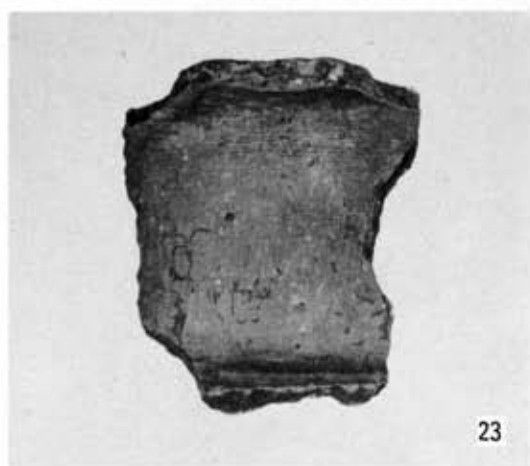
30



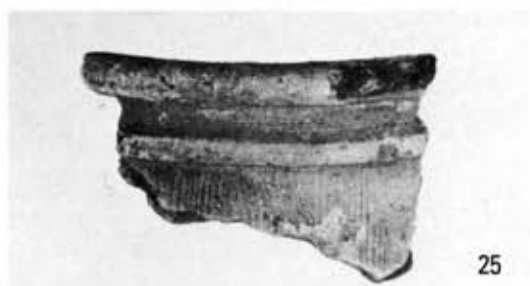
41



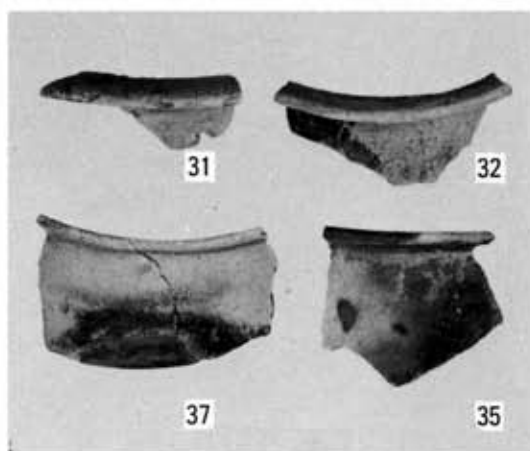
21



23



25



31

32

37

35

18. SK104出土

22~25 II区遺構検出面出土

21 P-3 出土

30・31・32・35・37・41 II区2層出土



42



44



46



48



53



43



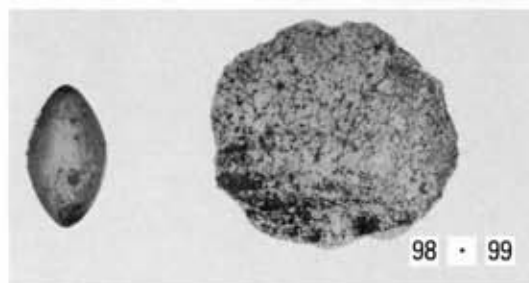
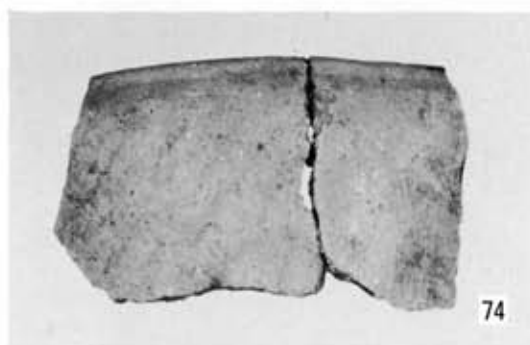
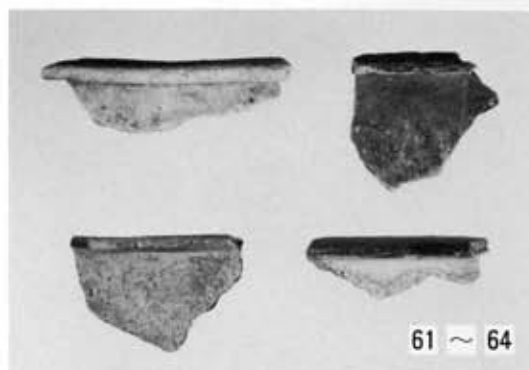
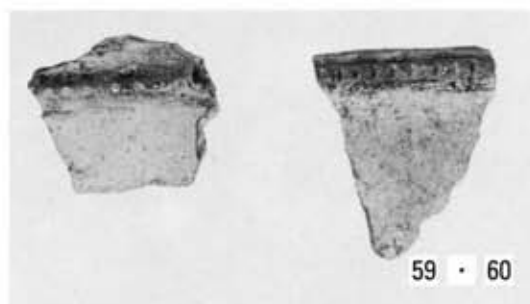
45



47



49



57 II区表土层出土

59~64・66・69・74・75 II区3層出土

58・98・99 II区2層出土

96 II区3層出土



97



101



102



111



112



100



103

•

105

~

107

106



109



110



108

97 · 101 ~ 104 · 108 ~ 113 II区2層出土
105 II区表土層出土

100 II区3層出土
106 · 107 SE101出土

図 版 III

尾崎土生遺跡



1



2

1. 11区 全景〈南西上空より〉
2. 11区 全景〈西から〉



1. 11区西側 〈南から〉
2. 11区中央 〈南から〉
3. 11区東側 〈南から〉



1. 12区 全景〈西から〉
2. 12区中央部〈南から〉



1

1. 13区全景〈西から〉
2. 14区全景〈西から〉



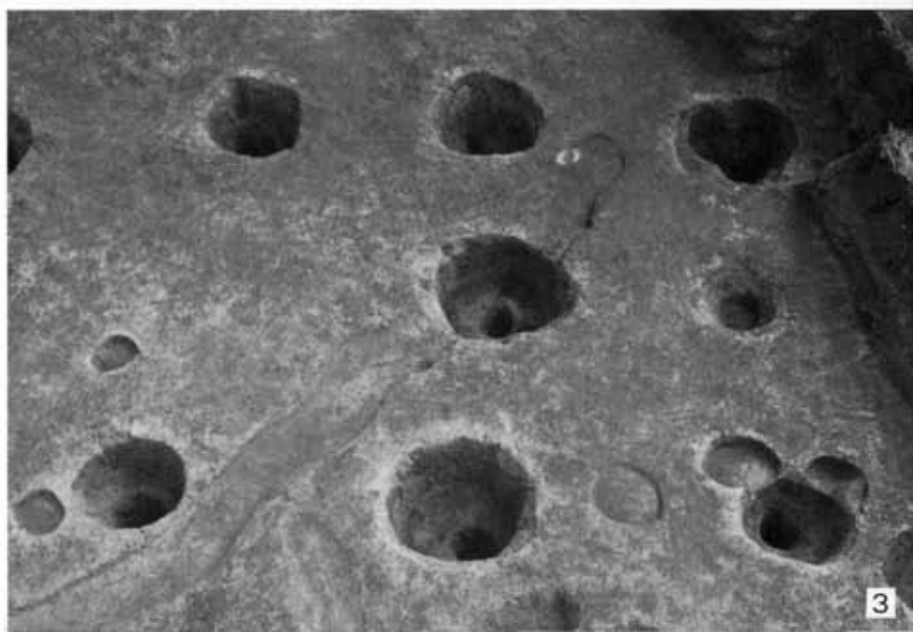
2



1



2



3

1. SE403 〈北から〉
2. SB122 〈南から〉
3. SB123 〈西から〉



- 1. SB124 〈東から〉
- 2. SB125 〈東から〉
- 3. SB126 〈東から〉



1



2



3



4



5



6

1. SE114 <南から>
3. SE406 <南から>
5. SK118 <南から>

2. SE211 <西から>
4. SK113 <東から>
6. SK201 <北から>



1. SD101 <南から>
3. SD401 <南から>
5. SD401遺物出土状況 <西から>
7. SD402 <南から>

2. SD102・108 <南から>
4. SD401北壁土層 <南から>
6. SD401発掘後 <南から>
8. SD402掘出土状況 <西から>



1. SE202 <西から>
3. SK120 <北から>
5. SD315 <北から>

2. SE112 <南から>
4. SK207 <南から>
6. SD104・105・106 <南から>



11



13



6



7



8



10



15



19

6・7・8・10・11・13 SE403出土

15・19 SK113出土



24



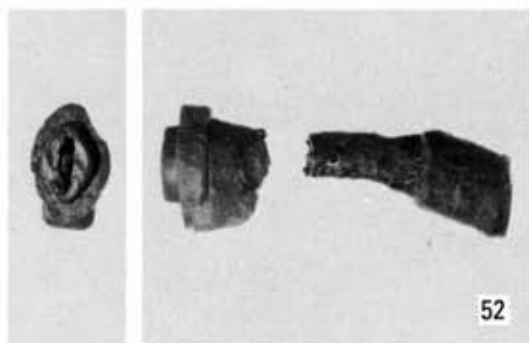
29



32



34



52



28



31



35



37

24 · 28 · 31 · 32 · 34 · 35 · 37 SK118出土

52 SE406出土



39



43



44



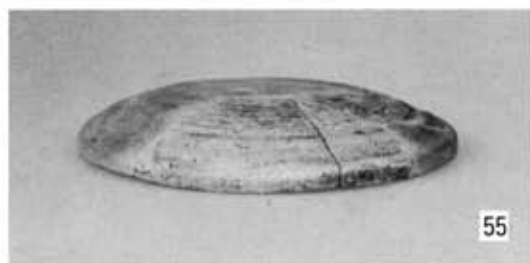
47



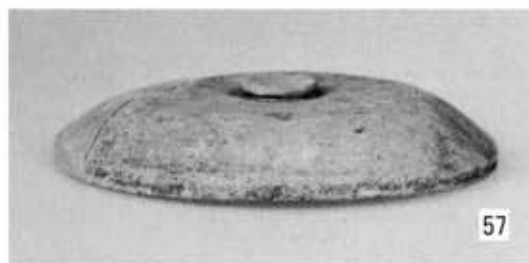
48



49



55

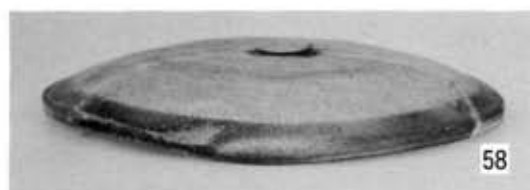


57

39・43 SE114出土

55・57 SK201出土

44・47～49 SE211出土



58



61



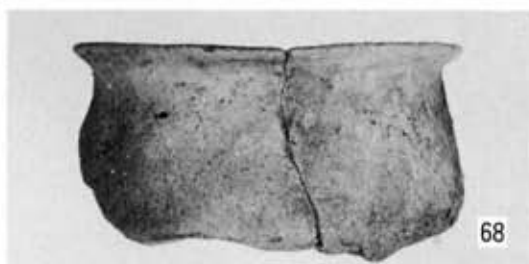
62



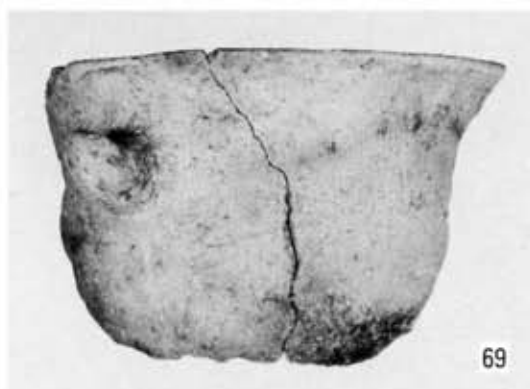
63



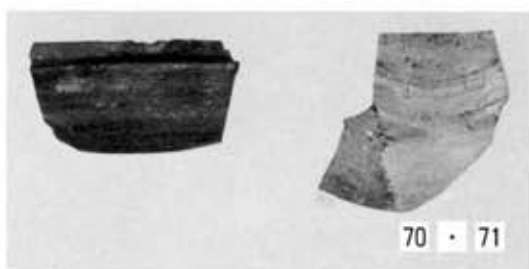
64



68



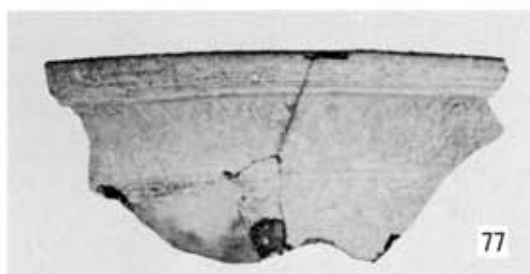
69



70 · 71



75



77



74

58 · 61 ~ 64 · 68 · 69 SK201出土

74 · 75 SD402出土

70 · 71 SK206出土

77 SD103出土



80・81・83～90 SD401出土



91



93



95



96



97



99



101



103



107



104



116



122



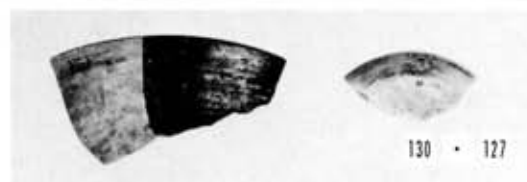
123



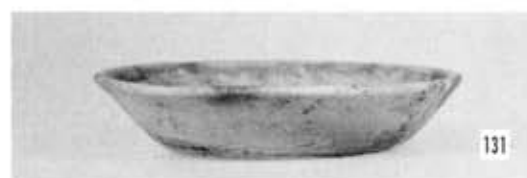
124



126



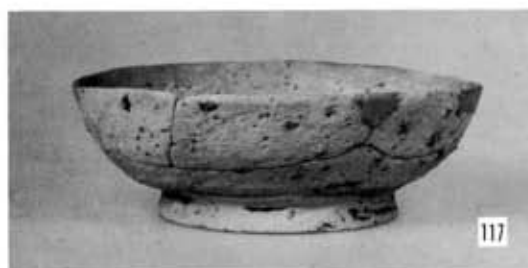
130 • 127



131



135



117



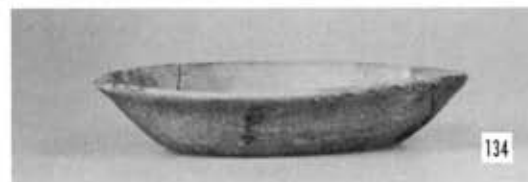
118



119



129



134



137

116~119 SK120出土

124・126 SE202出土

122・123 SE112出土

127・129・131・134・135・137 SE207出土



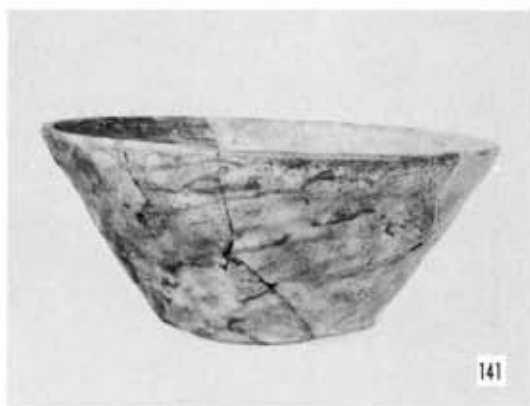
138



139



140



141



142



143

138 SD328出土
139~144 SD307出土



144

資料の整理と保管

野田遺跡・川寄吉原遺跡・尾崎土生遺跡の調査資料は、佐賀県文化課文化財資料室（〒840 佐賀市水ヶ江1丁目12番9号 佐賀県庁東別館内 電話0952（23）4537）において整理・保管されている。出土遺物・実測図・写真には、それぞれ登録番号が付され、番号順に収納されている。さらに、遺物実測図については1/2に縮図したものを、写真についてはベタ焼きしたものをカード化している。以下に各資料の登録番号を示したので検索の便としていただきたい。

遺 跡 名	遺 構 写 真	遺 物 実 測 図	遺 物 写 真
野 田 遺 跡 (略号:NOD)	(4×5inch) 820651～820670 821140～821190 821832～821844 822305～822308 (35mm) 820076～820079 820102～820107 820185～820186 820245	845505～845534 845547～845551 845569～845575 845606	(4×5 inch) 842353～842374 842554～842555 842560～842681 842835～842850 (6×7) 841129～841173
川 寄 吉 原 遺 跡 (略号:KTY)	(4×5 inch) 822309～822314 822806～822820 822833～822837 823012～823015 823023～823057 (35mm) 820286・820287 820297・820298 820368	845535～845547 845552～845568 845607～845609 845802	(4×5 inch) 842490～842541 842550～842553 842556～842559 842682～842689 842938～842974 843041～843056
尾 崎 土 生 遺 跡 (略号:OSH)	(4×5 inch) 830123～830130 830671～830685 830690～830697 830704～830729 830742～830745 830789～830795 831750～831761 832065・832066 832821～832832 832890・832891 (35mm) 830202 830331～830335 830404・830405 830416・830417 830474・830475 830451・830520 (6×7) 831052～831056	845754～845763	(4×5 inch) 842542～842549 842769～842816 842851～842922 842924～842935

佐賀県文化財調査報告書第80集

筑後川下流用水事業に係る
文化財調査報告書Ⅰ

野 田 遺 跡
川 寄 吉 原 遺 跡
尾 崎 土 生 遺 跡

編集 佐賀県教育庁文化課
発行

印刷 株式会社副島印刷
佐賀県高木瀬町大字長瀬1136の52

